

WEBを活用した園児情報記録システムの開発と園児 情報活用に関する研究

著者	渡邊 多恵子
発行年	2013
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2013
報告番号	12102甲第6659号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00121567

WEB を活用した園児情報記録システムの開発と
園児情報活用に関する研究

2 0 1 2

筑波大学大学院博士課程人間総合科学研究科

渡邊多恵子

筑 波 大 学

博士（看護科学）学位論文

論文概要

○論文題目 WEB を活用した園児情報記録システムの開発と園児情報活用に関する研究

○指導教員 医学医療系 安梅勅江 教授

(所属) 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻（博士後期課程）

(氏名) 渡邊多恵子

目的： 本研究では、保育の質向上に寄与することをめざし、「WEB を活用した園児情報記録システム（以下、本システム）」を開発した。研究 1 では、本システムの内容妥当性とデータ集積可能性を検討した。研究 2 では、本システム機能に準拠し、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用尺度（以下、本尺度）」を開発し、信頼性・妥当性の検証を行った。

対象と方法： 本研究は 2 つの研究により構成されている。「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積の可能性（研究 1）、「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討（研究 2）である。

1. 「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積の可能性(研究 1)

本システム開発のために開催した全 10 回の会議記録から、本システムの機能を抽出し、内容分析法を用いて類型化した。整理された本システムの機能より、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクル展開のための機能を内包するかどうかを確認した。

訪問許可の得られた保育所を訪問し、保育専門職に本システムの概要、特徴、使い方に関する説明を行った。同様に、従来の紙媒体のスケールの概要、特徴、使い方に関する説明を行った。平成 24 年 8 月 1 日から平成 24 年 12 月 31 日までの 5 か月間における、本システムの導入実績と、従来の紙媒体スケール導入実績の比較から、本システムの改善点を抽出した。本システム、及び、紙媒体スケールは、①一般発達評価票、②社会的スキル尺度、③気になる子どもチェックリスト、④育児環境評価票、⑤保育環境評価票の 5 つのスケールから構成される。

2. 「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討（研究 2）

尺度開発に先立ち、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、及び、園児情報をより活用しやすい形で提供する WEB アプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の 3 種類のグループを対象に、本システムの機能に焦点をあてたフォーカス・グループ・インタビューを実施した。インタビュー記録から本尺度を構成する質問項目を作成した。保育専門職を対象とした無記名の自記式質問紙調査を実施し、作成した質問項目について、「全くそう思わない（1 点）」から「かなりそう思う（5 点）」までの 5 件法で回答を求め、因子分析により因子構造の確認と尺度

項目の選定を行った。本尺度の下位尺度ごとに信頼性係数を算出した。本尺度得点と、職業経験年数、保育環境評価票得点、Communicative and Critical health literacy 尺度得点について Spearman の順位相関係数を算出した。

結果：1.「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積の可能性（研究1）

【園児情報の基本的活用】、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックにあたる【園児情報の発展的活用】の2つを重要カテゴリーとして位置づけ、本システムの機能を整理した結果、【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」、「情報の共有」「情報の補完」を意味する機能を抽出し、【園児情報の発展的活用】には、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」を意味する機能を抽出した。

平成24年8月1日から平成24年12月31日の5か月間に、本システムを導入した保育所は13であった。従来の紙媒体スケールの使用を継続した保育所は5であった。本システムにおけるデータ回収数は、①一般発達評価票1746、②社会的スキル尺度1436、③気になる子どもチェックリスト1131、④育児環境評価票175、⑤保育環境評価票8であった。紙媒体スケールにおけるデータ回収数は、①一般発達評価票676、②社会的スキル尺度676、③気になる子どもチェックリスト676、④育児環境評価票364、⑤保育環境評価票0であった。

2.「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討（研究2）

2因子26項目で構成される園児情報活用尺度が開発された。2因子解の因子寄与は、第1因子8.47、第2因子7.45、共通性15.92であった。各因子を構成する質問項目の特徴から、第1因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル「園児情報の発展的活用（12項目）」、第2因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル「園児情報の基本的活用（14項目）」であると解釈され、単純構造に近い因子パターンを有した。Cronbachの α 係数は、第1因子 $\alpha=0.93$ 、第2因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ であった。職業経験年数との相関は、 $r=0.32$ ($p<0.001$)であった。保育環境評価票得点（子どもの全体像を捉える領域）との相関は、 $r=0.26$ ($p=0.001$)であった。Communicative and Critical health literacy 尺度との相関は、 $r=0.49$ ($p<0.001$)であった。各下位尺度との相関は、Communicative 領域得点と、園児情報の発展的活

用との相関は $r=0.36$ ($p<0.001$), 園児情報の基本的活用との相関は $r=0.36$ ($p<0.001$), 総合得点との相関は $r=0.41$ ($p<0.001$) であった. Critical 領域得点と, 園児情報の発展的活用との相関は $r=0.51$ ($p<0.001$), 園児情報の基本的活用との相関は $r=0.41$ ($p<0.001$), 総合得点との相関は $r=0.52$ ($p<0.001$) であった.

考 察 : 本システムの機能を整理した結果, 本システムは, アセスメントに必要な園児情報の収集と理解, アセスメント, 目標の明確化, 支援, 評価, 継続的な情報活用, 関連・因果関係の検証という PDCA サイクル展開に寄与する機能を内包することから, システムの内容的妥当性が示唆された.

システム導入実績からは, 今後の展開可能性が期待できる数を得られた. 子どもの発達に関するデータは, ①一般発達評価票, ②社会的スキル尺度, ③気になる子どもチェックリストにおいて, 短期間に千以上のサンプルが得られ, 今後, 同程度のサンプルが得られれば, 園児の発達に関する経時的な情報記録を活用できる可能性が示唆された.

因子分析の結果, 想定した 2 因子構造が得られ, 単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された. Cronbach の α 係数は高い値を示し, 内的一貫性の側面から信頼性が確認された. 保育の質向上につながるとされる「経験年数」「保育環境評価票」との有意な正の相関が得られたことより, 基準関連妥当性(併存的妥当性)が確認された. 概念に共通性がみられる Communicative and Critical health literacy 尺度の各下位尺度との有意な正の相関が見られたことより, 構成概念妥当性が確認された. 本尺度を活用することで, 保育専門職自身が, 園児情報を PDCA サイクルの中で活用し, 一人一人の子どもの力を最大限に引き出す「園児情報活用」を自己評価し, 質の高い専門技術を検討して行ける可能性が示唆された.

結 論 : 園児情報のアセスメント, 実践, 実践の評価, よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能と, 継続的に情報を集積する可能性をもつ「園児情報記録システム」を開発した. 同時に, 子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し, 一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を測定する尺度を作成した. これらが保育実践で活用されることにより, 保育の質向上への効果と, 保育専門職の質の高い専門技術の取得が期待される.

目次

第 1 章 序論

1. 1	少子化の現状	-----	1
1. 2	保育所保育の課題	-----	1
1. 3	保育の「質」評価	-----	2
1. 4	電子健康記録の動向	-----	3
1. 4. 1	電子健康記録導入の現状と課題	-----	3
1. 4. 2	電子健康記録の開発に関する研究	-----	6
1. 4. 3	電子健康記録導入の効果	-----	8
1. 5	健康情報活用におけるヘルスリテラシーの視点	-----	10
1. 6	研究課題への着想	-----	12

第 2 章 保育所・幼稚園用電子システムの開発と活用の状況（予備調査）

2. 1	保育所・幼稚園用システムの開発状況（予備調査 1）	-----	14
2. 2	保育所における電子システムの活用状況（予備調査 2）	-----	18

第 3 章 研究の目的と概要

3. 1	研究の背景	-----	22
3. 2	研究の目的	-----	22
3. 3	研究の概要	-----	23
3. 4	研究の意義	-----	25
3. 5	用語の定義	-----	25

第 4 章 「WEB を活用した園児情報記録システム」の開発

4. 1	開発方針とコンセプト	-----	27
4. 2	電子化した項目の設定と根拠	-----	29
4. 3	システム開発の計画	-----	31
4. 4	システム画面構成・動作・活用に関する検討	-----	33
4. 5	画面構成とアクセス権	-----	34

4.6	安全性・信頼性・柔軟性	-----	36
4.7	システムの概要	-----	38
4.8	ホームページの概要	-----	48

第5章 「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積可能性（研究1）

5.1	研究の目的	-----	52
5.2	研究の方法	-----	52
5.2.1	「園児情報記録システム」の内容的妥当性	-----	52
5.2.2	「園児情報記録システム」のデータ集積可能性	-----	55
5.3	結果	-----	56
5.3.1	「園児情報記録システム」の内容的妥当性	-----	56
5.3.2	「園児情報記録システム」のデータ集積可能性	-----	59
5.4	考察	-----	60
5.4.1	本システムがPDCAサイクル展開に寄与する可能性	-----	60
5.4.2	本システム普及の可能性	-----	61
5.4.3	本システム普及のデータ集積可能性	-----	61
5.4.4	日常の保育評価への活用	-----	62
5.4.5	システム開発への提言	-----	62
5.4.6	本研究の可能性と限界	-----	63

第6章 「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討（研究2）

6.1	研究の目的	-----	64
6.2	尺度を構成する質問項目の作成	-----	64
6.2.1	質問項目の作成方法	-----	64
6.2.1.1	対象者とリクルートの方法	-----	64
6.2.1.2	調査時期と調査実施時間	-----	65
6.2.1.3	データの収集及び調査項目	-----	65
6.2.1.4	分析	-----	65
6.2.1.5	倫理的配慮	-----	67
6.2.2	質問項目の作成結果	-----	68

6.2.2.1	対象属性	-----	68
6.2.2.2	重要フレーズと分類	-----	68
6.2.2.3	尺度を作成する質問項目	-----	75
6.3	研究の方法	-----	83
6.3.1	対象者	-----	83
6.3.2	調査日	-----	83
6.3.3	調査方法と調査依頼	-----	83
6.3.4	調査項目	-----	83
6.3.5	分析	-----	84
6.3.6	倫理的配慮	-----	85
6.4	結果	-----	85
6.4.1	対象属性	-----	85
6.4.2	因子分析結果	-----	87
6.4.3	信頼性係数	-----	89
6.4.4	年齢・経験年数・職位との関連	-----	89
6.4.5	保育環境評価票との関連	-----	90
6.4.5	Communicative and Critical health literacy 尺度との関連	-----	90
6.4.2	園児情報活用尺度の基本統計量	-----	91
6.5	考察	-----	92
6.5.1	本尺度の因子構造について	-----	92
6.5.2	本尺度の妥当性について	-----	92
6.5.3	本尺度の可能性と限界	-----	94
 第7章 考察			
7.1	本研究の独創性	-----	95
7.2	健康政策的側面からの考察	-----	97
7.3	本研究の可能性と限界	-----	98
 第8章 結論			
			100

謝 辞	-----	102
-----	-------	-----

文 献	-----	103
-----	-------	-----

資 料

- 資料 1 一般発達評価票
- 資料 2 社会的スキル尺度
- 資料 3 気になる子どもチェックリスト
- 資料 4 育児環境評価票
- 資料 5 保育環境評価票
- 資料 6 WEB を活用した園児総合支援システムの使い方
- 資料 7 システム導入に関する説明書・同意書・依頼書
- 資料 8 フォーカス・グループ・インタビュー調査の説明書・同意書・依頼書
- 資料 9 フォーカス・グループ・インタビューガイド
- 資料 10 質問紙調査の説明書・依頼書
- 資料 11 質問紙（日頃の保育に関するおたずね）
- 資料 12 倫理審査承認書

参考論文

第 1 章 序論

1.1 少子化の現状

日本の合計特殊出生率は 1971 年をピークに低下傾向に転じ、2003 年には「超少子化国」と呼ばれる水準 1.3 を下回る 1.29 を記録した。2005 年には 1.26 と過去最低を記録し、2006 年から 2008 年には上昇に転じた傾向がみられるものの、2009 年は前年と同様 1.37 と横ばい、2010 年は 1.39 と前年を上回ったが、依然として低い水準にあり、長期的な少子化の傾向が継続している（厚生労働省, 2012）。少子化問題を解決するためには、「就労と出産・子育ての二者択一構造の解消」が必要であり、「働き方の見直しによる仕事と生活の調和の実現」と「就労と子育ての両立、家庭における子育てを包括的に支援する枠組みの構築」を両輪とした取り組みが不可欠であるとされ、保育所は、就労形態の多様化に対応した延長保育や夜間・休日保育などの保育サービス、待機児童を解消するための取り組みなどを推進しつつある（厚生労働省, 2012）。しかし、出生率を高めるための政策は効果に即効性はないとの見解があり（伊達・他, 2004）。保育所保育の社会的な要請は長期的に継続すると考えられる。

1.2 保育所保育の課題

家庭以外での保育が子どもの発達や適応機能に及ぼす影響に関する数多くの研究がある。Bradley (2007) らは、保育（入園年齢、保育時間、保育形態、保育の質）と子どもの発達（社会的、身体的、認知的発達）に関する研究 106 点のレビューから、「保育は多次元的事象であり、子どもに対しては非常に多くの交互作用が働いている。子どもの発達に対する入園年齢や保育時間、保育形態からの提言は複雑なものになるが、保育の質の影響は示唆される」と報告している。網野 (2003) らは 133 点のレビューから、「子どもへの影響を、乳児期あるいは幼児期に、親とともに家庭で過ごしたか否かという単純な変数でのみ判断することは科学的ではなく、この時期の子どもたちにとって最も重要なことは、保育環境におけるケアの質や、対人関係における応答性及び感受性豊かな人間的相互作用である」と述べている。その後に行われたコホート研究は、「保育の質が高いほど、子どもの認知・言語発達や就学レディネスは高くなる一貫した関係がみられる (NICHD, 2002)。」「幼児期のかかわりの質が、子どもの情緒的な不安定さに影響し、思春期の「問題行動」や「身体症状」にまで影響する (Crosnoe R・et.al., 2012)。」「虐待など好ましくない家庭環境にあ

っても、質の高いかかわりが保育所等で行なわれていれば、子どものアタッチメントが育つ（Bernard K, et.al., 2012）.」などを報告している。質の確保された保育の充実は社会的な要請であると考えられる。

1.3 保育の「質」評価

保育の質を評価するための変数は研究によって異なるが、「保育専門職の意識・あり方」を保育の質の定義の中核にとらえるという点は、国内外を問わずほとんどの研究で共通している（高辻, 2004）。国内の研究では、「子どもの発達に見合った適切な働きかけ、保護者へのサポート（網野, 2004）」などが質評価の視点としてあげられてきた。国外の研究では、保育専門職の離職に着目した評価（Cassidy, DJ., 2011）や、保育専門職の教育レベルに着目した評価（Mims, S. U・et.al., 2008）があるものの、多くは「子どものコミュニケーションに対する適切な反応（Melhauish EC・et.al., 1991）」「積極的なスキンシップ、発声や子どもの話に答える、積極的に話しかける、認知的発達の刺激など、保育者の子どもに対する敏感なかかわり（NICHD, 2002）」などが質評価の視点としてあげられてきた。

2008 年に改訂された新保育所保育指針は、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調した（全国保育所協議会, 2008）。これは、「保育専門職の意識・あり方」を中核にもち、保育専門職が子どもや保護者とのかかわりの中で得た情報（以下、園児情報）のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという plan-do-check-act サイクル（以下、PDCA サイクル）により保育の質向上をねらうものである。しかし、これをうけた保育実践の場では、多くの保育専門職が、園児情報をどのように受け止め、判断し、ケアに活かし、評価すべきか、どのように自己点検を行えばいいのか、日々悩みながら活動している。

園児情報を PDCA サイクルとして保育計画、実施、評価に活かすための記録システムの必要性が報告されている（仁木・他, 2008）が、同時に、保育専門職には、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている多くの園児情報を受け止め、判断し、ケアに活かし、評価していくこと（以下、園児情報活用）が求められている。園児情報活用は、これまでの保育の質評価の視点を包括するものであると考えられる。

1.4 電子健康記録の動向

情報通信技術を利用して、健康情報を保管し活用する動きが進んでいる（石樽, 2011）. 日本では, 2006 年に IT 新改革戦略が交付され, e-Japan 戦略に引き続き医療・健康分野の IT による構造改革に重点がおかれた (IT 戦略本部, 2006). 厚生労働省のグランドデザインに電子健康記録 (Electronic Health Records : EHR) の活用が盛り込まれ (山本, 2007), 保健, 医療, 福祉の様々な分野で電子健康記録導入に向けた国レベルでの取り組みがなされている (山縣, 2010 : 田中, 2010 : Okamoto, 2009 : 山縣, 2007). 同様に, 海外で国レベルの取り組みが進んでいる. イギリスでは, ”Connecting for Health”というシステムを構築し, 患者情報の共有やデータの二次有効活用, 医療サービスの分析などが展開された (NHS, 2011). アメリカでは, ”EHRs for all Americans by the year 2014”という目標のもと, 電子健康記録システムの導入に影響を及ぼす要因の検討がなされている (Morton・Wiedenbeck, 2011 : Morton・Wiedenbeck, 2009). オーストラリア, ニュージーランド, 中国, 台湾, シンガポールなどでは, アメリカと同様の取り組みが進んでいる (石樽, 2011).

電子健康記録に関するこれまでの研究を整理すると, 大きくは, 「電子健康記録導入の現状と課題の検討」「電子健康記録の開発と紹介」「電子健康記録導入の効果」の 3 つに分類される.

1.4.1 電子健康記録導入の現状と課題

電子健康記録導入の現状と課題 (表 1-1) では, 導入の現状として, 現場レベルでの普及は進んでいないことが報告されている (DesRoches・et.al., 2008 : 田中・岡村&山縣, 2007 : Ashish, et.al., 2009). 導入の課題としては, 情報漏洩が不明瞭である (八幡, 2010) などセキュリティの課題, 使いやすいデザインへの改良 (Archer&Cocosila, 2011 : 渡辺・他, 2007b) や活用可能なデータ集積の仕組みへの改良 (田中・岡村&山縣, 2007 : 渡辺・他, 2009 : 八幡, 2010) を求めるデザインやコンセプトに関する課題, 運用のための予算の問題 (Steven, 2007 : 渡辺・他, 2007b) などが報告されている. また, 電子健康記録導入の効果を実証しエビデンスを蓄積していくこと (Archer&Cocosila, 2011) や, 情報を扱う専門職の情報活用に関する意識やスキルを高めること (Ashish・et.al., 2009 : Fuji・et.al., 2011 : Fetter, 2009 : 池田・他, 2005 : Morton&Wiedenbeck, 2009 : Morton&Wiedenbeck, 2010 : Nagle, 2007 : 渡辺・他, 2007) などが求められている.

表 1-1 電子健康記録導入の現状と課題

論文内容	論文
導入の現状	
2008年の段階で、電子カルテを完全に導入している医師は少数である（完全導入4％、基本体系はある13％）。	Catherine M, et.al. (2008). Electronic Health Records in Ambulatory Care – A National Survey of Physicians. N Engl J Med, 359, 50-60.
日本の全市区町村と特別区を対象に調査。母子保健情報を電子化している自治体は全体の60.8％。	田中太一郎, 岡村智教 & 山縣然太朗. (2007). 市町村における母子保健データの収集・利活用状況. 平成16-18年度総合研究報告書, 68-73.
健康情報の管理に、情報技術を活用することは、情報管理の安全性とケアの質向上に効果をもたらすことが示されているが、なかなか普及しない現状がある。	Ashish K, et.al. (2009). Use of Electronic Health Records in U.S. Hospitals. N Engl J Med, 360, 1628-1638.
セキュリティ	
情報漏洩対策が不明確である。	八幡勝也. (2010). クラウド環境下での健康情報の利用. ITヘルスケア, 5(1), 73-76.
デザイン・コンセプト	
電子健康記録実現のためには、システムのデザインをより使いやすいものに改良することが求められる。	Archer N & Cocosila M. (2011). A comparison of physician pre-adoption and adoption views on electronic health records in canadian medical practices. J Med Internet Res, 13(3), e57.
健康情報の電算化の課題には、入力しやすいフォーム、入力困難な情報の取り扱いなどがある。	渡辺多恵子, 他. (2007b). 市町村における母子保健情報電算化支援と課題の検討, 平成16-18年度総合研究報告書, 228-237.
集積されたデータは分析・活用しやすい状況に管理されていない。	田中太一郎, 岡村智教 & 山縣然太朗. (2007). 市町村における母子保健データの収集・利活用状況. 平成16-18年度総合研究報告書, 68-73.
公式電子システムが導入されていながら、4人に1人以上の割合で記録のない者が存在。データの精度を高く保つには、随時データの更新を行うとともに、転入出に対応可能な記録システムの検討が求められる。	渡辺多恵子, 他. (2009). 小中学校における麻疹予防システム構築に関する研究—感染ハイリスク者の把握とワクチン接種実態調査から—。小児保健研究, 68(5), 529-535.
時系列比較の困難、個人に診療情報などをデジタルで報告する習慣がないため、個人に提供できるデジタル情報が乏しい。	八幡勝也. (2010). クラウド環境下での健康情報の利用. ITヘルスケア, 5(1), 73-76.
予算	
マサチューセッツでは、財政的に安定している総合病院では、電子健康記録を採用したが、ひとり、あるいは、小さい病因ではほとんど採用されていない。電子健康記録を普及させるためには、財政面と技術面の両方に対応しなければならない。	Steven R. (2007). Correlates of electronic health record adoption in office practices: a statewide survey. J Am Med Inform Assoc, 14(1), 110-117
健康情報の電算化の課題には、システム運用のための予算などがある。	渡辺多恵子, 他. (2007b). 市町村における母子保健情報電算化支援と課題の検討, 平成16-18年度総合研究報告書, 228-237.

効果の実証

新しい電子健康記録実現のためには、使用することの効果を実証することが求められる。

Archer N & Cocosila M. (2011). A comparison of physician pre-adoption and adoption views on electronic health records in canadian medical practices. J Med Internet Res, 13(3), e57.

専門職の意識やスキル

政策立案が普及の障害になっている現状も示されている。技術サポートスタッフの資金援助、相互運用性、トレーニングなどの政策的戦略が必要である。

Ashish K, et. al. (2009). Use of Electronic Health Records in U.S. Hospitals. N Engl J Med, 360, 1628-1638.

電子健康記録は、薬剤師が患者の安全とケアの質を高めるために有用性であるが、電子健康記録に関する薬剤師の理解は低く、普及させるためには電子化への抵抗をなくすための更なる研究がもとめられる。

Fuji KT, et. al. (2011). Electronic health record adoption and use by nebraska pharmacists. Perspect Health Inf Manag, 8(1d), 1-11.

アメリカでは、2014年までに電子健康記録の完全実施が進んでいるので、看護師にはIT能力が求められる。しかし、現状では、多くの看護師のIT能力は初心者水準であり、教育者側も教える準備ができていない。

Fetter MS. (2009). Improving information technology competencies: implications for psychiatric mental health nursing. Issues Ment Health Nur, 30(1), 3-13.

健康情報の電算化にとっての最大の障壁は、健康情報を取り扱う専門職の情報活用の意識であった。

池田裕子, 他. (2005). 長岡京市の電子情報化への取り組み. 保健師ジャーナル, 61(6), 507-512.

2014年までに、すべてのアメリカ国民に電子健康記録をと言われているが、導入はさほど進んでいない。リーダーシップと組織の変容が影響力をもつ。

Morton ME & Wiedenbeck S. (2009). A framework for predicting EHR adoption attitudes: a physician survey. Perspectives in Health Information Management, 16(6), 1-19.

導入のためには、利用する者の社会的な行動要因をしらべなければならない。

Morton ME & Wiedenbeck S. (2010). EHR Acceptance Factors in Ambulatory Care: A Survey of Physician Perceptions. Perspectives in Health Information Management, 1(7), 1-17.

医療従事者の基本的な教育プログラムに、電子健康記録を用いた情報管理に関するプログラムを入れる必要がある。

Nagle LM, (2007). Infoway's EHR user engagement strategy. Nurs Leadersh (Tor Ont), 20(2), 31-33.

健康情報の電算化の課題には、専門職の運用スキル（研修やマニュアルの必要性）などがある。

渡辺多恵子, 他. (2007b). 市町村における母子保健情報電算化支援と課題の検討, 平成16-18年度総合研究報告書, 228-237.

1.4.2 電子健康記録の開発に関する研究

電子健康記録の開発に関する研究（表 1-2）では，患者の医療情報を共有するために効果的な医療情報交システム（Han・et.al., 2010）や，腕時計型のセンサにより，無意識のうちに，脈拍，運動量，体温，睡眠などの健康情報を収集し，無線 LAN を介して情報をサーバーに集積し，個人のパソコンから自身の健康情報を閲覧できるシステム（河西・他, 2009）などが示されている．利用者自身の情報コントロール権を遵守させつつ利便性を損なわない技術の提案（中村&千石, 2008），複数診療科からの要件と連携を考慮し最適なものをデザインする技術の検討（澤智, 2011），公的な個人情報アカウントが導入されたことを想定し，そのアカウントを利用し個人の健康情報を管理する実験システムが，安全に医療機関や家庭で利用できることの実証（鈴木・他, 2010）などが報告されている．また，インターネット上のホスト名と IP アドレスを対応させるドメインネームシステム（DNS）による，健康情報管理データベースとして流用するための健康情報取得手法や登録方法，データ対応付け方法の提案と，セキュリティの検討（渡邊&藤野, 2007），患者の情報を長期にわたって保管し活用し，施設間連携をはかるために開発されたシステムの機能（山田, 2010）など，セキュリティやコンセプトに工夫を凝らせた，保健医療福祉分野の様々なシステムが開発されていることが報告されている．

表 1-2 電子健康記録の開発に関する研究

論文内容	論文
患者の医療情報を共有するために効果的であり、患者の医療情報管理に不可欠なセキュリティを保証する新しい医療情報交換システム(ミース)を開発。	Han SH, et. al. (2010). Implementation of Medical Information Exchange System Based on EHR Standard. Healthc Inform Res, 16(4), 281-289.
腕時計型のセンサにより、無意識のうちに、脈拍、運動量、体温、睡眠などの健康情報を収集し、無線LANを介して情報をサーバーに集積する。個人は、パソコンから自身の健康情報を閲覧できるシステムの開発。	河西正樹, 他. (2009). ZigBee無線規格を用いた健康情報管理システムの概要とその基本特性について. 電子情報通信学会技術研究報告 RCS, 109(229), 101-106.
利用者の自己情報コントロール権を遵守させつつ利便性を損なわない技術の提案。	中村雄介 & 千石靖. (2008). 医療福祉分野における動的な交渉による個人情報の自己管理可能なシステムの提案. 電子情報通信学会技術研究報告 SP, 107(435), 43-46.
複数診療科からの要件と連携を考慮し最適なものをデザインする技術の検討。	澤智博. (2011). 診療科ごとの要件と連携を考える 病院IT化の突破口を示す 病院情報システム稼働における複数診療科からの各要件とその解決に対する具体的考察. 新医療, 38(3), 114-117.
公的な個人情報アカウントが導入されたことを想定し、そのアカウントを利用し個人の健康情報を管理する実験システムが、安全に医療機関や家庭で利用できることを実証。	鈴木裕之, 他. (2010). 公的な個人情報アカウントを利用した健康情報管理システムに関する実証実験. 電子情報通信学会技術研究報告 LIOS, 110(282), 15-21.
インターネット上のホスト名とIPアドレスを対応させるドメインネームシステム (DNS) による、健康情報管理データベースとして流用するための健康情報取得手法や登録方法、データ対応付け方法の提案と、セキュリティの検討。	渡邊英伸 & 藤野貴之. (2007). DNSによる簡易健康情報データベースの実現に関する一検討. 電気情報通信学会技術研究報告 NS, 107(261), 51-56.
患者の情報を長期にわたって保管し活用し、施設間連携をはかるために開発されたシステムの機能紹介。	山田貴子. (2011). 研究の新しい展開 医療の課題とその解決を目的としたシステム開発. 医学のあゆみ, 237(5), 537-534.

1.4.3 電子健康記録導入の効果

電子健康記録導入の効果（表 1-3）では，断続的に集積された健康に関する情報を包括的に管理し，データを研究などに活用するチャンスとなる（Devoe・et.al., 2011），電子的に利用可能になった臨床上のデータと医学文献の統合による疾病の関連要因の検討が可能となる（Holmes・et.al., 2011），電子健康記録に集積された情報は，長期にわたって包括的に管理されるので，遺伝学的研究にとってはなくてはならないものである（Kurreeman・et.al., 2011），データベースから抽出した多様なデータは「医療の質評価(Quality Indicator)」「病院経営(診療科別原価計算)」などに活用できる（小泉&谷川, 2011），ネットワークがあれば，サーバー上の情報を検索し利用することができる（八幡, 2011）など，電子健康記録データベースに集積されたデータ活用が検討されている．

電子カルテ導入後の職員への質問紙調査より職員の業務負担の面から業務の効率化が評価されている（磯崎・他, 2011；小泉&谷川, 2011）．

ケアの質への効果と患者満足（DesRoches・et.al., 2008），患者と接する時間の増加（薄・他, 2010），治療やケアの標準化，クリニカルパスの適応率上昇（磯崎・他, 2011），地理的，経済的な理由により十分なサービスを受けられない人へのケア（Sequist・et.al., 2007），感染症発生時の拡大防止（渡辺・他, 2009），乳幼児健診未受診・予防接種未接種者への徹底した対応，家族単位での支援活動，ハイリスク者支援，集团的支援，将来的な健康課題への対応，他機関・他市町村との情報共有，学校検診との連携（渡辺・他, 2007a）などの側面から，保健医療の質向上が検討されている．

電子健康記録を採用した医師は健康情報活用の意識が高い（Simon, 2007），健康情報の集積と活用に対する専門職の意識統一（渡辺, 2007a；渡辺, 2007b），など，専門職の情報活用に関する意識の向上が検討されている．

表 1-3 電子健康記録導入の効果

論文内容	論文
集積されたデータの活用	
電子健康記録は、断続的に集積された健康に関する情報を包括的に管理し研究などに活用するチャンスとなる。	Devoe JE, et.al. (2011). Electronic health records vs medicaid claims: completeness of diabetes preventive care data in community health centers. Ann Fam Med, 9(4), 351-358.
電子健康記録は多くの病気に関する研究を可能にした絶好のシステムである。電子的に利用可能となった臨床上のデータと医学文献の統合による、疾病の関連要因の検討が可能となった。	Holmes AB, et.al. (2011). Discovering disease associations by integrating electronic clinical data and medical literature. PLoS One, 6(6), e21132.
電子健康記録に集積された情報は、長期にわたって包括的に管理されるので、遺伝学的研究にとってはなくてはならないものである。	Kurreeman F, et.al. (2011). Genetic Basis of Autoantibody Positive and Negative Rheumatoid Arthritis Risk in a Multi-ethnic Cohort Derived from Electronic Health Records. The American Journal of Human Genetics, 88, 57-69.
データベースから抽出した多様なデータは「医療の質評価(Quality Indicator)」「病院経営(診療科別原価計算)」などに活用できることを検証。	小泉孝範 & 谷川浩隆. (2011). 電子カルテ導入の効果と稼働後の取り組み. 日本農村医学会雑誌, 59(5), 574-579.
ネットワークがあれば、サーバー上の情報を検索し利用することができる。	八幡勝也. (2010). クラウド環境下での健康情報の利用. ITヘルスケア, 5(1), 73-76.
業務の効率化	
看護師を対象とした質問紙調査では、84.5%が電子カルテ導入は「業務の効率化に寄与した」と回答した。	磯崎淳, 他. (2011). 電子カルテによる小児気道感染症の入院クリニカルパスの導入 当科の変遷とその評価. 小児科, 52(3), 371-376.
電子カルテ導入の1年4か月後に、職員への質問紙調査を実施し、電子カルテ導入効果を検討した。導入してよかった、業務負担が減ったと回答した者が多くみられた。	小泉孝範 & 谷川浩隆. (2011). 電子カルテ導入の効果と稼働後の取り組み. 日本農村医学会雑誌, 59(5), 574-579.
保健医療の質向上	
患者へのケアの質への明らかな効果と、高い患者満足が示された。	Catherine M, et.al. (2008). Electronic Health Records in Ambulatory Care - A National Survey of Physicians. N Engl J Med, 359, 50-60.
全診療時間に占める診察時間割合（患者と接する時間）増加。	薄雄斗, 他. (2010). 電子カルテ導入前後の外来診察状況の変化に関する研究. ITヘルスケア, 5(1), 44-47.
治療やケアの標準化、クリニカルパスの適応率が有意に上昇。	磯崎淳, 他. (2011). 電子カルテによる小児気道感染症の入院クリニカルパスの導入 当科の変遷とその評価. 小児科, 52(3), 371-376.
地理的、経済的な理由により十分なサービスを受けられない人たちへのケアの質を高めた。	Sequist TD, et.al. (2007). Implementation and Use of an Electronic Health Record within the Indian Health Service. J Am Med Inform Assoc, 14, 191-197.
公式記録の精度を維持・向上することは、麻疹発生時に早急な措置を可能とし、感染拡大防止に大きな効果を発揮する。	渡辺多恵子, 他. (2009). 小中学校における麻疹予防システム構築に関する研究—感染ハイリスク者の把握とワクチン接種実態調査から—. 小児保健研究, 68(5), 529-535.
乳幼児健診未受診・予防接種未接種者への徹底した対応、家族単位での支援活動、ハイリスク者支援、集団的支援、将来的な健康課題への対応、他機関・他市町村との情報共有、学校検診との連携。	渡辺多恵子, 他. (2007a). 家族リンク型健康情報データベースの活用と保健師活動における視点の変化に関する研究. 平成16-18年度総合研究報告書, 223-227.
専門職の情報活用に関する意識向上	
電子健康記録を採用した医師は、採用なかった医師と比べて、健康管理へのコンピュータの効果について、ポジティブな視点をもっており、健康情報活用の意識も高い。	Simon SR. (2007). Physicians and electronic health records: a statewide survey. Arch Intern Med, 167(5), 507-512.
利活用に視点をのいた健康情報の集積と管理、健康情報の集積と活用に対する専門職の意識統一。	渡辺多恵子, 他. (2007a). 家族リンク型健康情報データベースの活用と保健師活動における視点の変化に関する研究. 平成16-18年度総合研究報告書, 223-227.
健康情報の電算課にとりくんだ専門職には、利活用に視点をのいた健康情報の集積と管理、健康情報の集積と活用に対する専門職の意識統一などの活動の視点が生じた。	渡辺多恵子, 他. (2007b). 市町村における母子保健情報電算化支援と課題の検討, 平成16-18年度総合研究報告書, 228-237.

1.5 健康情報活用におけるヘルスリテラシーの視点

現在の健康政策の中心には、ヘルスプロモーションの考え方がある。グローバル化した世界での健康決定要因に視点を置いたバンコク憲章は、情報通信技術（Information and communications technology : ICT）の強化を含むグローバル化を健康増進と健康リスク軽減の新たな好機としてとらえ、高めるべき能力の一つに「ヘルスリテラシー」をあげている（WHO, 2005）。

ヘルスリテラシーとは、「健康についての適切な意思決定を行うにあたって必要な健康情報やサービスを手に入れ、整理し、理解する能力（Healthy People, 2010）」「健康リスクを減少させ、生活の質を向上させるための健康情報と考え方を探し、理解し、評価して利用できる、生涯を通して発達する幅広い範囲のスキルと能力（Zarcadoolas, 2005）」「認識面のスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力（WHO, 1998）」などと定義されている。

Nutbeam（2000）は、ヘルスリテラシーを構成する概念として、「機能的ヘルスリテラシー（Functional health literacy）」「相互作用的ヘルスリテラシー（Interactive health literacy）」「批判的ヘルスリテラシー（Critical health literacy）」の3つを提唱した。（Nutbeam, 2000）。「機能的ヘルスリテラシー」とは、日常生活場面での健康に関連した情報について理解できる能力と定義される。「相互作用的ヘルスリテラシー」とは、日常的な活動に活発に参加し、様々な形式のコミュニケーションから情報を入手し、意味を引き出し、新しい情報を変化する環境へ適用するために利用される能力と定義される。「批判的ヘルスリテラシー」とは、情報を批判的に分析し、この情報を日常的な出来事や状況をよりコントロールするために使用することに適用される能力と定義される。また、Zarcadoolas（2005）は、ヘルスリテラシーを構成する概念として、「基本的リテラシー（fundamental literacy）」「科学的リテラシー（scientific literacy）」「市民リテラシー（civic literacy）」「文化的リテラシー（cultural literacy）」の4つの多次元モデルを提唱した。「基本的リテラシー」とは、読み書き、会話、計算能力である。「科学的リテラシー」とは、科学の基本的知識や技術の理解、科学の不確実性の理解などである。「市民リテラシー」とは、各人の健康に関する意思決定が集団の健康に影響することの認識である。「文化的リテラシー」とは、集団の信念、習慣、社会的アイデンティティ等の認識である。

健康情報活用に関する実践と研究は、国内外問わず、概ね上記の定義や概念のもとに行われているが、現状ではヘルスリテラシーに関する評価が十分であるとは言えず、ヘルス

リテラシー向上プログラムやWEBサイトの開発と評価、及び、ヘルスリテラシーに関する測定ツールの開発が急務であると述べられている（中山, 2008）。

一方、新保育所保育指針（全国保育所協議会, 2008）が重要性を強調した「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」は、「保育専門職の意識・あり方」中核にもち、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をアセスメントし、PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育をめざすものである。保育専門職には、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている多くの園児情報を受け止め、判断し、ケアに活かし、評価していく「園児情報活用」が求められている。「園児情報活用」と「ヘルスリテラシー」とは対象とするものに違いはあるものの、健康維持や増進に必要な情報を理解し、活用するという点で、共通性が見られる。評価ツールがほとんど提案されていない園児情報を活用するスキルを評価するツールを考えるにあたり、ヘルスリテラシーを構成する概念は多いに参考になるものである。

1.6 研究課題への着想

少子化を迎え、孤立した子育てについて、質的にも量的にも十分な支援策を講じることが喫緊の課題となっている。発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加は社会問題となっており、子育て支援にかかわる専門職への社会の期待は高まるばかりである。保護者と子どもを日常的に支えつつ虐待予防や障害児支援を展開することは国の重要施策の一つであり、新保育所指針では、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調している。すなわち、保育専門職には「子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき」による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用した「根拠に基づく実践」が求められている。また、「特段の配慮を要する子どもを早期に把握し、他機関と連携した質の高い支援の実施と評価」が求められている。保育の質向上への大きな転機を迎えた保育実践の場では、多くの保育専門職が、「子どもの気になる行動」や「保護者のサイン」をどのように受け止め、判断し、実践し、評価すべきか日々悩みながら活動している。

これまでの研究を通して、子どもの健やかな発達に影響する要因と支援のあり方を分析し、保育の質向上に寄与する5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票（資料1-5））を開発するとともに、保育実践で活用する方法について整理した（安梅, 2007a: 安梅, 2008）。これらは、保育実践の場で活用され、質の高い保育の展開に役立つこと（安梅, 2007a: 安梅, 2008）、発達障害の早期把握と支援（篠原・他, 2009）、虐待予防（渡辺・他, 2010）などに役立つことが実証されている。

しかし、「子どもと保護者の真のニーズの見極めと気づき」による「的確な実践」「実践の評価」「よりよい実践へのフィードバック」という支援ループを活用した「根拠に基づく実践」のためには、5つのスケールと実践での活用方法を、「より日常の保育に活用しやすい形」「保育の成果を視覚的に捉えやすい形」「柔軟で汎用性の高い形」で提供することが求められる。また、保育所保育の影響をさらに検証し、強固な根拠を生み出していくためには、集積した情報を、学童期、あるいはそれ以降まで活用可能な形で保管していくことが求められる（NICHD, 2002: Crosnoe R・et.al., 2012）。これを実装するための一手段として、情報通信技術の活用が考えられる。「保健医療業務の改善」と、「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てる」ことは、健康情報の保管と活用への情報通信技術活用がめざすところである（石樽, 2011）。

また、新保育所保育指針（全国保育所協議会、2008）が重要性を強調した、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」を評価していくためには、保育専門職が、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている多くの園児情報を受け止め、判断し、ケアに活かし、評価していくという、保育の質評価の視点を包括するともいえる「園児情報活用」を自己評価できる測定ツールが求められる。

そこで、5つのスケールと実践での活用方法を、情報通信技術を利用して展開するWEBアプリケーションを開発すること、保育専門職が、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている多くの園児情報を受け止め、判断し、ケアに活かし、評価していく、園児情報活用を定量的に評価する尺度を開発することに着目した。WEBアプリケーションは、「根拠に基づく支援」「評価」という点で、保育の質向上に貢献すると考えられる。尺度は「自己点検」という点で、保育の質向上に貢献するとともに、開発後、6つ目のスケールとして、WEBアプリケーションの中に盛り込むことのできるものである。

第2章 保育所・幼稚園用電子システムの開発と活用の状況（予備調査）

情報通信技術を利用して、健康情報を保管し活用する動きが進み、「電子健康記録導入の現状と課題」「電子健康記録の開発」「電子健康記録導入の効果」などに焦点をあてた研究が行われている。使いやすいデザインへの改良（Archer&Cocosila, 2011：渡辺・他, 2007b）や活用可能なデータ集積の仕組みへの改良（田中・岡村&山縣, 2007：渡辺・他, 2009：八幡, 2010）などが課題となっている。

予備調査では、保育所、幼稚園、総合園を対象とした、「園児情報を取り扱う電子記録システム」の開発状況と、活用上の課題を検討した。

2.1 保育所・幼稚園用電子システムの開発状況（予備調査1）

1) 研究の目的

本研究では、保育所、幼稚園、子ども園を対象として開発されている園児電子記録システムが、どのような情報を集積、管理しているかを明らかにした。

2) 研究の方法

Google Search を使用し、園児システム、園児ソフト、園児管理、園児管理ソフト、園児管理システムをキーワードとして検索し、上位 150 件のサイトに表示され、重複表示されたものを除く 53 システムを分析の対象とした。

53 の電子園児システムについて、ホームページ上での紹介内容と、取り寄せた説明書を参考に、53 のシステムが、下記の機能を持っているかどうかを整理した。

- ① 事務業務：保育料や職員の給与などの管理機能
- ② 保育業務：登降園、バス乗車、要録作成、日報・月報などの作成機能
- ③ 基本：園児の氏名、年齢、住所、連絡先などの基本的な情報
- ④ 健康：既往歴、現病歴、内服状況、予防接種状況など健康情報
- ⑤ 発育：身長、体重など
- ⑥ 発達：運動発達、社会性発達、言語発達など発達状況

3) 結果

事務業務管理機能をもっているシステムは、53 システム中 46 システム（86.8%）であった。保育業務管理機能は 41（77.4%）、基本情報は 48（90.6%）、健康情報は 20（37.7%）、発育情報は 18（34.0%）であった。発達情報を集積しているシステムは 9（17.0%）であったが、項目の信頼性、妥当性の検証はなされていなかった（表 2-1）。

4) 考察

園児の健やかな発達を促すかかわりの根拠や評価のために必要な、発育、発達、健康情報を集積しているシステムは乏しい状況であった。信頼性、妥当性の検証された項目の選定が求められる。

表 2-1 保育所・幼稚園用電子記録システム開発状況

システム名	メーカー名	事務 業務	保育 業務	基本	健康	発育	発達
1 パステル園児管理 for クラウド	株式会社 サンロフト	○	○	○			
2 Kid's View (キッズビュー)	日本ソフト開発株式会社	○	○	○	○	○	△
3 Smart Kids	メディアモバイル株式会社	○	○	○	○	○	△
4 保育園 登降園システム	株式会社イトン	○	○	○			
5 桜システム	株式会社 エステム	○	○	○	○	○	△
6 くらら	ANS株式会社	○	○	○	○	○	△
7 ピーカブック	株式会社 コンピュータシステム研究所	○	○	○	○	○	△
8 幼稚園・保育園ソフト	Frontier Soft	○	○	○			△
9 保育支援システム	株式会社 チャイルド社	○	○	○	○		△
10 園児情報管理システム	トップオフィスシステム株式会社	○	○	○	○		△
11 見守るほいく	株式会社カグヤ						△
12 おまかせ管理ちゃんNTP	株式会社 フロンティア	○	○	○	○	○	
13 園児情報管理システム	株式会社 アピ・グローバル	○	○	○	○	○	
14 はぐくむ保育	社団法人 東京都民間保育園協会	○	○	○	○	○	
15 保育園の業務一括管理	有限会社 プロデュースQ	○	○	○	○	○	
16 楽っ子	有限会社 アイポイント	○	○	○		○	
17 幼稚園情報管理システム	G・I NET		○	○	○	○	
18 えんじくん	ウィングソフトウェア株式会社	○	○	○	○	○	
19 園児用カウプ指数計算判定ソフト	ジャパンカスタムパソコン教室					○	
20 園児管理統合システム	有限会社 アンデュウトロワ	○	○	○	○	○	
21 保育園運営支援システム	株式会社サーブ	○	○	○	○	○	
22 園-SiEN	株式会社サーブ	○	○	○	○	○	
23 保育支援システム	データウェアネットワーク株式会社		○	○		○	
24 保育園向け業務支援システム	社会保険システムコンサルタント	○	○	○	○	○	
25 園児管理どうさんネット	日本システムクリエイト株式会社	○	○	○			
26 園児情報管理	有限会社 システムライツ	○	○	○			

※ ○は機能あり、空欄は機能なし、△は機能はあるが項目の信頼性・妥当性が確認できないもの

システム名	メーカー名	事務 業務	保育 業務	基本	健康	発育	発達
27 わらべシステム	教育産業株式会社	○	○	○			
28 園児さんの管理ソフト	有限会社 宇治商会	○	○	○			
29 園児管理システム	株式会社 工研情報システム	○	○	○			
30 園児管理テンプレート	株式会社 大塚商会	○	○	○			
31 先生といっしょ！	協立システムマシン株式会社	○	○	○	○		
32 わんぱくランチ	株式会社 アドム	○	○	○	○		
33 エクセルde登園管理	株式会社 リードコナン	○					
34 Kid's Saver	株式会社 テクノ産業	○	○	○			
35 すくすく保育支援	NIC日本インフォメーション株式会社	○	○	○			
36 わくわく保育	株式会社 エフピース・ソフト	○					
37 保育システム	株式会社エナジー・コンピュータ	○		○			
38 わくわく保育料管理	有限会社 新システムデザイン	○		○			
39 園児管理システム	株式会社セプト	○		○			
40 おまかせ園児くん Light	株式会社 フロンティア	○		○			
41 登降園管理システム	株式会社ISTソフトウェア	○		○			
42 園児見守り支援システム	日本パーソナルコンピュータ株式会社		○				
43 ウチダトータル保育所システム	株式会社 内田洋行	○		○			
44 e-Kids	有限会社 アクリート	○	○	○			
45 すくすくKids21 園児管理	株式会社 サンアリックス	○	○	○			
46 通園管理システム	キュービックアイディ/システムライツ	○	△	○			
47 ジャストクレヨン園児管理	JUST. SYSTEMS	○	○	○			
48 幼稚園（園児管理）	応研株式会社	○	○	○	○		
49 保育指針システム2009	株式会社サーブ		○	○			
50 タッチ de ネット24	テレネットジャパン株式会社		○	○			
51 就園奨励システム	株式会社アイティフォー	○		○			
52 保育園等支援システム	株式会社ネクスタッツ	○		○			
53 保育システムNursery Star★	株式会社ジラッフア	○	○	○			
合計		46	41	48	20	18	9

※ ○は機能あり，空欄は機能なし，△は機能はあるが項目の信頼性・妥当性が確認できないもの

2.2 保育所における電子システムの活用状況（予備調査2）

1) 研究の目的

園児情報の電子システム化と活用に向け、電子化に取り組んでいる2つの保育所を訪問し、現行のシステム活用における課題を検討した。

2) 研究の方法

独自に開発したシステムで、保育情報の電子化に取り組んでいる2つの保育所を訪問し、システム管理担当保育士2名に、聞き取り調査を行なった。聞き取りの内容は、①システムの概要、②電子化した情報、③システム活用年数、④システムの継続活用における課題、の4点とした。訪問日は、平成23年2月21日であった。

本研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会（第455号）の承認を得て実施した。

3) 結果

< A 園の状況 >

① システムの概要

園内共通サーバーを使用し、様々な文書をサーバー上の共有フォルダで管理していた。園児の基本情報、健康情報、保育計画、要録などは MS Excel、園児の発達情報は、MS Access で独自に開発した「子育て支援システム」を使用していた。職員のスケジュール管理や連絡調整には、独自のインターネット環境を構築し、サイボウズ社の Office8 を使用していた。園児の登降園情報は独自に開発した WEB アプリケーションで管理していた（図 2-1）。

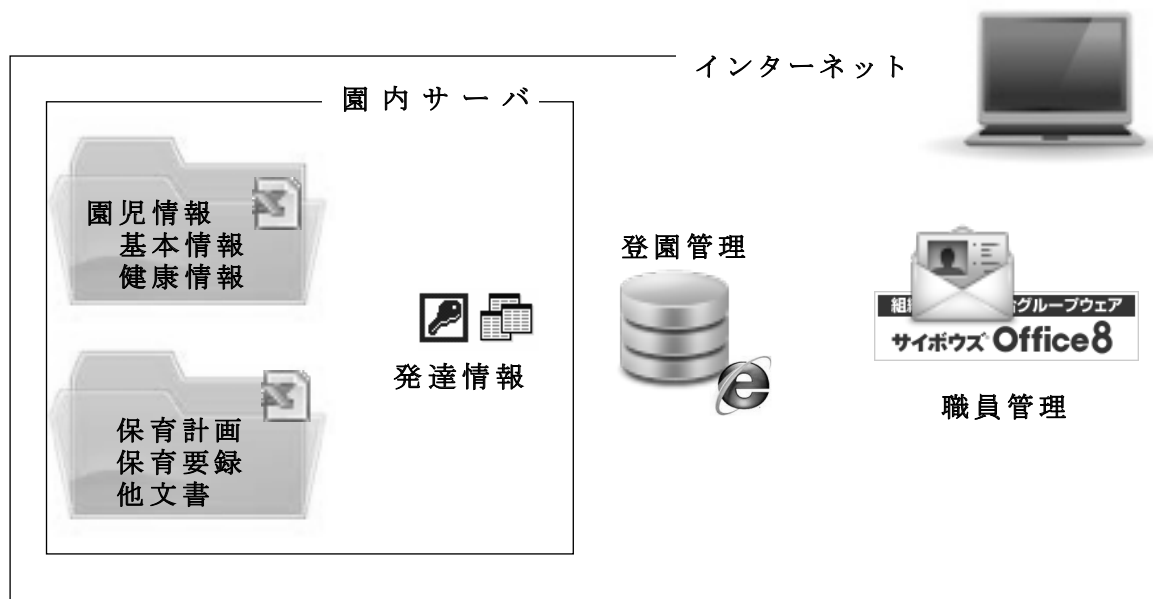


図 2-1 A 園のシステム環境

② 電子化した情報

基本情報，健康情報，発達情報，保育文書（年間計画，月案，週案，日案，保育日誌），登降園状況，職員情報．

③ システム活用年数

平成 20 年からシステム活用を開始し，3 年間継続活用していた．

④ 継続活用における課題

下記 7 点があげられた．

- A) 自由記述による文章データ（保育士のコメント等）の入力，管理
- B) 発育記録のグラフによる表示
- C) 発達記録のグラフによる表示，クラス，園，全国との比較
- D) 保育所児童保育要録作成機能
- E) 指導計画作成機能（入力したデータが，コメント例として反映される．）
- F) 保育過程作成機能
- G) 保育情報の一元管理

< B 園の状況 >

① システムの概要

独自に開発した保育管理ソフトを、園内イントラネットを活用し共有していた。入力は、PC の他に、PDA（保育士がひとり 1 台 PDA を持っていた）を活用していた（図 2-2）。

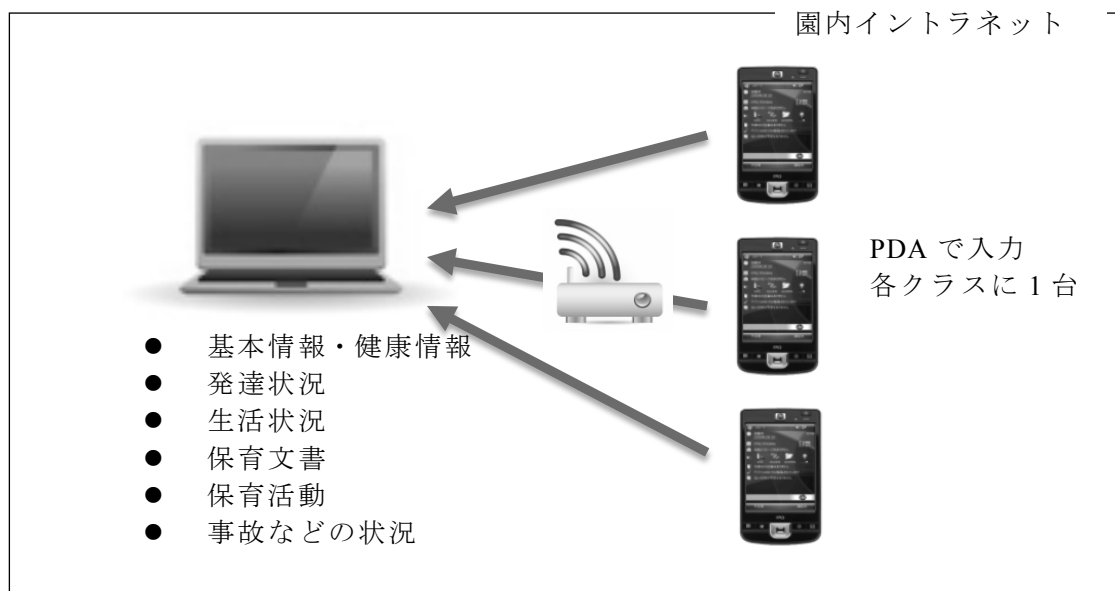


図 2-2 B 園のシステム環境

② 電子化した情報

基本情報、健康情報、発達状況、登降園情報、生活状況、保育文書（年間計画、月案、週案、日案、保育日誌）、職員情報

③ システム活用年数

平成 18 年からシステム活用を開始し、5 年間継続活用していた。

④ 継続活用における課題

子どもの発達発達について、根拠に基づく項目で、より入力しやすいシステムが必要である。

4) 考察

本調査の対象とした保育所は、システム環境は異なるものの、ほぼ同様の情報を集積し、継続活用していた。基本情報、健康情報、発達状況、登降園情報、生活状況、保育文書（年間計画、月案、週案、日案、保育日誌）、職員情報などが、電子化すべき情報として、必要とされていると考えられる。

継続活用の課題として、入力した情報を視覚的に表示するレポート機能や、入力した情

報の保育計画への反映などがあげられていた。入力した情報をすぐに活用できる仕組みの構築が求められている。また、発達情報について、根拠に基づく項目、及び、入力しやすいフォームがあげられていた。信頼性、妥当性の検証された項目の選定と、保育士にとって入力しやすい画面、フォームの構成が求められている。

第 3 章 研究の目的と概要

3.1 研究の背景

新保育所保育指針は、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調した（全国保育所協議会，2008）。これは、「保育専門職の意識・あり方」を中核にもち、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルによる保育実践、および、保育専門職自身の自己評価により保育の質向上をねらうものである。しかし、これをうけた保育実践の場では、多くの保育専門職が、園児情報をどのように受け止め、判断し、ケアに活かし、評価すべきか日々悩みながら活動している。

これまでの研究を通して、保育の質向上に寄与する5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票（資料1-5））を開発するとともに、保育実践で活用する方法について整理した（安梅，2007a：安梅，2008）。園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクル展開への活用には、5つのスケールと実践での活用方法を、「より日常の保育に活用しやすい形」「保育の成果を視覚的に捉えやすい形」「柔軟で汎用性の高い形」で提供することが求められる。また、「自己点検」のためには、園児情報を受け止め、判断し、ケアに活かし、評価していく「園児情報活用」を自己評価できる測定ツールが求められる。

3.2 研究の目的

本研究では、保育の質向上に寄与する5つのスケールと実践での活用方法を、情報通信技術を利用して展開する「WEBを活用した園児情報記録システム（以下、本システム）」を開発した。研究1では、本システムの機能より、園児情報の適切なアセスメント、PDCAサイクル展開に妥当であるかどうか、導入実績より、データ集積の可能性を検討した。研究2では、本システムの機能に準拠し、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を量的に測定可能な尺度を作成し、信頼性・妥当性の検証を行った。

3.3 研究の概要

3.3.1 研究1 「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積の可能性

保育の質向上に寄与する5つのスケールと実践での活用方法を、情報通信技術を利用して展開する「WEBを活用した園児情報記録システム」の開発に取り組んだ。本システム開発のために開催した全10回の会議記録から、本システムの機能を抽出し、内容分析法を用いて類型化した。整理された本システムの機能より、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクル展開のための機能を内包するかどうかにより、内容妥当性を確認した。

訪問許可の得られた保育所を訪問し、保育専門職に本システムの概要、特徴、使い方に関する説明を行なった。同様に、従来の紙媒体のスケールの概要、特徴、使い方に関する説明を行った。平成24年8月1日から平成24年12月31日までの5か月間における、本システムの導入実績と、従来の紙媒体のスケール導入実績の比較から、本システムのデータ集積の可能性を検討するとともに、改善点を明らかにした。

3.3.2 研究2 「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討

尺度開発に先立ち、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、及び、園児情報をより活用しやすい形で提供するWEBアプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の3種類のグループを対象に、本システムの機能に焦点をあてたフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施した。インタビュー記録から子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用尺度」を構成する質問項目の作成を試みた。保育専門職を対象とした無記名の自記式質問紙調査を実施し、作成した質問項目について、「全くそう思わない(1点)」から「かなりそう思う(5点)」までの5件法で回答を求め、因子分析により因子構造の確認と尺度項目の選定を行った。下位尺度ごとに信頼性係数を算出し、尺度の信頼性を確認した。職業経験年数、保育環境評価票得点との相関分析により、基準関連妥当性を確認した。Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により、構成概念妥当性を確認した。

3.3.3 研究の概念枠組み

研究1は、保育の質向上に向け、本システムの評価をするとともに、保育の質向上にさらに貢献するための改良点を本システムにフィードバックするものである。研究2は、保育の質向上に向け、本システム機能に準拠し、尺度を開発し信頼性・妥当性の検証を行うものである。

研究1で、システムの内容的妥当性が確認されることにより、本システムの機能に準拠して研究2を行ったことの妥当性が高まる。また、尺度の信頼性・妥当性が確認されれば、研究1の結果の妥当性が高まる。さらに、研究2で開発された尺度は、保育の質向上にむけた新たなスケールである。本システムに追加できる6つ目のスケールとして、本システムの機能向上に寄与するものである（図3-1）。

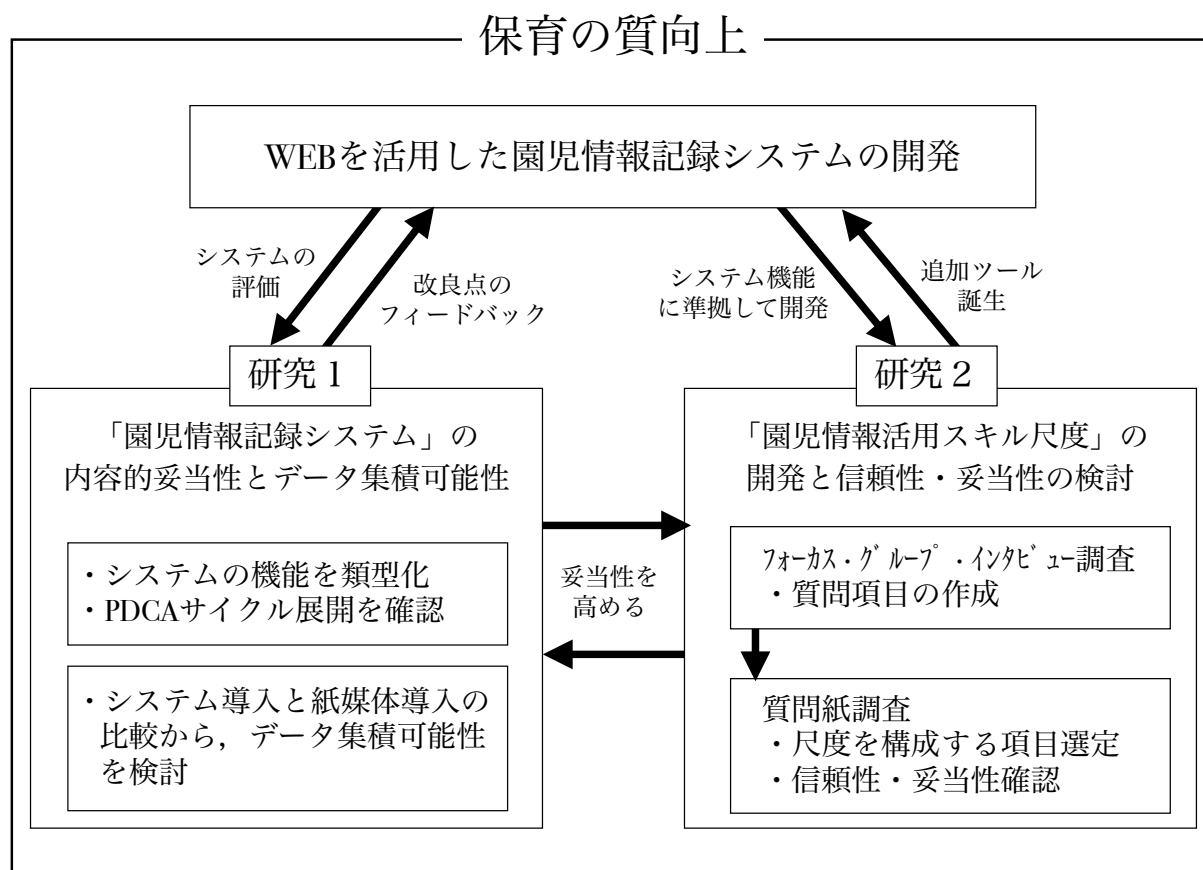


図 3-1 研究の概念枠組み

3.4 研究の意義

園児情報記録への情報通信技術の活用はまさしくこれからであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実という点で社会的意義の高い研究である。これまで紙媒体で雑多に集積されていた園児情報は、包括的に管理され、「日常の保育に活用しやすい形」「保育の成果を視覚的に捉えやすい形」「柔軟で汎用性の高い形」で提供される。園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開により、子どもや保護者はよりよい支援を受けることができる可能性が高まる。

本システムが普及する事で、研究者側は、連結可能匿名化された園児情報を継続的に集積することが可能となり、園児の発達に関する経時的な情報記録を活用できる可能性を持つ。保護者と子どもを日常的に支えつつ虐待予防や障害児支援を展開し、社会問題化している「孤立した子育て」「発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加」などの解決に向けた支援の充実が期待される。

保育の質評価の視点を包括すると考えられる「園児情報活用」を測定するツールの開発は、保育専門職が自己点検により、自分自身の意識やあり方を振り返り、改善すべき点を見いだすことに活用できる。保育専門職の、より質の高い専門技術の取得につながるものである。

3.5 用語の定義

1) 保育専門職

日常的に乳幼児と保護者に関わりをもつ保育士、幼稚園教諭、看護師、保健師と定義する。

2) 園児情報

保育所、幼稚園、総合園に所属する 0～6 歳の子どもの「健康情報」「発育情報」「発達情報」「育児環境など養育者情報」「保育環境など保育専門職情報」など、子どもや養育者とのかかわりの中で得る情報と定義する。

3) 質の高い保育

2008 年に改訂された新保育所保育指針は、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調した（全国保育所協議会, 2008）。これは、「保育専門

職の意識・あり方」を中核にもち、保育専門職が子どもや保護者とのかかわりの中で得た園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルにより保育の質向上をねらうものである。そこで、本研究では、「質の高い保育」を「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育」と定義する。

4) 園児情報活用

子どもや保護者とのかかわりの中で得ている「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報」を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うための情報理解と定義する。

第4章 「WEBを活用した園児情報記録システム」の開発

保育の質向上に寄与する5つのスケールと実践での活用方法を、情報通信技術を利用して展開する「WEBを活用した園児情報記録システム」の開発に取り組んだ。本システム開発は、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会（第455号）の承認を得て実施した。開発のプロセスと開発したシステムの概要を解説する。

4.1 開発方針とコンセプト

本システムの活用により、保育専門職が、子どもの状況を定期的にチェックし、専門職、保護者間の「情報の共有化」、個人的な思い込みをなくす「視点の統一」、情報を正確に適切に利用できる「客観的な内容の統一」、専門職自身の「保育の質向上の啓発」を開発の方針（図4-1）とし、下記7つのコンセプトを設定した。

- 1) 園児に関する基本情報、発達状況、日常生活状況などが電子データ化され、管理が容易になるとともに、保育専門職および他職種間の迅速な情報共有が可能となる。
- 2) 個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均との比較が図として瞬時に表示されることにより、発達状態の特徴を視覚的かつ客観的に確認することが可能となる。
- 3) 保護者に対して子どもの特徴をわかりやすく示し、保育の共有および子育て支援に資することが可能となる。
- 4) 経年データを用いた発達の状況把握が可能となり、一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定への一助となる。
- 5) 備考や特記事項の入力により子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積し、質の高い保育方法が分析可能となり、保育支援のフィードバックの一助となる。
- 6) 特段の配慮を要する子どもが明示され、保育専門職同士が課題を共有したり、該当園児に対する保育のあり方を見直すなど、早期支援とよりよい保育への一助となる。
- 7) 学童期におよぶ経年分析により、乳幼児期の育児環境と学童期の子どもの状況(心身の健康)との関連を評価し、影響因子の分類、選定、考察が可能となる。

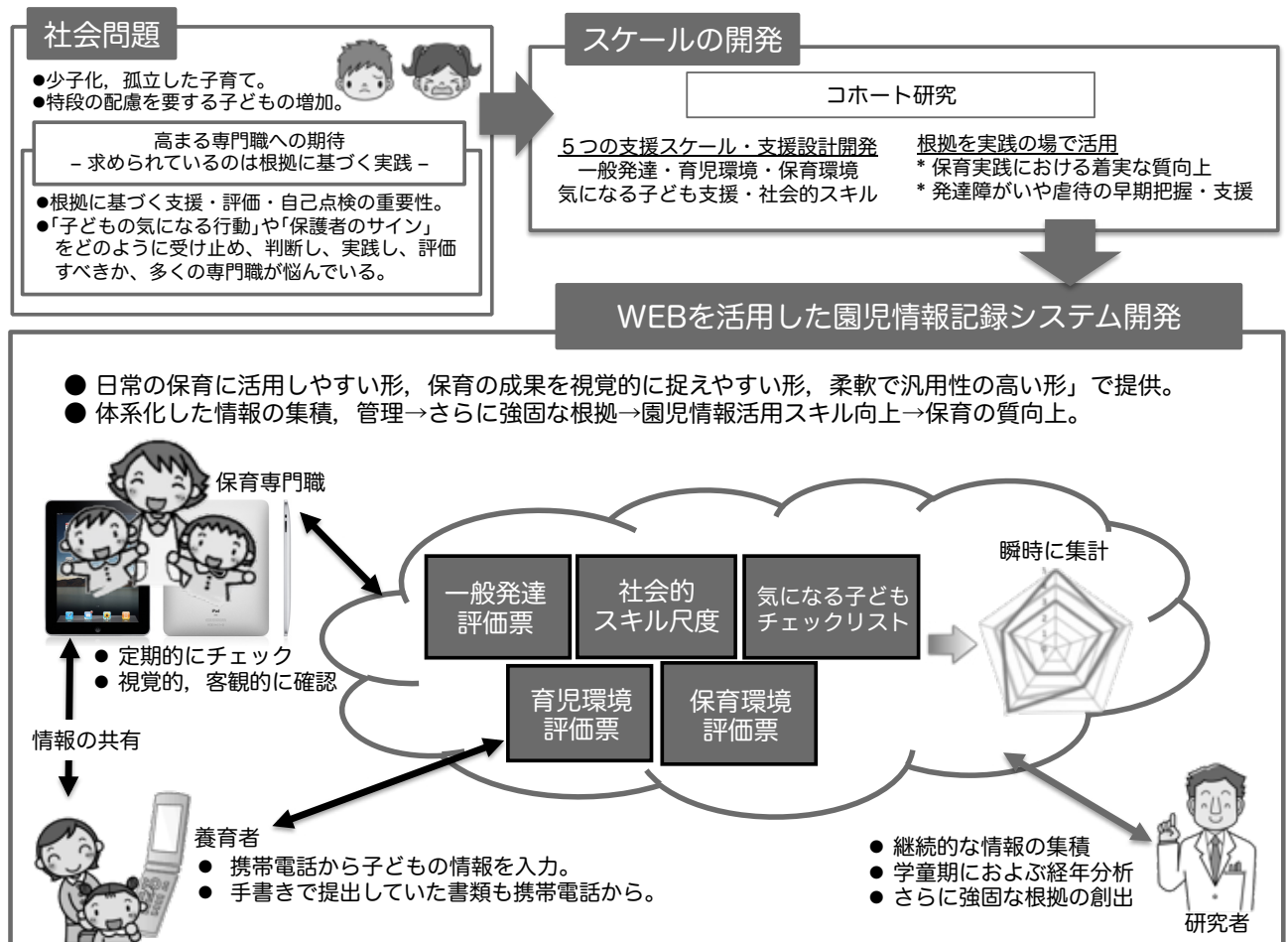


図 4-1 WEB を活用した園児情報記録システム

4.2 電子化した項目の設定と根拠

コホート研究による科学的根拠に基づいて開発された5つのスケール(一般発達評価票, 社会的スキル尺度, 気になる子どもチェックリスト, 育児環境評価票, 保育環境評価票), 及び, 園児と保護者の基本属性(性別, 生年月日, 入園年齢, 保育時間, 家族構成, 保護者の職業など)を, 電子化する項目とした。これら5つのスケールは, 紙媒体では, 保育実践の場などで活用され, 質の高いケアの実践に役立つことが報告されている(安梅, 2008: 安梅, 2007a)。

一般発達評価票は, 遠城寺式乳幼児分析的発達検査法, デンバー式発達検査, 新版 K 式発達検査など, 既存の発達検査で使われている項目を参考に, 複数の保育専門職の討論により, 担当の専門職が評価できる項目に変更し, 月齢順に並べたものである。「運動発達」, 「社会性発達」, 「言語発達」の3領域を設けており, それぞれ2つの小領域に分けてチェックする。満7歳までの子どもを対象とし, 発達状況を総合的, 客観的に捉えられるものである(安梅・他, 2007b)。

社会的スキル尺度は, 就学前児を対象とし, 社会的スキルを量的に測定することができる。欧米の先行研究で繰り返し認識されている協調・自己制御・自己表現の3因子構造をもち, 高い内の一貫性及び経時的安定性が示されている。また, 併存的妥当性, 予測的妥当性, 基準関連妥当性が確認されている(高橋・他, 2008: 篠原・他, 2009: 恩田・他, 2010)。

気になる子どもチェックリストは, 実践の場の保育専門職の経験に基づいて作成され, 子どもの全体的な理解と, 発達評価や社会的スキル評価で問題にならなかった子どもについても, 特に支援が必要かどうかを見極めるための項目を網羅している。33 カテゴリーで構成され, 項目ごとにその背景要因をチェックする(安梅, 2008: 安梅, 2007a)。

育児環境評価票は, 人的かかわり, 社会的かかわり, 社会的サポート, 制限や罰の回避の4領域13項目で構成され, 0~6歳児の保護者を対象として活用することができる。育児環境評価 HOME (Home Observation for Measurement of the Environment) の枠組みをもとに項目と領域が設定されており, 日本での家庭訪問調査により HOME との基準関連妥当性, 将来の発達や気になる行動等との予測的妥当性が検証されている(安梅, 2008: 安梅, 2007a)。

保育環境評価票は, 「多様な保育ニーズ」に対応できる「専門技術の向上」を目指して開発された。「子どもの全体像を捉える」「家族の全体像を捉える」「子どもを取り巻く望ましい環境」「関係機関との連携を強化する」の4領域で構成される。子どもの最善の利益を実

現するために、子どもや保護者の多様なニーズに応えるエキスが整理されている。日常の保育の質を向上させるための自己評価に有効なツールとして活用できる（安梅，2008：安梅，2007a）。

5つのスケール（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト，育児環境評価票，保育環境評価票）を活用し，保育所を利用する子どもの育児環境の実態を明らかにする中から，保育専門職が担ってきた支援的役割について考察した。5つのスケールを日常的に活用してきた保育専門職は，子どものすこやかな発達を促すかわりを子どもの発達状態に合わせて日常的に提供し，子どものすこやかな発達を支える役割を担っていた。また，養育者のサポートを通じ，虐待など子どもに関する深刻な問題の予防に寄与してきたことが示唆された。電子化するツールの根拠が実証された研究である（渡辺・他，2010）。

5つのスケール（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト，育児環境評価票，保育環境評価票（資料 1-5））と実践での活用方法は，これまで紙ベースの媒体で活用され，「子どもと保護者を取り巻く環境の実態と課題の把握」「課題解決に最適な総合的実践方法の選択」「実践効果の確認とよりよい実践の実現」による質の高い保育実践が実現し，子どもと保護者によりよい支援をもたらすことが実証されているものである。子どもの発達を評価する尺度は，いくつか開発されているが，「一般発達評価票」「社会的スキル尺度」保育実践において，保育専門職が簡易にチェックできるスケールや，「気になる子どもチェックリスト」のように，子どもの全体的な理解と，発達評価や社会的スキル評価で問題にならなかった子どもについても，特に支援が必要かどうかを見極めるための項目を網羅したスケールは乏しい。「一般発達評価票」は，一般発達評価票は，遠城寺式乳幼児分析的発達検査法，デンバー式発達検査，新版 K 式発達検査など，日本における代表的な発達検査で使われている項目を参考にして作られたものである。また，育児環境評価や保育環境評価のためのスケールは日本において，ほとんど提案されていない。さらに，子どもの側面，育児環境の側面，保育環境の側面からの評価スケールを組み合わせ実践に活用かのようなスケールのセットは，ほとんど提案されていない。よって，5つのスケール（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト，育児環境評価票，保育環境評価票（資料 1-5））を電子化する項目として採用した。

4.3 システム開発の計画

計画的に開発をすすめるため、マイルストーンを設定した（図 4-2）。

1) 技術的基盤の構築

平成 22 年 10 月までに、本システムを稼働させるためのサーバーを確保し、本システムを発信するためのベースとなるホームページを完成した。ホームページは、保育専門職のニーズにもっとも近く、保育専門職にとって活用しやすいデザイン構成となるよう配慮した。実際に使いやすいかどうか保育専門職に評価を求め、活用しにくい部分や、より活用しやすくするための意見が得られれば、それを反映させカスタマイズした。

2) 園児情報記録システムパイロット版の作成

5 つのスケールを WEB アプリケーション化し、出力レポートの作成を行なった。システムの動作確認と修正を完了し、平成 23 年 2 月までに、園児情報記録システムパイロット版を完成し、操作マニュアルを作成した。パイロット版の概要と操作マニュアルはホームページに掲載した。

3) 園児情報記録システムパイロット版のパイロット起動と改訂

パイロット起動に了解の得られた 5 つの保育所に導入支援と活用支援を行い、パイロット起動させた。保育専門職が使いやすいものとして機能するか否かを確認し、使いにくい部分、技術的に不都合が出る部分など出来る限り把握し、システムの改訂を行なった。また、ネットワーク上で園児情報を集積、管理するため、情報漏洩などのリスク管理を十分に検討し、セキュアなシステムであることを確認し、平成 23 年 6 月までに、本システムを完成した。

4) 園児情報記録システムの展開

本システムの展開に向け、概要をホームページ（<http://childnet.me/web.html>）に掲載し、広く周知を行なった。

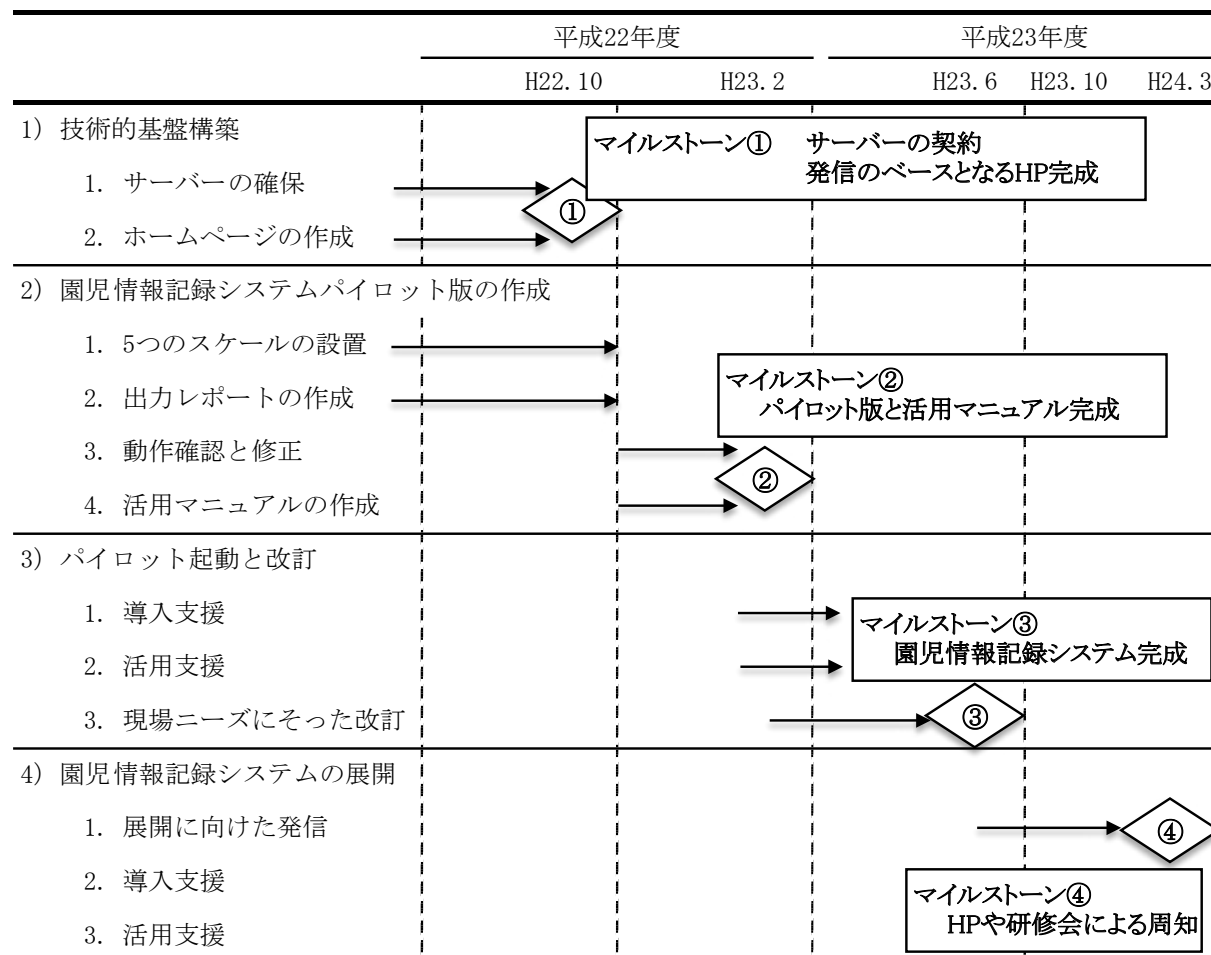


図 4-2 WEB を活用した園児情報記録システム開発計画

4.4 システムの画面構成、動作、活用に関する検討

実際に園児情報を取り扱う保育士、保育園連盟役員、保育所管理職、研究者、及び、保育者専用のパソコンコールセンターを運営してきた IT 専門家をメンバーとして、10 回のシステム開発会議を行い、保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねた（表 4-1）。会議のテーマは、システム開発状況に合わせて設定した。

表 4-1 園児情報記録システム開発会議の概要

回	開催日	参加者	テーマ
1	平成22年 9月15日	研究者4名, IT専門家3名	1. 園児総合支援システムについて 2. 園児総合支援システム実現可能性の検討
2	平成22年10月 4日	研究者6名	1. 各スケールの使い方 2. アラート表示の条件と出力レポート 3. 子どものプロフィール画面 4. 保育者へのコメントと付加機能
3	平成23年 1月29日	保育士5名, 保育園連盟役員2名, 保育管理職4名, 研究者9名, IT専門家3名	1. WEB園児総合支援システムの概要 2. iPadの活用 3. 保育環境評価票簡易版について
4	平成23年 2月27日	保育士2名, 保育園連盟役員1名, 保育管理職1名, 研究者10名, IT専門家2名	1. WEB園児支援システムに触れてみての感想 2. 園児情報管理の現状と今後の可能性 3. WEB版発達評価票の特徴 4. WEB版社会的スキル尺度の特徴 5. WEB版気になる子どもチェックリストの特徴
5	平成23年 3月 9日	研究者6名, IT専門家2名	1. ダッシュボード 2. 個人基本画面 3. 園, 及び, 園児レポート
6	平成23年 5月12日	研究者4名, IT専門家1名	1. データの投入 2. WEB園児支援システムシミュレーション版
7	平成23年 6月23日	研究者3名, IT専門家1名	1. WEB園児支援システムの論点整理
8	平成23年 6月26日	保育士2名, 保育園連盟役員2名, 保育管理職1名, 研究者10名, IT専門家3名	1. 各ツールの仕様変更点
9	平成23年 8月 5日	研究者3名, IT専門家1名	1. ホームページを使用した活用支援 2. アラートメッセージ 3. 過去データの投入について
10	平成23年10月 2日	研究者3名, 保育士2名	1. システムのコンテンツについて 2. システムの使いやすさについて 3. システムの活用について

4.5 画面構成とアクセス権

園児情報の入力や閲覧を行うための画面は、園（保育所、幼稚園、総合園）用、保護者用、研究者用の3パターンを用意した（図 4-3）。

1) 保育所・幼稚園・総合園

- ① 園ごとに付与したIDと各園が設定したパスワードにより本システムにログインする。
- ② ログイン後、登録メールアドレスに使用する端末を認証するための確認コードが送信され、その確認コードを入力することにより園児一覧画面にアクセスすることができる。
- ③ 園児一覧画面から各ツールにアクセスし、園児情報の入力や園全体及び個々の園児の分析レポートの閲覧ができる。
- ④ 各ツールに情報を入力すると、ツールごとの結果が瞬時に視覚的にフィードバックされる。
- ⑤ 園児一覧画面および各ツール画面に設置した「レポート表示」ボタンを押すことにより、園全体および個々の園児の分析レポートが表示される。
- ⑥ 園全体レポートは、各園の集計結果が全国平均や標準値と比較可能な形で表示される。
- ⑦ 個々の園児のレポートは、個々の園児の発育、発達状況が、園全体の集計結果と比較可能な形で表示される。また、特段な配慮が必要な園児については、保育士の気づきを促すためのアラート（注意喚起のサイン）とメッセージをあわせて表示する。

2) 保護者

- ① 園が設定したパスワードから育児環境評価票にアクセスし、育児環境情報を入力する。
- ② 入力した育児環境情報は、入力後すぐに保護者が指定したメールアドレスにフィードバックされる。
- ③ 保護者は、保護者自身の端末からは分析レポートの閲覧はできない。保育専門職とのやり取りのもと、レポートを共有する。

3) 研究者

- ① システム管理者としての認証が適用され、管理者モードで本システム管理画面にログインできる。

- ② 研究者は、本システム活用を希望した園に対して、本システムへのユーザー登録、ユーザー（本システムを活用する園）がパスワードを紛失した際のパスワードリセット操作を行うことができる。
- ③ 研究者は、園全体及び個々の園児の分析レポートに反映されるアラート条件（注意喚起の条件）やメッセージの管理、標準値の管理、匿名化されたデータのエクスポート（エクセルや CSV 形式での取り出し）ができる。
- ④ 研究者は、条件を指定することにより、詳細な分析レポートの作成ができる。
- ⑤ 研究者は、個人情報の閲覧や操作は一切できない。

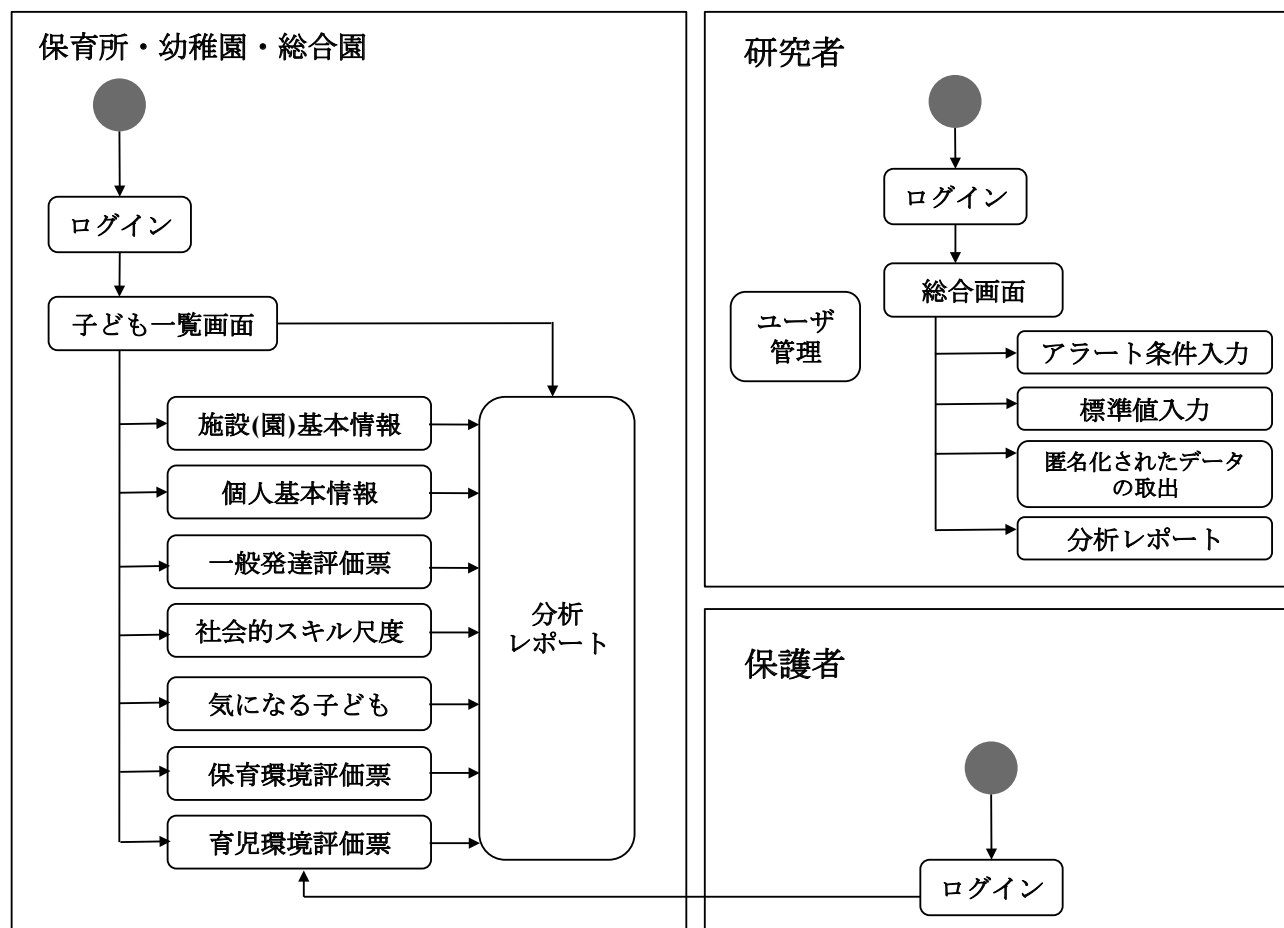


図 4-3 画面構成とアクセス権

4.6 安全性, 信頼性, 柔軟性

下記により, 本システムの安全性, 信頼性, 柔軟性を確認した.

1) 安全性と信頼性

- ① サーバーは, Salesforce.com 社が提供するものを活用した. Salesforce.com 社は, 政府の情報も管理する, 安全性, 信頼性の高いサービスを提供している (Salesforce.com., 2012a : Salesforce.com., 2012b).
- ② Salesforce.com 社は, 大規模マルチテナントシステムにより, 集中化されたシステムを少数精鋭, 世界トップクラスのエンジニアにより直接管理している. エンジニアに対して, 厳しい選定基準およびバックグラウンドチェックが行われている. 他社クラウドは, 顧客 (ユーザー) ごとに分離されたデータベースを数十人から数百人の管理者で管理 (監視が難しい) しており, 高度なスキルをもった要員の確保が困難であるといわれている. また, セールスフォースは, 政府情報や銀行など, 個人情報管理が厳しく, 24 時間絶対に止まらない管理体制が求められる分野における実績を積んでいる (Salesforce.com, 2011).
- ③ 入力された情報は, Salesforce.com 社のネットワークストレージに保存される. ネットワークストレージとは, インターネットを介してデータを保管するスペースである.
- ④ Salesforce.com 社のプラットフォーム上では, 個人情報部分の ID 化が自動的に行なわれ, 各ユーザー (本システムを活用する園) 以外は, 個人情報を扱うことができない. 匿名化 ID は大文字と小文字を区別する 15 から 18 の文字と数字を組み合わせたランダムなユニーク文字列である. プラットフォームとは, ソフトウェアなどを動作させるための基盤となる環境である.
- ⑤ データをサーバーに保存する特徴から, 災害時にも確実に緊急連絡先, データを保持する.

2) 柔軟性

- ① Salesforce.com 社は, 複数のサーバーを一つのサーバーに見立てる高度な仮想化技術を持っており, システム同士の連携や, カスタマイズを柔軟に行う.

- ② 複数サーバーで構築された一つの仮想化されたアプリケーション空間（本システムのこと）を複数のユーザーで共有することから、ユーザー（本研究では保育所，幼稚園，総合園）が増えた場合に，費用がかさむ心配が生じない．
- ③ WEB アプリケーションの特徴から，インターネット環境があれば活用することが可能である．PC，タブレット型 PC，スマートフォンなど，ほとんどすべての端末に対応している．

4.7 システムの概要

1) 全体像

本システムは、5つのスケール（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト，育児環境評価票，保育環境評価票）の他，園児一覧画面，個人基本情報（性別，生年月日，入園年齢，保育時間，家族構成，保護者の職業など），評価レポート，支援設計で構成された．5つのスケール，評価レポート，支援設計と，園児一覧画面，個人基本情報画面は，相互にリンクし，ワンクリック（またはタップ）操作にて移動可能である（図 4-4）．

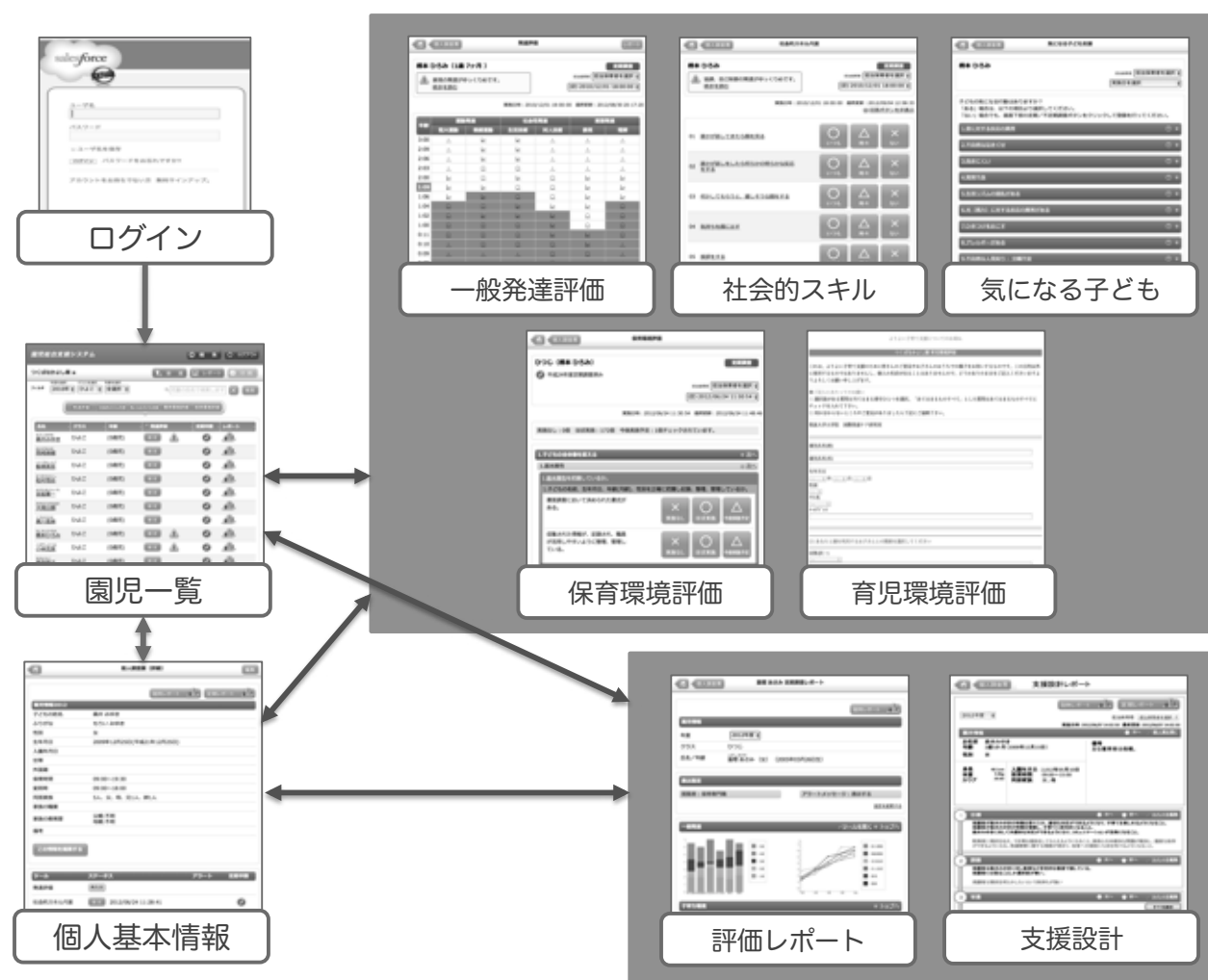


図 4-4 WEB を活用した園児情報記録システムの全体像

2) 園児一覧画面

園児一覧画面では、各スケールの入力状況を一覧で確認することができる。年度、クラス、学年での絞り込み、名前での検索、月例、入力状況、入力結果での一覧の並べ替えができる（図 4-5）。

氏名	クラス	年齢	発達評価	定期申請	レポート
もりいみゆき 森井みゆき	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
おかざきまお 岡崎麻緒	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
いいづかしんご 飯塚真吾	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
まつむらさとし 松村悟志	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
みやわきけんいち 宮脇憲一	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
おおはたきみあき 大畑公顕	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
くろかわえま 黒川恵麻	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
はしもとひろみ 橋本ひろみ	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
こばやしかつみ 小林克実	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	
そがようこ 曽我陽子	ひよこ	(0歳児)	確定	✓	

[トップへ](#)

Copyright (C) International Community Care and Lifespan Development All rights reserved.

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-5 園児一覧画面

3) 個人基本情報

個人基本情報画面は、園児と保護者の基本属性（性別、生年月日、入園年齢、保育時間、家族構成、保護者の職業など）で構成された。この画面からは、各スケールの入力状況の確認のほか、調査実施画面への移動ができる（図 4-6）。

個人基本情報の入力は、プルダウンとチェックボックスによる選択と、保管のためのテキストで構成される他、保育専門職がメモとして残しておきたい情報を、自由に書き残しておけるメモ機能に対応した。

個人調査票（詳細）			
園児情報2012			
子どもの姓名	森井 みゆき		
ふりがな	もりい みゆき		
性別	女		
生年月日	2009年12月25日(平成21年12月25日)		
入園年月日			
世帯			
外国籍			
保育時間	09:00～19:30		
変則時	09:00～18:00		
同居家族	5人、父、母、兄1人、姉1人		
家族の職業			
家族の教育歴	父親:不明 母親:不明		
備考			
<button>この情報を編集する</button>			

ツール	ステータス	アラート	定期申請
発達評価	未入力		
社会的スキル尺度	確定	2012/06/24 11:28:41	✓
気になる子ども支援	未入力		

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-6 個人基本情報画面

4) 一般発達評価票

6領域のどこからでも入力（調査）を始めることができる。入力が完了していない場合は、「途中」状態が表示され、未入力なのか、発達に配慮すべき点があるのかの判断ができる。入力結果は、瞬時に棒グラフとなり、視覚的に発達状況の確認ができる。グラフの中の「○」や「レ」「・」にマウスを重ねると、質問項目の内容を表示し、クリアしている項目と、そうでない項目の確認ができる。

入力は、大きめのボタンをタップしながら回答することで完了する。質問項目にマウスを重ねると、判断のためのガイドを示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図 4-7）。

年齢	運動発達		社会性発達		言語発達	
	粗大運動	微細運動	生活技術	対人技術	表現	理解
	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始	調査開始
7:06	・	・	○	レ	レ	レ
7:00	レ	レ	レ	レ	レ	レ
6:06	レ	レ	○	レ	レ	○
6:00	レ	レ	レ	○	レ	○
5:06	レ	○	○	○	○	○
5:00	○	○	○	○	○	○
4:08	① 片足で5秒立つ		○	○	○	○
4:04	○	○	○	○	・	○
4:00	・	○	○	○	・	・
3:00	・	○	○	○	・	・

運動発達

粗大運動

5歳6ヶ月

ブランコをこぎながら立ったり座ったりする

○ できる

レ できない

5歳0ヶ月

片足で5秒立つ

① やり方を見せれば、つかまらないで片足で5秒以上立っていられる

○ できる

レ できない

4歳8ヶ月

スキップができる

○ できる

レ できない

次の問題へ進む

ければ×をつけてく
○が3つ続いたら止
記をコピーして新規保存
調査開始

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-7 一般発達評価票

5) 社会的スキル尺度

社会的スキル尺度項目 30 項目を一覧で表示し、大きめのボタンをタップしながら回答することで入力完了する。選択されていない項目がある場合は、「途中」状態を表示する。質問項目にマウスを重ねると、判断のためのガイドを示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図 4-8）。

個人調査票

社会的スキル尺度

橋本 ひろみ

定期調査

⚠ 協調、自己制御の発達がゆっくりめです。
続きを読む

担当保育者 担当保育者を選択 ▾

(定) 2010/12/01 18:00:00 ▾

実施日時：2010/12/01 18:00:00 最終更新：2012/09/04 12:58:33

☒ 回答ボタンを非表示

01 誰かが話してきたら顔を見る	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない
02 誰かが話しをしたら何らかの明らかな反応をする	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない
03 何かしてもらうと、嬉しそうな顔をする	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない
04 気持ちを顔に出す	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない
05 挨拶をする	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない
06 人に近づきおしゃべりをする	<input type="radio"/> いつも	<input type="radio"/> 時々	<input type="radio"/> ない

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-8 社会的スキル尺度

6) 気になる子どもチェックリスト

まずは 33 項目をチェックし、33 項目から詳細にアクセスしやすいような構成とし、項目、内容、基準、背景要因に触れて行く設定となった。質問項目にマウスを重ねると、解説を表示し、回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図 4-9）。

The screenshot shows a web application interface for '気になる子ども支援' (Support for Children Who Are Worried About). At the top, there is a navigation bar with a home icon and the text '個人調査票' (Individual Survey Form). Below this is a list of 17 items, each with an information icon (i) and a right arrow icon. The items are:

- 8. アレルギーがある
- 9. 不自然な人見知り・分離不安
- 10. 極端な内気
- 11. 不自然な関係性（孤立）
- 12. 無関心
- 13. こだわり
- 15. 不自然な食
- 16. 不自然なハイハイ、歩行、動きがある・歩行の遅れ
- 17. 手指の動きが鈍い・不自然な動きがある

A tooltip is displayed over item 13, containing the following text:

① 特定のものに興味を集中させる、ものをきちんと並べるなどの奇妙な行動、順序や空間、場所へのこだわりなど、程度を超えた子どもが見せる姿の不自然さに注目することで標準発達からのずれを見る。

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-9 気になる子どもチェックリスト

7) 育児環境評価票

PC、タブレット、携帯電話（スマートフォンでない携帯電話対応）などから、入力できる。プルダウンから選択、チェックボックスで複数選択、自由記述欄に入力をし、登録内容確認画面に進む（図 4-10）。内容を確認し、間違いがなければ「送信」ボタンを押すと、園と入力した保護者のメールアドレスに、確認メールが送信される。園で、子どもと保護者が確認できれば登録完了となり、保護者と保育専門職が同じ情報を共有できる。

The screenshot shows a web-based evaluation form titled '育児環境' (Child Environment). The form is divided into sections with question numbers. A dropdown menu is open for question (4), showing options like 'めったにない' (Rarely), '月に1~2回' (1-2 times a month), etc.

育児環境

(3) 1日にお子さんと向き合って一緒に遊ぶ時間はどれくらいとれますか（但し、睡眠時間は除く）

平日約 時間を選択 時間 分を選択 分
休日約 時間を選択 時間 分を選択 分

(4) お子さんと一緒に遊ぶ機会（子どもと向き合って過ごすこと）はどのくらいありますか

回答(択一)
✓ 選択してください
めったにない
月に1~2回
週に1~2回
週に3~4回
ほぼ毎日

(6) お子さんに本を読み聴かせる機会はどのくらいありますか

回答(択一)
選択してください

(7) あなたは童謡やお子さんの好きな歌と一緒に歌いますか

回答(択一)
選択してください

(8) お子さんと公園に行く機会はどのくらいありますか

回答(択一)
選択してください

(9) お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚とどの程度の頻度で訪問したりされたりしますか

図 2-10 育児環境評価票

8) 保育環境評価票

「×実施なし」「○ほぼ実施」「△今後実施予定」の該当する項目をタップする。園やクラスで共通する設問は、コピーが反映される。設問には解説が用意されており、下線を引いた部分にマウスを重ねると解説を表示する。回答を助け、回答の標準化をはかるとともに、保育専門職の学習に対応するものとした（図 4-11）。

個人調査票 保育環境評価

1. 子どもの全体像を捉える 次へ

1. 基本属性 次へ

1. 基本属性を把握しているか。

1. 基本属性とは、児童名、住所、生年月日、年齢、性別、保護者氏名、連絡先、入園保育園名、保育実施期間をさす。

× 実施なし ○ ほぼ実施 △ 今後実施予定

収集された情報が、記録され、職員が活用しやすいように整理、管理している。

× 実施なし ○ ほぼ実施 △ 今後実施予定

2. 観察所見 次へ 前へ トップへ

1. 身体状態を把握しているか。

1. 入所(園)時における子どもの出生の状況、発育歴、既往症、身体状態、疾病、感染症、平熱など子どもに関する情報を収集し記録、整理、管理されているか。

入所(園)前に説明会等、個別に子どもの状態等を聞き取り、共有しあう機会がある。

× 実施なし ○ ほぼ実施 △ 今後実施予定

入所(園)時に健康診断調査票が整備されており、調査項目について嘱託医の指導や行政により定められたものである。

× 実施なし ○ ほぼ実施 △ 今後実施予定

図 4-11 保育環境評価票

9) 評価レポート

各スケールの入力結果を集計し、グラフを用いて表示し、各スケールの状況を、視覚的に把握できるものとなった。個人レポートは、園平均値と比較可能、園全体レポートは、全国平均値と比較可能なかたちで表示し、各スケールの状況を客観的に把握できる。発達や日々の行動、育児環境などについて、配慮を要する必要がある園児には、保育について注意を促す注意喚起サインとメッセージを表示し、保育専門職の気づきを促すことに対応した（図 4-12）。



※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-12 評価レポート

10) 支援設計レポート

入力された各スケールの状況から、個々の園児に対応した支援設計を、目標、課題、背景、影響要因、支援方法、根拠の構成で出力する。自動的に出力したものに対して、担当保育専門職と管理職が、加筆、修正を行なうことが可能な設定とした。出力された支援設計から、個々の園児の状況を客観的に判断するだけでなく、実践に基づく判断を取り入れた支援の検討ができる（図 4-13）。

個人調査票

支援設計レポート

随時レポート

定期レポート

2012年度

担当保育者

担当保育者を選択

実施日時: 2012/06/07 14:02:50
最終更新: 2012/06/07 14:02:50

園児情報

次へ
個人票を開く

お名前

森井みゆき

年齢

2歳5か月(2009年12月15日)

性別

女

備考

主な養育者は母親。

身長

48.1cm

体重

4.8kg

カウブ

20.83

入園年月日

2,012年05月10日

保育時間

09:00~15:00

同居家族

父、母

1 目標

次へ
前へ
コメントを編集

保護者が森井みゆきの特徴を受け入れ、適切な対応ができるようになり、子育てを楽しめるようになること。
保護者が森井みゆきの特徴を理解し、子育てに前向きになること。
森井みゆきに対して共感的な対応ができるようになり、コミュニケーションが活発になること。

配偶者に現状を伝え、でき得る援助をしてもらえるようになること。実母との未解決な問題が解決し、適度な依存ができるようになる。発達障害に関する理解が深まり、他者への援助にも目を向けるようになること。

2 課題

次へ
前へ
コメントを編集

保護者は森井みゆきに対し無視など否定的な態度で接している。
保護者には怒ることしか選択肢が無い。

保護者は現状を何とかしたいという気持ちが強い

3 背景

次へ
前へ
コメントを編集

1.音に対する反応の異常
大きな音に対して、音のする方を向いたり、体をビクッとさせたり、驚いたりするなどの反応を見せない

すべてを表示

子

常表示

※氏名・データなどすべてダミーである。

図 4-13 支援設計レポート

4.8 ホームページの概要

1) ホームページの構成

本システムの周知と、本システムの活用を考えるためのホームページを作成し、発信した。ホームページのタイトルは「保育パワーアップ研究会」とし、「トップページ」「根拠に基づく保育とは」「根拠に基づく実践とは」「根拠に基づくツール」「気になる子どもの実践例と評価」「根拠に基づくツール活用法」「WEBを活用した園児支援システム紹介」「保育パワーアップ研究会メンバー」「リンク集」「保育パワーアップ相談室」「Facebook ページ：保育パワーアップ研究会」で構成された（図 4-14）。「WEBを活用した園児支援システム」のページから、操作マニュアル（資料 6）をリンクした。

ホームページの URL は、<http://childnet.me/> であった。

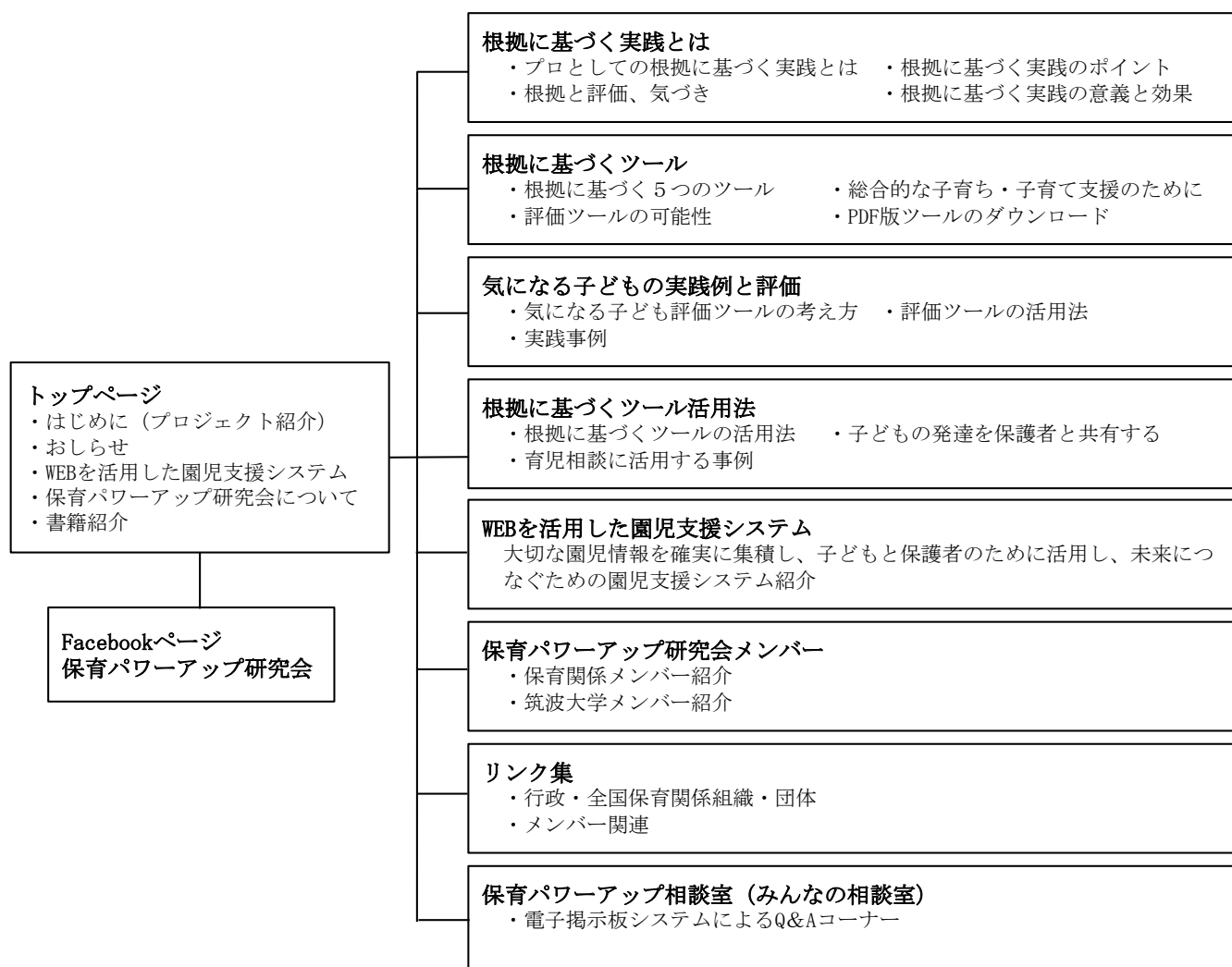


図 4-14 ホームページの構成

2) ホームページのデザイン

ページデザインは、保育専門職のニーズに近く、保育専門職にとって使いやすいよう検討を加え発信した（図 4-15）。発信だけの一方通行のサイトではなく、意見交換を行なえる「電子掲示板システム」を掲載し、350 を超える書き込みを確認した（図 4-16）。「電子掲示板システム」は閲覧しやすいよう、表示の切り替えが可能（スレット表示、ツリー表示、トピック表示）とし、記事検索機能を盛り込んだ（図 4-17）。



図 4-15 ホームページのイメージ

009330


[トップに戻る] [スレッド表示] [ツリー表示] [トピック表示] [留意事項] [ワード検索] [管理用]

おなまえ

タイトル

コメント

アイコン [アイコン参照]

暗証キー (英数字で8文字以内)

画像認証 (右画像の数字を入力) **4 7 0 6 1 0**

文字色 ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐

自発的行動。投稿者：保育士目指し高校生 投稿日：2012/08/21(Tue) 19:32 No.375

 保育士になるために、学校に通う意外で自発的にかんばることってなんですか？

図 4-16 電子掲示板システムのイメージ

第 5 章 「園児情報記録システム」の内容的妥当性とデータ集積可能性（研究 1）

5.1 研究の目的

本システム開発のために開催した全 10 回の会議記録から、本システムの機能を抽出・整理し、整理された機能より、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能を内包するかどうかにより、内容的妥当性を確認した。本システムの導入実績と、従来の紙媒体のスケール導入実績の比較から、本システムの普及、および、データ集積可能性を検討した。

5.2 研究の方法

5.2.1 「園児情報記録システム」の内容的妥当性

1) 対象

本システムの開発のために開催した全 10 回の会議記録を分析の対象とした。会議記録は、2 名の記録者が会議参加メンバーの発言を、その場で要約して速記し、会議後に照合し、互いの記録の抜けているところを補い 1 本の記録としたものである。この記録は、会議ごとに、参加メンバー全員に配布し、内容の記載に間違いがないことを確認している。

会議の開催日は平成 22 年 9 月から平成 23 年 10 月、参加者は保育士、保育園連盟役員、保育管理職などの保育専門職、乳幼児に関する研究を専門とする研究者、システム開発専門家であった（表 4-1）。

会議のテーマは、第 1 回目「1.園児総合支援システムについて」「2.園児総合支援システム実現可能制の検討」、第 2 回目「1.各スケールの使い方」「2.アラート表示の条件と出力レポート」「3.子どものプロフィール画面」「4.保育者へのコメントと付加機能」、第 3 回目「1.WEB 園児総合支援システムの概要」「2.iPad の活用」「3.保育環境評価票簡易版について」、第 4 回目「1.WEB 園児支援システムに触れてみての感想」「2.園児情報管理の現状と今後の可能性」「3.WEB 版発達評価票の特徴」「4.WEB 版社会的スキル尺度の特徴」「5.WEB 版気になる子どもチェックリストの特徴」、第 5 回目「1.ダッシュボード」「2.個人基本画面」「3.園、及び、園児レポート」、第 6 回目「1.データの投入」「2.WEB 園児支援システムシミュレーション版」、第 7 回目「1.WEB 園児支援システムの論点整理」、第 8 回目「1.各ツールの仕様変更点」、第 9 回目「1.ホームページを使用した活用支援」「2.アラートメッセージ」、第 10 回目「1.システムのコンテンツについて」「2.システムの使いやすさについ

て」「3.システムの活用について」「3.過去データの投入について」であった。

第1回目の会議では、めざす園児総合支援システム（システムに入れこむ項目、レポート出力案を含む）と実現可能性について話し合われた。

第2回目の会議では、各スケールの使い方を確認するとともに、「システム画面のレイアウト構成」「表示させるグラフ」「園・全国平均、年度変化の表示」「アラート表示の条件と画面構成」「支援設計の表示」「付加機能の検討」などについて話し合われた。

第3回目の会議では、「より実用的なシステム構築」に向け、実践チーム（保育専門職）より多数の要望や意見が提案され討論した。園児総合システムの試作ツールを用いたデモンストレーションを行い、ツール全体像の把握を通じ使用して気付いた点やアイデアについて話し合われた。

第4回目の会議では、実際にWEB園児総合支援システムを動かした上で、園児一覧画面、園児基本画面、各スケール入力画面と結果表示画面などの特徴と修正点について話し合われた。優れた道具と現場のコミットの視点から、「目標の共有」「プロセスも含めた仕様の文章化」などについて話し合われた。

第5回目の会議では、現場のニーズをふまえた画面構成、ボタンの配置、結果の表示についての再検討が行われた。

第6回目の会議では、これまでに紙ベースでとったデータの活用と、システムがデータを集積したのちのエクスポートのテーブル設定や活用について話し合われた。

第7回目の会議では、開発してきたシステムに関する論点整理から、システムを活用したデータ集積と保育支援のために残された課題と、今後の課題について話し合われた。

第8回目の会議では、解説とディスカッションにより決定した各ツールの仕様（または仕様変更点）について話し合われた。

第9回目の会議では、システム活用支援のためのホームページの内容に関する検討や、システムのアラートメッセージの活用などについて話し合われた。

第10回目の会議では、システムをどのように活用するか、システムに入力する情報を手に入れるためにどんな工夫をするか、集積した情報はどんなことに役立てられるかについて話し合われた。

2) 分析方法

1) 重要カテゴリーの設定

「園児情報の基本的活用」「園児情報の発展的活用」の2つを重要カテゴリーに位置づけた。本研究は、本システム機能が園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開のための機能を内包するかどうかを確認することを目的としている。そこでまず、「アセスメントに必要な園児情報の収集と理解」に活用できる機能を「園児情報の基本的活用」とした。「園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバック」に活用できる機能を「園児情報の発展的活用」とした。

健康情報活用におけるヘルスリテラシーの視点に戻ると、ヘルスリテラシーとは、「健康についての適切な意思決定を行うにあたって必要な健康情報やサービスを手に入れ、整理し、理解する能力 (Healthy People, 2010)」「健康リスクを減少させ、生活の質を向上させるための健康情報と考え方を探し、理解し、評価して利用できる、生涯を通して発達する幅広い範囲のスキルと能力 (Zarcadoolas, 2005)」「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力 (WHO, 1998)」などと定義されている。「園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクル展開」は、健康維持や増進に必要な情報を理解し活用するという点で、ヘルスリテラシーの概念に共通性が見られる。Nutbeam (2000) は、ヘルスリテラシーを構成する概念として、「機能的ヘルスリテラシー (Functional health literacy)」「相互作用的健康リテラシー (Interactive health literacy)」「批判的健康リテラシー (Critical health literacy)」の3つを提唱した。(Nutbeam, 2000)。「機能的ヘルスリテラシー」とは、日常生活場面での健康に関連した情報について理解できる能力と定義される。「相互作用的健康リテラシー」とは、日常的な活動に活発に参加し、様々な形式のコミュニケーションから情報を入手し、意味を引き出し、新しい情報を変化する環境へ適用するために利用される能力と定義される。「批判的健康リテラシー」とは、情報を批判的に分析し、この情報を日常的な出来事や状況をよりコントロールするために使用することに適用される能力と定義される。「アセスメントに必要な園児情報の収集と理解」に活用できる「園児情報の基本的活用」は、Nutbeam (2000) が提唱した3つのヘルスリテラシーの「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用的健康リテラシー」をあわせ持つ概念であると考えられる。また、「園児情報のアセスメント、実践、実

践の評価、よりよい実践へのフィードバック」に活用できる「園児情報の発展的活用」は、Nutbeam（2000）が提唱した「批判的ヘルスリテラシー」に共通する概念であると考えられる。よって、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能の重要カテゴリーとして、「園児情報の基本的活用」「園児情報の発展的活用」の2つを位置づけた。

2) 保育支援に活用できるシステム機能抽出

演繹的アプローチを用いて、2つの重要カテゴリーに当てはまる機能を、3名の分析者により会議記録から抽出した。3名の分析者には、乳幼児に関する看護、保育、相談支援の経験をもち、質的研究を繰り返し行なっている者を選定した。

2) カテゴリーの抽出

同分析者のディスカッションにより、要約的内容分析法（安梅，2001）を用いて、抽出された機能を類型化し、サブカテゴリーを抽出した。

3) 妥当性の確認

機能の抽出、類型化、サブカテゴリーの妥当性について、質的研究に精通した専門家のスーパーバイズを受け、システム機能の意味することと、類型化及びサブカテゴリーの抽出にずれがないことを確認した。

4) 倫理的配慮

本システムの開発のために開催した全10回の会議に参加したメンバーには、本研究の目的、方法、成果、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、会議への参加や会議記録を分析に使用することでいかなる不利益も受けないことを口頭で説明し、書面と口頭で研究への同意を得ている。本研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会（第455号）の承認を得て実施した。

5.2.2 「園児情報記録システム」のデータ集積可能性

既に紙媒体のスケールを使用している保育所のうち、訪問許可の得られた21保育所を訪問し、107名の保育専門職に、本システムの概要、特徴、使い方に関する説明を行った。

同様に、従来の紙媒体のスケールの概要、特徴、使い方に関する説明を行った。本システムについては、簡単な使用マニュアル（添付資料6）を用意した。また、本システムは実践の場の保育専門職を交え、使いやすいデザインや入力しやすいフォームについて検討を重ねて開発されたものである（第4章）。

平成24年8月1日から平成24年12月31日までの5か月間における、本システムの導入実績と、従来の紙媒体スケールの導入実績の比較から、本システムの普及可能性を検討した。

本研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科研究倫理委員会（第455号）、および、筑波大学医の倫理委員会（第668号）の承認を得て実施した。通知番号第668号は「追跡研究による子どもの発達軌跡と関連要因の解明」という研究課題名であるが、本研究において開発した「園児情報記録システム」により経年的に園児データを得ることが、研究課題の一部として承認されている。

5.3 結果

5.3.1 「園児情報記録システム」の内容的妥当性

本システムの機能は、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】の2つの重要カテゴリーに分かれた。さらにその中で11のサブカテゴリーが抽出された（表5-1）。以下、重要カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、機能は「」の記号を用いて記述する。

1) 園児情報の基本的活用

【園児情報の基本的活用】には6つのサブカテゴリーが抽出された。

「根拠に基づくツールにより情報収集」「情報の正確かつ適切な収集」より『情報の選定』が抽出された。

「保育専門職の個人的な思い込みをなくす」「個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均の比較」より『情報の客観的理解』が抽出された。

「子どもの発達を運動発達、社会性発達、言語発達から捉える」「保育環境を子どもや保護者の多様なニーズから捉える」などより『情報の体系的理解』が抽出された。

「子どもと子どもを取り巻く環境を5つの支援ツールにより捉える」より『情報の複合的理解』が抽出された。

「保育専門職、他職種、保護者間の情報共有」「子どもの特徴をわかりやすく示す」「保

育専門職同士が課題を共有する媒体となる」より『情報共有』が抽出された。

「子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積」「必要な情報プラスαがわかる」より『情報の補完』が抽出された。

2) 園児情報の発展的活用

【園児情報の発展的活用】には5つのサブカテゴリーが抽出された。

「瞬時に視覚的にフィードバックされることにより目標を明確にすることができる」「配慮を要する子どもの早期把握・早期支援」より『目標の明確化』が抽出された。

「根拠に基づく保育方針決定」「質の高い保育方法が分析可能」「一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定」より『根拠に基づく支援』が抽出された。

「専門職自身のケアの評価」「保育支援のフィードバック」より『活動の評価』が抽出された。

「継続的かつ着実な情報管理」「生涯にわたる個人の健康管理」より『継続的な情報活用』が抽出された。

「乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響要因の分類、選定、考察が可能となる」より『関連・因果関係の検証』が抽出された。

表 5-1 保育支援に活用できる本システムの機能

重要 カテゴリー	サブカテゴリー	保育支援に活用できる本システムの機能
園児情報の 基本的活用	情報の選定	根拠に基づくツールにより情報収集 情報の正確かつ適切な収集
	情報の客観的理解	保育専門職の個人的な思い込みをなくす 個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均との比較
	情報の体系的理解	子どもの発達を「運動発達」「社会性発達」「言語発達」の3領域から捉える 子どもの社会的スキルを、「協調」「自己制御」「自己表現」の3因子から捉える 子どもの気になる行動を、33の領域から総合的に捉える 養育環境を「人的かかわり」「社会的かかわり」「社会的サポート」「制限や罰の回避」の4領域13項目で捉える 保育環境を、子どもと保護者の多様なニーズから捉える
	情報の複合的理解	子どもと子どもを取り巻く環境を、5つの支援ツールにより捉える
	情報共有	保育専門職、他職種、保護者間の情報共有 子どもの特徴をわかりやすく示す 保育専門職同士が課題を共有する媒体となる
	情報の補完	子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積 必要な情報プラスαがわかる
園児情報の 発展的活用	目標の明確化	瞬時に視覚的にフィードバックされることにより、目標を明確にすることができる 配慮を要する子どもの早期把握・早期支援
	根拠に基づく支援	根拠に基づく保育方針決定 質の高い保育方法が分析可能 一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定
	活動の評価	専門職自身のケアの評価 保育支援のフィードバック
	継続的な情報活用	継続的かつ着実な情報管理 生涯にわたる個人の健康管理
	関連・因果関係の検証	乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響因子の分類、選定、考察が可能となる

5.3.2 「園児情報記録システム」のデータ集積可能性

平成24年8月1日から平成24年12月31日の5か月間に、本システムを導入した保育所は13であった。従来の紙媒体スケールの使用を継続した保育所は5であった。本システムにおける一般発達評価票データの回収数は1746、社会的スキル尺度データの回収数は1436、気になる子どもチェックリストの回収数は1131、育児環境評価票の回収数は175であった。紙媒体スケールにおける一般発達評価票データの回収数は676、社会的スキル尺度データの回収数は676、気になる子どもチェックリストの回収数は676、育児環境評価票の回収数は364、保育環境評価票の回収数は9であった（表5-2）。

表 5-2 WEB を活用した「園児情報記録システム」利用状況

	保育所数 使用園数	一般発達 評価票 回収数	社会的 スキル尺度 回収数	気になる子ども チェックリスト 回収数	育児環境 評価票 回収数	保育環境 評価票 回収数
本システム	13	1746	1436	1131	175	9
紙媒体	5	676	676	676	364	0
合計	18	2422	2112	1807	539	9

※平成24年8月1日～平成24年12月31日まで

5.4 考察

5.4.1 本システムが PDCA サイクル展開に寄与する可能性

本システムの機能は、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】の2つの重要カテゴリーに分かれた。

アセスメントに必要な園児情報の収集と理解として位置づけた重要カテゴリー【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」、「情報の共有」「情報の補完」のサブカテゴリーが抽出された。

アセスメントとは、必要な情報の収集と処理を通して、援助計画と実践の展開に必要な情報の「系統的提供」を目的にした援助活動の認識過程（大田, 1995）、実践を決定するために「統合された情報」を確認するプロセス（Hodge DR, 2001）、「構造的に理解」すること（Carol HM, 1995）、クライアントの強さや問題を明らかにするために情報を収集し続けることで、「客観的情報」と「主観的情報」の両方を必要とする（Jordan C, 2008）などとされている。本システムの活用により、アセスメントに必要な園児情報を、適切に選び、客観的、体系的、複合的にとらえ、他の保育専門職、他職種、保護者と共有しながら園児情報を整理し、さらに必要な情報や、質的な情報を補完していける可能性が示唆された。本システムは、効果的なアセスメントに寄与する機能を内包すると考えられる。

園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックとして位置づけた【園児情報の発展的活用】には、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」が抽出された。

抽出されたサブカテゴリーには、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証という、PDCA サイクル (plan-do-check-act サイクル) が確認された。PDCA サイクルは、業務を継続的に改善するマネジメント手法の一つとして知られており、保育者が子どもの発達記録を PDCA サイクルとして保育計画に生かすための発達記録システム機能や施策の必要性が述べられている（仁木・他, 2008）。本システムの活用により、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す質の高い保育実践が期待される。

5.4.2 本システム普及の可能性

今回対象にした保育所は、通常から紙媒体スケールを使用している保育所であったが、使い慣れた紙媒体スケールの使用継続を希望した保育所 5 に対し、新たに開発された本システムを使用した保育所は 13 保育所であった。電子健康記録は、情報管理の安全性やケアの質向上が示されても、なかなか普及しない現状があり (Ashish K, et.al., 2009), 電子健康記録普及のためにはシステムデザインをより使いやすいものにすることが求められる

(Archer N. et.al., 2011), 活用マニュアルが必要である (渡辺・他, 2007b) などの報告がされている。保育専門職を交えて検討を重ねたデザインと簡単な活用マニュアルにより、単純な導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数が得られたと考えられる。

5.4.3 本システムのデータ集積可能性

保育専門職が回答を行う、一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリストについて、本システムにおける回収数は、1746, 1436, 1131 であった。紙媒体における回収数は、いずれも 676 であった。紙媒体のスケールは、3 つのスケール (調査票) が一つの綴りになっていることから、同数のサンプルを回収できる。一方、本システムは一元管理されているものの、入力フォームが独立しているため、回答数にばらつきが生じる。乳幼児の発達には、2, 3 か月で変化が生じることも踏まえ、同時期に、できるだけすべての調査票に回答が得られるような検討が必要であろう。

保護者が回答を行う育児環境評価票について、本システムにおける回収数は 175、紙媒体における回収数は 364 であった。子どもの発達への関連要因を検討するために、育児環境評価データは欠かせないものである。保護者向けマニュアルの作成や、保護者向けのフィードバック機能の付加を検討する必要がある。

保育環境評価票について、本システムにおける回収数は、13 保育所中 9 であった。紙媒体における回収数は、5 保育所中 0 であった。保育環境評価票は、評価項目の数が多く、すべての項目のチェックには時間を要することが考えられる。本システム上では 9 保育所からの回収が確認できたが、今後、項目をしばった簡易版の作成などを検討することが求められる。

子どもの発達に関するデータは、一般発達評価票 1746, 社会的スキル尺度 1436, 気になる子どもチェックリスト 1131 と、短期間に、千以上のサンプルが得られている。今後、同

程度のサンプルが得られれば、子どもの発達軌跡を明らかにしていくことが可能となるだろう。

5.4.4 日常の保育評価への活用

子どもの発達に関するデータは、一般発達評価票 1746、社会的スキル尺度 1436、気になる子どもチェックリスト 1131 と、本システム上で千以上のサンプルが得られている。保育専門職は、日常の保育の評価として、特に子どもの発達に関するデータに着目していると考えられる。多くの先行研究が、子どもの健やかな発達への保育所保育の「質」の影響を述べている（Bradley RH, et.al., 2007 : 網野, 2003 : NICHD, 2002 : Bernard K, et.al., 2012）。日常の保育の評価としての、子どもの発達への着目は、有効な一手段ある。子どもの発達の側面から、目に見える結果が得られることで、システムの継続活用が期待できる。

5.4.5 システム開発への提言

本システムの開発において、まず、本システムの活用により、保育専門職が、子どもの状況を定期的にチェックし、専門職、保護者間の「情報の共有化」、個人的な思い込みをなくす「視点の統一」、情報を正確に適切に利用できる「客観的な内容の統一」、専門職自身の「保育の質向上の啓発」という開発方針を明確にした。その上で、電子化する項目を根拠に基づき設定し、実際に園児情報を取り扱う保育士、保育園連盟役員、保育所管理職、研究者、及び、保育者専用のパソコンコールセンターを運営してきた IT 専門家をメンバーとして、10 回のシステム開発会議を行い、保育専門職のニーズにもっとも近い、活用しやすい画面構成や動作、実際の活用に向けた検討を重ねた。

その結果、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能を内包する点より、内容的妥当性が確認され、導入実績と、従来の紙媒体のスケール導入実績の比較から、本システムの普及、および、データ集積可能性が示唆された。

実用可能なシステム開発においては、開発の方針と項目を明確にすることに加え、実践でシステムを活用する立場の当事者が、活用しやすい画面構成やパフォーマンスを持つシステムが望まれる。

5.4.6 本研究の可能性と限界

本研究はシステム開発のために開催した会議記録を用いて、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックというPDCAサイクルの展開のための機能を内包するかどうかを確認した。また、限られた保育所のみを訪問し、本システムの概要、特徴、使い方を説明し、5 か月間という限られた期間に得られた導入数と、各スケールのサンプル回収数からのみ、展開の可能性を検討した。実績を積み上げるとともに、実際にシステムを利用した保育専門職の声を取り入れた検討や、介入研究など別の研究デザインでの検討などにより、本システムの保育の質向上への効果を明らかにしていくことが望まれる。

しかし、健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用することに関する現在の研究は、長期にわたる包括的な情報管理（Devoe JE・et.al., 2011：Kurreeman F・et.al., 2011）や、田舎や恵まれない環境にある人たちへのケアの質向上（Sequist TD・et.al., 2007）、感染症拡大防止（渡辺・他, 2009）など、ある側面からみた保健医療の質向上の視点での評価が主である。PDCAサイクルの展開に寄与する可能性をもつ本システムの開発と評価は、実践と研究の新たな展開に一石を投じる可能性をもつ。実践の場では、保育専門職が、情報の理解、共有、活用という質の高い専門技術を取得し、子どもや保護者を日常的に支えつつ、虐待予防や障害児支援を展開し、情報をつなぎ、「孤立した子育て」「発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加」などの解決に向けた支援が充実する可能性を持つ。研究においては、子どもや保護者の情報を継続的に収集し分析することにより、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクルが展開される。本システムが実践で継続して活用されることより、保育の質向上が期待される。

第6章 「園児情報活用尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討（研究2）

6.1 研究の目的

本章では、園児情報記録システム（以下、本システム）の機能に準拠し、子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を量的に測定可能な尺度を作成し、信頼性・妥当性を確認した。

6.2 尺度を構成する質問項目の作成

研究に先立ち、「園児情報活用尺度」を構成すると考えられる質問項目の作成を試みた。

6.2.1 質問項目の作成方法

6.2.1.1 対象者とリクルートの方法

対象として、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、園児情報をより活用しやすい形で提供する WEB アプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の3種類を設定した。

「保育士グループ」のリクルートは、保育業界に精通している「保育パワーアップ研究会の代表者」に依頼した。「保健師グループ」のリクルートは、保健師業界に精通している「保健師」に依頼した。「開発者グループ」のリクルートは、園児情報を扱っている「IT企業の代表者」に依頼した。

各グループともリクルートする人数は、グループダイナミックスがもっとも起こりやすい7名前後を設定した（安梅，2001：安梅，2003）。

対象者には、調査の目的、方法、結果の取り扱い、研究の意義について書面と口頭で十分な説明を行った。また、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、調査に協力したことでいかなる不利益も受けないこと、調査への協力は本人の自由意思によるものであり、協力に同意しなくても不利益を受けないこと、同意後も不利益を受けず随時撤回できることを、書面と口頭にて説明した上で、同意書へのサインにより同意を得た（資料8）。

6.2.1.2 調査時期と調査実施時間

調査日は、平成 23 年 12 月 15 日～平成 24 年 1 月 15 日とした（筑波大学医の倫理委員会の承認後）。調査時間は、各グループとも 1 時間 30 分とした。

6.2.1.3 データの収集及び調査項目

データの収集には、フォーカス・グループ・インタビュー法を用いた。調査場所は静かな個室とし、参加者の承諾を得た上で IC レコーダとビデオカメラを設置し記録を行った。インタビュー中は番号札を参加者の名前の変わりにする事で、名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるよう配慮した。

調査項目は、「本システムの内容（コンテンツ）について」「本システムの使いやすさについて」「本システムの活用について」の 3 点とした。

インタビュアーは研究実施者が務めた。参加者の自由な発言やグループダイナミックスを効果的に促進できるようインタビューガイド（資料 7）を作成し、事前トレーニングを積んでからインタビューに臨んだ。

6.2.1.4 分析

質的研究の分析は、データから浮かび上がってくるコードから概念を生成する帰納的アプローチと、既存の理論的枠組みから導かれるコードを使用する演繹的アプローチに大別できる（佐藤，2008）と言われている。本研究では、演繹的アプローチを用いた。

1) 分析枠組みの設定

研究 1 の結果から、本研究では、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の 2 つを重要カテゴリーに位置づけた。また、【園児情報の基本的活用】のサブカテゴリーとして、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」、「情報の共有」「情報の補完」の 6 つを位置づけた。【園児情報の発展的活用】のサブカテゴリーとして「保育目標の明確化」「根拠に基づく保育」「保育評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」の 5 つを位置づけた。【園児情報の基本的活用】とは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキルである。【園児情報の発展的活用】とは、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキルである。

子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子

どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」は、健康維持や増進に必要な情報を理解し活用するという点で、ヘルスリテラシーの概念に共通性が見られる。【園児情報の基本的活用】は、Nutbeam（2000）が提唱した「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用的ヘルスリテラシー」をあわせ持ち、【園児情報の発展的活用】は、批判的ヘルスリテラシーに共通する概念であると考えられる。園児情報活用の構成概念として、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の2つを位置づけることは、先行研究、および、研究1の結果から妥当であると考えられる。

2) 分析 1：重要フレーズの抽出と分類

まず、ICレコーダに録音された記録から正確な逐語記録を作成した。次に、ビデオカメラの録画記録による参加者の反応を加味しながら、重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】に当てはまる、重要な成句（重要フレーズ）を、3名の分析者により逐語記録から抽出した。抽出した重要フレーズについて、要約的内容分析を用いて、同3名の分析者により、た【園児情報の基本的活用】の6つのサブカテゴリー、【園児情報の発展的活用】の5つのサブカテゴリー、合計11のサブカテゴリーに分類した。

分析の妥当性を確保するために、重要フレーズの抽出、及び、分類については、3名の分析者による検討の他、グループインタビュー法に精通した専門家のスーパーバイズを受け、重要フレーズの意味することとカテゴリーへの分類にずれがないことを確認した。

3名の分析者には、乳幼児に関する看護、保育、相談支援の経験をもち、質的研究を繰り返し行なっている者を選定した。

3) 分析 2：質問項目の作成

分析1の結果から、4名の分析者により、【園児情報の基本的活用】と【園児情報の発展的活用】の2つの要因を表すと考えられる質問項目を作成した。質問項目を作成する際には、フォーカス・グループ・インタビュー調査で得たデータに含まれる文章や言葉を用いるよう配慮し、重複や同様の意味をもつ質問項目がないか、保育専門職にわかりやすい言葉になっているかどうか、十分な検討を行った。

分析の妥当性を確保するために、4名の分析者による検討に加え、疫学の専門家、母子保健の専門家、及び、保育専門職のスーパーバイズを受け、精度の高い質問項目の作成を

目指した。4名の分析者は、分析1を行なった3名に、保育学領域での研究を長く行なっているものを加えた。

6.2.1.4 倫理的配慮

対象者には事前に、インタビューの目的、方法、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、インタビューに参加したことでいかなる不利益も受けないことを書面と口頭で説明し、同意書へのサインによりインタビュー参加への同意を得た。また、ICレコーダ及びビデオカメラによる記録は、記録をとる理由を説明し、参加者の承諾を得た上で実施した。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで名前が表に出ないことを保証した。録音、録画、及び観察記録は鍵付きのケースに保管し、研究終了後（平成25年3月31日）には確実に消去する。

本研究は、筑波大学医の倫理委員会の承認を得てから実施した（通知番号23-283）。

6.2.2 質問項目の作成結果

6.2.2.1 対象属性

3種類4グループからデータを得た（表 6-1）。1G は保育士グループで、男性 3 名、女性 2 名、年齢は 41-49 歳であった。2G は保健師グループで、女性 7 名、年齢は 30-60 歳であった。3G は保健師グループで、女性 7 名、年齢は 25-50 歳であった。4G は開発者グループで、男性 4 名、女性 3 名、年齢は 28-53 歳であった。全体では、男性 7 名、女性 19 名、合計 26 名、年齢は 25-60 歳であった。

表 6-1 対象属性

グループ		性別と人数			年齢	
		男性	女性	合計	最小値-最大値	平均値 (SD)
1G	保育士G	3	2	5	41-49	44.4(±3.4)
2G	保健師G	0	7	7	30-60	47.6(±9.8)
3G	保健師G	0	7	7	25-50	37.0(±7.4)
4G	開発者G	4	3	7	28-53	37.1(±9.8)
合計		7	19	26	25-60	41.3(±9.4)

6.2.2.1 重要フレーズと分類

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）は、【園児情報の基本的活用】6つ、【園児情報の発展的活用】5つ、合計 11 のサブカテゴリーに分類された。以下、重要カテゴリーは【】、サブカテゴリーは『』、重要フレーズは「」の記号を用いて記述する。

1) 園児情報の基本的活用

【園児情報の基本的活用】の 6 つのサブカテゴリー『情報の選定』『客観的理解』『体系的理解』『複合的理解』『情報の共有』『情報の補完』に、合計 80 の重要フレーズが抽出された（表 6-2）。

『情報の選定』として、「たくさんある情報をどこにどう整理しておけばいいのかわからない」「情報を持っている人と持っていない人では全然違う」「必要な基本情報をチェック

できる」「情報を無駄なくみられる（健康，発育，発達，生活，対人）ように整理」が抽出された。

『情報の客観的理解』として、「アラートありきになったらいかんけど，アラートから気づくこともある」「成長を客観的に理解する」「思い込みや思い入れでなく，客観的にみる」「思い込みや思い入れでなく，冷静に判断できる」「経験年数の差や思いの温度差に左右されず客観的にみられる」「偏見でものをみるんじゃない」「第三者の立場で客観的な判断材料とする」「主観ではなく，データからその子の状況を理解しようとする」「自分の子はこうだけど他の子と比較してどうなのか」の重要フレーズが抽出された。

『情報の体系的理解』として、「気になる子，気になる親，次の支援のヒントと考える」「子どもや保護者の多様なニーズから理解」「どのような情報から収集していけばいいかわかる」「ある一つの情報から，他に必要な情報が浮かぶ」「ある一つの情報を，別の情報に結びつける」「他の分野の情報と連動して理解」が抽出された。

『情報の複合的理解』として、「総合的に子どもの発達と育児環境と社会性の部分はリンクされる」「こういうバランスなんやな」「発達のことだけでなく，生活習慣，環境，医療，予防接種など幅ひろく情報を理解する必要がある」「情報はたくさんあった方が判断しやすい」「一つの質問の答えがイエスかノーかということじゃなくて，ビミョーなところも含めてみることができる」が抽出された。

『情報の共有』として、「保育専門職，他職種，保護者間のすばやい情報共有」「先生はこうみていた，親はこうみていた，あなたはこう発達してきたという記録と共有」「こんなことができるようになるためにサポートしたいという気持ちを共有」「こういう育ちをしてきたということを全員にかえせる」「発達評価票を一緒につける」「先生の思いを伝えて共通理解」「保育士同士が課題を共有すること」「子どもの特徴をわかりやすく示されて共有できる」「これを入力したらこういう状況になりますよと視覚的にみてもらえる」「困難ケースもあるので，医療とか福祉の情報がつながる連携」「経験や感覚を仲間や後輩と共有する」「結果のみでなく，これからどうしていけばいいのか共有する」「結果のみでなく，子どものどんなところをみたのか保護者と共有する」「問題を指摘するより，気づきを促す状況を作る必要があるよね」「気づきにつながるようなかわりが求められるよね」「言葉以外の方法をつかって情報を伝達」「相手がどこまで理解できているかを知って，説明する。次につながるように気をつけて話さなければ・・・」「あのときもうちょっと分かりやすく言っておけばよかったな」「他の分野の情報と連携できる」「一つのもので他職種が情報を

共有することができる」「お母さんと子どもの成長を共有」「子どもの成長に興味をもってもらうような」「カンファレンスや話し合いも進めやすくなる」「こんなことをしたらこんなに伸びたよと共有」「かかわりの事例を共有」「子どもの状況を知ることによってもっと子どもに興味をもつ」「何が気になるのかが形としてみなで共有できる」「入力したデータを育児教室などにプリントして持って行ってもらう。ネット上でみてもらうこともできる」「同じような子どもを抱えている園同士の連携がとれたら」「どのようなケアをしているか共有できたり」「先輩と後輩がどのように子どもをみているか共有することで関係性をつくる」「同じ悩みを共有できたり」「必要性を知ってもらう」「情報が他のものとどんどんリンクすることに気づく」「結果に対する説明がいらぬ」「結果に対する説明がいらぬ素早いグラフ化」が抽出された。

『情報補完』として、「やりとりが始まってスルーしてしまうと何もわからない」「気になった部分が記録として残る」「なんとなく気になった行動を形にしてのこす」「お母ちゃんたちは批判されたくない、そういうところから得るものがある」「保護者の子育てを認めながら実際にこうだから一緒に考えていこうと」「グループ何人かでつける中でその人が学んでいく」「親とのコミュニケーションの中から情報を得る」「保護者が出している赤信号のサインを見逃さない」「基本的には、感覚で得た情報を言語化して残していく」「のぼしてあげられる部分を見つける」「相手を受け入れ、話を聞ける状況をつくる」「相手に共感しないと相手のことはわからない」「安心して話せる雰囲気」「この人になら話しても良いという信頼関係」「子どもをみて将来を想像できる」「保護者の対応、返し方、考え方、家庭環境からその子の将来を想像できる」「重要な情報を持っている人、聞き出せる人がわかる」「何が気になるのかははっきりしないけど気になる部分」「どう見たら良いのかわからないけど気になる部分」が抽出された。

表 6-2 園児情報の基本的活用

サブ カテゴリー	グループ				重要フレーズ
	1G	2G	3G	4G	
情報の選定	●	● ●	●		たくさんある情報をどこにどう整理しておけばいいかわからない 情報を持っている人と持っていない人では全然違う 必要な基本情報をチェックできる 情報を無駄なくみられる（健康、発育、発達、生活、対人）ように整理
情報の客観的理解	● ●	● ●	● ●	● ● ●	アラートありきになったらいかんけど、アラートから気づくこともある 成長を客観的に理解する 思い込みや思い入れでなく、客観的にみる 思い込みや思い入れでなく、冷静に判断できる 経験年数の差や思いの温度差に左右されず客観的にみれる 偏見でものをみるんじゃない 第三者の立場で客観的な判断材料とする 主観ではなく、データからその子の状況を理解しようとする 自分の子はこうだけど他の子と比較してどうなのか
情報の体系的理解	● ●	● ● ●	●		気になる子、気になる親、次の支援のヒントと考える 子どもや保護者の多様なニーズから理解 どのような情報から収集していけばいいかわかる ある一つの情報から、他に必要な情報が浮かぶ ある一つの情報を、別の情報に結びつける 他の分野の情報と連動して理解
情報の複合的理解	● ●	● ●		●	総合的に子どもの発達と育児環境と社会性の部分はリンクされる こういうバランスなんやな 発達のことだけでなく、生活習慣、環境、医療、予防接種など幅ひろく情報を理解する必要がある 情報はたくさんあった方が判断しやすい 一つの質問の答えがイエスかノーかということじゃなくて、ビミョーなところも含めてみることができる
情報の共有	● ● ● ● ● ● ● ● ●	● ● ● ● ● ● ● ● ●			保育専門職、他職種、保護者間のすばやい情報共有 先生はこうみていた、親はこうみていた、あなたはこう発達してきたという記録と共有 こんなことができるようになるためにサポートしたいという気持ちを共有 こういう育ちをしてきたということを全員にかえせる 発達評価票を一緒につける 先生の思いを伝えて共通理解 保育士同士が課題を共有すること 子どもの特徴をわかりやすく示されて共有できる これを入力したらこういう状況になりますよと視覚的にみてもらえる 困難ケースもあるので、医療とか福祉の情報がつながる連携 経験や感覚を仲間や後輩と共有する 結果のみでなく、これからどうしていけばいいのか共有する 結果のみでなく、子どものどんなところをみたのか保護者と共有する 問題を指摘するより、気づきを促す状況を作る必要があるよね 気づきにつながるようなかわりが求められるよね

2) 園児情報の発展的活用

【園児情報の発展的活用】の5つのサブカテゴリー「保育目標の明確化」「根拠に基づく保育」「保育評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」に、合計36の重要フレーズが抽出された（表6-3）。

『目標の明確化』として、「最終目標がどこなのかを見極めることができる」「一人ひとりの子どもに対して目標をたてて」「早い段階でわかったら早くケアにつなげていけるんだろうとか」「早く適切なケアがなされて社会になじんでいく」「早めに園が気づいて取り上げてくれると子どもの将来が違う」が抽出された。

『根拠に基づく支援』として、「実践にもって行って結果につなぐ」「根拠に基づく保育方針の決定」「一人ひとりの園児にあったかかわり」「その子が最終的に自立するために情報をどう使うか」「その子の個性をいかせる、持っているものをのばすようなかかわり」「子どもや保護者の不利益にならないような情報の扱い」「多くの情報から必要な事業を立案できる」「その子の特性を理解して支援」「こういうことがあったからこういう保育をした」「子どもの性格上の問題なのか、訓練すればなおるのか親は判断できない」が抽出された。

『活動の評価』として、「効果があったという部分が見える」「ちょっとした変化がわかる」「これをしたらこのように評価がかわったよとわかる」「子どももかわっていくのでそこが反映される」が抽出された。

『継続的な情報活用』として、「一時点で評価するのではなく、その後どうのびていったか評価していく」「子どもの育ちを追いかける形で小学校、中学校につながる」「最低小学校までリンクできて共有できる」「障害を持った人は大人までいる。継続したデータの蓄積がほしい」「生涯にわたる情報を途切れることなく集積」「記録を残して引き継ぐ」「口頭で引き継がれている情報を記録として残す」「小学校にあがるときに情報を伝えていく」「何度も使ってもらうしくみ」「ずっと使っていくものなので使いやすくなければならない」が抽出された。

『関連・因果関係の検証』として、「根拠を蓄積することによって、”このような情報をとっておく”というような法の整備にまでつながれば」「どのような支援をすればその子が社会で幸せに生きていけるか感覚じゃなくて根拠として残していけるように」「将来的な問題に対して情報が蓄積される」「将来的な自立に対して情報が蓄積される」「将来の幸せや問題に対して情報が蓄積される」「何が関係しているのか具体的になる」「そういう発達をたどってきたのかのこせる」が抽出された。

表 6-3 園児情報の発展的活用

サブ カテゴリー	グループ				重要フレーズ
	1G	2G	3G	4G	
目標の 明確化		●	●	● ● ●	最終目標がどこなのかを見極めることができる 一人ひとりの子どもに対して目標をたてて 早い段階でわかったら早くケアにつなげていけるんだろうなとか 早く適切なケアがなされて社会になじんでいく 早めに園が気づいて取り上げてくれると子どもの将来が違う
根拠に 基づく支援	● ● ●	● ● ● ●	● ●	●	実践にもっていった結果につなぐ 根拠に基づく保育方針の決定 一人ひとりの園児にあったかかわり その子が最終的に自立するために情報をどう使うか その子の個性をいかせる、持っているものをのばすようなかかわり 子どもや保護者の不利益にならないような情報の扱い 多くの情報から必要な事業を立案できる その子の特性を理解して支援 こういうことがあったからこういう保育をした 子どもの性格上の問題なのか、訓練すればなおるのか親は判断できない
活動の評価	● ● ●		●		効果があったという部分が見える ちょっとした変化がわかる これをしたらこのように評価がかわったよとわかる 子どももかわっていくのでそこが反映される
継続的な 情報活用	● ● ●	● ● ●	● ●	● ● ●	子どもの育ちを追いかける形で小学校、中学校につながる 最低小学校までリンクできて共有できる 障害を持った人は大人までいる。継続したデータの蓄積がほしい 生涯にわたる情報を途切れることなく集積 記録を残して引き継ぐ 口頭で引き継がれている情報を記録として残す 一時点で評価するのではなく、その後どうのびていったか評価していく 小学校にあがるときに情報を伝えていく 何度も使ってもらうしくみ ずっと使っていくものなので使いやすくなければならない
関連・因果関係 の検証		● ● ● ● ● ●		●	根拠を蓄積することによって、「このような情報をとっておく」というような法の整備にまでつながれば どのような支援をすればその子が社会で幸せに生きていけるか感覚じゃなくて根拠として残していけるように 将来的な問題に対して情報が蓄積される 将来的な自立に対して情報が蓄積される 将来の幸せや問題に対して情報が蓄積される 何が関係しているのか具体的に そういう発達をたどってきたのかのこせる

※ ●は重要フレーズにつながる発言が見られたグループ

6.2.2.3 尺度を構成する質問項目

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）から、【園児情報の基本的活用】18項目、【園児情報の発展的活用】12項目、合計30項目の質問項目が作成された。

1) 園児情報の基本的活用を構成する質問項目

【園児情報の基本的活用】を構成する質問項目として、18の項目が作成された（表 6-4）。

『情報の選定』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者に関する情報を、健康、発育、発達、生活、対人関係などの側面から、整理して把握することを意味するものであると考えられた。そこで、まずは、子どもや保護者について把握すべき内容を整理し、「一般的な子どもの発育・発達について理解している。」「一般的な子どもの健康について理解している。」「子どもの基本情報（名前、生年月日、年齢、性別）を把握している。」「子どもの発育・発達の状態（身長、体重、乳幼児健診などの状況）を把握している。」「子どもの健康状況（既往歴、病気、けが、平熱など）を把握している。」「子どもの生活習慣の状態（食事、睡眠、排泄、清潔、衣服の着脱、遊びなど）を把握している。」「子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。」「保護者の基本情報（大まかな年齢、家族構成、同居の有無、住所、緊急連絡先など）を把握している。」「保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。」「保護者の就労状況（勤務先や勤務時間、勤務形態など）を把握している。」「保護者の育児状況（子どもへのかかわり、協力者、相談者など）を把握している。」「子どもや家族の情報を整理して記録している。」の12の質問項目を作成した。次に、本研究における【園児情報の基本的活用】とは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキルであり、「園児情報」は、子どもや養育者とのかかわりの中で得る情報であることを鑑み、「一般的な発育、発達、健康」を理解しているだけの項目である「一般的な子どもの発育・発達について理解している。」「一般的な子どもの健康について理解している。」を削除した。また、「整理して記録する」だけの項目である「子どもや保護者の情報を整理して記録している。」を削除した。合計9項目を採用した。

『情報の客観的理解』として抽出された重要フレーズは、子どもや家族をいかに客観的に理解できるかを意味するものであると考えられた。よって、「子どもや家族を、噂や中傷

に惑わされず理解している.」「子どもや家族を、思い込みや思い入れでなく理解している.」の2項目を作成した.

『情報の体系的理解』として抽出された重要フレーズは、ある情報を他の情報に結びつけて考えることを意味するものであると考えられた. よって「ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる.」という項目を作成した.

『情報の複合的理解』に関する項目は、子どもや家族を取り巻く様々な情報から、子どもや家族を理解することを意味するものであると考えられた. よって「様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる.」という項目を作成した.

『情報の体系的理解』と『情報の複合的理解』について、重要フレーズのレベルではそれぞれにわけて分類したが、質問項目として保育専門職の目線で考えた場合、体系的理解と複合的理解を差別化して解釈することが困難であることが予測された. また、再度、アセスメントの定義に戻って検討した結果、「考えることができる」だけではスキルとして不十分であることが考えられた. よって、『情報の体系的理解』『情報の複合的理解』は、『情報の複合的理解』としてまとめ、「ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる.」という項目を削除し、「様々な情報から総合的に子どもや保護者を理解できる.」の1項目を採用した.

『情報の共有』として抽出された重要フレーズは、数多くあったが、整理すると、保育専門職が、子どもや家族に関する情報を、職場内、他の専門機関、保護者と共有できることを意味するものであると考えられた. そこで、まずは、「自分の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる.」「自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる.」「仲間の思いを受け止めている.」「子どもや家族の情報を仲間内で共有している.」「子どもや家族の情報を職場内で共有している.」「子どもや家族について他の専門機関と共有している.」「保護者の子どもへの思いを受け止めている.」「保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど、信頼関係の構築を日々行っている.」「子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている.」「保護者と、子どもに関する情報の交換を細やかに行っている.」「保護者のおかれている状況に理解を示している.」「保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている.」「保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している.」の13項目を作成した. 次に、【園児情報の基本的活用】の定義を鑑み、「思いを受け止める」「状況を理解する」など保育専門職側のみの行動や態度、信頼関係の構築など具体的な情報の共有につながる以前の行動や態度として考えられる自分

の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる.」「自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる.」「仲間の思いを受け止めている.」「子どもや家族の情報を仲間内で共有している.」「保護者の子どもへの思いを受け止めている.」「保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど、信頼関係の構築を日々行っている.」「保護者のおかれている状況に理解を示している.」「保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている.」の8項目を削除した。また、「わかりやすく伝える」「ことば以外の方法を使って」は、いずれも伝達のための工夫であり、「ことば以外の方法を使う」は「わかりやすく伝える」ための一手段であると考えられることから、「保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している.」を削除した。最終的に「子どもや家族の情報を職場内で共有している.」「子どもや保護者の情報家族について他の専門機関と共有している.」「保護者と子どもに関する情報の交換を細やかに行っている.」「子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている.」の4項目を採用した。

『情報の補完』として抽出された重要フレーズは、保護者とのやりとりの中から、支援に必要な情報を補うことを意味するものであると考えられた。「保護者が出している赤信号を見逃さない.」「保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを話し合っている.」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している.」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している.」「子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている.」「保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている.」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている.」の7項目を作成し、「保護者が出している赤信号」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分」は同様の意味をもつと解釈し、「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している.」「子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している.」「子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている.」は削除した。また、「保護者の今までの子育てを認め」「保護者との対話の中から」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくる」は同様の意味をもつと解釈し、「保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている.」「保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている.」の2項目は削除した。最終的に、「保護者が出している赤信号を見逃さない.」「保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを一緒に考えている.」の2項目を採用した。

【園児情報の基本的活用】を構成する質問項目として、『情報の選定』『情報の客観的理解』『情報の複合的理解』『情報の共有』『情報の補完』の5つのサブカテゴリーの中に、18の質問項目が作成された。

表 6-4 園児情報の基本的活用を構成する質問項目

サブ カテゴリー	質問項目
情報の選定	<p>一般的な子どもの発育・発達について理解している。</p> <p>一般的な子どもの健康について理解している。</p> <p>子どもの基本情報（名前，生年月日，年齢，性別）を把握している。</p> <p>子どもの発育・発達の状態（身長，体重，乳幼児健診などの状況）を把握している。</p> <p>子どもの健康状況（既往歴，病気，けが，平熱など）を把握している。</p> <p>子どもの生活習慣の状態（食事，睡眠，排泄，清潔，衣服の着脱，遊びなど）を把握している。</p> <p>子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。</p> <p>保護者の基本情報（大まかな年齢，家族構成，同居の有無，住所，緊急連絡先など）を把握している。</p> <p>保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。</p> <p>保護者の就労状況（勤務先や勤務時間，勤務形態など）を把握している。</p> <p>保護者の育児状況（子どもへのかかわり，協力者，相談者など）を把握している。</p> <p>子どもや家族の情報を整理して記録している。</p>
情報の客観的理解	<p>子どもや家族を，噂や中傷に惑わされず理解している。</p> <p>子どもや家族を，思い込みや思い入れでなく理解している。</p>
情報の体系的理解	ある一つの情報を他の情報に結びつけて考えることができる。
情報の複合的理解	様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる。
情報の共有	<p>自分の思いを受け止めてくれる身近な仲間がいる。</p> <p>自分の思いを受け止めてくれる仲間が職場内にいる。</p> <p>仲間の思いを受け止めている。</p> <p>子どもや家族の情報を仲間内で共有している。</p> <p>子どもや家族の情報を職場内で共有している。</p> <p>子どもや家族について他の専門機関と共有している。</p> <p>保護者の子どもへの思いを受け止めている。</p> <p>保護者の疑問や要望には誠実に対応するなど，信頼関係の構築を日々行っている。</p> <p>子どもの発育，発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。</p>

	<p>保護者と、子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。</p> <p>保護者のおかれている状況に理解を示している。</p> <p>保護者が、この人になら話しても良いと思えるような信頼関係を築いている。</p> <p>保護者や他の専門機関に、ことば以外の方法を使って情報を伝達している。</p>
情報の補完	<p>保護者が出している赤信号を見逃さない。</p> <p>保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを話し合っている。</p> <p>子どもや保護者のなんとなく気になった部分を誰かに話している。</p> <p>子どもや保護者のなんとなく気になった部分を記録に残している。</p> <p>子どもや保護者の何となく気になった部分の記録を職場内で確認し合っている。</p> <p>保護者との対話の中から子どもや育児に関する情報を得ている。</p> <p>保護者を受け入れ、安心して話せる状況をつくっている。</p>

※網かけはディスカッションにより削除した項目

2) 園児情報の発展的活用を構成する質問項目

【園児情報の発展的活用】を構成する質問項目として、12の項目が作成された(表 6-5)。

『目標の明確化』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者への支援の目標を明らかにすることを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。」という項目を作成した。

『根拠に基づく支援』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者の情報をもとに、的確な支援を判断することを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。」「子どもや保護者の情報から一人ひとりの個性を生かす支援計画を立案している。」の2項目を作成した。本研究における「質の高い保育」とは、「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報をPDCAサイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育」と定義していることから、「一人ひとりの個性を生かす」は「適切な支援」と同様の意味を持つと解釈し、「子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。」の1項目を採用した。

『活動の評価』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者へのかかわりを評価していることを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果か

ら、支援計画を見直している。」の4項目を作成し、「感覚ではなく記録として残す」「支援計画を見直す」は評価として当然行なうべきことであると解釈できることから、「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果から、支援計画を見直している。」の2項目を削除し、評価の視点が具体的で妥当であると解釈できる「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。」「子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。」の2項目を採用した。

『継続的な情報活用』として抽出された重要フレーズは、評価を継続的に言い、次の支援につないでいくことを意味するものであると考えられた。「子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に言っている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。」「子どもの発育、発達の変化を、感覚ではなく記録として残している。」「保護者の育児状況の変化を、感覚ではなく記録として残している。」「子どもの発育、発達の変化を、就学後に引き継いでいる。」「保護者の育児状況の変化を、就学後に引き継いでいる。」の7項目を作成し、「感覚ではなく記録として残す」は評価として当然の内容であると解釈し、また、「子どもの発育、発達の変化」「保護者の育児状況」は活動の評価項目であることから「子どもや保護者へのかかわりの評価」として統合し、「子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に言っている。」「子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。」の3項目を採用した。

『関連・因果関係の検証』として抽出された重要フレーズは、子どもや保護者へのかかわりと評価を繰り返す中で集積されていく情報が根拠を生み出し、その根拠が子どもの将来を見据えた支援に欠かせないことの理解を意味するものであると考えられた。「子どもの将来的な自立のために、どのような情報が必要なのかがわかる。」「子どもの将来的な自立のために、どのようなかかわりが必要なのかがわかる。」「情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。」「情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。」「情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。」の5項目を作成し、5項目すべてを採用した。

【園児情報の発展的活用】を構成する質問項目として、『目標の明確化』『根拠に基づく

支援』『活動の評価』『継続的な情報活用』『関連・因果関係の検証』の5つのサブカテゴリーの中に、12の質問項目が作成された。

表 6-5 園児情報の発展的活用を構成する質問項目

サブ カテゴリー	質問項目
目標の 明確化	子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。
根拠に 基づく支援	子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。
	子どもや保護者の情報から一人ひとりの個性を生かす支援計画を立案している。
活動の評価	子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。
	子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。
	子どもや保護者へのかかわりとその効果を、感覚ではなく、記録として残している。
	子どもや保護者へのかかわりとその効果から、支援計画を見直している。
継続的な 情報活用	子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。
	子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。
	子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。
	子どもの発育、発達の変化を、感覚ではなく記録として残している。
	保護者の育児状況の変化を、感覚ではなく記録として残している。
	子どもの発育、発達の変化を、就学後に引き継いでいる。
	保護者の育児状況の変化を、就学後に引き継いでいる。
関連・因果関係 の検証	子どもの将来的な自立のために、どのような情報が必要なのかがわかる。
	子どもの将来的な自立のために、どのようなかかわりが必要なのかがわかる。
	情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのと思う。
	情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのと思う。
	情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのと思う。

※網かけはディスカッションにより削除した項目

3) 園児情報活用尺度を構成する質問項目

重要カテゴリーとして位置づけた【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に当てはまる重要な成句（重要フレーズ）から、【園児情報の基本的活用】18項目、【園児情報の発展的活用】12項目、合計30項目の質問項目が作成された（表 6-6）。

表 6-6 園児情報活用尺度を構成する質問項目

園児情報の基本的活用

- 1 子どもの基本情報（名前，生年月日，年齢，性別）を把握している。
- 2 子どもの発育・発達の状態（身長，体重，乳幼児健診などの状況）を把握している。
- 3 子どもの健康状況（既往歴，病気，けが，平熱など）を把握している。
- 4 子どもの生活習慣の状態（食事，睡眠，排泄，清潔，衣服の着脱，遊びなど）を把握している。
- 5 子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。
- 6 保護者の基本情報（大まかな年齢，家族構成，同居の有無，住所，緊急連絡先など）を把握している。
- 7 保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。
- 8 保護者の就労状況（勤務先や勤務時間，勤務形態など）を把握している。
- 9 保護者の育児状況（子どもへのかかわり，協力者，相談者など）を把握している。
- 10 子どもや家族を，噂や中傷に惑わされず理解している。
- 11 子どもや家族を，思い込みや思い入れでなく理解している。
- 12 様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる。
- 13 子どもや家族の情報を職場内で共有している。
- 14 子どもや家族について他の専門機関と共有している。
- 15 子どもの発育，発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。
- 16 保護者と，子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。
- 17 保護者が出している赤信号を見逃さない。
- 18 保護者の今までの子育てを認めながら，今後のことを話し合っている。

園児情報の発展的活用

- 19 子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。
 - 20 子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。
 - 21 子どもや保護者へのかかわりとその効果を，子どもの発育，発達の変化から評価している。
 - 22 子どもや保護者へのかかわりとその効果を，育児状況の変化から評価している。
 - 23 子どもや保護者へのかかわりの評価を，次の支援に生かしている。
 - 24 子どもや保護者へのかかわりの評価を，一時点ではなく継続的に行っている。
 - 25 子どもや保護者へのかかわりの評価を，就学後につないでいる。
 - 26 子どもの将来的な自立のために，どのような情報が必要なのかがわかる。
 - 27 子どもや保護者へのかかわりの評価を，どのようなかかわりが必要なのかがわかる。
 - 28 情報の蓄積が，子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。
 - 29 情報の蓄積が，将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。
 - 30 情報の蓄積が，子どもの発育，発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。
-

6.3 研究の方法

6.3.1 対象者

本研究における「保育専門職」は、日常的に乳幼児と保護者に関わりをもつ保育士、幼稚園教諭、看護師、保健師と定義しているが、本研究では、妥当性の検証のために「保育環境評価票（保育士、幼稚園教諭を対象とする評価票）」を用いることから、対象者は、全国の人口構成と大きなずれのない自治体の認可保育所、幼稚園に勤務する保育士、幼稚園教諭 200 名程度とした。

6.3.2 調査日

調査日は、平成 24 年 8 月 1 日～8 月 31 日（筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認後）とした。

6.3.3 調査方法と調査依頼

本研究は、無記名の自記式質問紙調査である。研究実施者が、依頼書、説明書、質問紙を持って保育所、及び、幼稚園を訪問し、書面と口頭で調査の目的や方法、成果、データの取り扱い、調査に協力せずとも不利益を受けないことについて十分な説明を行ない、調査への協力について承認を得た。個人の回答が他に漏れないよう、個別の糊付封筒を用意した。質問紙の回収は、各保育所、幼稚園の担当者に依頼した。回収した質問紙は、まとめて担当者から研究実施者まで送付いただいた。回収を行なう担当者には、調査票の取り扱いについて十分な説明を行ない、共通理解をはかった。

6.3.4 調査項目

質問紙は、基本的属性（年齢、性別、職業、職業経験年数、職位）、研究に先立ち作成した尺度を構成する質問項目、基準関連妥当性の検証を行うための「保育環境評価票（安梅，2008）」「Communicative and Critical health literacy 尺度（Ishikawa・et.al，2008）」で構成した。

尺度を構成する質問項目は、本研究に先立って実施したフォーカス・グループ・インタビュー調査（倫理審査承認番号 23-283）の結果から作成を試みた質問項目である。2 因子 30 項目で構成（表 6-6）され、「全く思わない（1 点）」から「かなり思う（5 点）」までの 5 件法で回答を得るものである。

保育環境評価票は、多様な保育ニーズに対応できる「専門技術の向上」を目指して開発された。「子どもの最善の利益」を実現するために、子どもと保護者の多様なニーズに応えるエキスが整理されており、子どもの健やかな成長に望ましい効果をもたらすことが実証されている。日常の保育の質を向上させるための自己評価に有効なツールとして活用できるものである。子どもの全体像を捉える 9 項目、家族の全体像を捉える 8 項目、関係機関との連携 12 項目の合計 29 項目に「実施していない（1 点）」から「実施している（5 点）」の 3 件法で回答を得るものであり、各領域の合計得点を尺度得点としている（安梅, 2007a: 安梅, 2008）。

Communicative and Critical health literacy 尺度は、WHO によるヘルスリテラシーの定義を参考に開発されたものである。個人の相互作用的ヘルスリテラシーを測定する 3 項目と批判的ヘルスリテラシーを測定する 2 項目の合計 5 項目の質問に「全く思わない（1 点）」から「かなり思う（5 点）」5 件法で回答を得るものであり、5 項目の平均得点を尺度得点としている（Ishikawa・et.al, 2008）。WHO によるヘルスリテラシーの定義は、「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力（WHO, 1998）」とされている。本研究における「園児情報活用」とは、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を、PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキルである。健康維持や増進に必要な情報を理解し、活用するという点で、概念に共通性がみられる。また、本研究における【園児情報の基本的活用】は、「機能的ヘルスリテラシー」と「相互作用的ヘルスリテラシー」をあわせ持ち、【園児情報の発展的活用】は、批判的ヘルスリテラシーに共通する概念であると考えられる。よって、Communicative and Critical health literacy 尺度を構成概念妥当性検証のための尺度とした。

6.3.5 分析

まず、単純集計を行い、それぞれの変数の分布を把握した。次に、園児情報活用を適切に測定できる尺度構成をめざし、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に相当する因子構造が、保育専門職から取得したデータにおいて得られるかどうかを確認するため、「尺度を構成する質問項目」について分布を考慮した上で因子分析を行った。2 因子構造が確認された際には、信頼性係数を算出し、因子構造の内的一貫性を確認した。また、

職業経験年数, 保育環境評価票得点との相関分析により, 基準関連妥当性 (併存的妥当性) の検証を行った. Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により, 構成概念妥当性の検証を行った.

6.3.6 倫理的配慮

対象者には, 調査の目的, 調査結果の活用, 及び, 調査結果を目的外に使用しないこと, 調査に参加したことでいかなる不利益も受けないこと, 質問紙に回答するかどうかは, 個人の自由であり, 回答しなくても不利益を受けないことを書面と口頭で説明し, 調査を実施する. 調査への同意は, 質問紙への提出をもって同意とみなす. また, 質問紙への回答内容が第三者に漏れないよう, 質問紙の回収には個別の糊付封筒を用意する. 本研究は, 筑波大学医学医療系医の倫理審査委員会の承認を得てから実施した (通知番号 第 649 号).

6.4 結果

6.4.1 対象属性

質問紙を 180 名に配布し, 178 名から回答を得た. 回収率は, 98.9%であった.

回収された 178 のうち, 属性と園児情報活用尺度を構成する項目に欠損のない 168 を分析の対象とした (表 6-7).

対象の性別は, 男性 16 (9.5%), 女性 152 (90.5%) であった. 勤務地は, 関西地域 61 (36.3%), 関東地域 107 (63.7%) であった. 職種は, 保育士 133 (79.2%), 幼稚園教諭 35 (20.8%) であった.

年齢は, 20-24 歳 18 (10.7%), 25-29 歳 43 (25.6%), 30-34 歳 23 (13.7%), 35-39 歳 19 (11.3%), 40-44 歳 15 (8.9%), 45-49 歳 8 (4.8%), 50-54 歳 19 (11.3%), 55 歳以上 23 (13.7%), 平均値 37.5, 中央値 34.5 であった.

経験年数は, 0-5 年未満 45 (26.8%), 5-10 年未満 40 (23.8%), 10-15 年未満 27 (16.1%), 15-20 年未満 14 (8.3%), 20-25 年未満 10 (6.0%), 25-30 年未満 5 (3.0%), 30-35 年未満 11 (6.5%), 35 年以上 16 (9.5%), 平均値 13.5, 中央値 9.4 であった.

職位は, 園長・所長 12 (7.1%), 副園長・副所長 2 (1.2%), 主任 12 (7.1%), 副主任 7 (4.2%), クラス担任 125 (74.4%), 臨時・パートタイム 10 (6.0%) であった.

表 6-7 対象属性

n = 168		
項目		人数 (割合)
性別	男性	16 (9.5)
	女性	152 (90.5)
勤務地	関西	61 (36.3)
	関東	107 (63.7)
職種	保育士	133 (79.2)
	幼稚園教諭	35 (20.8)
年齢	平均値 (95%CI)	37.5 (35.7-39.3)歳
	中央値 (25-75%)	34.5 (27.0-49.5)歳
	20-24歳	18 (10.7)
	25-29歳	43 (25.6)
	30-34歳	23 (13.7)
	35-39歳	19 (11.3)
	40-44歳	15 (8.9)
	45-49歳	8 (4.8)
	50-54歳	19 (11.3)
	55歳以上	23 (13.7)
経験年数	平均値 (95%CI)	13.5 (11.8-15.3)年
	中央値 (25-75%)	9.4 (4.6-19.8)年
	0-5年未満	45 (26.8)
	5-10年未満	40 (23.8)
	10-15年未満	27 (16.1)
	15-20年未満	14 (8.3)
	20-25年未満	10 (6.0)
	25-30年未満	5 (3.0)
	30-35年未満	11 (6.5)
	35年以上	16 (9.5)
職位	園長・所長	12 (7.1)
	副園長・副所長	2 (1.2)
	主任	12 (7.1)
	副主任	7 (4.2)
	クラス担任	125 (74.4)
	臨時・パートタイム	10 (6.0)

6.4.2 因子分析の結果

園児情報活用尺度を構成すると考えられる 30 項目について、それぞれの分布を確認したところ、多変量正規性は確保されなかった。また、因子間には相関がみられ、因子の独立性は確認されなかった。よって、最小二乗法による因子分析を行い、斜交回転（プロマックス回転）を施した。因子数は、当初よりの仮説に加え、スクリープロットや固有値を考慮し、2 因子解を採用した。いずれの因子についても、因子負荷量が 0.40 以上の項目を採用し、複数の因子に対して、重複した負荷を示した項目は除かれた。最終的に 2 因子 26 項目が採用された（表 6-8）。

2 因子解の因子寄与は、第 1 因子 8.47、第 2 因子 7.45、共通性 15.92 であった。各因子を構成する質問項目の特徴から、第 1 因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル「園児情報の発展的活用（12 項目）」、第 2 因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル「園児情報の基本的活用（14 項目）」であると解釈され、単純構造に近い因子パターンを有した。

表 6-8 園児情報活用尺度の因子分析結果

質問項目 (26項目) $\alpha = 0.94$	第 1 因子 $\alpha = 0.93$	第 2 因子 $\alpha = 0.90$	共通性
第 1 因子：園児情報の発展的活用			
子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。	0.87	-0.13	0.65
子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。	0.80	-0.05	0.60
子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。	0.77	-0.04	0.56
子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。	0.76	0.01	0.59
情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。	0.73	-0.09	0.47
子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。	0.73	0.03	0.55
子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。	0.72	-0.07	0.46
情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。	0.70	0.03	0.51
どのような情報が子どもの将来的な自立のために必要なかがわかる。	0.67	0.12	0.56
情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。	0.67	-0.03	0.44
どのようなかかわりが子どもの将来的な自立のために必要なかがわかる。	0.63	0.06	0.44
子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。	0.56	0.22	0.51
第 2 因子：園児情報の基本的活用			
子どもの生活習慣の状態（食事、睡眠、排泄、清潔、衣服の着脱、遊びなど）を把握している。	-0.18	0.77	0.47
子どもの基本情報（名前、生年月日、年齢、性別）を把握している。	-0.32	0.74	0.38
保護者の就労状況（勤務先や勤務時間、勤務形態など）を把握している。	-0.13	0.73	0.44
保護者の基本情報（大まかな年齢、家族構成、同居の有無、住所、緊急連絡先など）を把握している。	0.00	0.70	0.48
子どもの発育・発達の状態を把握している。	0.09	0.65	0.49
保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。	0.05	0.62	0.43
保護者の育児状況（子どもへのかかわり、協力者、相談者など）を把握している。	0.06	0.61	0.41
子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。	-0.01	0.58	0.33
子どもの健康状況（病気、けが、アレルギーなど）を把握している。	0.18	0.54	0.44
様々な情報から総合的に子どもや家族を理解している。	0.22	0.53	0.45
保護者が出している赤信号を見逃さない。	0.20	0.50	0.40
子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。	0.22	0.46	0.37
子どもや家族を、噂や中傷に惑わされず理解している。	0.18	0.43	0.31
子どもや家族を、思い込みや思い入れでなく理解している。	0.18	0.41	0.28
因子寄与	8.47	7.45	15.92
因子間相関（Spearman順位相関係数）	0.56		

最小二乗法，プロマックス回転

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性：0.902

6.4.3 信頼性係数

尺度および各因子間の内的整合性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した。尺度全体の信頼性係数は $\alpha=0.94$ ，第 1 因子は $\alpha=0.93$ ，第 2 因子は $\alpha=0.90$ であった。尺度を構成する質問項目について高い内的一貫性が示された。

6.4.4 年齢・経験年数・職位との関連

年齢，経験年数，職位と，園児情報活用尺度の各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 6-9）。年齢との相関は $r=0.23\sim0.27$ ($p<0.001$)，経験年数との相関は $r=0.27\sim0.33$ ($p<0.001$)，職位との相関は， $r=0.08\sim0.17$ であった。Spearman の順位相関係数からは，経験年数との関連がより強いことが示されたが，年齢と経験年数との間に高い相関 ($r=0.85$ ， $p<0.001$) が示されたため，経験年数と園児情報活用各下位尺度の得点について，年齢で調整し，偏相関係数を算出した（表 6-10）。経験年数と「園児情報の発展的理解」との偏相関係数は $r=0.16$ ($p=0.039$)，「園児情報の基本的理解」との偏相関係数は $r=0.20$ ($p=0.012$)，総合得点との偏相関係数は $r=0.21$ ($p=0.009$) であった。

表 6-9 年齢，経験年数，職位との関連

N = 168										
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点		経験年数		職位	
	r	p	r	p	r	p	r	p	r	p
年齢	0.23	0.003	0.27	<0.001	0.27	<0.001	0.85	<0.001	0.40	<0.001
経験年数	0.27	<0.001	0.33	<0.001	0.32	<0.001	—	—	0.47	<0.001
職位	0.17	0.029	0.08	0.291	0.14	0.077	—	—	—	—

表 6-10 経験年数との偏相関（年齢調整）

N = 168						
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
経験年数	0.16	0.039	0.20	0.012	0.21	0.009

6.4.5 保育環境評価票との関連

保育環境評価票の各下位尺度得点と、園児情報活用尺度各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 6-11）。

子どもの全体像を捉える領域と園児情報の発展的理解との相関は $r=0.21$ ($p=0.006$)、園児情報の基本的理解との相関は $r=0.23$ ($p=0.003$)、総合得点との相関は $r=0.26$ ($p=0.001$) であった。

家族の全体像を捉える領域と園児情報の発展的理解との相関は $r=0.09$ ($p=0.261$)、園児情報の基本的理解との相関は $r=0.20$ ($p=0.009$)、総合得点との相関は $r=0.16$ ($p=0.033$) であった。

関係機関との連携領域と園児情報の発展的理解との相関は $r=0.09$ ($p=0.232$)、園児情報の基本的理解との相関は $r=0.08$ ($p=0.334$)、総合得点との相関は $r=0.11$ ($p=0.151$) であった。

表 6-11 保育環境評価票との関連

	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
子どもの全体像を捉える (n=168)	0.21	0.006	0.23	0.003	0.26	0.001
家族の全体像を捉える (n=168)	0.09	0.261	0.20	0.009	0.16	0.033
関係機関との連携 (n=167)	0.09	0.232	0.08	0.334	0.11	0.151
総合 (n=167)	0.07	0.366	0.11	0.173	0.11	0.149

6.4.6 Communicative and Critical health literacy 尺度との関連

Communicative and Critical health literacy 尺度の各下位尺度得点と、園児情報活用尺度各下位尺度の得点について Spearman の順位相関係数を算出した（表 6-12）。

Communicative 領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は $r=0.36$ ($p<0.001$)、園児情報の基本的活用との相関は $r=0.36$ ($p<0.001$)、総合得点との相関は $r=0.41$ ($p<0.001$) であった。

Critical 領域得点と、園児情報の発展的活用との相関は $r=0.51$ ($p<0.001$)、園児情報の基本的活用との相関は $r=0.41$ ($p<0.001$)、総合得点との相関は $r=0.52$ ($p<0.001$) であった。

Communicative and Critical health literacy 尺度総合得点と、園児情報の発展的活用は $r=0.46$

($p<0.001$), 園児情報の基本的活用との相関は $r=0.42$ ($p<0.001$), 総合得点との相関は $r=0.49$ ($p<0.001$) であった.

表 6-12 Communicative and Critical health literacy 尺度との関連

N = 163						
	園児情報の 発展的理解		園児情報の 基本的理解		総合得点	
	r	p	r	p	r	p
Communicative	0.36	<0.001	0.36	<0.001	0.41	<0.001
Critical	0.51	<0.001	0.41	<0.001	0.52	<0.001
Total	0.46	<0.001	0.42	<0.001	0.49	<0.001

6.4.6 園児情報活用尺度得点の基本統計量

開発された園児情報活用尺度の基本統計量を算出した (表 6-13).

園児情報の発展的理解因子の得点は, 平均値 3.59 (SD \pm 0.55), 中央値 3.58 (3.25-4.00), 最小値 2.00, 最大値 5.00 であった. 園児情報の基本的理解因子の得点は, 平均値 3.88 (SD \pm 0.42), 中央値 3.86 (3.57-4.14), 最小値 2.86, 最大値 5.00 であった. 尺度総合得点は, 平均値 3.74 (SD \pm 0.43), 中央値 3.73 (3.46-4.03), 最小値 2.50, 最大値 5.00 であった.

表 6-13 園児情報活用尺度得点の基本統計量

N = 168			
	園児情報の 発展的活用	園児情報の 基本的活用	総合
平均値	3.59	3.88	3.74
標準偏差	0.55	0.42	0.43
中央値	3.58	3.86	3.73
25 th - センタイル値	3.25	3.57	3.46
75 th - センタイル値	4.00	4.14	4.03
最小値	2.00	2.86	2.50
最大値	5.00	5.00	5.00
p	<0.001	<0.001	

※ p値は, 2つの下位尺度の1標本のt検定の有意確率である

6.5 考察

6.5.1 本尺度の因子構造について

園児情報活用を適切に測定できる尺度構成をめざし、【園児情報の基本的活用】【園児情報の発展的活用】に相当する因子構造が、保育専門職から取得したデータにおいて得られるかどうかに着目しながら、尺度の構成を試みた。

因子分析の結果、想定した2因子構造が得られ、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認された。尺度および因子間の内的整合性を検討するために算出した Cronbach の α 係数は高い値を示し（第1因子 $\alpha=0.93$ ，第2因子 $\alpha=0.90$ ，総合 $\alpha=0.94$ ），内的一貫性の側面から信頼性が確認された。

各因子を構成する質問項目の特徴から、第1因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル【園児情報の発展的活用（12項目）】、第2因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル【園児情報の基本的活用（14項目）】であると解釈された。

6.5.2 本尺度の妥当性について

1) 基準関連妥当性の確認

経験年数との相関分析では、年齢を調整しても、有意な正の相関が示された。質の高い保育を提供する保育専門職の専門性は、「経験的な根拠」と「科学的な根拠」に裏付けられた豊かな知識と技術であると言われている（安梅，2008）。経験的な根拠は、職業経験を積むことにより創出される。よって、経験年数は保育専門職の専門性向上につながる一つであると考えられる。

一方、職位との相関は、園児情報の発展的理解は $r=0.17$ ($p=0.029$)，園児情報の基本的理解は $r=0.08$ ($p=0.291$)，総合は $r=0.14$ ($p=0.077$) であり、有意な相関は見られなかった。保育実践における職位は、年齢や経験年数が長く、よりよい保育支援を展開できる保育専門職が高い職位（管理者）についているとは限らない。また、本研究において、「質の高い保育」は、「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育」と定義しているが、高い職位にある者は、個々の園児や保護者と直接的に関わる保育業務は少なく、保育所経営に関することが日常業務の大半を占めることが考えられる。よって関連が見られないことは妥当な結果である。

と考えられる。

保育環境評価票との相関分析では、子どもの全体像を捉える領域、家族の全体像を捉える領域との有意な正の相関が示された。関係期間との連携領域では有意な相関は見られなかった。保育環境評価票は、多様な保育ニーズに対応できる「専門技術の向上」を目指して開発され、子どもの健やかな成長に望ましい効果をもたらすことが実証されているものであるが、関係機関との連携領域の項目内容をみると、「(保育所が)子育て支援の拠点を心がけている」や「小学校との連携」「地域との連携」など、園児情報活用よりもさらに踏み込んだ内容の質問項目である。本研究における「園児情報の活用」は、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報」を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うための情報理解」であることから、必ずしも相関は見られないと考えられる。

本研究では、保育の質向上につながるとされる「経験年数」「保育環境評価票（子どもの全体像を捉える領域）（家族の全体像を捉える領域）」との有意な正の相関が得られたことより、基準関連妥当性（併存的妥当性）が確認された。

2) 構成概念妥当性の確認

Communicative and Critical health literacy 尺度との相関分析では、下位尺度、総合スコアともに、有意な正の相関が示された。Communicative and Critical health literacy 尺度の Communicative 因子は、本尺度の園児情報の基本的活用因子との相関がより高く、Communicative and Critical health literacy 尺度の Critical 因子は、本尺度の園児情報の発展的活用との相関がより高く示された。

Communicative and Critical health literacy 尺度は、WHO によるヘルスリテラシーの定義を参考に開発されたものである。個人の相互作用的ヘルスリテラシーを測定する 3 項目と批判的ヘルスリテラシーを測定する 2 項目の合計 5 項目で構成されている (Ishikawa・et.al, 2008)。WHO によるヘルスリテラシーの定義は、「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力 (WHO, 1998)」とされている。本研究における「園児情報活用」とは、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を、PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う

スキルである。健康維持や増進に必要な情報を理解し、活用するという点で、概念に共通性がみられる。Communicative and Critical health literacy 尺度との各下位尺度ごとの相関、総合スコアとの相関が得られたことより、構成概念妥当性が確認された。

経験年数、保育環境評価票との相関分析により基準関連妥当性が確認され、Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により構成概念妥当性が確認された。質問項目作成プロセスから内容的妥当性が確認されている。本尺度により、子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行う「園児情報活用」を適切に測定できる可能性が示唆された。

6.5.3 本尺度の可能性と限界

本尺度は、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキル」を適切に測定することを目指して開発された。質の高い保育に繋がるとされている経験年数や保育環境評価票との基準関連妥当性、および、同様の概念を有すると考えられる Communicative and Critical health literacy 尺度との構成概念妥当性が確認された。しかし、より強固な妥当性を得るためには、保育の質との因果関係が示されている子どもの認知・言語発達、就学レディネス（NICHD, 2002）などとの関連から、さらなる検証がもとめられる。

第 7 章 考察

7.1 本研究の独創性

本研究の独創性は、以下の 4 点である。

1 点目は、保育の質向上に寄与することをめざし、WEB を活用した園児情報記録システムを開発し、本システムが園児情報の適切なアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクル展開のための機能を内包するかどうかにより、内容妥当性を確認した点である。

アセスメントに必要な園児情報の収集と理解にあたる【園児情報の基本的活用】、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックにあたる【園児情報の発展的活用】の 2 つを重要カテゴリーとして位置づけ、本システムの機能を整理した結果、【園児情報の基本的活用】には、「情報の選定」「客観的理解」「体系的理解」「複合的理解」、「情報の共有」「情報の補完」を意味する機能が整理された。【園児情報の発展的活用】には、「保育目標の明確化」「根拠に基づく支援」「活動の評価」「継続的な情報活用」「関連・因果関係の検証」を意味する機能が整理された。効果的なアセスメントに寄与し、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証という PDCA サイクル展開に寄与する機能を内包する可能性が示唆されたと考えられる。

質の確保された保育の充実が社会的な要請となっている。新保育所保育指針は、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調（全国保育所協議会、2008）しており、これをうけた保育専門職は、園児情報をどのように受け止め、判断し、ケアに活かし、評価すべきか、どのように自己点検を行えばいいのか、日々悩みながら活動している。本システムは、質の確保された保育実践の一助となる可能性がある。

2 点目は、連結可能匿名化された園児情報の集積可能性を確認した点である。本研究において、5 か月という短期間で、13 の保育所が本システムを導入し、子どもの発達に関するデータは、一般発達評価票 1746、社会的スキル尺度 1436、気になる子どもチェックリスト 1131 と、本システム上で千以上のサンプルが得られている。引き続き運用を続けることで、子どもの発達軌跡や関連要因などの解明につながるデータが集積される可能性が示唆された。

子どもの問題行動は親子にとどまらず 3 世代の影響を見る必要があることが、27 年間の追跡研究により明らかにされている（Capaldi DM・et.al., 2012）。継続的にデータを得るこ

とで、社会問題化している「発達障害など特段の配慮を要する子どもの増加」などの解決に向けた支援の充実が期待される。また、医療・健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用する最大の目的は「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てる」ことである（石樽, 2011）と言われている。本システムの活用により、この目的達成が期待される。

3 点目は、保育専門職が子どもや保護者とのかかわりの中で得ている「子どもの健康維持や増進に必要な園児情報」を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキルを評価する「園児情報活用尺度」を開発したことである。

本尺度は、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子的妥当性が確認され、経験年数、保育環境評価票との相関分析により基準関連妥当性が確認され **Communicative and Critical health literacy** 尺度との相関分析により構成概念妥当性が確認されている。また、内的一貫性の側面から信頼性が確認されている。

保育所保育の「質」と子どもの健やかな発達に関する研究は、数多く行われているが、保育の質を評価するための変数は、研究によって異なり、「保育専門職の意識・あり方」を中核にもつと言われながらも、保育の質を定量的に測定するツールは乏しい状況であった。本尺度は、保育の質を測定するだけにとどまらず、保育専門職が自己点検により、自分自身の意識やあり方を振り返り、改善すべき点を見いだすことに活用できるものである。本尺度の活用により、保育専門職の質の高い専門技術の取得につながる可能性が示唆された。

4 点目は、本システムの機能に準拠して行った 2 つの研究により、保育の質向上をめざした点である。研究 1 は、保育の質向上に向け、本システムの評価をするとともに、保育の質向上にさらに貢献するための改良点を本システムにフィードバックするものである。研究 2 は、保育の質向上に向け、本システム機能に準拠し、尺度を開発し信頼性・妥当性の検証を行うものである。研究 1 で、システム的内容的妥当性が確認され、本システムの機能に準拠して研究 2 を行ったことの妥当性が高められた。尺度の信頼性・妥当性が確認され、研究 1 の結果の妥当性が高められた。また、研究 2 で開発された尺度は、保育の質向上にむけた新たなスケールである。本システムに追加できる 6 つ目のスケールとして、本システムの機能向上に寄与すると考えられる。

7.2 健康政策的側面からの考察

現在の健康政策の中心には、ヘルスプロモーションの考え方がある。グローバル化した世界での健康決定要因に視点をおいたバンコク憲章は、情報通信技術（Information and communications technology : ICT）の強化を含むグローバル化を健康増進と健康リスク軽減の新たな好機としてとらえ、高めるべき能力の一つに「ヘルスリテラシー」をあげている（WHO, 2005）。ヘルスリテラシーとは「認識面でのスキルや社会生活上のスキルを意味し、これにより健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」と定義される（WHO, 1998）。一方、オタワ憲章は、ヘルスプロモーション活動の意図するものとして、「個人的スキルの開発」だけでなく、「支援的環境の創造」を強調してきた（WHO, 1986）。専門職側は、「個人とコミュニティが健康を高める意思決定をするために情報を提供し、影響を与えるためのコミュニケーション戦略」としてのヘルスコミュニケーション（Healthy People, 2010）が重視されてきた。Nutbeam (2008)は、ヘルスリテラシーの2場面として、「リスク」と「資産」をあげ、ヘルスリテラシーの低い人を発見できるよう実践や組織を変化させることや、ヘルスリテラシーをアセスメントして、その人に併せた健康情報、コミュニケーション方法、教育方法、を用いることで、健康や適切な意思決定を促進することの重要性を述べている。しかし、ヘルスリテラシーが高ければ、保健医療専門家に不必要な依存をもたらし、低ければ健康選択のリスクをもたらす（Schulz PJ & Nakamoto K, 2012）などの報告がなされ、ヘルスリテラシーに働きかけるためのヘルスコミュニケーションは、複雑高度化している。このような状況に対応していくために、専門職には、相手やコミュニティを理解し、適切な意思決定によりケアを提供するというヘルスコミュニケーションに止まらない能力が求められる。

本研究で開発した園児情報記録システムは、アセスメントに必要な情報の収集と理解、アセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに寄与する機能を内包するものである。「相手やコミュニティを理解し、適切な意思決定によりケアを提供すること」に効果を発揮する可能性が考えられる。複雑高度化するヘルスコミュニケーション能力向上への一助となることが期待される。

7.3 本研究の可能性と限界

本システムの内容的妥当性は、システム開発のために開催した会議記録を用いて、本システムが園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能を内包するかどうかを確認したものである。また、本システムの普及とデータ集積の可能性は、本研究では、限られた保育所のみを訪問し、本システムの概要、特徴、使い方を説明し、5 か月間という限られた期間に得られた導入数と、各スケールのサンプル回収数からのみ、展開の可能性を検討したものである。

情報機能において求められるエンパワメント技術（情報エンパワメント技術）では、利用可能性、適量性、適質性、受容性、利便性の5つの視点が重要であると言われている（安梅, 2006）。利用可能性とは、利用できる状態にあるかどうかという評価である。適量性とは、利用者のニーズに見合った十分なケアが用意されているかという評価である。適質性とは、利用者のニーズに見合った内容のケアが用意されているかという評価である。受容性とは、利用者が受け入れやすい形態となっているかという評価である。そして、利便性とは、利用のしやすさである。カナダでの研究では、電子健康記録（EHR）の成功のために優先されるべき10の要因として、目に見える有用性、生産性、動機づけ、実現戦略へのエンドユーザーの参加、対象者と専門家の相互作用、時間不足と仕事量、資源の有効性、マネジメント、結果の予測、互換性が述べられている（Carrie A McGinn・et.al., 2012）。また、全国電子健康記録システムが5年以上存在する5か国（イギリス、ドイツ、カナダ、デンマーク、オーストラリア）における研究では、「採択と変更管理」「便利さの実演と資金」「プロジェクト管理」「保健政策関連のゴール」「データ保護にかかる法的必要条件と実現戦略」の5点がカバーすべき点としてあげられている（Deutsch E・et.al., 2010）。今後、より広く周知を行い、運用を続け、実績を積み上げるとともに、実際にシステムを利用した保育専門職の声を取り入れた検討が求められる。また、介入研究など別の研究デザインで検討を行い、本システムの保育の質向上への効果を明らかにしていくことが望まれる。

しかし、健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用することに関する現在の研究は、長期にわたる包括的な情報管理（Devoe JE・et.al., 2011；Kurreeman F・et.al., 2011）や、田舎や恵まれない環境にある人たちへのケアの質向上（Sequist TD・et.al., 2007）、感染症拡大防止（渡辺・他, 2009）など、ある側面からみた保健医療の質向上の視点での評価が主である。PDCA サイクルの展開に寄与する可能性をもつ本システムの開発と評価は、実践

と研究の新たな展開に一石を投じる可能性をもつ。実践の場では、保育専門職が、情報の理解、共有、活用という質の高い専門技術を取得し、子どもや保護者を日常的に支えつつ、虐待予防や障害児支援を展開し、情報をつなぎ、「孤立した子育て」「発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加」などの解決に向けた支援が充実する可能性を持つ。研究においては、子どもや保護者の情報を継続的に収集し分析することにより、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクルが展開される。本システムが実践で継続して活用されることより、保育の質向上が期待される。

本尺度は、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキル」を適切に測定することを目指して開発された。質の高い保育に繋がるとされている経験年数や保育環境評価票との基準関連妥当性、および、同様の概念を有すると考えられる **Communicative and Critical health literacy** 尺度との基準関連妥当性が確認された。しかし、より強固な妥当性を得るためには、保育の質との因果関係が示されている子どもの認知・言語発達、就学レディネス（NICHHD, 2002）などとの関連の視点から、さらなる妥当性の検証がもとめられる。

本研究では、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能と、継続的に情報を集積する可能性をもつ「園児情報記録システム」を開発した。同時に、「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキル」を測定する尺度を開発した。本システム運用の効果を、本尺度を活用して評価することで、本システムの保育の質向上への効果と、保育専門職の質の高い専門技術取得への効果を明らかにしていくことが期待される。

第 8 章 結論

WEB を活用した園児情報記録システムを開発した。アセスメントに必要な園児情報の収集と理解にあたる【園児情報の基本的活用】、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックにあたる【園児情報の発展的活用】の 2 つを重要カテゴリーとして位置づけ、本システムの機能を整理した結果、本システムは、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解、アセスメント、目標の明確化、支援、評価、継続的な情報活用、関連・因果関係の検証という PDCA サイクル展開に寄与する機能を内包する可能性が示唆された。

平成 24 年 8 月 1 日から平成 24 年 12 月 31 日までの 5 か月間における、本システムの導入実績と、従来の紙媒体のスケール導入実績の比較から、本システムの普及可能性、および、データ集積可能性を検討した。単純な導入実績からは、今後の展開可能性が期待できる数が得られた。子どもの発達に関するデータは、一般発達評価票 1746、社会的スキル尺度 1436、気になる子どもチェックリスト 1131 と、短期間に、千以上のサンプルが得られている。今後、同程度のサンプルが得られれば、子どもの発達軌跡を明らかにしていける可能性が示唆された。

フォーカス・グループ・インタビュー法を用いた質的研究と、質問紙調査による量的研究のトライアングレーションにより、園児情報活用尺度の開発を行った。因子分析の結果、想定した 2 因子構造が得られ、単純構造に近い因子パターンを有している結果から因子の妥当性が確認された。第 1 因子は、園児情報のアセスメント、実践、実践の評価、よりよい実践へのフィードバックに適用されるスキル【園児情報の発展的活用（12 項目）】、第 2 因子は、アセスメントに必要な園児情報の収集と理解に適用されるスキル【園児情報の基本的活用（14 項目）】と解釈された。2 因子 26 項目で構成される園児情報活用尺度が開発された。尺度および因子間の内的整合性を検討するために算出した Cronbach の α 係数は高い値を示し（第 1 因子 $\alpha=0.93$ 、第 2 因子 $\alpha=0.90$ 、総合 $\alpha=0.94$ ）、内的一貫性の側面から信頼性が確認された。経験年数、保育環境評価票との相関分析により基準関連妥当性が確認され、Communicative and Critical health literacy 尺度得点との相関分析により構成概念妥当性が確認された。質問項目作成プロセスから内容的妥当性が確認された。園児情報を PDCA サイクルの中で活用し、一人一人の子どもの力を最大限に引き出すスキルである「園児情報活用」を適切に測定できる可能性が示唆された。

園児情報のアセスメント，実践，実践の評価，よりよい実践へのフィードバックという PDCA サイクルの展開のための機能と，継続的に情報を集積する可能性をもつ「園児情報記録システム」を開発した．同時に，「子どもや保護者とのかかわりの中で得ている子どもの健康維持や増進に必要な園児情報を PDCA サイクルの中で活用し，一人一人の子どもの力を最大限に引き出す保育を行うスキル」を測定する尺度を開発した．本システムと本尺度が，保育実践で活用されることにより，保育の質向上への効果と，保育専門職の質の高い専門技術の取得が期待される．

謝 辞

本研究をまとめるにあたり，ご協力を頂きました多くの方々にお礼を申し上げます．

論文の完成に至るまで親身にご指導，ご助言をいただきました指導教官の安梅勅江先生に心より感謝いたします．

さまざまな領域にわたり，大所高所からご指導いただきました鹿児島国際大学教授 高山忠雄先生に謹んで感謝の意を表します．

論文の完成にいたるまで，貴重なご指導，ご助言をいただきました主査の川口孝泰先生，副査の岡田昌史先生，三木明子先生，柴山大賀先生に，深謝いたします．

研究にご協力いただいた全国夜間保育園連盟会長 天久薫先生，全国夜間保育園連盟副会長 枝本信一郎先生，大宝保育園園長 田中裕先生，どろんこ保育園園長 城戸裕子先生，小倉北ふれあい保育所所長 酒井義秀先生，酒井初恵先生，あすなろ保育園副園長 宮崎勝宣先生，共栄保育園 小林昭雄先生，株式会社サンロフト社長 松田敏孝様，中村雄様，鈴木あゆみ様，常総市いきいき支援課課長 石塚隆様，秋葉利恵子様，市原市保健センター保健師 鈴木茜様に深謝いたします．

研究にご参加いただいた保育所，幼稚園の先生方，保健センター職員の皆さま，すべての対象者の皆さまに深謝いたします．

そして，多くの学びの機会を提供してくださった先生方，多大な時間をともに費やし多くのことを語りあってくれた研究仲間，いつも陰ながら支えてくれた家族に，心よりお礼を申し上げます．

文献

Al Sayah F, Majumdar SR, Williams B, Robertson S, Johnson JA.(2012). Health Literacy and Health Outcomes in Diabetes: A Systematic Review. *Journal of General Internal Medicine*. doi : 10.1007/s11606-012-2241-z.

網野武博, 朽尾勲, 増田まゆみ, 木村昭仁, 硯川和歌子, 尾木まり, 安治陽子, 高辻千恵. (2001). 保育効果に関する縦断的研究(Ⅰ). 平成 13 年度厚生労働科学研究報告所, 223-289.

網野武博. (2004). 保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究. 平成 15 年度厚生労働科学研究報告書, 241-243.

安梅勅江. (2008). 保育パワーアップ講座活用編. 東京：日本小児医事出版社.

安梅勅江. (2007a). 保育パワーアップ講座. 東京：日本小児医事出版社.

安梅勅江, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 丸山昭子, 田中裕, 酒井初恵, 宮崎勝宣, 西村真美. (2007b). 子どもの発達の全国調査に基づく園児用発達チェックリストの開発に関する研究. 厚生 の指標, 54(1), 36-41.

安梅勅江. (2006). エンパワメントのケア科学：当事者主体チームワーク・ケアの技法. 東京：医歯薬出版株式会社.

安梅勅江. (2001). グループインタビュー法-科学的根拠に基づく質的研究法の展開. 東京： 医歯薬出版株式会社.

安梅勅江. (2003). グループインタビュー法Ⅱ/活用事例編 -科学的根拠に基づく質的研究 法の展開. 東京：医歯薬出版株式会社.

安梅勅江. (2012). きずな育む力〈絆育力〉をつむぐ - エンパワメント科学のすすめ. チャイルドサイエンス, 8, 22-25.

安梅勅江, 田中裕, 酒井初江, 庄司ときえ, 宮崎勝宣. (2004). 夜間におよぶ長時間保育に関する 5 年間の追跡実証研究－5 年後の発達に関連する要因に焦点をあてて－. 平成 15 年度厚生労働科学研究報告書, 315-326.

Archer N & Cocosila M. (2011). A comparison of physician pre-adoption and adoption views on electronic health records in canadian medical practices. *Journal of Medical Internet Research*, 13(3), e57. doi:10.2196/jmir.1726.

Jha AK, DesRoches CM, Campbell EG, Donelan K, Rao SR, Ferris TG,...Blumenthal D.(2009). Use of electronic health records in U.S. hospitals. *The New England journal of medicine*, 360(16), 1628-1638. doi: 10.1056/NEJMs0900592.

Barnett WS & Masse LN. (2007). Comparative benefit-cost analysis of the Abecedarian program and its policy implications. *Economics of Education Review*, 26(1), 113-125. doi:10.1016/j.econedurev.2005.10.007

Bernard K, Dozier M, Bick J, Lewis-Morrarty E, Lindhiem O, Carlson E. (2012). Enhancing Attachment Organization Among Maltreated Children: Results of a Randomized Clinical Trial. *Child Development*, 83(2), 623-636. DOI: 10.1111/j.1467-8624.2011.01712.x

Middleton B. (2009). The Clinical Decision Support Consortium. *The Clinical Decision Support Consortium*, 150, 26-30. doi:10.3233/978-1-60750-044-5-26.

Boxell EM, Smith SG, Morris M, Kummer S, Rowlands G, Waller J, Wardle J, Simon AE. (2012). Increasing awareness of gynecological cancer symptoms and reducing barriers to medical help seeking: does health literacy play a role?. *Journal of Health Communication*, 17 suppl3, 265-279. doi: 10.1080/10810730.2012.712617.

- Bradley RH, et.al. (2007). Vandell DL. Child Care and the Well-being of Children. *Arch Pediatr Adolesc Med.* 161 (7) , 669-676.
- Capaldi DM, Pears KC, Kerr DC, Owen LD, Kim HK. (2012). Growth in Externalizing and Internalizing Problems in Childhood: A Prospective Study of Psychopathology Across Three Generations. *Child Development*, 83(6), 1945-1959. doi: 10.1111/j.1467-8624.2012.01821.x.
- Carol HM. (1995). *Assessment, Encyclopedia of Social Work(19th ed)*. Washington: NASW Press.
- McGinn CA, Gagnon MP, Shaw N, Sicotte C, Mathieu L, Leduc Y,...Légaré F. (2012). Users' perspectives of key factors to implementing electronic health records in Canada: a Delphi study. *BMC Medical Informatics and Decision Making*, 12(105), doi:10.1186/1472-6947-12-105.
- Cassidy DJ, Lower JK, Kintner-Duffy VL, Hegde AV, Shim Jonghee. (2011). The day-to-day reality of teacher turnover in preschool classrooms: An analysis of classroom context and teacher, director, and parent perspectives. *Journal of Research in Childhood Education*, 25(1), 1-23. doi:10.1080/02568543.2011.533118.
- Cawthon C, Walia S, Osborn CY, Niesner KJ, Schnipper JL, Kripalani S. (2012). Improving care transitions: the patient perspective. *Journal of Health Communication*, 17 suppl3, 312-324. doi: 10.1080/10810730.2012.712619.
- Cronbach LJ. (1951). Coefficient alpha and the internal structure of tests. *Psychometrika*, 16(3), 297-334.
- Crosnoe R, Augustine JM, and Huston AC. (2012). Children's Early Child Care and Their Mothers' Later Involvement With Schools. *Child Development*, 83(2), 758-772. doi: 10.1111/j.1467-8624.2011.01726.x.

- Cummings EM, George MR, McCoy KP, Davies PT. (2012). Interparental conflict in kindergarten and adolescent adjustment: prospective investigation of emotional security as an explanatory mechanism. *Child Development*, 83(5), 1703-1715. doi: 10.1111/j.1467-8624.2012.01807.x.
- 伊達雄高 & 清水谷論. (2004). 日本の出生率低下の要因分析：実証研究のサーベイと政策的含意の検討. *ESRI Discussion Paper Series*, 94, 2-56.
- DesRoches CM, Campbell EG, Rao SR, Donelan K, Ferris TG, Jha A,...Blumenthal D. (2008). Electronic Health Records in Ambulatory Care — A National Survey of Physicians. *The New England journal of medicine*, 359(1), 50-60. doi: 10.1056/NEJMsa0802005.
- Deutsch E, Duftschmid G, Dorda W. (2010). Critical areas of national electronic health record programs—Is our focus correct? *International journal of medical informatics*, 79(3), 211-222. doi: 10.1016/j.ijmedinf.2009.12.002.
- Devoe JE, Gold R, McIntire P, Puro J, Chauvie S, Gallia CA. (2011). Electronic health records vs medicaid claims: completeness of diabetes preventive care data in community health centers. *Annals of Family Medicine*, 9(4), 351-358. doi: 10.1370/afm.1279.
- Fetter MS. (2009). Improving information technology competencies: implications for psychiatric mental health nursing. *Issues in Mental Health Nursing*, 30(1), 3-13. doi: 10.1080/01612840802555208.
- Fuji KT, Gait KA, Siracuse MV, Christoffersen JS. (2011). Electronic health record adoption and use by nebraska pharmacists. *Perspectives in health information management*, 8(1d), <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC3142138/>

Gaglio B, Glasgow RE, Bull SS. (2012). Do patient preferences for health information vary by health literacy or numeracy? A qualitative assessment. *Journal of Health Communication, 17 suppl3*, 109-121. doi: 10.1080/10810730.2012.712616.

Giuse NB, Koonce TY, Storrow AB, Kusnoor SV, Ye F. (2012). Using health literacy and learning style preferences to optimize the delivery of health information. *Journal of Health Communication, 17 suppl3*, 122-140. doi: 1080/10810730.2012.712610.

薄雄斗, 大野ゆう子, 清水佐知子, 山田憲嗣, 喜久元香, 中川里恵, 松村泰志. (2010). 電子カルテ導入前後の外来診察状況の変化に関する研究. *IT ヘルスケア, 5(1)*, 44-47.

Healthy People 2010. *Healthy People* . <http://www.healthypeople.gov/2010/>

Healthy People 2020. *Healthy People* .

http://healthypeople.gov/2020/TopicsObjectives2020/pdfs/HP2020_brochure_with_LHI_508.pdf

Helitzer D, Hollis C, Sanders M, Roybal S. (2012). Addressing the "Other" Health Literacy Competencies-Knowledge, Dispositions, and Oral/Aural Communication: Development of TALKDOC, an Intervention Assessment Tool. *Journal of Health Communication, 17 suppl3*, 160-175. doi : 1080/10810730.2012.712613.

Hodge DR. (2001). Spiritual Assessment:A Review of Major Qualitative Methods and a New Framework for Assessment Spirituality. *Social Work. 46(3)*, 203-214.

Holmes AB, Hawson A, Liu F, Friedman C, Khiabani H, Rabadan R. (2011). Discovering disease associations by integrating electronic clinical data and medical literature. *PLoS One, 6(6)*, e21132. doi: 10.1371/journal.pone.0021132.

Holroyd-Leduc JM, Lorenzetti D, Straus SE, Sykes L, Quan H. (2011). The impact of the electronic medical record on structure, process, and outcomes within primary care: a systematic review of the evidence. *Journal of the American Medical Informatics Association*, 18(6), 732-737. doi: 10.1136/amiajnl-2010-000019.

Howes C, Galonsky E & Kontos S. (1998). Child care caregiver sensitivity and attachment. *Social Development*. 7(1), 25-36. doi : 10.1111/1467-9507.00048

庵原俊昭. (2004). 望ましい接種時期と接種方法. *小児科診療*, 67(11), 2005-2011.

池田裕子 & 向井智子. (2005). 長岡京市の電子情報化への取り組み. *保健師ジャーナル*, 61(6), 507-512.

石樽康雄. (2011). 医療・健康情報に関する国内外の動向と 標準化・相互運用性. *NTT 技術ジャーナル*, 23(3), 88-91.

Ishikawa H, Nomura K, Sato M, Yano E. (2008). Developing a measure of communicative and critical health literacy: a pilot study of Japanese office workers. *Health Promotion International*, 23(3), 269-274. doi: 10.1093/heapro/dan017.

磯崎淳. (2011). 電子カルテによる小児気道感染症の入院クリニカルパスの導入 当科の変遷とその評価. *小児科*, 52(3), 371-376.

IT 戦略本部. (2006). *IT 新改革戦略 - いつでも, どこでも, 誰でも IT の恩恵を実感できる社会の実現*. 東京 : 内閣府. <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/it2/kettei/060119honbun.pdf>

Jordan C. (2008). Assessment, *Encyclopedia of Social Work*(19th ed). Washington : NASW Press.

- 河西正樹, 大田健紘, 平田幸広, 松江英明, 山下 春造. (2009). ZigBee 無線規格を用いた健康情報管理システムの概要とその基本特性について. *電子情報通信学会技術研究報告 RCS, 109(229)*, 101-106.
- 小泉孝範 & 谷川浩隆. (2011). 電子カルテ導入の効果と稼働後の取り組み. *日本農村医学会雑誌, 59(5)*, 574-579.
- 厚生労働省. (2008). 平成 20 年度版 厚生労働白書. 東京 : ぎょうせい.
- 厚生労働省. (2012). 厚生労働白書 <平成 24 年度版> 社会保障を考える. 東京 : 日経印刷.
- Kurreeman F, Liao K, Chibnik L, Hickey B, Stahl E, Gainer V,...Plenge RM. (2011). Genetic Basis of Autoantibody Positive and Negative Rheumatoid Arthritis Risk in a Multi-ethnic Cohort Derived from Electronic Health Records. *The American Journal of Human Genetics, 88(1)*, 57–69. doi: 10.1016/j.ajhg.2010.12.007.
- Lamb, M.E. (1996). Effects of Nonparental Child Care on Child. Development: An Update. *Canadian Journal of Psychiatry. 41*, 330-342.
- Lau F, Price M, Boyd J, Partridge C, Bell H, Raworth R. (2012). Impact of electronic medical record on physician practice in office settings: a systematic review. *BMC Medical Informatics and Decision Making, 12(10)*. doi:10.1186/1472-6947-12-10
- Lau F, Price M, Keshavjee K. (2011). From benefits evaluation to clinical adoption: making sense of health information system success in Canada. *Healthcare quarterly, 14(1)*, 39-45.
- Lee JC. & Richard JS. (2004). My Current Thoughts on Coefficient Alpha and Successor Procedures. *Educational and Psychological Measurement, 64(3)*, 391–418. doi:10.1177/0013164404266386.

Melhuish EC & Moss P. (1991). *Day care for young children. International perspectives.* London : Routledge.

Mims SU, Scott-Little C, Lower JK, Cassidy DJ, Hestenes LL. (2008). Education level and stability as it relates to early childhood classroom quality : A survey of early childhood program directors and teachers. *Journal of Research in Childhood Education*, 23(2), 227-237.

Mitchell SE., et.al. (2012). Health literacy and 30-day postdischarge hospital utilization. *Journal of Health Communication*. 17(suppl3). 325-338. doi: 10.1080/10810730.2012.715233

Morton ME & Wiedenbeck S. (2009). A framework for predicting EHR adoption attitudes: a physician survey. *Perspectives in Health Information Management*, 6, 1a. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2804456/>

Morton ME & Wiedenbeck S. (2010). EHR Acceptance Factors in Ambulatory Care: A Survey of Physician Perceptions. *Perspectives in Health Information Management*, 7, 1c. <http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC2805555/>

Nagle LM. (2007). Infoway's EHR user engagement strategy. *Nurs Leadersh(Tor Ont)*, 20(2), 32-34.

中村雄介 & 千石靖. (2008). 医療福祉分野における動的な交渉による個人情報 の 自己管理可能なシステムの提案. 電子情報通信学会技術研究報告 SP, 107(435), 43-46.

中山和弘. (2008). ヘルスリテラシーとヘルスプロモーション. 病院, 67(5), 394-400.

NHS. (2011). *Connecting for Health*. <http://www.connectingforhealth.nhs.uk/>

NICHD. (2002). Early Child Care and Children's Development Prior to School Entry: Results from

the NICHD Study of Early Child Care. *American Educational Research Journal*, 39(1), 133-164. doi: 10.3102/00028312039001133

仁木賢治, 新谷公朗, 糠野亜紀, 金田重郎, 芳賀博英. (2008). 保育者の保育傾向を抽出できる発達記録支援システムの提案. *情報システムと社会環境研究*, 52, 31-38.

Nutbeam D. (2000). Health literacy as a public health goal: A challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. *Health Promotion International*, 15(3), 259-267. doi: 10.1093/heapro/15.3.259.

Nutbeam D. (2008). The evolving concept of health literacy. *Social Science & Medicine*, 67(12), 2072-2078. doi: 10.1016/j.socscimed.2008.09.050.

Okamoto E, Fujii H, Tanaka H, Yamakata D, Nobutomo K, Nagata H. (2009). Development of an IT Infrastructure under Japan's Health Care Reform 2008 : A Potential for Regional Health Information Networks. *Japan Journal of Medical Informatics*, 28(2), 93-98.

恩田陽子, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 童連, 田中笑子, 富崎悦子, ...安梅勅江. (2010). 就学前児用社会的スキル尺度の妥当性に関する検討. *日本保健福祉学会誌*, 16(2), 23-28.

Salesforce.com. (2012a). *Proven reliability*.

<http://www.salesforce.com/platform/cloud-infrastructure/reliability.jsp>

Salesforce.com. (2012b). クラウド・コンピューティングの自治体業務への活用.

<http://www.salesforce.com/jp/campaigns/public-sector/>

Salesforce.com. (2011). *Force.com のマルチテナント型アーキテクチャ*.

http://www.developerforce.com/media/ForcedotcomBookLibrary/Force.com_Multitenancy_WP_101508_JP.pdf

佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法 - 原理・方法・実践 -. 東京 : 新曜社.

澤智博. (2011). 診療科ごとの要件と連携を考える 病院 IT 化の突破口を示す 病院情報システム稼働における複数診療科からの各要件とその解決に対する具体的考察. *新医療*, 38(3), 114-117.

Schulz PJ & Nakamoto K. (2012). Health literacy and patient empowerment in health communication: The importance of separating conjoined twins. *Patient Education and Counseling*, 90(1), 4-11. doi: 10.1016/j.pec.2012.09.006.

Sequist TD, Cullen T, Hays H, Taulii MM, Simon SR, Bates DW. (2007). Implementation and Use of an Electronic Health Record within the Indian Health Service. *Journal of the American Medical Informatics Association*, 14, 191-197. doi:10.1197/jamia.M2234.

篠原亮次, 星野崇宏, 杉澤悠圭, 童連, 田中笑子, 渡辺多恵子,...安梅勅江. (2009). 就学前社会スキル尺度と広汎性発達障害(PDD)との関連. *厚生の指標*, 56(15), 20-25.

Simon SR, Kaushal R, Cleary PD, Jenter CA, Volk LA, Orav EJ,...Bates DW. (2007). Physicians and electronic health records: a statewide survey. *Archives of Internal Medicine*, 167(5), 507-512. doi:10.1001/archinte.167.5.507.

Steven RS, Rainu K, Paul DC, Chelsea AJ, Lynn AV, Eric GP,...David WB. (2007). Correlates of electronic health record adoption in office practices: a statewide survey. *Journal of the American Medical Informatics Association*, 14(1), 110-117. doi: 10.1197/jamia.M2187.

鈴木裕之, 喜多紘一, 李中淳, 平良奈緒子, 小尾高史, 山口雅浩,...土屋文人. (2010). 公的な個人情報アカウントを利用した健康情報管理システムに関する実証実験. *電子情報通信学会技術研究報告 LIOS*, 110(282), 15-21.

田原保. (2011). 電子カルテの現状と今後の期待. *電子情報通信学会誌*, 94(3), 185-191.

高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 安梅勅江. (2008). 就学前児の社会的スキル -コホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討-. *教育心理学研究*, 56(1), 81-92.

高辻千恵. (2004). 乳幼児の発達と保育の「質」. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 43, 147-154.

田中博. (2010). 日本版 EHR (生涯健康医療電子記録) の実現に向けた研究. *平成 21 年度総括・分担報告書*, 1-8.

田中太一郎, 岡村智教, 山縣然太朗. 市町村における母子保健データの収集・利活用状況. *平成 16-18 年度総合研究報告書*, 68-73.

渡邊英伸 & 藤野貴之. (2007). DNS による簡易健康情報データベースの実現に関する一検討. *電気情報通信学会技術研究報告 NS*, 107(261), 51-56.

渡辺多恵子, 竹原健二, 斉藤進, 佐甲隆. (2009). 小中学校における麻疹予防システム構築に関する研究—感染ハイリスク者の把握とワクチン接種実態調査から—. *小児保健研究*, 68(5), 529-535.

渡辺多恵子, 杉田真理子, 池田裕子, 松浦賢長, 山縣然太朗. (2007a). 家族リンク型健康情報データベースの活用と保健師活動における視点の変化に関する研究. *平成 16-18 年度総合研究報告書*, 223-227.

渡辺多恵子, 松田由佳, 田中太一郎, 山崎嘉久, 松浦賢長, 山縣然太朗. (2007b). 市町村における母子保健情報電算化支援と課題の検討, *平成 16-18 年度総合研究報告書*, 228-237.

渡辺多恵子, 田中笑子, 富崎悦子, 安梅勅江. (2010). 夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所の支援的役割に関する考察-育児環境の実態から-. *小児保健研究*, 69(2), 329-335.

渡辺多恵子, , 田中笑子, 富崎悦子, 望月由妃子, 徳竹健太郎, 安梅勅江. (2012). クラウドを活用した園児への総合支援システムの開発 - ヘルスリテラシーの視点から -. *小児保健研究*, 71(5), 780-786.

WHO. (1986). Ottawa Charter for Health Promotion First International Conference on Health Promotion Ottawa, 21 November 1986 - WHO/HPR/HEP/95.1.
http://www.who.int/hpr/NPH/docs/ottawa_charter_hp.pdf

WHO. (1998). Health Promotion Glossary. http://www.who.int/hpr/NPH/docs/hp_glossary_en.pdf

WHO. (2005). The Bangkok Charter for Health Promotion in a Globalized World.
http://www.who.int/healthpromotion/conferences/6gchp/hpr_050829_%20BCHP.pdf

八幡勝也. (2010). クラウド環境下での健康情報の利用. *ITヘルスケア*, 5(1), 73-76.

山田貴子. (2011). 医療の課題とその解決を目的としたシステム開発. *医学のあゆみ*, 237(5), 537-534.

山縣然太郎. (2010). 健やか親子 21 を推進するための母子保健情報の利活用に関する研究. *平成 21 年度総括・分担研究報告書*, 2-5.

山縣然太郎. (2007). 健やか親子 21 を推進のため情報システムの構築および各種情報の利活用に関する研究. *平成 16-18 年度総合研究報告書*, 2-4.

山本隆一. (2007). 電子カルテから EHR へ. *医学のあゆみ*, 222(12), 955-958.

Yorke JA, Nathanson N, Pianigiani G, Martin J. (1979). Seasonality and the requirements for perpetuation and eradication of viruses in populations. *American Journal of Epidemiology*. 109(2), 103-123.

Zarcadoolas C, Pleasant A, Greer D. (2005). Understanding health literacy: An expanded model.

Health Promotion International, 20(2), 195–203. doi: 10.1093/heapro/dah609.

全国保育所協議会. (2008). *全国の保育所実態調査報告書*. 東京 : 全国社会福祉協議会.

資 料

資料1

一般発達検査票

7:06	片足で30秒立つ	ピアノやオルガンで好きなようにひく	ほうぎで掃除をする	ひとりがりちりとりを持ち、一人がほうぎを持って協力して掃除をする	ひらがなの本を完全に読む	簡単な足し算ができる
7:00	まりつきでまりを脚の下にくぐらせる	風船や鶴を自分で折る	ひもを蝶結びにする	友だちがやって欲しいことを察してやってあげる	幼児語をほとんど使わなくなる	時計の針を正しく読む
6:06	ひとり縄跳びをする	絵の具で絵を描く	手ぬぐいや雑巾を絞る	ばば抜きができる	ひらがなの本をだいたい読む	トランプの神経衰弱をする
6:00	片足で10秒立つ	人物画（6部分）	ひとりです外出の支度が完全にできる	ひとりで簡単なルールのゲームができる	自発的に物語を話す	反対類推ができる 火は熱い、水は冷たい、水は濁は大きい、なすみは黒は汚い、夜は暗い
5:06	ブランコをこぎながら立ったり座ったりする	よく飛びように飛行機の折り方や飛ばし方を工夫する	体をタオルで拭く	店で買い物をしてお釣りをもらう	しりとりを、つなげる	なぞなぞをする
5:00	片足で5秒立つ	人物画（3部分）	ひとりです外出の支度がほぼできる	まねて簡単なルールのゲームができる	まねて物語を話す	空腹、疲労、寒いを理解する お腹が痛かったらどうしますか 寝たらどうしますか 暑かったらどうしますか
4:08	スキップができる	紙飛行機を自分で折る	ひとりで着衣ができる	砂場で二人以上で協力して一つの山を作る	文章の復唱（2/3） 子どもが二人ブランコに乗っています。山の上に大きな月が出ました。きのうお店に買物に行きました。	左右が分かる
4:04	ブランコに立ち乗りしてこぐ	はすむボールをつかむ	信号を見て正しく道路を渡る	ジャンケンで勝負を決める	四数詞の復唱（2/3） 5-2-4-9 6-8-3-5 7-3-2-8	数の概念が分かる（5まで）
4:00	片足で数歩跳ぶ	紙を直線にそって切る	入浴時、ある程度自分で体を洗う	おとなに断って移動する	両親の姓名を言う	用途による物の指示（5/5） 本、鉛筆、時計、いす、電灯。
3:09	幅跳び（両足をそろえて前に跳ぶ）	十字を書く	鼻をかむ	友だちと順番に物を使う（ブランコなど）	文章の復唱（2/3） きれいな花が咲いています。飛行機は空を飛びます。じょうずに歌を歌います。	数の概念が分かる（3まで）
3:06	三輪車をこげる	投げたボールをつかむ	手を洗って拭く	友だちにおもちゃを貸したり借りたりする	文章の復唱（1/3） きれいな花が咲いています。飛行機は空を飛びます。じょうずに歌を歌います。	数の概念が分かる（2まで）
3:03	でんぐり返しをする	ボタンをはめる	顔をひとりで洗う	「こうしていい？」と許可を求める	同年齢の子どもと会話ができる	高い、低い分かる
3:00	片足で2～3秒立つ	はさみを使って紙を切る	上着を自分で脱ぐ	ままごとで役を演じることがができる	二語文の復唱（2/3） 小さな人形、赤い風船、おいしいお菓子	赤、青、黄、緑が分かる（4/4）
2:09	立ったままでぐるっと回る	まねて丸を書く	靴をひとりではく	年下の子どもの世話をやきたがる	二数詞の復唱（2/3） 5-8 6-2 3-9	長い、短い分かる
2:06	足を交互に出して階段を上がる	まねて直線を引く	こぼさないでひとりで食べる	友だちとけんかをすると言いつけに来る	自分の姓名を言う	大きい、小さいが分かる
2:03	両足でびよんびよん跳ぶ	鉄棒などに両手でぶら下がる	ひとりでパンツを脱ぐ	電話ごっこをする	「きれいな」「おいしいね」などの表現ができる	鼻、髪、歯、舌、へそ、爪を指示する（4/6）
2:00	ボールを前にける	積木を横に二つ以上並べる	排尿を予告する	主養育者から離れて遊ぶ	二語文を話す 「わんわん来た」など	「もうひとつ」「もうすこし」が分かる
1:09	ひとりで一段ごとに足をそろえながら階段を上がる	鉛筆でぐるぐる丸を書く	ストローで飲む	友だちと手をつなぐ	絵本を見て3つの物の名前を言う	目、口、耳、手、足、腹を指示する（4/6）
1:06	走る	コップからコップへ水を移す	パンツをはかせる時、両足を広げる	困難なことに会おうと助けを求める	絵本を見て1つの物の名前を言う	絵本を読んでもらいたがる
1:04	靴をはいて歩く	積木を二つ重ねる	自分の口もとをひとりで拭こうとする	簡単な手伝いをする	3語言える	簡単な指示を実行する（「新聞を持っていらっしゃい」など。）
1:02	2～3歩を歩く	コップの中の小粒を取り出そうとする	お菓子の包み紙を取って食べる	ほめられると同じ動作を繰り返す	2語言える	要求を理解する（3/3）（おいで、ちょうだい、ねんね）
1:00	座った位置から立ち上がる	なぐり書きをする	さじで食べようとする	主養育者の後追いをする	言葉を1～2語、正しくまねる	要求を理解する（1/3）（おいで、ちょうだい、ねんね）
0:11	つたい歩きをする	おもちゃの車を手で走らせる	コップを自分で持って飲む	人見知りをする	音声をまねようとする	「バイバイ」や「さよなら」の言葉に反応する
0:10	つかまって立ち上がる	びんのふたを開けたり閉めたりする	泣かずに欲求を示す	身振りをまねする（オツムテンテンなど）	さかんにおしゃべりをする（囁語）	「いけません」と言うと、ちょっと手を引っ込める
0:09	物につかまって立っている	おもちゃのたいこをたたく	コップなどを両手で口にかけていく	おもちゃを取られると不快を示す	タ、ダ、チャなどの音が出る	知っている人の声を聞き分ける
0:08	ひとりで座って遊ぶ	親指と人さし指でつかもうとする	顔を拭こうとするといやがる	鏡を見て笑いかけたり話しかけたりする	マ、バ、パなどの音が出る	声の方に振り向く
0:07	腹ばいで体を回す	おもちゃを一方の手から他方に持ち替える	コップから飲む	親しみと怒った顔が分かる	おもちゃなどに向かって声を出す	相手の話し方で感情を聞き分ける（禁止など）
0:06	裏返りをする	手を出して物をつかむ	手でつかめる物などを、自分で口にもっていく。	鏡に映った自分の顔に反応する	人に向かって声を出す	見て笑いかける
0:05	横向きに寝かせると裏返りをする	ガラガラを振る	おもちゃを見ると動きが活発になる	人を見ると笑いかける	キャーキャー言う	主養育者の声と他の人の声を聞き分ける
0:04	首がすわる	おもちゃをつかんでいる	さじから飲むことができる	あやされると声を出して笑う	声を出して笑う	話しかけられた方を向こうとする
0:03	仰向けにして体を起こした時、頭を保つ	頬に触れた物を取ろうとして手を動かす	顔に布をかけられて不快を示す	人の声がする方に向く	泣かずに声を出す（アー、ウア、など）	人の声で静まる
0:02	腹ばいで頭をちょっと上げる	手を口に持っていったしゃぶる	満腹になると乳首を舌で押し出したり顔を背けたりする	人の顔をじっと見つめる	いろいろな泣き声を出す	話しかけられた方を見る
0:01	仰向けで時々左右に首の向きを変える	手に触れた物をつかむ	空腹時に抱くと顔を乳の方に向けて欲しがる	泣いている時、抱き上げると静まる	元気な声で泣く	大きな音に反応する
年齢	粗大運動	微細運動	生活技術	対人技術	表現	理解
	運動発達		社会性発達		言語発達	

社会的スキル（30項目すべてにお答えください）

資料 2

項 目	2012年			
	いつも	時々	ない	不明
1 誰かが話をしたら顔を見る				
2 誰かが話をしたら何らかの明らかな反応をする				
3 何かしてもらおうと、嬉しそうな顔をする				
4 気持ちを顔に出す				
5 挨拶をする				
6 人に近づきおしゃべりをする				
7 話をする時には顔を見る				
8 誘われれば遊び仲間に入れる				
9 他の子に思いやりの行動を示す				
10 他の子に攻撃的な態度をとらない				
11 自分の姓と名を言える				
12 見たり聞いたりしたことを自分から話せる				
13 「あとで」と言われて待つことができる				
14 持っている物を他の子と分け合う				
15 人の話を最後まで聞く				
16 順番がわかる				
17 おもちゃの貸し借りをする				
18 必要な場面ではお行儀よくしてられる				
19 欲しい物があっても説得されれば我慢できる				
20 大勢の人の中でだだをこねない				
21 けがをした友だちを助ける				
22 寂しそうな友だちを元気づける				
23 誰かが失敗すると励ましたり慰めたりする				
24 誰かが上手にできたら嬉しい				
25 誰かが上手にできたら「じょうず」とほめる				
26 いいと思ったらその人に「いいね」と言う				
27 友だちに何か頼まれると手助けする				
28 自分から友だちを手伝う				
29 自分にできることはないか聞く				
30 自分の意見と違っていても皆の決めたことに従う				

子どもの気になる行動

資料 3

項目	内容	基 準	該当に○	該当に○
1 音に対する反応の異常	①音に対して反応が鈍いか反応しない	大きな音に対して、音のする方を向いたり、体をビクッとさせたり、驚いたりするなどの反応を見せない		
	②音に対して非常に敏感に反応する	周りの音に神経質に反応し、不安定になる		
	③その他	(自由記述)		
2 不自然な泣きぐせ	①泣きぐせがある	哺乳後、寝かせようとするときぐいでしまう 睡眠障害がある 日中の興奮が持続しやすい		
	②抱きぐせがある			
	③夜泣きがある			
	④その他	(自由記述)		
3 抱きにくい	①抱っこを嫌がる	子どもを抱いた時に、身体を反らす 抱っこする時に、身を委ねない あやしても表情が変わらない 抱っこしていても視線が合わない		
	②身体が硬い	乳児期に腰はひきをしようとし 身体ほくしなど、スキンシップを嫌がる		
	③その他	(自由記述)		
4 発育不良	①発育不良である	乳幼児身体発育値 (パーセントイル曲線) により、体重が3パーセントイル未満及び97パーセントイルを超えるもの		
	②発育不良へ移行する可能性がある	乳幼児身体発育値 (パーセントイル曲線) により、体重が10パーセントイル未満及び90パーセントイルを超えるもの		
	③その他	(自由記述)		
5 生活リズムの混乱がある	①食事量 (哺乳量) にばらつきがある			
	②食事 (授乳) 回数にばらつきがある			
	③睡眠時間にばらつきがある			
	④就寝時間にばらつきがある			
	⑤起床時間にばらつきがある			
	⑥午睡時間にばらつきがある			
	⑦1日の内で不自然な体温変化がある			
	⑧昼・夜の区別がついていない			
	⑨その他	(自由記述)		
6 光 (視力) に対する反応の異常がある	①見ることにに対する反応の異常がある	乳児期 大きな物体を目で追って見ない 目の前に手を伸ばしてつかもうとしない 見えにくいようである 目つきや目の動きがおかしい		
		幼児期 斜視である 近視である 遠視である 色弱である (色盲)		
7 ひきつけをおこす	②光に対する反応が敏感か反応が鈍い	乳幼児期 光に対して非常に敏感に反応する 光に対して反応が鈍い		
	③その他	(自由記述)		
8 アレルギーがある	①食物アレルギーがある	(原因について自由記述) 除去食・代替食が必要である		
	②アナフィラキシーショックを起こしたことがある	(原因について自由記述)		
	③アトピー性皮膚炎がある	皮膚をいつもかゆがっている (どの程度かゆがっているか自由記述)		
	④花粉症がある	特定の時期になると、鼻水、くしゃみが出ている		
	⑤その他	(自由記述)		
9 不自然な見知り 分離不安	①不自然な見知り	生後6～8カ月頃からみられる見知りがなく、見知らぬ人に対しても見慣れた人の時と同様に、名前を呼ばれて微笑む等の反応を示す 人見知りの時期 (生後6～8カ月頃) から幼児期にかけて、見知らぬ人を見て極度に泣き叫んだり、怒ったりする		
	②不自然な分離不安	分離不安の始まる生後6～8カ月頃から3歳前後の時期に、保護者から引き離されても泣き叫ぶ等の不安反応を見せない 分離不安の始まる生後6～8カ月頃から3歳前後の時期に、保護者から引き離されると、極度に不安を抱いて泣き叫んだり、怒ったりする、またその人にまとわりつく		
	③その他	(自由記述)		
10 極端な内気	①自己表現 (主張) が苦手	保護者との関係の中でほとんど自己表現 (主張) をしない 職員との関係の中でほとんど自己表現 (主張) をしない 友だちとの関係の中でほとんど自己表現 (主張) をしない		
	②おとなしい	自分から進んで遊ぼうとしない 新しい物に対して自分から進んで関わろうとしない		
	③その他	(自由記述)		
11 不自然な関係性孤立)	①不自然な友だち関係	みんなから離れて隅の方で自分の好きなことをして遊んでいる みんなの輪の中に入れてずに一人で遊びを見ている 同年齢の子とも遠くうまく遊べない		
	②不自然な親子関係	保護者や世話をする人に関心を示さない		
	③その他	(自由記述)		

項目	内容	基 準	2012 該当に○	2013 該当に○	2014 該当に○	背景要因
12 無関心	①あやしても笑わない	生後3か月頃から乳児期にかけて、保護者にあやされても微笑まない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②視線が合わない （視力に関しては、項目3を参照）	生後2か月頃から乳児期にかけて、あやしている人と視線があわない 会話をしている時に視線が合わない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③後ろから声だけで名前を呼んでも振り向かない	自分の名前を理解していない 胸こえていないので振り向かない 胸こえているが、対人不安・対人緊張が強くて、振り向きたくない 胸こえているが、自分がしていることに夢中になって気が付かない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④子どもや大人の身振りを真似しない	人に対する興味が無い 興味はあるが、身体をうまくコントロールできない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑤友だちに対して関心を示さない	一人遊びを好み、仲間入りしたり仲間と遊ぶことをしようとしない 友だち付き合いが苦手 主に室内で机の下や部屋の隅を好み、幸せそうに一人遊びをする ごっこ遊びが見られない 人の立場や気持ちがよくわからない 一方的に話すので友達同士の遊びに入れない 友だちの表情を讀むことができない 大人とは上手に付き合えるが子ども同士になるとトラブルが生じる 楽しみ、興味、成し遂げたことを他人と共有することを自発的に求めようとしない（見せる、持ってくる、指差すことがない）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑥その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑦その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
13 こだわり	①身近にある特定のものに興味を集中させる	タオル等を持った口にくっくわえたりすることで落ち着くとする 耳たぶなど、身体の一部をつねに触りたがる ものの一部に持続的に熱中する 水に対する特別なこだわり（大好きな容器に怖がる）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②物をきちんと並べる等の奇妙な癖がみられる	積み木やシールなど、隙間なくまっすぐに並べたいと気がすまない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③順序にこだわる	つねに○番になりたい（順位に対するこだわり） 迷宮路などで、決まった道順を必ず通りたがる 日課や習慣等の変更に対して過度の抵抗を示す				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④空間・場所にこだわる	○番目という場所にこだわる ロッカーの中、机の下など、特定の場所で落ち着く 物の置き場所にこだわる				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑤同じ行動をよく繰り返す（常同的行動）	手をひらひらさせる・ぐるぐる回るなど、パターン化された行動が目立つ				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑥行動にこだわる	特定の習慣や儀式にかたくなにこだわる				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑦その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
14 吐きやすい	①消化器系の疾病異常がある	1ヶ月に1回以上の嘔吐、吐気がある				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②身体の疾病異常がある	嘔吐・吐気の症状を持つ身体異常がある				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③神経性嘔吐がある	保護者による食事の強制、特に強いな食物を強制する 食團を嫌う 保護者や家族から強く叱られたり注意される 無理なしつづがある 他児の嘔吐により誘発が頻繁に起こる				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑤その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑥その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑦その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
15 不自然な食	①食べすぎ	過食である 抱っこをしながら（下に落ちているものを拾ってまで食べる） 盗み食いをする（友だちの食事を横取りしてまで食べる）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②少食	少食である お腹は空いているが、食べようとしない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③食にむらがある	食にむらがある 偏食（好き嫌い）が激しい 味覚に対して過敏である（苦手な食物に敏感に反応し不安定になり混乱する） 口に入れただけですぐに吐き出す				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④異食	食べ物でない物まで口に入れて食べる				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑤その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑥その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	⑦その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
16 不自然なハイハイ、歩行、動きがある・歩行の遅れ	①脳神経系の疾病異常がある					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②運動器系の疾病異常がある					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③粗大運動発達に遅れがある					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
17 手指の動きが鈍い・不自然な動きがある	①手指の整形外科系の疾患異常					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②微細運動発達に遅れがある					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
18 激しいかんしゃく	①短気・かんしゃくを起こしやすい	卒拍ができずにすぐに怒り出す いやな時、身体を反り返らせるような行動が見られる 困難なことがあるとすぐにイライラする 過剰に注意されたり間違いを指摘されるとすぐに怒ったり泣いたりする 「できない」「僕なんかいないんだ」等の否定的な言葉を使って怒る				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②やりたいことを禁止されるとパニックになる	些細なことでも興奮して床に寝転んで泣きわめく、乱暴する、器物を破壊する等が見られる 環境が変わったり、予定が変わったり、いつものやり方でなかったりすると混乱する ゲームで負けた時などは感情を抑えることができない				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
19 不自然な甘え	①突然甘えてくるようになった					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	②なかなか甘えてこない					A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	③大人（職員・保護者）を独占する	大人（職員・保護者）を独占する 人見知りがなく、誰にでも甘える				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境
	④その他	（自由記述）				A：子ども C：かかわり B：保護者 D：取り巻く環境

	項目	内容	基準	2012 該当に○	2013 該当に○	2014 該当に○	背景要因				
20 かん然			もしもして、何を言いたいのかよくわからない（自己表現ができない） コミュニケーションにならない 発話できるのにしゃべらない				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	①しゃべらない						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	②その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
21 多動	①不注意		しばしば指示に従えないが反動的ではない ・反省はするがすぐに同じ間違いを繰り返す ・不注意でうっかりミスや忘れ物、物をなくすることが多い 時間内に製作などが最後までできない。途中で投げ出してしまう ・段取りや手帳のある活動が苦手 ・片付けができない 集中力がなく、一つのことには注意が持続しない ・他に注意がそれる 話が聞けない ・環境の変化（音・光等）に敏感に反応する				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
		②多動性		意図的ではなく、とにかくよく動く ・手足をもそもそさせたり身体をくねくねさせることがしばしば ・いすがたがたさせる 椅子に座ってられない じっとしてられない 落ち着きがない ・部屋を抜け出し、園庭に小動物を探しに行く ・休みなく動き回り高い所にとったり飛び降りたりする ・家庭内より外に連れ出すと動きが増える				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
			③衝動性		友だちと一緒に活動することが困難 ・儀式的行事が苦手で運動会や発表会、卒園式に参加しがらない 質問が終わらないうちにし出されに答えてしまうことがある 列に並んで待ったり、ゲームの集団の場で順番を守ることができない 友だちを阻止したり邪魔する 他人の会話や遊びに割り込む （自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境		
				④その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境	
				①攻撃性（けんかをうる）ことがある		友だちに暴力を振るうことがよくある 友だちに乱暴な言葉をよく使う 相手の感情を汲み取れない （自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境	
					②その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境
					23 反抗がひどい	①過度に反抗する （注意事項）・・・年齢相応（２～３歳）の関心をひく反抗期程度は含めない	臨興や保護者の言う事を聞かない 臨興や保護者の言う事に真実に聞かず、ちゃちゃを入れる				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境
			②物を粗暴に扱う	嫌なことがあるとすぐに物を投げる おもちゃを大切にしない					A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境		
	③その他		（自由記述）					A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
	24 運動嫌い	①動かことが嫌い	身体を動かすことを過度に嫌がる 壁外遊びを嫌がる すぐに「疲れた」と言って動かうとしない				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
		②その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
	25 言葉に関する問題	①言葉が遅い		まったく発語がない 言葉に音刺激だけで振り向くなどの反応がない 言語理解が良好で発語だけが遅い 言語理解も発語も大きく遅れている 3～4歳で言語理解も発語も大きく遅れているが、4～5歳になると急速に言葉が伸びて早い言葉の遅れと感ずる事がある 言語発達だけをみると軽微遅れであるが、行動発達や知的能力にゆがみがある				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
			②会話になりにくい		話はあるが、正確な言語理解が困難なため、会話が成り立ちにくい。それでも聞かれたことに関連した内容を話そうとする 自分から話をしておいて、会話が成り立たない（無関心） 多弁で自分の言いたいことを相手の様子もお構いなしに話し続ける 比喩や冗談などが理解できず、言葉通りに受け取ってしまう				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境		
				③しゃべりすぎる		しゃべりすぎる 独り言でしゃべりすぎる				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境	
					④構音障害がある		吃音がみられる 発音が、はっきりしない 早口で話す				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境
				⑤その他			（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境
26 神経質		①汚れを過度に嫌がる						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
		②細かいことを気にする						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
		③その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
27 疲れやすい		①登園後、朝から寝ることが多い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
		②午睡の時間が長い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
	③だらけていることが多い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	④「疲れた」「きつい」と言うことが多い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	⑤その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
28 夜尿	①多量に出る		4歳以上児でほぼ毎日 4歳以上児で週に数回				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
		②量は少ないが頻繁に出る		4歳以上児でほぼ毎日 4歳以上児で週に数回				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境 A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
	③その他							A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境			
									A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境		
29 頻尿	①トイレに行った直後にまた行くことが多い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	②トイレに1時間おき程度に行くことが多い						A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				
	③その他		（自由記述）				A：子ども B：保護者 C：かかわり D：取り巻く環境				

項目	内容	基 準	2012 該当に○	2013 該当に○	2014 該当に○	背景要因
30 気になる癖 ①指しゃぶり	①寝る前などに親指やその他の指をしゃぶる					A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②こぶしをくわえる					A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③その他	(自由記述)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②爪かみ	①手の爪を噛む				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		爪の白い部分がなくなるほど噛む				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		②足の爪を噛む				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		爪の白い部分がなくなるほど噛む				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		③その他				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③オナニー	①性器を触ったり、物で刺激する				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		週に2～3回				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		週に1回程度				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		②その他				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
④チック	①目	まばたきが多い・くるくる回す・左右に寄せる				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②鼻	くんくん鳴らす・よくすする				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③口	曲げる・とんがらす・吸吮いをする・アー、ワー、ハッなど大声を出す				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	④首	よく振る・よく回す				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	⑤手足	ピクッと動かす・人の行動のまねをする・わいせつなしくさをする				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	⑥その他	(自由記述)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
						A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
31 ルールの逸脱行動	①人の物を断りもなく取る	自分の物と他の人の物だという区別(自他の区別)がつかない・わかりづらい				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		コミュニケーションの取り方を理解できない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②大人の言葉を無視して行動する	言われたことが理解できない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		理解はでき、反抗するつもりもないが、しばしば言われた通りにできない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③その他	注意集中が苦手、外からの刺激などですぐに気がそってしまう				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
32 とても騒がしい	①時や場所をわきまえず、早口でおしゃべりし続ける	多弁状態				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		突然しゃべり出す				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②自分自身の興味を一方的に話すことが目立つ・同じフレーズを繰り返す					A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③社会的に遠慮すべきところで不適当なほどに過剰にしゃべる					A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	④その他	(自由記述)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
33 年齢相応の生活習慣の遅れ	①食事	食事時間が決まっていない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		極端な偏食、少食、過食				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		食べる意欲がない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		空腹感がない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		箸やスプーン、フォークが使えない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		咀嚼、嚥下がうまくできない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		食事中座していることがない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		食事中に人と会話をしたり、かかわって食べたりすることがない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	②排泄	トイレトレーニングの極端な遅れ				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		トイレに行くのを拒む				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		汚れた下着やおむつを替えることを嫌がる				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	③睡眠	物置や不適当な場所で排泄を行なう				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		睡眠と覚醒のリズムが乱れている				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		睡眠時間が小刻みである				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	④着脱衣	寝つき、目覚めがわるい				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		一人で服を着ることができない(手順・技術)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		服の前・後・上・下に構わない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		ボタンやスナップをかけられない(仕組みの理解・器用さ)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	⑤清潔	着脱の順番がわからない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		毎日同じ服を着たがる				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		洗顔、歯磨き、耳の掃除、髪をとかすことをしない、させない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	⑥朝の支度、降園準備など身支度を行うことが困難である	身辺整理ができない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
		一連の動作が理解できない				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境
	⑦その他	(自由記述)				A: 子ども B: 保護者 C: かかわり D: 取り巻く環境

お子さんについて何か気になることがありましたら書いてください。

★ ご記入にあたってのお願い★

選択肢がある質問は当てはまる番号ひとつに○を、「あてはまるものすべて」とした質問はあるものすべてに○を付けて下さい。ご不明な点は右記までご連絡下さい。（連絡先：筑波大学国際発達ケア研究室 tae@fureai.or.jp Fax 029-853-3436）

1. あなたと園を利用するお子さんとの関係に○を付けてください。 1) 母親 2) 父親 3) 祖母 4) 祖父 5) その他 ()
2. 現在、園を利用するお子さんと同居している方すべてに○を付けてください
1) お子さんの実母 2) お子さんの実父 3) お子さんの祖母 4) お子さんの祖父 5) お子さんの年上のきょうだい
6) 年下のきょうだい 7) 母親の代わりとなる方 8) 父親の代わりとなる方 9) 親戚 10) その他 ()
3. 1 日にお子さんと向き合って一緒に遊ぶ時間はどれくらいとれますか。（但し、睡眠時間は除く）
1) 平日 約 時間 分 2) 休日 約 時間 分
4. お子さんと一緒に遊ぶ機会（子どもと向き合って過ごすこと）はどのくらいありますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
5. お子さんと一緒に買い物に行く機会はどのくらいありますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
6. お子さんに本を読み聴かせる機会はどのくらいありますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
7. あなたは童謡やお子さんの好きな歌と一緒に歌いますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
8. お子さんと公園に行く機会はどのくらいありますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
9. お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親戚とどの程度の頻度で訪問したりされたりしますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
10. お父さん（お母さん）は（または父親（母親）代わりとなる方）どの程度協力的ですか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
11. お子さんは両親（または母親、父親の代わりとなる方）と一緒に食卓を囲んで食べるのは何回くらいですか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
12. お子さんがわざと牛乳をこぼしたらどうしますか。あてはまるものひとつに○を付けてください。
1) 子どもをたたく 2) 口でしかる 3) 何等かの方法で悪いことをわからせる（内容； ）
4) 別の方法でこぼさないように考える 5) その他 ()
13. 先週は何回くらいお子さんをたたいたりしましたか。
1) たたかない 2) 1～2回位 3) 3～4回位 4) 5～6回位 5) ほぼ毎日
14. 夫婦（または母親、父親の代わりとなる方）で子どもの話をする時間はどの程度とれますか。
1) めったにない 2) 月に1～3回 3) 週に1～2回 4) 週に3～4回 5) ほぼ毎日 6) その他
15. 園以外に、お子さんの面倒を見てくれる人がいますか。
1) いない 2) いる→それは誰ですか。あてはまるすべての番号に○を付けてください。
1) 配偶者（かわりの方含） 2) 祖父母 3) 友人 4) 親戚 5) 隣人 6) ベビーシッター 7) その他 ()
16. 子育てについて誰か相談できる人がいますか。
1) いない 2) いる→それは誰ですか。あてはまるすべての番号に○を付けてください。
1) 配偶者（かわりの方含） 2) 祖父母 3) 友人 4) 親戚 5) 隣人 6) 職員 7) 園長 8) その他 ()
17. お子さんを育てながら、育児の自信が無くなると感じることはありますか。
1) よくある 2) 時々ある 3) あまりない 4) 全くない 5) その他 ()
18. お子さんは園に行くのを楽しみにしていますか。
1) たいへん楽しみにしている 2) まあ楽しみにしている 3) どちらでもない 4) あまり行きたがらない 5) 嫌がっている
19. お子さんが何歳の頃から子育て支援（ベビーホテル、ベビーシッター含）を利用しはじめましたか。() 歳 () か月から
20. お子さんはいつも、何時に起きて何時に寝ますか。一番多い時間を、平日と休日それぞれ記入してください。
〈平日〉 起床 (AM・PM) 時 () 分ごろ 就寝 (AM・PM) 時 () 分ごろ
〈休日〉 起床 (AM・PM) 時 () 分ごろ 就寝 (AM・PM) 時 () 分ごろ
21. お子さんの睡眠は規則的ですか。
1) いつも不規則 2) ととき不規則 3) ほぼ規則的 4) いつも規則的 5) わからない
22. あなたのストレスはどの程度ですか。ひとつに○を、またその内容についても該当するものすべてに○を付けてください。
(無い・低い・中程度・やや高い・とても高い) → 内容 (子育て・体調・仕事・人間関係・その他 ())
23. 子育て支援について何かご意見やご希望がありましたら書いてください。（裏面に書いていただいても結構です）

ご協力ありがとうございました。

I 子どもの全体像を捉える

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	確認欄	マニュアル内容
1 基本属性		1) 基本属性を把握しているか。	子どもの名前、生年月日、年齢(月齢)、性別を正確に把握し記録しているか。		書面調査において決められた書式がある。
					収集された情報が、記録され、職員が活用しやすいように整理している。
2 観察所見		1) 身体状態を把握しているか。	①入所時における子どもの出生の状況、発育歴、既往症、身体状態、疾病、感染症、平熱など子どもに関する情報を収集し記録整理されているか。		入所説明会後等、個別に子どもの状態等を聞き取れる機会を作っている。
					園独自の入所前健康診断調査票があり、について囁託医の指導を受けて調査項目、面接項目が設定している。既往歴や予防接種、健診結果、アレルギー等の状況が記録、整理されている。
					母子健康手帳を参考に、出生前(妊娠中)の状態とその後の発育・発達状態や既往症、予防接種などについて把握している。
					定期検診の情報を把握している。
			②登園時および保育中に、身体状態、疾病、感染症、顔色、外傷、体温等の情報収集と視診を行っているか。		登園時に保護者から直接子どもの健康状態や家庭の様子を収集している。 口頭、書面(連絡帳等)
					登園時に子どもの身体に直接触れたり、顔を観察、視診している。
					観察は登園時に限ることなく一日を通じて異常の有無を個別に確認できるような形式を作成し、観察時間と記録者がわかるようにしている。
			③子どもの健康支援として、個別の配慮をおこなっているか。		登園時保育中、異常を発見した保育する場合、その保育方法についてを囁託医・看護師と連絡がとれるような体制がある。
					予薬を受けつける場合、予薬依頼書、受付者、保管場所等受け入れ体制が整っている
		2) 発育の状態を把握しているか。	行政により定められた規定に基づき、適切な健康診断、乳児健診、蛭虫検査等を行い、保健計画や個別の支援計画に生かしているか。		身体測定・年1回以上の健康診断、歯科検診、ぎょう虫検査等の実施をし記録している。
					身体発育評価を実施し記録している。
					健診の際に囁託医から全員の乳幼児一人一人の診断の結果に基づく保育において必要に応じて指導がある。
					年間保健計画を策定している。
		3) 発達の状態を把握しているか。	①子どもの発達を評価し、個別支援計画に活用しているか。		子どもの発達の基準を定めている。園内で統一された発達評価表がある。
					精神運動機能発達状態を把握している。
					個人の発達記録簿があり、整理されている。
					記録簿に記入する時に保育者間で話し合い、多面的な評価を実施している。
					発達の記録は年齢に合わせた頻度で行い、個別支援計画作成に生かしている。
			②発達の状況を保護者と共有しているか。		連絡帳などで、保護者にその日の子どもの様子を必ず伝えている。
					保護者からの発達に関する相談の機会が日常的にある
					クラス便り等で、保護者に一般的な発達について知らせている。
			③保育者自身が発達に関する専門性を高める機会があるか。		子どもの発達について疑問などが浮かんだとき、すぐに相談できる人が園内外にいる。
					子どもの発達について理解し、子ども一人一人の特性に応じ、発達の課題に配慮して保育している。
		4) 生活習慣の状態を把握しているか。	①入所時に子どもの生活習慣(睡眠、排泄、衣服の着脱の状態、入浴・シャワー浴の状態、食事)、遊び等に関する情報収集をしているか。		入所説明会後等、個別に子どもの状態等を聞き取る機会を作っている。
					書面調査の書式として設定している。
					収集された情報を記録し、職員が活用しやすいように整理している。
					調査項目や質問項目には、子どもを理解するのに必要な事項を記入している。
			②家庭での様子を把握しているか。		登園時、自宅での食事、排泄、睡眠、遊び等の状況を保護者から直接情報収集している。
			③保育中、子どもの健康状態を把握しているか。		食事、排泄、午睡、機嫌、体温等、保育中の心身の健康状態を観察し、記録している。
					午睡の際の呼吸状態の観察が行われ、記録している。
			④24時間を視野においた生活リズムの把握をしているか。		子どもの生活リズムを大切に自己活動を重視しながら生活の流れを安定し、かつ、調和のとれたものになっている。
					就学のための生活リズムを整えるように働きかけをしている。
		5) 対人関係の状態を把握しているか。	①入所時における子どもと保護者との愛着関係を把握しているか。		親子の愛着関係について、
					入所前、必要に応じて慣らし保育を実施している。
			②子どもから見た保護者との関係と子ども同士(仲間)との関係を把握しているか。		時間帯による子どもの変化(友だち、保育者、保護者との関わり)をきちんと把握している。
		6) 保育歴を把握しているか。	入所(園)前の面接時に保育歴について把握しているか。		保育所・幼稚園・乳児院・児童養護施設等の児童福祉施設の利用理由と時期、またその時の子どもの状態を把握し記録している。
		7) 子どもを取り巻く状況を把握しているか。	気になる行動、行動障害、自閉的傾向、癖(指しゃぶり、爪かみ、吃音、チック、頻尿、抜け毛等)の状況を把握し記録しているか。		年月齢に相応でない子ども自身の気になる行動、行動障害の状況を把握し記録している。
3 権利擁護	(1) 基本的な人権	1) 子ども自身の権利が守られているか。	①子ども自身が虐待(身体的・心理的・ネグレクト・性的)されていないか。		虐待や不適切な養育について早期発見、早期対応を徹底しており、必要に応じて専門機関と連携をとることができる(関係機関との連携参照)
					子どものサインを把握し、虐待が疑われる際の対応の方法が明確にされている。
			②本人の代弁者となる保護者や大人が的確に本人の代弁をし、自己肯定感を育んでいるか。		常に「子どもの最善の利益」の観点に立ち、子どもに愛情を持って接する
					多様性(ジェンダー、人種、文化、宗教等)に対する配慮を怠らない

II. 家族の全体像を捉える

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	確認欄	マニュアル内容
1	基本属性	1) 家族の全体像を捉える時の基本的な面接技法を知り、相談を実施しているか。	①面接・相談の場所や時間に配慮しているか。		プライバシーが守られる個室で相談・面接を実施している。
					夜間保育利用者の時間に合わせた面接時間を配慮している。
			②受容、共感、傾聴、非審判的態度に配慮しているか。		相談を受けたことは必ず記録に残す。
					面接では、保護者の不安を軽減する努力をしている。
					保護者の自己決定を尊重している。
					非審判的態度で接し、家族のこれまでの努力を最大限評価(コーピング)している。
2	家族理解	2) 基本属性を把握しているか。	家族の氏名、性別、生年月日(年齢)、住所、家族構成、同居の有無について記録しているか。		守秘義務を徹底することを保護者に明らかにし、知り得た情報の漏洩を防止している。
					基本属性(氏名、性別、生年月日、家族構成、住所、連絡先)を把握し、記録している。
3	基本的人権	1) 家族の問題を把握しているか。	相談年月日、保護者の相談理由、主訴について記録しているか。		保護者の就労状況(勤務先、勤務時間、連絡先)を把握し、記録している。
					保護者の緊急連絡先を把握し、記録している。
4	家族構成	2) 家族歴を把握しているか。	家族の生活歴について、必要に応じて記録しているか。		保護者以外の送迎がある場合、その方の住所、緊急連絡先を把握し、記録している。
5	家族の育児力を把握しているか。	3) 家族の育児力を把握しているか。	①育児の協力状況(家庭内での役割)について、必要に応じて、記録しているか。		子育てに関する保護者の意向を把握しているかを把握し、記録している。
					問題はいつから始まったのか？(どのくらいの期間に及ぶのか、どのくらいの頻度で生じるのか)を把握し、記録している。
6	子どもの権利擁護	1) 家族が子どもの権利を守っているか。	生命の保護、健全育成を含む「最善の利益」の保障、虐待の回避、年齢に応じた意向の尊重、不当に保護者から分離されない権利を守っているか。		問題が起こる状況について(いつ、どこで、誰が、どんな状況で)把握し、記録して。
					家族の問題に対する感情や姿勢はどうかを把握し、記録している。
7	子どもの権利擁護	2) 子どもの最善の利益を優先させた家族の権利を守っているか。	知る権利(情報アクセス権)、意見表明権、自己決定権への支援保障、サービス受給権、不当に拘束されない権利、プライバシーの保護、個人としての人格の尊重、財産保護、差別をされない権利を守っているか。		問題が生じてから生活にどのような変化が生じたのかを把握し、記録している。
					問題に対処している主な家族は誰かを把握し、記録している。
8	子どもの権利擁護	3) 子どもの権利を守っているか。	②子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		どのような対処をしているのかを把握し、記録している。
					生活歴を必要に応じて把握し、記録している。
9	子どもの権利擁護	4) 子どもの権利を守っているか。	③子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		家族ぐるみで育児の協力が出来ているのかを必要に応じて把握し、記録している。
					子どもへの言葉遣いについて把握している。
10	子どもの権利擁護	5) 子どもの権利を守っているか。	④子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもと遊ぶ時間について把握している。
					子どもと一緒に食事をとる機会の有無について把握している。
11	子どもの権利擁護	6) 子どもの権利を守っているか。	⑤子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもの就寝時のかわりについて把握している。
					絵本を読み聞かせる機会の有無について把握している。
12	子どもの権利擁護	7) 子どもの権利を守っているか。	⑥子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもと買い物に行く機会について把握している。
					子どもに対する感じ方について把握している。
13	子どもの権利擁護	8) 子どもの権利を守っているか。	⑦子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもに対する身体的な暴力(身体的虐待)が行われていないか把握している。
					子どもに対する性的虐待が行われていないか把握している。
14	子どもの権利擁護	9) 子どもの権利を守っているか。	⑧子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもに対する心理的虐待が行われていないか把握している。
					子どもに対するネグレクト(放置、保護の怠慢)が行われていないか把握している。
15	子どもの権利擁護	10) 子どもの権利を守っているか。	⑨子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		子どもの意見を聞き、年齢相応の対応をしているか把握している。
16	子どもの権利擁護	11) 子どもの権利を守っているか。	⑩子どもへの接し方(子どもへの言葉遣い、子どもと遊ぶ時間、一緒に食事をとる機会の有無、就寝時の関わり、家族との読書頻度、子ども同伴の買い物、子どもに対する感じ方)について、必要に応じて記録しているか。		憲法で保障されている基本的人権(第11条)、幸福追求権(第13条)、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利(第25条)、教育権(第26条)、勤労権(第27条)、労働基本権(第28条)などが基本的に守られているかどうかをはじめ、地域社会から差別をされずに生活する権利、個別ケアを受ける権利、個別の問題等に対して質の高いサービスを受ける権利、自己決定・自己選択する権利、利用者が必要とする事柄についてわかりやすい情報提供を受ける権利、意見・質問・苦情を表明する権利、プライバシーの保護に関する権利を守っている。ただし子どもへの虐待を行っている親やDVを行っている夫が、「知る権利」を振りかざし子どもが措置されている施設や母子が保護されている施設を尋ねてもその権利は尊重されない。
					施設においては、夫婦間のトラブルで親権をどちらにするのが問題になるケースも多い。そのため、親権を必ず確認して、保護者以外の人がお迎えや問い合わせがあっても、「そのような質問にはお答えできません。」等、対応する。

Ⅲ 子どもを取り巻く望ましい環境

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	チェック欄	項目
1	保育環境	(1) 物的環境	①子どもの生活や学びを考えた保育室・園庭を工夫しているか。		目指す保育が実現する保育空間となるように努力する。
			②日常のケアのために使いやすい空間や家具の工夫をしているか。		衛生的で子どもに合ったサイズの家具が使いやすく配置されている。身長に応じて、台などにより高さの調整できる椅子を使う。
			③室温・湿度などの快適性への配慮がされているか。		換気をし、極度の空調をしないようにする。
			④室内の明るさが適した明るさである		昼間の保育時間、昼寝の時間、夜の睡眠時間により適した照明に調整している。
			⑤音に対する配慮があるか		音や声の大きさに配慮し、場面に応じた静かな時間があるか
		2)子どもの生活や学びに応じた保育空間があるか。	①安心してくつろげる空間があるか。		リラックスできる場(空間・時間)がある。
			②多様性を受容する環境があるか		多様なジェンダー、人種、年齢、能力、文化に触れる教材や保育内容がある
			③食事ができる空間を工夫しているか。		子どもが自分で食事ができる環境があるか(幼児:自分で食事の準備や片づけを行う環境があるか)
			④障害を持つ子どもや保護者にとって生活しやすいか。		車いすで出入りできる出入り口、便所があるか
		3)地域の状況を把握しているか。	周辺の住宅形態、住民の年齢層、住民の転入出の特徴、歴史・文化、子どもの遊び場、交通の特徴・安全、地域産業を把握し、保育運営に活かしているか。		園はどのような特徴の地域にあり、利用者がどのような地域に住んでいるかを知るよう努力をする。どのような地域かなどを知ることで、地域の保育ニーズを把握する
	(2) 安全	1)安全に配慮しているか。	①子どもの使うもの・口にするものについて安全性を確認しているか。		おもちゃなども素材について配慮し、決められた時間に必要に応じて消毒を適切に管理する。
			②子どもが出かける場所・道路・公園や施設の設備の安全を確保しているか。		保育中に出かける施設(公園や散歩のルート)について、遊具や交通量の特徴を把握し、安全に子どもが活動できるよう配慮する。園外保育用の書式があるか。
		2)防犯・防災・緊急時対策があるか。	①施設と保護者で、緊急時の連絡手段・連絡網などを確認・徹底しているか。		園としてどのように対応するのかが徹底されている。必要に応じて、掲示するなどして、利用者に対応を伝える。
			②保護者の連絡先(確実に取れるところなら職場などに限らず、親戚なども考慮にいれる。携帯電話以外の連絡先も聞いておく)を確認している		保護者の連絡先だけでは、確実に連絡が取れない場合があるので、その他の連絡先を確認する。
			③インターホンなどで訪問者が確認できるようにしているか。		いつ・どのような訪問者が来・帰っていったのか、確認できるシステムを作る。
			④防犯ビデオ・防犯ベルを設置しているか、なるべくなら警備会社等と連携しているか。		警備会社との契約(直通回線がある)、警察への直通の通報装置があることが望ましい。
			⑤防災対策について確認・実施しているか。		前項①⑦を参照に、どのように対策を立て、保護者や諸機関と連携するのか明確にしている。
			⑥定期的な避難訓練を実施しているか。		同左:避難訓練をするたびに、見直す点がないかを点検する。通報の仕方・避難誘導のルール・事務員・調理員などの動きはどうか。点呼はスムーズか。
			⑦地域の医療機関の連絡先や地図をわかりやすいところに掲示しているか。		利用者、専門職の両者に分かりやすいようにする。
		3)安全教育をしているか。	危険にあったときの対処方法(大声をあげる・とにかく人のいる所へ逃げる・そのときの注意点など)を教えているか。(幼児)		安全教育が指導計画に位置付けられているか
	(3) 保育内容	1)月齢・年齢に応じた保育内容を整備しているか。	①保育課程、教育課程に基づいた指導計画がある		自園目指す保育に向けた書式が整備されている
			②個別のニーズに応じた日課がある。個別援助計画がある(0歳～3歳)。		規則正しい生活リズムは大切であるが、24時間を勘案した一人一人の子どもに応じた過ごし方がある程度できる
			③家庭との連携を取りつつ、その子のリズムに合わせて作ることを心がけているか。		登園時間の直前まで寝ている場合が考えられるので昼寝の時間を考える・帰宅した後の睡眠時間などから、園での就寝時間を考えるなど、幅をもたせて考える。 子どもにとって、どういう生活リズムが望ましいのかを念頭におきながらその子のリズムを整えていくようにする。
			④日課の中に集中して活動する時間とリラックスしてすごす時間を組み入れている。		戸外遊び、室内遊びがあり、子どもが遊びを選ぶ環境がある
			⑤発達や興味に応じた保育環境が整備されているか		自分で好きなように遊ぶことができるコーナー(センター・ゾーン)や十分な玩具が準備されている
		2)季節・地域性などを取り入れ保育しているか	①季節感(地域性(地元のお祭り)を大切に夜の過ごし方を考慮しているか。		季節感や地域性が生かされる行事を取り入れる。
			②保護者の出席しやすい時間帯の懇談会、イベント、運動会等を開催しているか。		懇談会やイベント、運動会など、アンケートを取るなどして夜間保育利用者は多様な利用時間帯なので、保護者の参加しやすい日程・時間帯を考慮して設定する。
		3)食事に配慮しているか	①栄養バランスや旬の食材に考慮しているか。		旬のものに触れる機会を多くし、そのことを食事中的話題に乗せて季節感を養う。
			②食物アレルギーを持つ子どもへの対応は保護者の意見だけでなく、医師の診断のもとに行っているか。		医師の診断によって行う。反応する素材・症状・調理方法・その期間など、診断に応じて対応を変えていく。そのための懇談を設定している。
			③食事時のマナー、好き嫌いへの対応について考えられているどうか。		好き嫌いをどのようにするのか園として・クラスとして話し合っている。 (無理に食べさせることで食事自体を嫌いにならないように、しかし、残すことの是非も話し合うようにし専門職間ですり合わせ共有し実践する。)
			④子どもたちが楽しくほっとしながら食べる時間として大事にされているか。		食事中、会話を楽しむなど和やかな雰囲気心がけている。
			⑤什器(食器)の安全性(子どもにとっての使いやすさ、割れやすさ、環境ホルモンなど)に配慮した物を用意しているか。		子どもが自分で食事しやすいサイズの食器や家具を使っている。
			⑥食育活動として調理活動を取り入れる、野菜作りをするなどを取り入れ、食への興味を引き出す活動をする。		自分たちの育てたもの・下ごしらえをする・調理をするなどすることによって食への興味が広がり、さまざまな食材や調理法に親しんだり、食を大事にする姿勢が養われる。
		4)就学への準備をしているか。	年長児では、就学のためのリズムを整えていくように、保護者とも連携しながら工夫しているか。		小学校での生活リズムに配慮し園での生活リズムを整える。 保護者がその生活リズムを作るように伝え、可能な部分から実行できるようにする。

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	チェック欄	項目
3 保 育 の 人 的 環 境	(1) 保 育 体 制	1) 担当制の確保と十分な引継ぎをしているか。	交代勤務制を採用している場合、次の担当への引継ぎが十分できるよう連携しているか。		引継ぎ事項について、一人一人の子どもの様子を記入できる記録用紙を整備することで、伝達事項の漏れを防ぐ。その時間を取るよう勤務内容を組み込む。短時間で出来るようにする。
		2) 専門職の専門性に関する自己評価マニュアルがあるか。	基本能力に関するもの(観察力、注意力、洞察力、判断力、柔軟性、共感性、創造性、知識、技術に関するもの、信頼関係の形成、適切性の判断)		これらの項目が取り入れられた自己評価マニュアル等がある。
		3) 担当者が問題をひとりで抱え込まない体制があるか。	同時に複数の担当者が関わる(バックアップシステム等)ことにより、ひとりの専門職にかかる負担を軽減するシステムがあるか。		複数で対応できることは、専門職の負担軽減になるので積極的にシステム化する。
		4) 専門性を高めるための体制や研修の機会があるか。	研修の機会があるか。		保育者としての専門性、保育の知識、技術、倫理観に裏付けられた判断を高めるために、OJT,OFF-JT,SDSの体制が園内で整備されている(所(園)内研修、所(園)外研自己研鑽の機会)
		5) 情報を適切に管理しているか。	記録報告の書式があり、適に保管し整理されているか。		会議報告・研修報告・相談事例・個人記録に必要な書式を統一し、取り扱い方が決まっている
		6) 苦情に対応しているか。	苦情、不平、不満に対する窓口があるか。		園内の体制がある 第三者委員が決まっており、保護者に知らしている
		7) 客観的評価の場があるか。	第三者評価等の導入があるか。		第三者評価を、客観的に園のサービスについて捉える機会として、受けることについて検討する。第三者評価についての資料や書籍が出版されている。それらを用いて、自己評価として用いてもよい。
	(2) 専 門 職 間 の 連 携	1) 全体的な話し合いの場を共有しているか。	園長、主任、スタッフが定期的に話し合う場があるか。		取り組み内容により、会議を構成する。クラス担任同士・クラス代表者会議・専門職会議・給食会議・所内(園内)研究会など。

IV. 関係機関との連携を強化する

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	確認欄	マニュアル内容
1	ネットワーク作り	1) 専門性に応じた機能分担をしているか	①他機関他業種の現状を尊重しているか		保健・医療・福祉を主に、教育・法律・司法等の支援内容、具体的な利用の仕方を把握している。受付時間・窓口・必要手続き等の情報を収集している。
					地域の関係機関の役割、連絡先、受付時間等を一覧にして、職員が目につくところに貼り、情報を共有している。
					緊急時(急病、事故、事件、火災、地震等)の協力可能な他機関、特に医療機関、消防所、警察に関する窓口、対応範囲の確認を行い、一覧にして貼りだし、利用ができる園内の体制がある。
					安全確保のため、警備会社、地域の警察署(交番)と連携関係にある。定期的な巡回、有事の際の支援の受け方の把握をしている。
					連携する専門職同士がお互いに尊敬をはらった言動を心がける。相手の立場を理解し、連携を行う。
					連携先の専門職に対して長時間保育の実態(子ども、保護者、職員)サービス内容(保育時間、宿泊保育、緊急保育、一時保育、病児、病後児保育等)、入所児童(年齢、人数、等)利用者(保護者)について説明を行っている。
			②専門性を生かした連携を心がけているか		定期的に話し合いの場を持つことで、各専門職の役割を詳しく知る。お互いの限界を知り、その上で役割分担を確認できている。
					緊急時に、警察、消防、警備会社との連絡方法、連携の内容が決まっており、職員が周知している。
					地域の支援者(ボランティア)の受け入れや、協力体制がある。園行事への参加、日常保育への参加交流の機会がある。
					専門職は、ボランティア、NPO、その他を含めたソーシャルサポートネットワークの中で、地域の人々と協働して支援の輪を広げられるように、ソーシャルワーカーとしての力をつける。特に長時間保育に関して地域に周知され、協力を得られるように努力する。
		2) 情報の共有を行っているか	連携に必要な情報を専門職が共有するための工夫を会議・書面・口頭でしているか。		誰が見てもわかりやすい記録の書き方、支援内容に応じた書式がある。専門用語の定義、語句の表現に対して共通理解がある。
					定期的に専門職が情報のやりとりが出来る機会、場がある。
					連携の際、長時間保育所でどのようなサービスを提供できるか、関係機関に情報を提供している。(会議の場、各種サークル活動、広報活動、ホームページ等の利用。)
					専門職が、会議・書面・口頭の機会を十分生かせる技術を持っている。
		3) 利用者の自己決定の促しがあるか	サービス利用者の意思を尊重し、連携に関する十分な説明がされているか		この人なら話そうという相互信頼と、親和の関係(ラポール)が成立している。
					事前説明により、利用者の合意を得ている。専門用語は極力避け、利用者に分かりやすい言葉で内容を説明する。
		4) 利用者の自己決定の促しがあるか	①サービス利用者の意思を尊重し、連携に関する十分な説明がされているか		随時話し合いの機会を持ち、利用者の意思の確認を行う。利用者の話をよく聞き、希望、価値観を知っておく。
					長時間保育利用者については、利用者の勤務時間帯を考慮し、話し合いの設定は利用者とともに、参加しやすい時間を設定する。
					利用者の地域性、利便性を考えた支援を心がける
			②最終的に利用者が自分でサービスを選択できる力をつけることへの配慮がされているか。		サービス利用の決定権は利用者にあることを支援者は自覚し、利用者が自分でサービスを選ぶことができるように、必要に応じて、意思決定に必要な情報を提供する。
					日頃から家族内で問題について話し合う事の大切さを伝え、キーパーソンを中心に円滑に意思決定が行われるように援助する。
					利用者が同じ悩みを持つ仲間との関係を作ることへの援助を行う。互いに励ましあい、情報を提供しながら問題を解決することの勇気づけを行い、指示する。
	(2) 支援の評価	5) 柔軟な連携を行っているか	こまめな連携を心がけ、形式上の会議に終わらないように心がけているか。		日頃から地域の話し合い、自治会活動に参加することで、地域の人びととのつながりをもつ。各機関のいつ、どこに行けば、誰がいて、どの様な支援が受けられるかを日頃から知っておく。
					連携の事例について、必要に応じて話し合い、各機関、専門職の役割を決め、支援の方向を確認しあう。
					定期的な会議の他に、日頃から電話、FAX、インターネットを利用した連絡の方法がある。
					他機関からの問い合わせ、連絡に対して担当者を決め、継続して担当する体制がある。担当者がいない場合のため、補助の担当者がいて、いつでも対応する事ができる。
		1) 子どもと家族の変化を把握しているか	サービス利用によって子どもと家族にどのような変化が見られたかを把握し、次の支援に結びつけることができているか。		利用者の健康状態(精神的、肉体的)満足度について把握し、記録に残す。
					直接援助を受ける子どもと保護者等利用者の変化が違う場合を見逃すことが無いように、常に子どもの視点に立った支援を心がける。
		2) 個性性への配慮を行っているか	子どもと家族の個々の状況に応じた支援であったかの評価を行っているか。		利用者の情報や支援の状況は随時記録され、責任者に確認されている。
					会議の際、①～③の状況の変化を関係機関に報告し、支援の見直しに生かしている。
		3) 個性性への配慮を行っているか	子どもと家族の個々の状況に応じた支援であったかの評価を行っているか。		どの子ども、どの家族も、ともにみな一様ではない。利用者の話をよく聞き、好み、希望、価値観、生活信条、文化的背景を理解し、認める。
					長時間保育利用の場合、保護者の勤務状況や生活事情は様々であり、子どもの生活状況も多様であることを認める。
		4) フィードバックを実施しているか	利用者の状況や結果を必要に応じて確認していくことで、状況に応じ、随時支援計画、支援方法の見直し、支援の改善が行われているか。		子どもや保護者の個別事情や要望を聞いた後、決められた書式に記録をしている。
					個別事情に変化があった場合は修正、加筆を行い、変化の経過がわかるようにしている。
					子どもと家族の個性性に関する情報は専門職間で共有化され支援に活用されている。
		4) フィードバックを実施しているか	利用者の状況や結果を必要に応じて確認していくことで、状況に応じ、随時支援計画、支援方法の見直し、支援の改善が行われているか。		利用者の状況を定期的、随時確認し、必要に応じて支援の見直しを行う。

大	小	チェック項目	チェック項目の説明	確認欄	マニュアル内容
2	権利擁護	1) 利用者の利益、権利に配慮した対応を行っているか	各機関の専門職が子どもと家族の利益、権利を守るための配慮を行っているか。		連携に関して、子どもと家族が持つ権利に対して分かりやすく説明を行う。
					子どもや家族の権利の危機例えば、虐待、家庭内暴力(DV)が疑われる場合、嘱託医、地域の児童相談所、福祉事務所、民生委員、児童委員、保健所、市町村保健センター等要保護児童対策連絡協議会(子どもを守るネットワーク)との連携を速やかに図る。
					虐待や暴力が疑われる場合でも、警察、司法関係機関や児童相談所と連携し、保育所としては、常に親子の立場に沿って援助する役割を担う。
					利用者がどのようなサービスを必要としているか、他機関の専門職や、地域、行政に対して利用者のニーズを代弁する役割を担っている。
		2) 専門職の人権に対する意識の向上を図っているか	子どもと家族の権利、権利擁護に対する勉強会の開催、人権意識について周知、徹底をはかっているか。		権利擁護に関する外部研修への参加をしている。 研修参加に対する勤務上の配慮がある。
					外部研修で学んだことや、得た情報をまとめ、園内研修等を通して、他の職員に伝える機会がある。まとめた資料、研修報告書が閲覧することができる。
					園内研修や日常保育を通して、利用者の権利を考え、常に利用者に対して敬意をはらった言動を心がけている。
					子どもの権利保障に対する視点がある。
		3) プライバシーへの配慮を徹底しているか	①守秘義務の徹底が図られている。		援助の段階で知れた利用者の情報について、他者に漏らしてはならない。
					情報を共有化しなければならない場合は、利用者に事前に説明し、同意を得ることが必要。
					連携の際には、支援の目的にあった、必要最小限の情報のみ共有する。
			②個人情報の保護のための情報管理が徹底されているか。		特に配慮が必要な事例の保護。
					決められた場所の保管、管理者を決める。保管場所は職員以外はわからないようにする。施錠をし、園外への持ち出しは禁止されている。
					会議等で必要な場合は個人情報を保護するためのルールがあり、厳守されている。

WEB を活用した園児総合支援システムの使い方

WEBを活用した園児総合支援システム

- 支援ツールを、より「活用しやすい」「視覚的にとらえやすい」「柔軟性、汎用性の高い」形で提供。
- 継続的な情報収集・分析 → さらに強固な根拠 → 継続的・着実な保育の質向上サイクル展開。



視覚的に確認
早期把握・支援
根拠に基づく保育
業務迅速化



携帯電話から子どもの情報にアクセス。
手書きで提出していた書類も携帯電話から！



分析



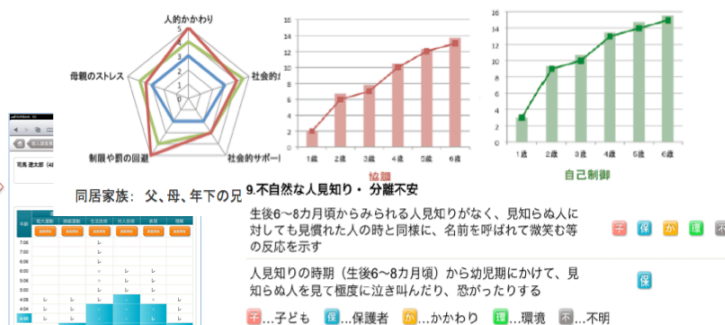
クラウド環境下
で実行！！



継続的な情報収集と分析
さらに強固な根拠
学童期に及び経年分析

特徴

- 大きめの画面をタップしながら入力し、結果を瞬時にグラフ化し視覚的に表示する。
- 全国平均との比較ができるだけでなく 個々の園児の発達状況もグラフで確認することができる。
- 特別な配慮が必要な子どもについて、アラート、かかわりのヒントを表示する。
- サーバーを使用し、匿名化して管理するのでセキュリティも万全。
- 業務の合間に簡単に入力を行える画面構成！



はじめに _____ 1

1 ログイン _____ 1

2 基本画面 _____ 2

3 個人画面 _____ 3

4 個人レポート _____ 5

5 園レポート _____ 8

6 入力の仕方 _____ 10

はじめに

このシステムは、お子さんの発達や育児環境の様子を、グラフを用いてわかりやすく示します。園や全国との状況と比較することもできます。視覚的、客観的に評価するのは、子どもが支援を必要としているかどうかを見極め、適切な支援を届けることが最大の目的です。「発達にかたよりがある」「遅れがある」というレッテルを貼るためではないということをご理解いただいた上で、ご活用ください。

1. ログインについて

- (1) <https://login.salesforce.com/> にアクセスして、ログインページに入ってください。



デスクトップにアイコンがある場合（作った場合）は、アイコンをクリックしてログインページに入ってください。

- (2) ユーザー名とパスワードを入力して、ログインしてください。

デモ用は

ID demo01@childnet.me

パスワード tsukuba



Copyright © 2000-2011 salesforce.com, Inc. All rights reserved.

2. 基本画面について

フィルタのクリックで、年度、クラス、年齢の条件にあった園児一覧を表示します。

2000年度
2001年度
2002年度
2003年度
2004年度
2005年度
2006年度
2007年度
2008年度
2009年度
2010年度
2011年度

ばら
さくら
つくし
すみれ
ひまわり
退園
未設定

年齢を選択
0歳児
1歳児
2歳児
3歳児
4歳児
5歳児
6歳児
7歳児
8歳児
9歳児
10歳児
11歳児
12歳児

設定

編集

ログアウト

なかよし園

レポート

新規

フィルタ

2011年度

クラスを選択

年齢を選択

児童の氏名で検索します

X

検索

発達評価

社会的スキル尺度

気になる子ども支援

養育環境評価

保育環境評価

氏名	クラス	年齢	気になる子ども支援	定期申請	レポート
すぎさわゆうか 杉澤悠圭	ひまわり	1歳 3ヶ月 (0歳児)	未入力		
あずまきょうたろう 東京太郎	ひまわり	1歳 6ヶ月 (1歳児)	確定		
ナヤタミ 納谷珠実	ひまわり	2歳 1ヶ月 (1歳児)	確定		
ナカノリマ 田中涼馬	ひまわり	2歳 2ヶ月 (1歳児)	確定		
こばやしあきお 小林昭雄	ひまわり	2歳 4ヶ月 (1歳児)	未入力		
ナリヤマ 桐山実佳	ひまわり	2歳 8ヶ月 (2歳児)	未入力		
ゴトリイ 後藤芽衣	ひまわり	2歳 8ヶ月 (2歳児)	未入力		

配慮を要する
には、アラート
表示される。

ツールの名称をクリックすると、名簿のよこに表示されるツールがかわります。

項目をクリックすると、一覧をソートします。

配慮を要する子
には、アラートが
表示される。

調査の状況を「確定」「未入力」「途中」で示されるので、調査済であるかどうかが一覧でわかります。

3. 個人画面について

個人調査票（詳細）
編集

随時レポート
定期レポート

園児情報

子どもの姓名	東 京太郎
ふりがな	あずま きょうたろう
性別	男
生年月日	2010年03月23日(平成22年03月23日)
入園年月日	2010年09月24日(平成22年09月24日)
世帯	課税
外国籍	
保育時間	8:00～20:00
変則時	5:00～0:00
同居家族	14人、父、母、祖母、兄2人、姉1人、弟1人、妹1人、その他5人
家族の職業	父親:自由業 母親:サービス業
家族の教育歴	父親:大学院以上卒 母親:中卒
備考	とっても大家族です。

この情報を編集する

園児の基本的な情報を表示します。

この情報を編集する

ボタンをクリックすると編集画面に飛びます。

家族の情報

世帯

課税

外国籍

☐ 父 ☐ 母 ☐ 子
※ 国籍が日本以外の方にチェックを入れてください

保育時間

8:00 ～ 20:00

変則時

5:00 ～ 0:00

同居家族

家族 14 名

☒ 父 ☒ 母 ☐ 祖父 ☒ 祖母

兄 2 名 / 姉 1 名
弟 1 名 / 妹 1 名
その他 5 名

家族の職業

父 自由業 母 サービス業

家族の教育歴

父 大学院以上卒 母 中卒

備考









とっても大家族です。

この内容で登録

削除

備考欄には、自由にテキスト入力
ができ、記入した内容は個人画面
に表示されます。

家族や子どものことで「気になっ
たこと」を記載するなど、自由に
活用することができます。

ツール	ステータス	アラート	定期申請
発達評価	確定 2011/10/03 14:14:30	 お知らせがあります。レポートをご確認ください。	
育児環境評価	確定 2011/10/02 04:35:54	 お知らせがあります。レポートをご確認ください。	
保育環境評価	確定 2011/10/02 07:36:11		
気になる子ども支援	確定 2011/10/04 22:10:31	 お知らせがあります。レポートをご確認ください。	
社会的スキル尺度	確定 2011/10/02 04:44:05		

ツールの入力状況を表示します。

配慮を要する項目には、アラートが表示されます。

クラス編集				クラス情報を登録する	
年度を選択		クラスを選択			
2002年度	0歳児	未設定		変更	削除
2003年度	1歳児	未設定		変更	削除
2004年度	2歳児	未設定		変更	削除
2005年度	3歳児	未設定		変更	削除
2006年度	4歳児	未設定		変更	削除
2007年度	5歳児	未設定		変更	削除
2008年度	6歳児	未設定		変更	削除

入園から卒園まで、データがあるかどうかを一覧で表示します。

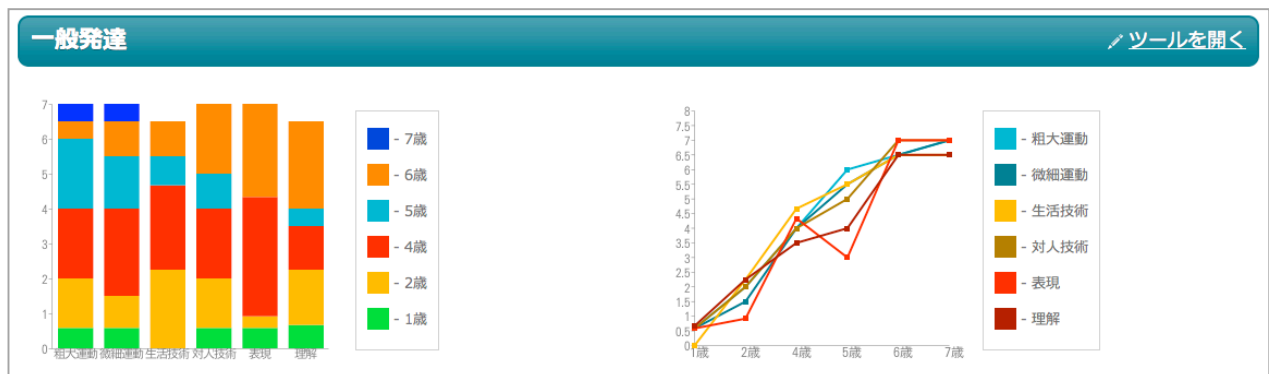
4. 個人レポートについて

「基本画面」の「レポートアイコン」または、「個人画面」の「レポートアイコン」をクリックしてください。

氏名	クラス	年齢	発達評価	申請	レポート
ありおかしおり 有岡葵	未設定	(0歳児)	確定	!	📊
なんばまゆみ 難波麻由美	未設定	(0歳児)	確定	!	📊

随時レポート 📊 定期レポート 📊

入力された内容は、すべて経年で表示されます。



配慮が必要な子には、アラートを表示します。

アラートは、まず、一行メッセージを表示し、「続きを読む」ボタンで詳細を表示します。



対人技術の発達がゆっくりめです。

[続きを読む](#)



対人技術の発達がゆっくりめです。

この背景には、子どもの要因にとどまらず、経験不足や保護者のかかわりなど、さまざまな要因が考えられます。日々の保育の中で、ひとりひとりの子どもの背景を踏まえていない保育により、その子なりの発達に配慮していくことが求められます。3~4か月後に再度チェックを行い、発達の伸びを確認してみましょう。

[続きを読む](#)

子育て環境は、「保護者評価」と「保育専門職評価」の2つを表示し、全国平均、園平均、個人の得点を比較します。



配慮が必要な場合は、かかわりのヒントとアラートメッセージを表示します。



本を読み聞かせる機会が乏しいようです。

子どもの健やかな発達のためには、日常生活の中に、保護者や保護者以外の人と子どもとの多様性とんだかかわりがあることが求められます。絵本は安いものではなく、買うことが困難な場合もあります。園の取り組みとして、絵本の貸し出しや、発達や興味に応じた絵本の紹介をし、家庭の中で本を読むなど、親子でおだやかな楽しい時間を持てるよう配慮していきましょう。保育（カリキュラム・デイリープログラム・日課）の中で本をどのように位置づけているのかを確認することも大切です。

[続きを読む](#)

歌を歌う機会が乏しいようです。

[続きを読む](#)

配偶者の育児協力が乏しいようです。

[続きを読む](#)

子育てに携わる母親（母親的な役割）、父親（父親的な役割）の間で、育児に関する会話をしっかりしていることが求められます。

[続きを読む](#)

育児について自信をなくしてしまっています。

[続きを読む](#)

子育てストレスは、子ども虐待の誘因になるともいわれています。

[続きを読む](#)

個人の状況と園の平均を比較できます。



気になる子どもレポートでは、「気になる」にチェックが入った項目を一覧で表示します。
その背景要因として、何が考えられるのか、アイコンで示します。

気になる子ども ツールを開く

2011/10/04

13.こだわり

積み木やシールなど、隙間なくまっすぐに並べないと気がすまない	子	保	か
つねに○番になりたい(順位に対するこだわり)	子	保	
日課や習慣等の変更に対して過度の抵抗を示す	子	保	か
通園路などで、決まった道順を必ず通りたいがる	子		
○番目という場所にこだわる	子		
ロッカーの中、机の下など、特定の場所で落ち着く	子	保	
物の置き場所にこだわる	子		
特定の習慣や儀式にかたくなにこだわる	子	保	か

子…子ども 保…保護者 か…かかわり 環…環境 不…不明

⚠ 背景要因が「子ども」の場合：子どもの状態に注目してみてください。低体重出生、身体的な障害、知的障害、病気、ストレス、気質・性格的なもの、経験不足、適応力が低い、保育になじめないなどの要因がありませんか？

背景要因が「保護者」の場合：保護者の状態に注目してみてください。精神疾患、身体疾患、知的障

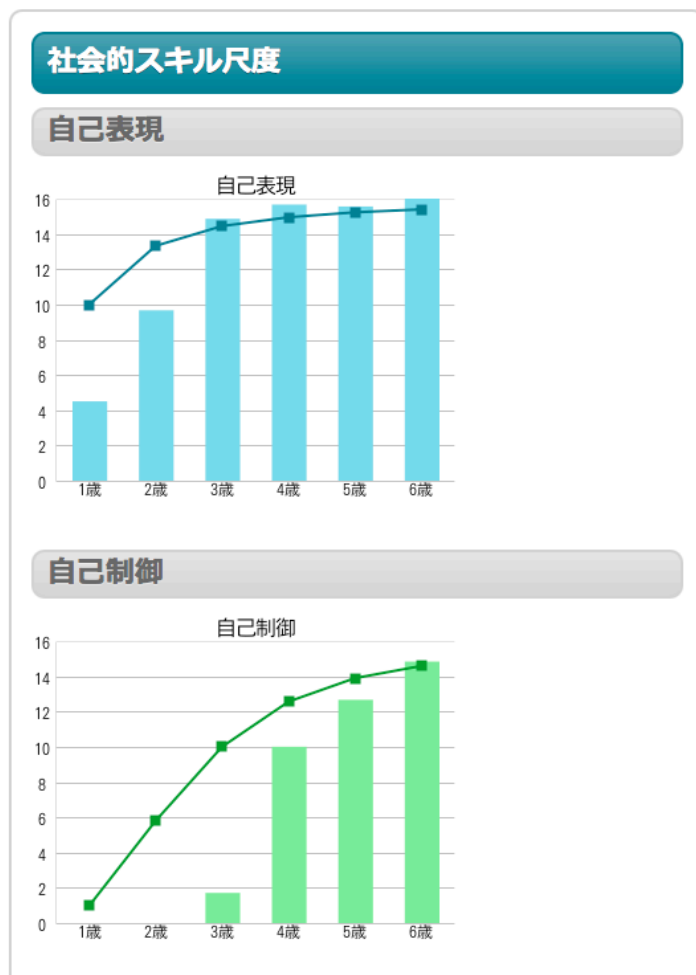
5. 園レポートについて

登録されている園児の人数を、年齢ごとに表示します。

園情報	
園番号	O-0000000001
年度	2008年度
登録園児数	0名（男児 0名／女児 0名） 0歳 0名／1歳 0名／2歳 0名／3歳 0名／4歳 0名／5歳 0名／6歳 0名

全国平均（折れ線）と園平均（棒）を比較できます。

表示させるレポートの
年度を変更できます。



気になる子ども一覧



をクリックすると、園の中の気になる子ども一覧を表示します。

さくら

有岡 栞 (2歳 1ヶ月)

33.年齢相応の生活習慣の遅れ

食事時間が決まっていない

子

保

極端な偏食、少食、過食

子

保

難波麻由美 (2歳 10ヶ月)

5.生活リズムの混乱がある

3.睡眠時間にばらつきがある

子

か

4.就寝時間にばらつきがある

子

か

5.起床時間にばらつきがある

子

か

15.不自然な食

過食である

子

か

子…子ども

保…保護者

か…かかわり

環…環境

不…不明

気になる子どもの個人名をクリックすると、その子の個人画面に飛びます。

一般発達

ツールを開く

社会的スキル尺度

ツールを開く

自己表現

保育環境は、実施、ほぼ実施 = 1 点、173 点満点で総合得点を算出します。

保育環境

ツールを開く

合計得点

173/173

9

6. 入力の仕方

1. システムにログインする

- (1) <https://login.salesforce.com/> にアクセスする。
- (2) 右のような入力フォームに ID とパスワードを入力。
- (3) 最初の1回だけ「確認コード」の入力を求められる。
- (4) メールで確認コード（5桁の数字）が届く。
- (5) 確認コードを入力して、基本画面に入る。



ユーザ名
demo01@childnet.me |

パスワード

☒ ユーザ名を保存

[ログイン](#) [パスワードをお忘れですか?](#)

アカウントをお持ちでない方 [無料サインアップ](#)。

2. 新しい年度を作成する。

--- 過去のデータがある園 ---

- (1) 右のような基本画面が表示される。
- (2) フィルタの「クラスを選択」プルダウンから「クラス変更…」を選ぶ。
- (3) 年度とクラスを選び、OK をクリックする。
※あらかじめクラスを選択し、「クラス変更」へ進むと、そのクラスの園児のみが表示され「全選択」で一括更新が可能となる。




園児総合支援システム

ななよし園

フィルタ 2011年度 クラスを選択 年齢を選択

氏名	クラス	年齢	気になる子ども支援	定期申請	レポート
すぎのりゆうか	ひまわり	1歳 3ヶ月 (0歳児)	未入力		
杉澤悠生	ひまわり	1歳 6ヶ月 (1歳児)	決定		
あすきまよひなつ	ひまわり	1歳 6ヶ月 (1歳児)	決定		
東京太郎	ひまわり	1歳 6ヶ月 (1歳児)	決定		
新谷珠実	IMPORT	2歳 1ヶ月 (1歳児)	決定		
田中悠馬	IMPORT	2歳 2ヶ月 (1歳児)	決定		
小林昭雄	ひまわり	2歳 4ヶ月 (1歳児)	未入力		
小森昭雄	ひまわり	2歳 4ヶ月 (1歳児)	未入力		
杉山実佳	IMPORT	2歳 8ヶ月 (2歳児)	未入力		
後藤芽衣	IMPORT	2歳 8ヶ月 (2歳児)	未入力		

--- 過去のデータがない園 ---

- (1) 画面右上の「編集」ボタンをおし、園名など、必要な情報を入力する。
- (2) 入力がすんだら、 ホームボタンをおして、最初の画面に戻る。
- (3) 右上の「新規」ボタンを押して、園児情報を入力する。

4. 担当保育士を追加する。

- (1) 画面右上の「編集」をクリックする。
- (2) 「担当保育者を追加する」をクリックし、保育士の名前を入力し、「この内容で担当保育者を登録する」をクリックする。

3. データを入力する（調査を実施する）。

（1）園児名をクリックし、個人画面に入る。

（2）ツールメニューより入力したいツールを選び調査開始。

ツール	ステータス	アラート	定期申請
発達評価	未入力		
育児環境評価	未入力		
保育環境評価	未入力		
気になる子ども支援	未入力		
社会的スキル尺度	未入力		

（3）発達チェック

- 6領域のどこからでも調査を始められる。過去データがある場合は、前回調査の続きから、新規の場合は、園児の暦年齢の時点から始まる。
- 月齢を上に向かって進み、できないことが3つ続くまで設問が表示される。
- 月齢を下に向かって進み、できることが3つ続くまで設問が表示される。
- 定期調査か随時調査かを選んで登録する。

（4）社会的スキルチェック

- 30 項目の質問が表示される。
- いつも、時々、ないを選んで 30 項目のチェックを行う。
- 過去の登録を編集して上書き保存、または、別の調査としての登録ができる。
- 定期調査か随時調査かを選んで登録する。

(5) 気になる子どもチェック

- 33 項目から気になる行動があればクリックする。
- 詳細が現れるので、気になる行動があれば、「ない」というボタンをクリックし、「ある」に反転させる。
- 気になる行動の背景要因がわかれば、チェックする。
- 定期調査か随時調査かを選んで登録する。

(6) 保育環境チェック

- 実施なし、ほぼ実施、今後実施予定をクリックし、チェックしていく。

(7) 育児環境チェック（保護者入力）

- 基本画面右上の「編集」をクリックし、「育児環境ツール 保護者用入力ページ」というところで、パスワード（6 文字以上 20 文字以内）を設定する。

- 上記の QR コード（または URL）と設定したパスワードを保護者に連絡する。
- QR コードか URL にアクセスに、入力してもらう。
- 保護者が入力すると、育児環境評価の部分に、「途中」と表示される。

育児環境評価

途中

2011/11/03 21:47:04

- 「途中」というボタンをクリックし、内容を確認して登録する。
- 保護者が園児に関する情報を間違えて入力した場合は、基本画面上に下記の情報が表示される。

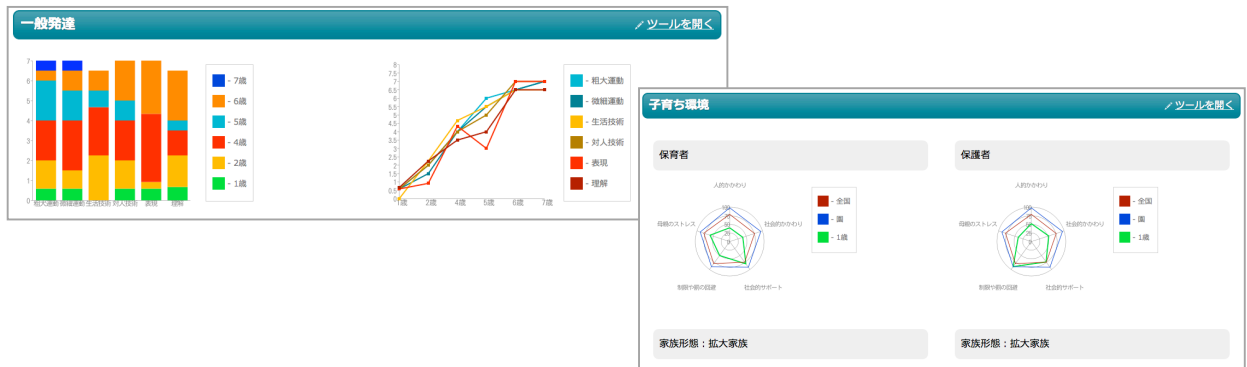
氏名	クラス	年齢	処理
筑波花子	さくら	2歳 0ヶ月 (1歳児)	特定する

- 特定するクリックし、園児の特定を行い、定期調査をクリックし登録する。

(8) 育児環境チェック（保育士入力）

- 育児環境評価票の「確定」（保護者が入力していない場合は「未入力」）をクリックする。
- 担当保育者を選択し、「実施日を選択」をクリックする。
- チェックを行い、登録する。

(9) レポートを確認する。



研究についての説明書

- 子育て専門職の皆さま -

少子高齢化を迎え、孤立した子育てについて、十分な支援策を講じることが課題となっています。発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加は社会問題となっており、子育て支援にかかわる専門職への社会の期待は高まるばかりです。保護者と子どもを日常的に支えつつ虐待予防や障害児支援を展開することは国の重要施策の一つであり、新保育所指針では、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」「評価」「自己点検」の重要性を強調しています。子どもの心の危機が叫ばれる中、幼児期の早い時期に児童虐待、発達障害など「気になる子ども」を発見し、早期に適切な支援を展開していくためには、子どもや保護者、環境に関する情報を経年的に集積し、分析し、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにしていくことが求められます。

本研究は、子どもの発達と行動、及び、子どもを取り巻く環境に関する情報を経年的に集積し、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにすることを目的としています。本研究の成果は、幼児期の早い時期に発達障害や児童虐待など「気になる子ども」を発見し、適切な支援を展開していくことにつながるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

本研究のデータを収集には「WEB を活用した園児総合支援システム」を使用します。子どもの発達と行動、及び、保育環境に関する質問（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト，保育環境評価票）は、子育て専門職の皆さんに、日頃の園児の様子や保育環境を観察しながら回答いただきます。育児環境に関する項目（育児環境評価票）は保護者の皆さんに回答いただきます。本システムのセキュリティ、特徴、使い方は、別紙資料にそってご説明いたします。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われます。本システムに入力いただいたデータは、セールスフォースという安全性の保証されたサーバーの中に保管されます。保管されたデータは、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにするための分析に使わせていただきますが、研究者は、完全に匿名化されたデータのみを扱い、個人情報部分はいっさい閲覧することはできません。調査にご協力いただくかどうかは、本人の自由意思によるものであり、協力に同意しない場合でも不利益を受けることはありません。本システムにデータを入力し、「確定ボタン」を押していただいた時点で協力に同意をいただいたと見なしますが、この同意は随時撤回することができます。

研究の結果は、論文や学会発表という形で公表しますが、調査に協力いただく方のご所属やお名前等の個人の情報が外部に出ることはありません。研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に下記の連絡先にお尋ねください。

説明者	筑波大学医学医療系 教授 安梅 勅江
連絡先	電 話 029-853-3436
	メール anmet@md.tsukuba.ac.jp

研究についての説明書

- 保護者の皆さま -

少子高齢化を迎え、孤立した子育てについて、十分な支援策を講じることが課題となっています。子育て支援にかかわる専門職への社会の期待は高まり、保育の質向上が求められています。子どもや保護者の心の危機が叫ばれる中、乳幼児早期からより良い子育て支援を行っていくためには、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにし、適切な支援を検討していくことが求められます。

本研究は、子どもの発達と行動、及び、子どもを取り巻く環境に関する情報を経年的に集積し、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにすることを目的としています。本研究の成果は、幼児期の早い時期に、適切な支援を展開していくことにつながるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

本研究のデータを収集には「WEB を活用した園児総合支援システム」を使用します。保護者の皆さんには、育児環境項目（育児環境評価表）にご回答いただきます。システムの使い方は別紙資料にそってご説明いたします。

お子さんの発達や保育所などでの行動に関する項目（一般発達評価票，社会的スキル尺度，気になる子どもチェックリスト）は、保育士等の子育て専門職に、日頃の園児の様子や保育環境を観察しながら回答いただきます。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われます。本システムに入力いただいたデータは、セールスフォースという安全性の保証されたサーバーの中に保管されます。保管されたデータは、子どもの発達の軌跡と関連要因を明らかにするための分析に使わせていただきますが、研究者は、完全に匿名化されたデータのみを扱い、個人情報部分はいっさい閲覧することはできません。調査にご協力いただくかどうかは、本人の自由意思によるものであり、協力に同意しない場合でも不利益を受けることはありません。本システムにデータを入力し、「送信するボタン」を押していただいた時点で協力に同意をいただいたと見なしますが、この同意は随時撤回することができます。

研究の結果は、論文や学会発表という形で公表しますが、調査に協力いただく方のご所属やお名前等の個人の情報が外部に出ることはありません。研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に下記の連絡先にお尋ねください。

説明者	筑波大学医学医療系 教授 安梅 勅江
連絡先	電 話 029-853-3436
	メール anmet@md.tsukuba.ac.jp

WEB 園児総合支援システムのセキュリティについて

1. ユーザーID の発行について

- 1) ユーザーID は、各園ごとに 1 つ、WEB 園児総合支援システム管理者（筑波大学）から発行されます。
- 2) 基本的には、「WEB 園児総合支援システム申込書」に記載いただいた「連絡用メールアドレス」がユーザーID となります。
- 3) 申し出により、連絡用メールアドレスとは別のものに変更することが可能です。

2. パスワードの発行について

- 1) 申込書の受理後、WEB 園児総合支援システム管理者が、ユーザーID と連絡用メールアドレスを登録すると、連絡用メールアドレスにセールスフォース（Salesforce）から初期設定メールが送信されます。
- 2) 初期設定メールに記載されている手順に従って、パスワードを設定し、ログインしてください。
（※ここで設定されるパスワードをシステム管理者が知ることはできません。各ユーザー（各園様）のみ、園児等の個人情報を管理できます。）
- 3) 初期設定メールは、メール送信より 72 時間有効です。72 時間以上経過した場合、ユーザーID の登録から再設定を行います。
- 4) パスワードを紛失した場合は、システム管理者への届け出により、パスワードリセット操作が行われ、セールスフォース（Salesforce）より、連絡用メールアドレスに、新パスワード設定メールが送信されます。初期設定時と同様の操作で、新パスワードを設定してください。
（※この操作の際にも、システム管理者は、各ユーザー（各園様）のパスワードを知ることはできません。）
- 5) パスワードは、6 ヶ月に 1 回変更されます。パスワード変更申請メールが、セールスフォース（Salesforce）より、連絡用メールアドレスに送信されますので、メールに従ってパスワードを変更してください。

3. 使用する端末（パソコン、タブレット型パソコンなど）の認証について

- 1) 初回ログイン時には、端末の認証のための確認コードの入力が求められます。
- 2) 画面上に表示される「確認コードの送信」ボタンをクリックすると、セールスフォース（Salesforce）より確認コードが発行され、登録した「連絡用メールアドレス」に確認コードが送信されます。
- 3) 連絡用メールアドレスが受信した確認コードを入力し、ログインしてください。
- 4) 発行された確認コードは、24 時間有効です。24 時間以上経過した場合、「ログイン」「確認コードの送信」から再操作してください。

4. 入力された個人情報の保存先

- 1) システムは、Salesforce.com 社のプラットフォームに開設されたアプリケーションです。
- 2) 入力された個人情報は、Salesforce.com 社のネットワークストレージに保存されます。
- 3) Salesforce.com 社は、政府の情報も管理する安全性、信頼性の高いクラウドです。

5. 本システムに集積されたデータの取り扱い

- 1) システム管理者は、完全に匿名化されたデータのみを扱います。システムの管理者とは、本研究の実施責任者である安梅勅江と、学生分担者である渡辺多恵子です。筑波大学との関係は、安梅は、筑波大学医学医療系教授、渡辺は WEB 園児総合支援システムのための非常勤研究員です。
- 2) システム管理者は、本システム活用を希望した園に対して、本システムへのユーザー登録、ユーザー（本システム活用を希望した協力園）がパスワードを紛失した際のパスワードリセット操作を行うことができます。システム管理者は、セールスフォース上の個人情報の閲覧や操作は一切できません。
- 3) データの分析は、筑波大学医学地区「健康医科学イノベーション棟」内の研究室で行われます。
- 4) 健康医科学イノベーション棟は、玄関及び各フロアのドアにセキュリティロックがかけられており、IC チップを持っている者のみが解錠できます。
- 5) さらに、研究室ドアに鍵がかけられており、研究メンバーのみ入室可能です。
- 6) 分析に使用するコンピュータは、イノベーション棟内の研究室に保管され、すべての端末は、パスワードまたは Facial Recognition System で管理されています。
- 7) 大学内のネットワークは、筑波大学学術情報メディアセンター及び、筑波大学医学情報基盤室が管理しています。
- 8) 筑波大学学術情報メディアセンター概要は下記 URL をご参照ください。
<http://www.cc.tsukuba.ac.jp/>
- 9) 医学情報基盤室概要は、外部に公開されておりません。(学内 LAN からのみアクセス可能です。)

6. その他

ご不明な点は、下記「お問い合わせ先」までご連絡ください。

【お問い合わせ先】

責任者 筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勅江

実施者 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 博士後期課程 3 年 渡辺多恵子

住所 〒305-8575 つくば市天王台 1-1-1 健康医科学イノベーション棟 2F 205

電話 029-853-3436

E-mail anmet@md.tsukuba.ac.jp

WEB園児支援システム申込書

平成 年 月 日

本システムに入力いただいたデータは，セールスフォースという安全性の保証されたサーバーの中に保管されます。保管されたデータは，園や個人が特定されない形で，統計的な処理に使わせていただきます。同意して本システムの使用を申し込みます。

施設等の名称 (保育所・幼稚園名)	ふりがな		
施設住所	ふりがな 〒		
代表者名	ふりがな		
担当者名	ふりがな		
連絡用メールアドレス (携帯アドレス以外)			
連絡用電話番号			
保育時間 (開園時間)		定員	名
<p>● WEB園児支援システムを知ったきっかけを教えてください。</p> <p><input type="checkbox"/> 紹介された (誰に紹介されましたか?)</p> <p><input type="checkbox"/> ホームページをみた</p> <p><input type="checkbox"/> 研修会</p> <p><input type="checkbox"/> その他 (</p> <p style="text-align: right;"><input type="checkbox"/> 同意して申し込む <input type="checkbox"/> 同意しない</p>			

研究についての説明書

近年、情報通信技術を利用して、健康情報を保管し活用する動きが進んでいます。これは、「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てるため」です。しかし、目的達成に向かっているかどうか、その評価が十分であるとは言いがたい状況です。そこで、まず、12年間のコホート研究による科学的根拠に基づいて開発された子どもの発達支援ツールをWEB上で活用するシステムを開発しました。

本研究では、保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成をめざし、開発したシステムを題材に、「フォーカス・グループ・インタビュー調査」を行ないます。

保育専門職ヘルスリテラシーとは、「日常的に乳幼児と保護者に関わりをもつ保育士、幼稚園教諭が、質の高い保育のために園児の健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」のことです。また、フォーカス・グループ・インタビュー調査とは、集団に生まれる様々な力の作用を応用して、質的に情報把握を行う科学的な方法の一つです。7名程度の小グループを設定し、3つの問いに焦点を当て、グループで話し合ってください。

本研究の成果は、乳幼児に関するたくさんの健康情報を、包括的に管理し、よりよいケアにつなげていくための一助となるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

本研究は筑波大学医学医療系研究倫理委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われています。名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるよう配慮いたします。研究の結果は、論文や学会発表という形で公表しますが、調査に協力いただく方のご所属やお名前等の個人の情報が外部に出ることはありません。また、ご所属やお名前が特定されない形で協力施設にご報告いたします。

調査への参加は本人の自由意思によるものであり、調査協力に同意しない場合でも不利益を受けることはありません。また、この同意書を提出した後も、不利益を得ず調査への参加を随時撤回することができます。

説明者 筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勅江

筑波大学大学院 人間総合科学研究科博士後期課程2年 渡邊多恵子

連絡先 電話 029-853-3436 メール anmet@md.tsukuba.ac.jp

この研究は筑波大学医の倫理委員会看護系小委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われます。この同意書の提出に関わらず、いつでも研究に協力することを不利益を受けず撤回することが出来ます。研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に研究実施者にお尋ねください。あるいは医学医療系倫理委員会までご相談ください。

電話 029-853-3022 (医学系支援室 研究支援担当)

メール igakusien@md.tsukuba.ac.jp

研究へのご協力どうもありがとうございました。

同 意 書

医学医療系長 殿

私は、「保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成
・ フォーカス・グループ・インタビュー調査より・」の研究について、目的、
方法、結果の取り扱い、研究の意義などについて十分な説明を受けました。ま
た、本研究への協力に同意しなくても何ら不利益を受けないことも確認した上
で、研究への協力に同意します。

ただし、この同意は、あくまでも私自身の自由意志によるものであり、不利
益を受けず随時撤回できるものであることを確認します。

平成 年 月 日

氏 名

生年月日 年 月 日 (歳)

(自筆署名または記名押印)

「保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成
・ フォーカス・グループ・インタビュー調査より・」の研究について、書面及び
口頭により平成 年 月 日に説明を行い、上記のとおり同意を得まし
た。

説明者

実施主体者 筑波大学 医学医療系

教授 安梅 勅江 印

分担実施者 筑波大学大学院 人間総合科学研究科

博士後期課程 2 年 渡邊 多恵子 印

同意撤回書

医学医療系長 殿

私は、「保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成・フォーカス・グループ・インタビュー調査より-」の研究について、目的、方法、結果の取り扱い、研究の意義などについて十分な説明を受け、研究への協力を同意し、同意書に署名しましたが、その同意を撤回します。

平成 年 月 日

氏名

(自筆署名)

「保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成・フォーカス・グループ・インタビュー調査より-」の研究について、研究への協力の同意撤回を確認いたしました。

確認者

実施主体者 筑波大学 医学医療系

教授 安梅 勅江 印

分担実施者 筑波大学大学院 人間総合科学研究科

博士後期課程 2 年 渡邊 多恵子 印

平成 23 年 月 日

様

筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勅江
人間総合科学研究科 博士後期課程 渡辺 多恵子

「クラウドを活用した園児総合支援システムの開発と活用に関する研究」 フォーカス・グループ・インタビュー調査へのご協力について（お願い）

〇〇の候 皆様におかれましてはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本学人間総合科学研究科博士後期課程の学生が、クラウドを活用した園児総合支援システムの開発と活用に関する研究を実施することとなりました。つきましては、下記の通り本研究にご協力いただきたくお願い申し上げます。

記

1. 調査の目的

本研究は、保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成を目指した「フォーカス・グループ・インタビュー調査」です。本研究の成果は、乳幼児に関するたくさんの健康情報を、包括的に管理し、よりよいケアにつなげていくための一助となるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

2. 調査の対象者及び調査期間

健康情報を日常的に扱っている専門職
平成 年 月 日

3. 調査方法

- (1) 研究実施者が、ご協力いただける方に対し、書面と口頭で調査の説明をいたします。
- (2) 本調査に対するご理解がいただけましたら、別紙同意書にサインをいただきます。
- (3) フォーカス・グループ・インタビュー調査を実施します。

4. その他

本調査の結果は、ご所属や個人が特定されない形で、ご協力いただいた施設に報告いたします。ご質問やご意見は、研究実施者までお願いします。

【お問い合わせ先】

実施責任者 筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勅江

実施者 筑波大学大学院人間総合科学研究科 博士後期課程 2 年 渡辺 多恵子

住所 〒305-8575 つくば市天王台 1-1-1

筑波大学大学院人間総合科学研究科

電話 090-3342-4978 メール s1030538@u.tsukuba.ac.jp

保育専門職ヘルスリテラシー尺度の構成と項目の選定に関する フォーカス・グループ・インタビューガイド

I. フォーカス・グループ・インタビュー概要＞

1. フォーカス・グループ・インタビューのテーマ

保育専門職ヘルスリテラシー尺度の構成と項目の選定

・ フォーカス・グループ・インタビュー調査より・

2. 目的

保育専門職ヘルスリテラシー向上への寄与の可能性をもつ「クラウドを活用した園児総合支援システム」を題材に、フォーカス・グループ・インタビュー調査を行い、保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成を行う。

3. 目的設定の理由

近年、情報通信技術を利用して健康情報を保管し活用する動きが進んでいる。健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用する目的のひとつに、「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てる」ことがあげられる。これを評価するには、「他者の健康情報を扱う専門職が、他者のために健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」、すなわち、「専門職ヘルスリテラシー」の評価が求められる。しかし、現状ではその評価が十分であるとは言いがたく、「健康情報活用スキル」を測定するツールの開発も喫緊と課題となっている。

一方、12年にわたるコホート研究により、子どもの健やかな成長に影響する要因と支援のあり方を科学的に分析してきた。そして、5つのスケール（一般発達評価票、社会的スキル尺度、気になる子どもチェックリスト、育児環境評価票、保育環境評価票（資料1-5））を開発するとともに、その根拠を実践で生かす方法について整理した（安梅, 2007a：安梅, 2008）。これらは、保育実践の場などで活用され、質の高いケアの実践に役立つこと（安梅, 2007a：安梅, 2008）、また、発達障害の早期把握と支援（篠原・他, 2009）、虐待予防（渡辺・他, 2010）などに役立つ事が実証されている。しかし、現状の課題を解決するために

は、5つのスケールと実践で生かす方法を「日常の保育に活用しやすい形」「保育の成果を視覚的に捉えやすい形」「柔軟で汎用性の高い形」で提供する必要がある。また、園児情報、育児環境情報、保育情報を継続的に収集し分析することにより、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクル展開が求められる。

そこで、まず、これら5つのスケールと実践で生かす方法をクラウド・コンピューティング環境下で実行する「クラウドを活用した園児総合支援システム（以下、本システム）」の開発し、本システムの開発のために開催した全10回の詳細な会議記録を対象とした記録物分析法を用いた質的研究により、本システムが、保育専門職ヘルスリテラシー向上への寄与の可能性をもつことを確認した。しかし、今後、本システムを実践の場に導入した上での評価が求められる。また、本システムの保育実践への導入効果検証に先立ち、効果測定のためのツール「保育専門職ヘルスリテラシー尺度」の開発が急務である。

保育専門職ヘルスリテラシー尺度を構成する質問項目の作成をめざし、保育専門職ヘルスリテラシー向上への寄与の可能性をもつ本システムを題材に、フォーカス・グループ・インタビュー調査を行う。尺度項目が選定されたのちには、量的研究により、尺度の信頼性・妥当性の検証を行なう予定である。

4. 対象者とリクルートの方法

対象として、本システムを使用し内容を十分に理解している、かつ、園児情報を日常的に扱っている「保育士グループ」「保健師グループ」、園児情報をより活用しやすい形で提供するWEBアプリケーション開発を行っている「開発者グループ」の3種類を設定した。

「保育士グループ」のリクルートは、保育業界に精通している「保育パワーアップ研究会の代表者」に依頼した。「保健師グループ」のリクルートは、保健師業界に精通している「保健師」に依頼した。「開発者グループ」のリクルートは、園児情報を扱っている「IT企業の代表者」に依頼した。

各グループともリクルートする人数は、グループダイナミックスがもっとも起こりやすい7名前後を設定した（安梅，2001：安梅，2003）。

5. 調査日／調査時間

筑波大学医の倫理委員会看護系小委員会の承認後。

各グループとも1時間30分間程度。

6. インタビュー場所

保育所，保健センター，IT 企業内の会議室（静かな個室），及び，健康医科学イノベーション棟 205「国際発達ケア研究室」．

7. 調査項目（インタビューの焦点）

- （1）内容について
- （2）使いやすさについて
- （3）活用について

園児情報を取り扱う専門家として，個人的に，あるいはなんとなくなど，何でも言いたい放題で構いません．自由にじゃんじゃんお話し下さい．

8. 必要物品

ビデオ（三台），IC レコーダー（三台），立て札（8），席順，環境調整

Ⅱ. グループインタビュー時の留意点

1. メンバーが話しやすくなる環境をつくる

- 受動的態度→フムフム，じっくり，メンバーの話を阻害しない.
- インタビュアーの主観を出さない・・平等なボーカークフェイスで！

2. メンバーが話したくなる環境をつくる

- 話への動機づけ・意義の明確化.
- メンバー間の一体感・積極的参加の促し，メンバー全体の発言を盛り上げる.

3. メンバー間のグループダイナミクスを促進する

- 話の KeyWord から関連のある話につなげる.

例) お仕事の面から捉えたすばらしい活用があがりましたが，プライベートな側面から感じることはありませんか？

4. グループインタビューのテーマに沿って進行するよう道案内する

- インタビュアーはテーマの分野に精通していることが望ましいが，
→各メンバー同士で盛り上がるよう，インタビュアー自らの発言を最低限にする.
→メンバーに威圧感を与えない，平等，リーダーではなく道案内役である.

5. 参加メンバーのすべての意向が反映されるよう必要に応じて発言の流れを調整

- 発言なし，内気なメンバーに話をふる.
- アイコンタクトで，発言を促す.
→自己主張の強いメンバーから他者へ，多数の意見で活発に議論.
→強い意見に全体が流されないように.

6. メンバーの意見をより深める

- 話がよくわからなくなった場合，話の流れの本質を明らかにする.
→出てきた意見の重要ポイントを引き出し，そのポイントについて議論を深める.

7. グループ内の意見に対する同意または反対をチェックする

- 言語的、非言語的な反応から、どのような意向をもっているかを明らかにする。
→うなずき、けげん顔、しらけ顔、目がキラキラ、あくび顔など。

8. メンバーの非言語的な動きを察知し、積極的に発言するよう道案内する

- 発言者と聞き手の非言語的な動きを察知して、必要があれば話題を振る。
→基本的にはやり取りを見守る。おさまらなければ、他者に話題を振る。

9. テーマに関するメンバーの意見を要約する

- テーマに関する話題が煮詰まってきた頃、次のテーマにつなげられるよう要約する。
→テーマに関する全体の成果を整理する →簡素に要点を短く！！！！

10. メンバーのテーマへの貢献の意義を明らかにし、満足感が得られるようにする

- 参加したことが良い印象としてメンバーに残るよう配慮する。
→話して役に立った！！また話しても良い！！勉強にもなった！！

Ⅲ. グループインタビューの流れ（シナリオ）

Time Progress	Details	Note
0:00	<p>みなさん、こんにちは。</p> <p>本日はお仕事後のお時間にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。本日司会を担当させていただきます、筑波大学の渡辺多恵子と申します。よろしくお願いいたします。</p> <p>さて、本日お集まりいただいたのは、みなさんにご活用いただいている「クラウドを活用した園児総合支援システム」を、保育実践の場でどのように活用できるか、みなさんの経験からご意見を伺うためです。</p>	導入および目的の提示
	<p>時間が限られておりますので、伺う事を3点に絞りたいと思います。</p> <p>（一呼吸おき、メモをとれるくらいゆっくり、はっきり）</p> <p>まず1つ目は、「コンテンツ（内容）」についてです。このコンテンツをみて思うこと、何がわかるのか、どんなことに使えるのかなどお話ください。</p>	質問1の説明
	<p>（一呼吸おいて）</p> <p>2つ目は、「使いやすさ」についてです。使いやすい部分、使いにくい部分、その理由なども含めお話ください。</p>	質問2の説明
	<p>（一呼吸おいて）</p> <p>3つ目は、「活用」についてです。実践の場で、どのように活用できるか、ご意見をお聞かせ下さい。</p>	質問3の説明

	<p>さて、すぐに皆様のご意見を伺いたいところですが、その前に、本日のグループインタビューの進め方について説明させていただきます。</p> <p>グループインタビュー法という科学的な手法を用いることで、皆様のご意見を抜け漏れなく最大限に活かしていくためにも、本日の進め方をお話させていただきます。皆さんの目の前に番号の札を立てさせていただきました。今日は、この番号札が皆様のお名前の代わりになります。</p> <p>(一呼吸おいて全体をみる)</p> <p>例えば、私が「6番さんお願いします」と言ったら、「6番ですが、」と言って、お話をして下さい。</p> <p>それに対して、どなたでも自由に発言や質問をしていただいて構いません。</p> <p>例えば、3番さんがお話ししたい気持ちになったとします。そうしましたら、軽く手を上げていただいて「3番ですが6番さんに対して・・・」というようにお話し下さい。</p> <p>(一呼吸おいて全体をみる)</p>	方法論の提示
	<p>このような形で、今日は、意見を自由に述べ合う方法を取らせていただきます。</p>	方法論の説明

	<p>何か、ご質問はありますか？</p> <p>(一呼吸おく)</p> <p>質問が来た場合、その人が何を質問したいのか、きちんと把握し誠実な対応をする。</p> <p>ここでもうひとつ、みなさんにお願ひがあります。</p> <p>今日のお話し合いの様子を、音声と録画による記録をとらせていただきたいと思いますのですが、よろしいでしょうか？</p> <p>(一呼吸おく)</p> <p>これはあくまでも分析のためだけに使い、分析が終わりましたらすぐに消去します。皆さんのお名前が外に出たり、発言の責任を問われたりすることは、一切ありません。よろしいでしょうか？</p> <p>(一呼吸おく、了解が得られたら、記録を開始する。)</p> <p>それでは、どうぞ肩の力を抜いて「言いたい放題、ジャンジャン」とお話下さい。</p> <p>時間は、1 時間 30 分を予定しております。</p>	<p>了解事項の確認</p>
--	---	----------------

0:10	<p>それでは、よろしいでしょうか？</p> <p>では、はじめさせていただきます。</p> <p>最初の話題として、みなさんにご活用いただいている、園児総合支援システムの内容（コンテンツ）について、どう思っているか、自己紹介を含めながらお話しください。</p> <p>（一呼吸おく）</p> <p>では、自己紹介を兼ねて1番さんから順に伺いたいと思います。よろしいですか？（アイコンタクト）</p> <p>お名前は結構ですので、1番さん、どうぞ。</p>	<p>質問1の再提示</p> <p>インタビュー開始</p>
	<p>強い主張をするメンバー、控えめな人</p> <p>男性、女性</p> <p>おおざっぱな発言は、できるだけ具体的になるように促す。「具体的には？」のように相槌を入れる。</p>	<p>メンバー特性観察</p> <p>予想回答チェック</p>
	<p>ありがとうございました。</p> <p>それぞれに熱く、語っていただきました。</p> <p>みなさん、園児情報を活用した素晴らしいお仕事を考えていらっしゃるのですね。</p>	<p>質問1の要約</p>
0:35	<p>では、2つ目の話題に移ります。</p> <p>園児総合支援システムの使いやすさについて、どうお考えですか（笑顔で全体を見回して）。</p> <p>今度は、どなたからでもかまいません。ご自由にどうぞ。</p>	<p>質問2の再提示</p>

	<p>メンバーの性別，年齢，経験に関わらず，貴重な意見であることを強調する（うなずきは平等に，発言は極力しない）．</p> <p>何か質問されたら，笑顔で「それは皆さんの思うところどうぞ」と応え，グループダイナミクスを促す．</p> <p>☆あまり発言していないメンバーには，発言を求める．</p> <p>「○番さんはいかがですか？」</p> <p>「○番さんのまわりではどんなことが言われてますか？」</p> <p>☆話がズレてしまったら質問 3 に移す</p> <p>「残り時間が 30 分ほどになってきました，大変興味深い○番さんのお話ですが，最後に一言まとめていただいて，次の話題に移りますね． ○番さんお願いします」</p>	<p>話の流れを見守る</p> <p>予想回答チェック</p>
1:00	<p>ありがとうございます． 日々，子どもたちの情報と向き合っているからこそその「なるほど」と感じる，たくさんのご意見を，幅広く伺うことができました．</p>	<p>質問 2 の要約</p>
	<p>では最後の話題です．</p> <p>「園児総合支援システムは，どんな事に役立てられると思いますか． 」</p> <p>子どもたちの情報を取り扱う専門家として，個人的に，あるいはなんとなくなど，何でも言いたい放題で構いません． 自由にじゃんじゃんお話し下さい．</p>	<p>質問 3 の再提示</p>

	<p>☆話を発展させたいとき</p> <p>「具体的にはどうでしょうか？」</p> <p>「例えばどのようなことでしょうか？」</p> <p>☆話していない人の発言を促す</p> <p>目配せをしながら、「はい、他には？」など.</p>	質問 3 の要約
1 : 25	<p>たくさんの貴重なご意見をありがとうございました.</p> <p>いかがでしょうか. お時間も迫ってまいりました.</p> <p>今回話題にさせていただいた 3 点について,あるいはそれ以外のことについても,これだけは言い残しておきたい,というものはありますか?</p>	追加的情報の確認
1:30	<p>ありがとうございます.</p> <p>今回はグループインタビューという形で,大変貴重なご意見を多数いただき,とても有意義な場とすることができました.</p> <p>今回話しきれなかったこと,言い忘れたこと等がありましたら,ぜひ後日ご連絡下さい.</p> <p>それではこれをもちまして終了とさせていただきます.</p> <p>本日はご参加いただき本当にありがとうございました.</p>	後の対応への布石

平成 24 年 月 日

市
市長 様

筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勲江

「子育て専門職用ヘルスリテラシー尺度の開発と信頼性、妥当性の検証」
アンケート調査へのご協力について（お願い）

〇〇の候 皆様におかれましてはますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、本学人間総合科学研究科博士後期課程の学生が、子育て専門職用ヘルスリテラシー尺度の開発と信頼性、妥当性の検証の研究を実施することとなりました。つきましては、下記の通り本研究にご協力いただきたくお願い申し上げます。

記

1. 調査の目的

本研究は、保育士や幼稚園教諭等の子育て専門職が、「他者のために健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」を量的に測定する「子育て専門職用ヘルスリテラシー尺度」を開発し、信頼性、妥当性の検証を行うことを目的とする「無記名のアンケート調査」です。本研究の成果は、乳幼児に関するたくさんの健康情報を包括的に管理し、よりよいケアにつなげていく専門職育成の一助となるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

2. 調査の対象者及び調査期間

市内の認可保育所、幼稚園に勤務する保育士、幼稚園教諭、看護師、保健師
平成 年 月 日

3. 調査方法

研究実施者が、ご協力いただける方に対し、書面と口頭で調査の説明をいたします。
本調査に対するご理解がいただけたら、アンケートに回答いただきます。
アンケートを糊付封筒にいれ、封をして「回収箱」提出していただきます。
回収箱は、研究実施者が説明時に設置させていただき、回収時に撤去いたします。

4. その他

本調査の結果は、ご所属や個人が特定されない形で、ご協力いただいた施設に報告いたします。ご質問やご意見は、研究実施者までお願いします。

【お問い合わせ先】

実施責任者 筑波大学 医学医療系 教授 安梅 勲江

住所 〒305-8575 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学大学院人間総合科学研究科

電話 090-3342-4978 メール anmet@md.tsukuba.ac.jp

研究についての説明書

近年、情報通信技術を利用して、健康情報を保管し活用する動きが進んでいます。これは、「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ、生涯にわたって個人の健康管理に役立てるため」です。しかし、目的達成に向かっているかどうか、その評価が十分であるとは言いがたい状況です。なぜなら、その評価には、日常的に子どもや保護者にかかわりを持つ保育士や幼稚園教諭等の子育て専門職が「子どもや保護者のために健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」、すなわち、子育て専門職のヘルスリテラシーの評価が求められますが、それを評価するためのツールの開発が課題となっているためです。

そこで、本研究では、子育て専門職が「子どもや保護者のために健康増進や維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための意欲や能力」を量的に測定する「子育て専門職のヘルスリテラシー尺度」を開発するために、保育士、及び、幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を行い、統計的な手法を用いて、信頼性、妥当性の検討を行います。

本研究の成果は、子どもや保護者に関するたくさんの健康情報を、包括的に管理し、よりよいケアにつなげていくための一助となるものであり、次世代を担う子どもたちへの支援充実に貢献するものです。

本研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われます。アンケート（子育て専門職のヘルスリテラシーに関するアンケート）は無記名とし、回答内容を第三者に知られることがないように、回収のための個別の糊付可能な封筒を用意しました。アンケートは封筒にいれ、封をして、回収箱に入れてください。

アンケートの提出をもって、本研究への協力に同意をいただいたと見なしますが、アンケートにお答えいただくかどうかは、本人の自由意思によるものであり、協力しない場合でも不利益を受けることはありません。

研究の結果は、論文や学会発表という形で公表しますが、調査に協力いただく方のご所属やお名前等の個人の情報が外部に出ることはありません。

この研究は筑波大学医学医療系医の倫理委員会の承認を得て、協力者の皆様に不利益がないよう万全の注意を払って行われます。研究への協力に際して、ご意見ご質問などございましたら、気軽に下記の連絡先にお尋ねください。

説明者 筑波大学医学医療系 教授 安梅 勅江

連絡先 電 話 029-853-3436 メール anmet@md.tsukuba.ac.jp

日頃の保育についてのおたずね

- 下記の質問について、当てはまる番号を一つ選び、○で囲んでください。
- ()の中には、当てはまる数字や言葉をお書きください。

問 1	あなたについてお答えください				
(1) 年齢	() 歳				
(2) 性別	1. 男性 2. 女性				
(3) 職業	1. 保育士 2. 幼稚園教諭 3. 看護師 4. 保健師 5. その他 ()				
(4) 職業経験	() 年 () か月				
(5) 職位	1. 園長 2. 副園長 3. 主任 4. 副主任 5. クラス担任 6. その他 ()				

問 2	下記の項目について、全く思わない～かなり思うまで、当てはまる番号に○をつけてください。				
	全く 思わない	あまり 思わない	どちらで もない	まあ思う	かなり 思う
(1) 子どもの基本情報（名前、生年月日、年齢、性別）を把握している。	1	2	3	4	5
(2) 子どもの発育・発達の状態を把握している。	1	2	3	4	5
(3) 子どもの健康状況（病気、けが、アレルギーなど）を把握している。	1	2	3	4	5
(4) 子どもの生活習慣の状態（食事、睡眠、排泄、清潔、衣服の着脱、遊びなど）を把握している。	1	2	3	4	5
(5) 子どもの対人関係（友だちや家族等との関係）を把握している。	1	2	3	4	5
(6) 保護者の基本情報（大まかな年齢、家族構成、同居の有無、住所、緊急連絡先など）を把握している。	1	2	3	4	5
(7) 保護者の健康状態（病気や介護の有無など）を把握している。	1	2	3	4	5
(8) 保護者の就労状況（勤務先や勤務時間、勤務形態など）を把握している。	1	2	3	4	5
(9) 保護者の育児状況（子どもへのかかわり、協力者、相談者など）を把握している。	1	2	3	4	5
(10) 子どもや家族を、噂や中傷に惑わされず理解している。	1	2	3	4	5
(11) 子どもや家族を、思い込みや思い入れでなく理解している。	1	2	3	4	5
(12) 様々な情報から総合的に子どもや家族を理解できる。	1	2	3	4	5
(13) 子どもや家族の情報を職場内で共有している。	1	2	3	4	5
(14) 子どもや家族について他の専門機関と情報交換している。	1	2	3	4	5
(15) 子どもの発育、発達に関する特徴を保護者にわかり安く伝えている。	1	2	3	4	5

	全く 思わない	あまり 思わない	どちらで もない	まあ思う	かなり 思う
(16) 保護者と、子どもに関する情報の交換を細やかに行っている。	1	2	3	4	5
(17) 保護者が出している赤信号を見逃さない。	1	2	3	4	5
(18) 保護者の今までの子育てを認めながら、今後のことを話し合っている。	1	2	3	4	5
(19) 子どもや保護者への支援の目標を明確にしている。	1	2	3	4	5
(20) 子どもや保護者の情報から適切な支援方針を決定している。	1	2	3	4	5
(21) 子どもや保護者へのかかわりとその効果を、子どもの発育、発達の変化から評価している。	1	2	3	4	5
(22) 子どもや保護者へのかかわりとその効果を、育児状況の変化から評価している。	1	2	3	4	5
(23) 子どもや保護者へのかかわりの評価を、次の支援に生かしている。	1	2	3	4	5
(24) 子どもや保護者へのかかわりの評価を、一時点ではなく継続的に行っている。	1	2	3	4	5
(25) 子どもや保護者へのかかわりの評価を、就学後につないでいる。	1	2	3	4	5
(26) どのような情報が子どもの将来的な自立のために必要なのかわかる。	1	2	3	4	5
(27) どのようなかかわりが子どもの将来的な自立のために必要なのかわかる。	1	2	3	4	5
(28) 情報の蓄積が、子どもの発達軌跡（どのような発達をたどるのか）の解明につながるのだと思う。	1	2	3	4	5
(29) 情報の蓄積が、将来の法の整備（乳幼児健診の時期や健診項目の決定など）にまでつながるのだと思う。	1	2	3	4	5
(30) 情報の蓄積が、子どもの発育、発達に影響する要因の解明につながるのだと思う。	1	2	3	4	5

問4 下記の項目について、全く思わない～かなり思うまで、当てはまる番号に○をつけてください。

	全く 思わない	あまり 思わない	どちらで もない	まあ思う	かなり 思う
(1) 新聞、本、テレビ、インターネットなど、いろいろな情報源から情報を集めることができる。	1	2	3	4	5
(2) たくさんある情報の中から、自分の求める情報を選び出せる。	1	2	3	4	5
(3) 情報がどの程度信頼できるかを判断できる。	1	2	3	4	5
(4) 情報を理解し、人に伝えることができる。	1	2	3	4	5
(5) 情報をもとに、健康改善のための計画や行動を決めることができる。	1	2	3	4	5

<div>問5</div> <div>あなたの所属している施設（保育所、幼稚園、子ども園など）では下記のことを実施していますか。実施していない～実施しているまで、当てはまる番号に○をつけてください。</div>			
＜子どもに関すること＞	実施して いない	今後 実施予定	実施 している
(1) 基本属性（名前、生年月日、年齢、性別）の把握.	1	2	3
(2) 身体状態（病気、けが、アレルギーなど）の把握.	1	2	3
(3) 発育の状態（身体測定・健康診断など）の把握.	1	2	3
(4) 発達の状態（運動、社会性、言語などの発達）の把握.	1	2	3
(5) 生活習慣（食事、排泄、午睡、睡眠、遊びなど）の状態の把握.	1	2	3
(6) 対人関係（友達、保育者、保護者との関係）の状態の把握.	1	2	3
(7) 保育歴（保育所、幼稚園等の利用理由と自記など）の把握.	1	2	3
(8) 子どもの気になる行動や、行動障害の状況を把握している.	1	2	3
(9) 子ども自身の権利（子どもの最善の利益の観点）が守られている.	1	2	3
＜家族に関すること＞	実施して いない	今後 実施予定	実施 している
(1) 家族の全体像を捉える時の基本的な面接技法を知り、相談を実施.	1	2	3
(2) 家族の基本属性（家族構成、勤務先、連絡先など）の把握.	1	2	3
(3) 家族の問題やニーズの把握.	1	2	3
(4) 必要に応じた、家族歴（家族の生活歴）の把握.	1	2	3
(5) 育児力（子どもへの接し方、家庭内での育児協力など）の把握.	1	2	3
(6) 保護者との相互理解をはかっている.	1	2	3
(7) 家族が子どもの権利を守っていること（子どもへの虐待などがないこと）の把握.	1	2	3
(8) 子どもの最善の利益を優先させた家族の権利（人格の尊重など）を守っている.	1	2	3
＜関係機関との連携＞	実施して いない	今後 実施予定	実施 している
(1) 子どもと保護者主体の連携を大切にしている.	1	2	3
(2) 専門職（チーム構成員）としての姿勢を理解している.	1	2	3
(3) 柔軟な連携（形式上の連携に終わらない）を行っている.	1	2	3
(4) 子育て支援の拠点を心がけている.	1	2	3
(5) 小学校との連携を心がけている.	1	2	3
(6) 地域との連携を心がけている.	1	2	3
(7) 専門職同士、情報の共有を行っている.	1	2	3
(8) 利用者の自己決定の促しがある.	1	2	3
(9) 連携及び支援の評価を定期的に行い、必要があれば見直し、改善が行われている.	1	2	3
(10) 利用者の利益、権利に配慮した対応（虐待から子どもを守るなど、人権保障のため）	1	2	3
(11) 専門職の人権に対する意識の向上を図っている.	1	2	3
(12) プライバシーへの配慮（守秘義務を守るなど）を徹底している.	1	2	3

ご協力ありがとうございました。
封筒にいれて封をしてご提出ください。

参 考 論 文

報 告

クラウドを活用した園児への総合支援システムの開発

—ヘルスリテラシーの視点から—

渡辺多恵子^{1,3)}, 田中 笑子¹⁾, 富崎 悦子¹⁾
望月由妃子¹⁾, 徳竹健太郎¹⁾, 安梅 勅江²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、「クラウドを活用した園児総合支援システム」が保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性を検討した。本システムは、12年間の保育コホート研究に基づき開発した「子どもの発達と環境を評価する5つのツール」とこれを実践で活かす方法をクラウド・コンピューティング環境下で活用するものである。本システムの特性は、Nutbeamが提唱する3つのリテラシー「機能的ヘルスリテラシー」、「相互作用のヘルスリテラシー」、「批判的ヘルスリテラシー」に分かれた。保育専門職のヘルスリテラシー向上への寄与の可能性が示唆された。

本システムの活用により、ヘルスプロモーションの理念に則った質の高い保育実践の実現、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクル展開が期待される。

Key words : 電子健康記録, クラウド・コンピューティング, ヘルスリテラシー, 保育の質向上, ヘルスプロモーション

I. 緒 言

少子高齢化を迎え、ますます孤立した子育てについて、質的にも量的にも十分な支援策を講じることが喫緊の課題となっている。発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加は社会問題となっており、子育て支援にかかわる専門職への社会の期待は高まるばかりである^{1,2)}。保護者と子どもを日常的に支えつつ虐待予防や障害児支援を展開することは国の重要施策の1つであり、新保育所指針では、保育の質向上に向けた「根拠に基づく支援」、「評価」、「自己点検」の重要性を強調している³⁾。保育の質向上への大きな転機を迎えた保育実践の場では、多くの保育専門職が、「子どもの気になる行動」や「保護者のサイン」をどのように受け止め、判断し、実践し、評価すべきか日々悩

みながら活動している。

われわれは12年にわたるコホート研究により、子どもの健やかな成長に影響する要因と支援のあり方を科学的に分析してきた。そして、5つのツール（一般発達評価票、気になる子どもチェックリスト、社会的スキル尺度、育児環境評価票、保育環境評価票）を開発するとともに、その根拠を実践で活かす方法について整理した^{1,2)}。これらは、保育実践の場などで活用され、質の高いケアの実践に役立つこと^{1,2)}、また、発達障害の早期把握と支援⁴⁾、虐待予防⁵⁾などに役立つことが実証されている。しかし、現状の課題を解決するためには、5つのツールと実践で活かす方法を「より活用しやすい形」、「成果を視覚的にとらえやすい形」、「柔軟性および汎用性の高い形」で提供する必要がある。また、園児情報、育児環境情報、保育情報を継続的に

A Study on the Potency of Cloud Computing-based Support Systems for Comprehensive Childcare :
Focusing on the Health Literacy of Childcare Professionals

[2419]

受付 12. 3.23

Taeko WATANABE, Emiko TANAKA, Etsuko TOMISAKI, Yukiko MOCHIZUKI, Kentaro TOKUTAKE, Tokie ANME

採用 12. 7.17

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科 (大学院生)

2) 筑波大学大学院医学医療系 (研究職)

3) 玉川大学 教育学部教育学科 (非常勤講師)

別刷請求先: 渡辺多恵子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1

Tel : 090-3342-4978 Fax : 0297-52-7066

収集し分析することにより, さらに強固な根拠を生み出し, 継続的かつ着実な保育の質向上のサイクル展開が求められる。そこで, これら5つのツールと実践で活かす方法をクラウド・コンピューティング環境下で実行する「クラウドを活用した園児総合支援システム(以下, 本システム)」を開発した。

健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用する目的の1つは, 「健康情報のもつ力を最大限に発揮させ, 生涯にわたって健康管理に役立てる」ことである⁶⁾。ヘルスリテラシーの概念によく似ている。ヘルスリテラシーとは, 「健康増進や維持に必要な情報にアクセスし, 理解し, 利用していくための意欲や能力」と定義される⁷⁾が, これには, 「他者の健康情報を扱う専門職」が, 「他者のために健康増進や維持に必要な情報にアクセスし, 理解し, 利用していくための意欲や能力」も含まれる。

本研究では, 本システムの特徴を Don Nutbeam が提唱した3つのヘルスリテラシー⁸⁾の概念に基づいて整理することにより, 本システムの保育専門職のヘルスリテラシー向上への寄与の可能性を検討することを目的とした。

II. 本システムの概要

園児および保護者の基本情報(性別, 生年月日, 入園年齢, 保育時間, 家族構成, 保護者の職業など)入力シート, および, 5つのツール(一般発達評価票, 社会的スキル尺度, 気になる子どもチェックリスト, 育児環境評価票, 保育環境評価票)と実践で活かす方法をクラウド・コンピューティング環境下に設置した。

クラウド・コンピューティング環境とは, 情報や情報を動かすソフトウェアをコンピュータのローカルディスク(ハードディスク)上で管理するのではなく, インターネット上におかれた特殊なサーバーを利用して管理する方式である。利用者はソフトウェアの購入やインストール, ファイルのバックアップなどを必要とせずに利用できる。

開発したシステムの基本要件は下記の通りであった。

1. 本システムの安全性と信頼性

(1) クラウド・コンピューティング環境は, Salesforce.com 社が提供するものを活用した。Salesforce.com 社は, 政府の情報も管理する, 安全性, 信頼性の高いサービスを提供している^{9,10)}。

(2) 入力された情報は, Salesforce.com 社のネットワークストレージに保存される。ネットワークストレージとは, インターネットを介してデータを保管するスペースである。

(3) Salesforce.com 社のプラットフォーム上では, 個人情報部分のID化が自動的に行われ, 各ユーザー(本システムを活用する園)以外は, 個人情報を扱うことができない。匿名化IDは大文字と小文字を区別する15~18の文字と数字を組み合わせたランダムなユニーク文字列である。プラットフォームとは, ソフトウェアなどを動作させるための基盤となる環境である。

(4) クラウド・コンピューティングの特徴から, 災害時にも確実に緊急連絡先, データを保持する。

2. 本システムの画面構成と情報へのアクセス権(図)

園児情報の入力や閲覧を行うための画面は, 園用, 保護者用, 研究者用の3パターンを用意した。

(1) 保育所・幼稚園・子ども園

- ① 園ごとに付与したIDと各園が設定したパスワードによりシステムにログインする。
- ② ログイン後, 登録メールアドレスに使用する端末を認証するための確認コードが送信され, その確認コードを入力することにより園児一覧画面にアクセスすることができる。
- ③ 園児一覧画面から各ツールにアクセスし, 園児情報の入力や園全体および個々の園児の分析レポートの閲覧ができる。
- ④ 各ツールに情報を入力すると, ツールごとの結果が瞬時に視覚的にフィードバックされる。
- ⑤ 園児一覧画面および各ツール画面に設置した「レポート表示」ボタンを押すことにより, 園全体および個々の園児の分析レポートが表示される。
- ⑥ 園全体レポートは, 各園の集計結果が全国平均や標準値と比較可能な形で表示される。
- ⑦ 個々の園児のレポートは, 個々の園児の発育, 発達状況が, 園全体の集計結果と比較可能な形で表示される。また, 特段な配慮が必要な園児については, 保育士の気づきを促すためのアラート(注意喚起のサイン)とメッセージをあわせて表示する。

(2) 保護者

- ① 園が設定したパスワードから育児環境評価票にアクセスし, 育児環境情報の入力ができる。

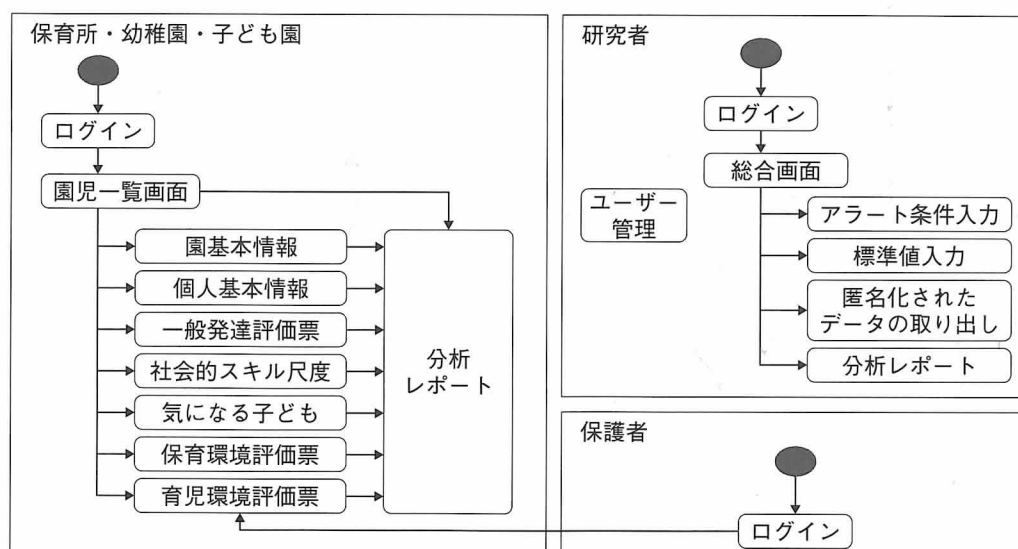


図 クラウドを活用した園児総合支援システム基本要件

- ② 入力した育児環境情報は、入力後すぐに保護者が指定したメールアドレスにフィードバックされる。
- ③ 保護者は、保護者自身の端末からは分析レポートの閲覧はできない。保育専門職とのやり取りのもと、レポートを共有する。

(3) 研究者

- ① システム管理者としての認証が適用され、管理者モードでシステム管理画面にログインできる。
- ② 研究者は、本システム活用を希望した園に対して、本システムへのユーザー登録、ユーザー（本システムを活用する園）がパスワードを紛失した際のパスワードリセット操作を行うことができる。
- ③ 研究者は、園全体および個々の園児の分析レポートに反映されるアラート条件（注意喚起の条件）やメッセージの管理、標準値の管理、匿名化されたデータのエクスポート（エクセルやCSV形式での取り出し）ができる。
- ④ 研究者は、条件を指定することにより、詳細な分析レポートの作成ができる。
- ⑤ 研究者は、個人情報の閲覧や操作は一切できない。

Ⅲ. 対象と方法

1. 対象

本研究は、記録物分析法による質的研究である。本システムの開発のために開催した全10回の詳細な会議記録を分析の対象とした。詳細な会議記録とは、2名の記録者が会議参加メンバーの発言内容のすべてを、その場で要約して速記し、会議後に照合し、互いの記録の抜けているところを補い1本の記録としたもので

ある。この記録は、会議ごとに、参加メンバー全員に配布し、内容の記載に間違いがないことを確認している。

会議の開催日は平成22年9月～平成23年10月、参加者は保育士、保育園連盟役員、保育管理職などの保育専門職、乳幼児に関する研究を専門とする研究者、システム開発専門家であった（表1）。

2. 分析の方法

(1) 重要カテゴリーの位置づけ

Nutbeam が提唱した3つのヘルスリテラシー⁸⁾を重要カテゴリーと位置づけた。Nutbeam が提唱した3つのヘルスリテラシーとは、「機能的ヘルスリテラシー (Functional literacy)」、「相互作用のヘルスリテラシー (Interactive literacy)」、「批判的ヘルスリテラシー (Critical literacy)」である。「機能的ヘルスリテラシー」とは、日常生活場面での健康に関連した情報について理解できる能力と定義される。「相互作用のヘルスリテラシー」とは、日常的な活動に活発に参加し、さまざまな形式のコミュニケーションから情報を入手したり、意味を引き出し、新しい情報を変化する環境へ適用するために利用される能力と定義される。「批判的ヘルスリテラシー」とは、情報を批判的に分析し、この情報を日常的な出来事や状況をよりコントロールするために使用することに適用される能力と定義される。

(2) 重要フレーズの抽出

3つの重要カテゴリーに当てはまる重要な成句（重要フレーズ）を、3名の分析者により会議記録から抽出した。

表1 クラウドを活用した園児総合支援システム開発会議の概要

回	開催日	参加者	テーマ
1	平成22年9月15日	研究者4名, IT 専門家3名	1. 園児総合支援システムについて 2. 園児総合支援システム実現可能制の検討
2	平成22年10月4日	研究者6名	1. 各スケールの使い方 2. アラート表示の条件と出力レポート 3. 子どものプロフィール画面 4. 保育者へのコメントと付加機能
3	平成23年1月29日	保育士5名, 保育園連盟役員2名, 保育管理職4名, 研究者9名, IT 専門家3名	1. クラウド園児総合支援システムの概要 2. iPad の活用 3. 保育環境評価票簡易版について
4	平成23年2月27日	保育士2名, 保育園連盟役員1名, 保育管理職1名, 研究者10名, IT 専門家2名	1. クラウド園児支援システムに触れてみての感想 2. 園児情報管理の現状と今後の可能性 3. クラウド版発達評価票の特徴 4. クラウド版社会的スキル尺度の特徴 5. クラウド版気になる子どもチェックリストの特徴
5	平成23年3月9日	研究者6名, IT 専門家2名	1. ダッシュボード 2. 個人基本画面 3. 園, および園児レポート
6	平成23年5月12日	研究者4名, IT 専門家1名	1. 過去データの投入 2. クラウド園児支援システムシミュレーション版
7	平成23年6月23日	研究者3名, IT 専門家1名	1. 過去データ投入の課題 2. クラウド園児支援システムの論点整理
8	平成23年6月26日	保育士2名, 保育園連盟役員2名, 保育管理職1名, 研究者10名, IT 専門家3名	1. 各ツールの仕様変更点
9	平成23年8月5日	研究者3名, IT 専門家1名	1. ホームページを使用した活用支援 2. アラートメッセージ 3. 過去データの投入について
10	平成23年10月2日	研究者3名, 保育士2名	1. システムのコンテンツについて 2. システムの使いやすさについて 3. システムの活用について

(3) サブカテゴリーの作成

同分析者のディスカッションにより, 内容分析法¹¹⁾を用いて, 重要フレーズを類型化し, サブカテゴリーを作成した。

(4) 妥当性の確認

重要フレーズの抽出, 重要フレーズの類型化, サブカテゴリー作成の妥当性について, 質的研究に精通した専門家のスーパーバイズを受け, 重要フレーズの意味することと, 類型化およびサブカテゴリーの抽出にずれがないことを確認した。

3. 倫理的配慮

本システムの開発のために開催した全10回の会議に参加したメンバーには, 本研究の目的, 方法, 成果, 名前や所属などの情報が外部に出ないこと, 会議への参加や会議記録を分析に使用することでいかなる不利益も受けないことを口頭で説明し, 書面と口頭で研究

への同意を得ている。

IV. 結 果

内容分析の結果, 本システムの特徴は, 【機能的ヘルスリテラシー】, 【相互作用のヘルスリテラシー】, 【批判的ヘルスリテラシー】の3つの重要カテゴリーに分かれた。さらにその中で11のサブカテゴリーに整理された(表2)。以下, 重要カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは『 』, 重要フレーズは「 」の記号を用いて記述する。

1. 機能的ヘルスリテラシー

【機能的ヘルスリテラシー】には4つのサブカテゴリーが抽出された。「根拠に基づくツールにより情報収集」「情報の正確かつ適切な利用」より『情報の選定』が抽出された。「保育専門職の個人的な思い込みをなくす」「個人, クラス全体, 園全体の特徴と全国平均

表2 ヘルスリテラシーからみたクラウドを活用した園児総合支援システムの有効性

重要カテゴリー	サブカテゴリー	重要フレーズ
機能的 ヘルスリテラシー	情報の選定	根拠に基づくツールにより情報収集 情報の正確かつ適切な利用
	情報の客観的理解	保育専門職の個人的な思い込みをなくす 個人、クラス全体、園全体の特徴と全国平均との比較
	情報の体系的理解	子どもの発達を「運動発達」、「社会性発達」、「言語発達」の3領域から理解 子どもの社会的スキルを、「協調」、「自己制御」、「自己表現」の3因子から理解 子どもの気になる行動を、33の領域から総合的に捉える 養育環境を「人的かかわり」、「社会的かかわり」、「社会的サポート」、「制限や罰の回避」の4領域13項目で理解 保育環境を、子どもと保護者の多様なニーズから理解
	情報の複合的理解	子どもと子どもを取り巻く環境を、5つの支援ツールにより理解
相互作用的 ヘルスリテラシー	情報共有	保育専門職、他職種、保護者間のすばやい情報共有 子どもの特徴をわかりやすく示す 保育専門職同士が課題を共有
	情報の補完	子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積 必要な情報プラス α がわかる
批判的 ヘルスリテラシー	目標の明確化	瞬時に視覚的にフィードバックされることにより、目標を明確にすることができる 配慮を要する子どもの早期把握・早期支援
	根拠に基づく支援	根拠に基づく保育方針決定 質の高い保育方法が分析可能 一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定
	活動の評価	専門職自身のケアの評価 保育支援のフィードバック
	継続的な情報活用	継続的かつ着実な情報管理 生涯にわたる個人の健康管理
	関連・因果関係の検証	乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響要因の分類、選定、考察が可能となる

との比較」より『情報の客観的理解』が抽出された。「子どもの発達を運動発達、社会性発達、言語発達から理解」、「保育環境を子どもと保護者の多様なニーズから理解」などより『情報の体系的理解』が抽出された。「子どもと子どもを取り巻く環境を5つの支援ツールにより理解」より『情報の複合的理解』が抽出された。

2. 相互作用的ヘルスリテラシー

【相互作用的ヘルスリテラシー】には2つのサブカテゴリーが抽出された。「保育専門職、他職種、保護者間のすばやい情報共有」、「子どもの特徴をわかりやすく示す」、「保育専門職同士が課題を共有」より『情報共有』が抽出された。「子どもの特徴や保育状況などの質的データを集積」、「必要な情報プラス α がわかる」より『情報の補完』が抽出された。

3. 批判的ヘルスリテラシー

【批判的ヘルスリテラシー】には5つのサブカテゴリーが抽出された。「瞬時に視覚的にフィードバック

されることにより目標を明確にすることができる」、「配慮を要する子どもの早期把握・早期支援」より『目標の明確化』が抽出された。「根拠に基づく保育方針決定」、「質の高い保育方法が分析可能」、「一人ひとりの園児の根拠に基づく保育方針決定」より『根拠に基づく支援』が抽出された。「専門職自身のケアの評価」、「保育支援のフィードバック」より『活動の評価』が抽出された。「継続的かつ着実な情報管理」、「生涯にわたる個人の健康管理」より『継続的な情報活用』が抽出された。「乳幼児期と学童期の関連を評価し、影響要因の分類、選定、考察が可能となる」より『関連・因果関係の検証』が抽出された。

V. 考察

1. 本システムが保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性

本システムの特性は、【機能的ヘルスリテラシー】、【相互作用的ヘルスリテラシー】、【批判的ヘルスリテラシー】の3つの重要カテゴリーに分かれた。【機能

的ヘルスリテラシー】として「情報の選定」、「客観的理解」、「体系的理解」、「複合的理解」、【相互作用的ヘルスリテラシー】として「情報の共有」、「情報の補完」、【批判的ヘルスリテラシー】として「保育目標の明確化」、「根拠に基づく支援」、「保育評価」、「継続的な情報活用」、「関連・因果関係の検証」など、本システムが保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性が示唆された。

ヘルスリテラシーは、ヘルスプロモーションの新しい概念であり、健康教育やコミュニケーション活動のアウトカムを構成する用語であるとされ⁸⁾、Healthy People 2010や健康日本21などの健康政策の中に位置づけられてきた。バンコク憲章では、情報通信技術の強化を含むグローバル化を健康増進と健康リスク軽減の新たな好機としてとらえ、高めるべき能力の1つに「ヘルスリテラシー」をあげている¹²⁾。また、Healthy People 2020では、「従来の印刷出版型の普及媒体にかわって、対話型ウェブサイトを活用すること」、「ユーザーが個々の必要性に応じ、情報や根拠を得ることのできるウェブサイトを維持すること」などが新たな特徴にあげられている¹³⁾。保育支援を含めたこれからのヒューマンサービスには、ヘルスリテラシー向上に向けた情報通信技術の効果的な活用が求められる。保育専門職のヘルスリテラシー向上につながる本システムの活用は、これからの子どもと保護者へのよりよい保育支援に効果を発揮すると考えられる。

また、3つのヘルスリテラシーのサブカテゴリーに注目すると、「情報の選定と理解」、「情報の共有と補完」を経た「保育目標の明確化、保育評価」、「継続的な情報活用」、「関連・因果関係の検証」という、PDCAサイクル(plan-do-check-act サイクル)が確認できる。PDCAサイクルは、業務を継続的に改善するマネジメント手法の1つとして知られており、保育者が子どもの発達記録をPDCAサイクルとして保育計画に活かすための発達記録システム機能や施策の必要性が述べられている¹⁴⁾。PDCAサイクル展開につながる本システムの活用は、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクル展開に効果を発揮すると考えられる。

2. 本研究の限界と可能性

本研究はシステム開発のために開催した会議の詳細な記録を用いて、本システムが保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性を検討したものであ

る。今後、本システムを実践の場に導入したうえでの評価が求められる。

しかし、健康情報の保管と活用に情報通信技術を活用することに関する現在の研究は、長期にわたる包括的な情報管理^{15,16)}や、田舎や恵まれない環境にある人々へのケアの質向上¹⁷⁾、感染症拡大防止¹⁸⁾など、ある側面からみた保健医療の質向上の視点での評価が主である。ヘルスリテラシー向上につながる本システムの開発と評価は、実践と研究の新たな展開に一石を投じる可能性をもつ。実践の場では、保育専門職が、情報の理解、共有、活用という質の高い専門技術を取得し、子どもや保護者を日常的に支えつつ、虐待予防や障害児支援を展開し、情報をつなぎ、「孤立した子育て」、「発達障害や虐待など特段の配慮を要する子どもの増加」などの解決に向けた支援が充実する可能性を持つ。研究においては、子どもや保護者の情報を継続的に収集し分析することにより、さらに強固な根拠を生み出し、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクルが展開される。

保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性をもつ本システムが実践の場で継続して活用されることにより、「健康情報のもつ力を最大限に発揮し、生涯にわたり個人の健康管理に役立てる」という目的達成が期待される。

VI. 結 語

【機能的ヘルスリテラシー】、【相互作用的ヘルスリテラシー】、【批判的ヘルスリテラシー】の視点から、本システムが保育専門職のヘルスリテラシー向上に寄与する可能性が示唆された。本システムの活用により、ヘルスプロモーションの理念に則った質の高い保育実践の実現、継続的かつ着実な保育の質向上のサイクル展開が期待される。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、全国夜間保育園連盟の天久薫会長、枝本信一郎副会長、保育パワーアップ研究会をはじめ、ご協力いただきましたすべての皆さまに深謝致します。なお本研究は、科学技術開発機構社会技術開発センター研究開発成果実装支援プログラム「WEBを活用した園児総合支援システムの実装」、文部科学省科学研究費補助金「大規模コホート調査に基づく気になる子どもへの早期支援プログラムの開発研究（課題番号

23330174)」の成果の一部です。

文 献

- 1) 安梅勅江. 保育パワーアップ講座. 第3版. 東京. 日本小児医事出版社, 2011: 1-37.
- 2) 安梅勅江. 保育パワーアップ講座 活用編. 第2版. 東京. 日本小児医事出版社, 2011: 1-17.
- 3) 全国保育所協議会. 全国の保育所実態調査報告書. 東京: 社会福祉法人全国社会福祉協議会, 2008: 1-107.
- 4) 篠原亮次, 星野崇宏, 杉澤悠圭, 他. 就学前社会スキル尺度と広汎性発達障害 (PDD) との関連. 厚生 の指標 2009; 56 (15): 20-25.
- 5) 渡辺多恵子, 田中笑子, 富崎悦子, 他. 夜間に及ぶ 長時間保育を行っている保育所の支援的役割に関 する考察—育児環境の実態から—. 小児保健研究 2010; 69 (2): 329-335.
- 6) 石樽康雄. 医療・健康情報に関する国内外の動向と 標準化・相互運用性. NTT 技術ジャーナル 2011; 23 (3): 88-91.
- 7) WHO. Health Promotion Glossary. 1998 : <http://www.who.int/healthpromotion/about/ HPR%20Glossary%201998.pdf> (2012.6.30 access.).
- 8) Nutbeam D. Health literacy as a public health goal: A challenge for contemporary health education and communication strategies into the 21st century. Health Promotion International 2000; 15 (3): 259-267.
- 9) Salesforce.com. Proven reliability. <http://www.salesforce.com/platform/cloud-infrastructure/reliability.jsp> (2012.6.30 access.).
- 10) Salesforce.com. クラウド・コンピューティングの自 治体業務への活用. <http://www.salesforce.com/jp/campaigns/public-sector/> (2012.6.30 access.).
- 11) 安梅勅江. グループインタビュー法—科学的根拠に 基づく質的研究法の展開. 第1版. 東京: 医歯薬出 版株式会社, 2003: 33-63.
- 12) WHO. The Bangkok Charter for Health Promotion in a Globalized World. 2005 : http://www.who.int/healthpromotion/conferences/ 6gchp/hpr_050829_%20BCHP.pdf (2012.6.30 access.).
- 13) Healthy People 2020 : http://healthypeople.gov/2020/TopicsObjectives2020/pdfs/HP2020_brochure_with_LHI_508.pdf (2012.6.30 access.).
- 14) 仁木賢治, 新谷公朗, 糠野亜紀, 他. 保育者の保育 傾向を抽出できる発達記録支援システムの提案. 情 報システムと社会環境研究報告 2008; 52: 31-38.
- 15) Devoe JE, Gold R, McIntire P, et al. Electronic health records vs Medicaid claims: completeness of diabetes preventive care data in community health centers. Ann Fam Med 2011; 9 (4): 351-358.
- 16) Kurreeman F, Liao K, Chibnik L, et al. Genetic Basis of Autoantibody Positive and Negative Rheumatoid Arthritis Risk in a Multi-ethnic Cohort Derived from Electronic Health Records. The American Journal of Human Genetics 2011; 88: 57-69.
- 17) Sequist TD, Cullen T, Hays H, et al. Implementation and Use of an Electronic Health Record within the Indian Health Service. J Am Med Inform Assoc 2007; 14: 191-197.
- 18) 渡辺多恵子, 竹原健二, 斉藤 進, 他. 小中学校に おける麻疹予防システム構築に関する研究—感染ハ イリスク者の把握とワクチン接種実態調査から—. 小児保健研究 2009; 68 (5): 529-535.

[Summary]

The purpose of this study was to clarify the potency of cloud computing-based support systems for comprehensive childcare by focusing on the health literacy of childcare professionals. This system, developed by our group over 12 years, comprises five tools of child development, childcare environment, and childcare support design. The potency was divided into Functional literacy, Interactive literacy, and Critical literacy advocated by Nutbeam.

These results suggested that childcare professionals' health literacy can be developed by implementing this system.

We expect to use this system to improve the quality of childcare in accordance with the fundamental principles of health promotion.

[Key words]

electronic health record, cloud computing, health literacy, quality of childcare, health promotion

研 究

高校生の安全なインターネット利用に関連する要因

—インターネット利用の実態と共感性—

渡辺多恵子¹⁾, 磯貝 恵美³⁾, 田中 笑子¹⁾
 富崎 悦子¹⁾, 恩田 陽子¹⁾, 望月由妃子¹⁾
 徳竹健太郎¹⁾, 齋藤 希望⁴⁾, 安梅 勅江²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、高校生の携帯端末からのインターネット利用の実態を把握するとともに、インターネット利用にともなう行動と共感性との関連を検討することである。高校生422名を対象に、無記名の自記式質問紙によりデータを得た。質問紙の回収率は96.8%であった。1日の携帯電話使用時間（中央値）は2.5時間、自分自身のウェブサイト所有は49.1%、情報教育の経験ありは94.4%であった。「他者のサイトへのアクセスあり」、「他者のサイトへのメッセージの投稿あり」は過半数以上、「誹謗・中傷の書き込み」、「有害サイトへのアクセス」、「アクセスして現実的に危険な経験をした」は、少数だが男女ともに見られた。「他者のサイトへのアクセスあり」、「他者サイトへのメッセージ投稿あり」など行動が活発な群の方が、他者に向かう他者志向型の共感性得点が高かった。一方、「有害広告に触発されて有害サイトにアクセスした」など危険な行動あり群の方が、他者志向型の共感性得点が低く示された。

Key words：インターネット，メディアリテラシー，情報モラル，共感性，高校生

I. 緒 言

近年、青少年がインターネット上の違法・有害情報に触発され発生した犯罪や、出会い系サイトと呼ばれるウェブサイトへのアクセスをきっかけに買春や暴行など犯罪に巻き込まれた例が多く報告されている^{1,2)}。「学校裏サイト」と呼ばれる学校公式サイトとは無関係に立ち上げられた電子掲示板や「プロフ」と呼ばれる自己紹介を発信するためのシステムが出現し、誹謗・中傷やわいせつ情報の発信は著しくなり、インターネット上でのいじめなどの問題が深刻化した³⁾。文部

科学省による青少年が利用する学校非公式サイト（学校裏サイトやプロフを含む学校公式サイト以外の学校や生徒に関するウェブサイト）に関する調査では、学校非公式サイト・スレッド（ひとつの話題に属する複数の記事をまとめたもの）数は38,260件（平成20年1月～3月現在）に及び、その半数に誹謗・中傷の言葉が含まれていた⁴⁾。

青少年のインターネット利用、とくに携帯電話を端末とした利用に関する研究は数多く行われ、インターネット利用における心理的效果などが検討されている^{5,6)}。また、青少年がインターネット上に氾濫して

Implications of a Safe Internet Environment for High School Students : Focus on the Students' Current Internet Usage and Their Empathy

[2303]

Taeko WATANABE, Emi ISOGAI, Emiko TANAKA, Etsuko TOMISAKI, Yoko ONDA, Yukiko MOCHIZUKI, Kentaro TOKUTAKE, Nozomu SAITO, Tokie ANME

受付 11. 1. 17

採用 11. 9. 20

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科（大学院生）

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科（研究職）

3) 愛知県西尾市（保健師）

4) 愛媛県新居浜市（保健師）

別刷請求先：渡辺多恵子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1

Tel : 090-3342-4978 Fax : 0297-52-7066

いる違法・有害情報に、携帯電話などから容易にアクセスできる状況があることから情報リテラシーの必要性⁷⁾、情報モラルに関する知識の習得など情報モラル教育の必要性⁸⁾が指摘され、学校教育、学校保健の現場では、情報リテラシー、情報モラル教育に関する積極的な取り組みがなされている。しかし、逸脱行動や犯罪はなくなり、学校における教育の情報化はますます推進される状況である⁹⁾。

一方、昨今の青少年の犯罪の根底には、共感性の欠如（喪失）があることが指摘されている¹⁰⁾。また、インターネットを安全に活用するための個の要因として、情報リテラシー、情報モラルに加え、「共感スキル」が必要であることが述べられている¹¹⁾。インターネット上のやりとりは、文字、画像、音のみによるものであり、相手に対するより繊細な配慮や共感性が求められるが、インターネット利用における青少年の行動について、情報リテラシーや情報モラルに関する教育の必要性は指摘されているものの、共感性との関連は十分に検討されているとは言えない。

そこで、本研究では、高校生のインターネット利用の実態を把握するとともに、インターネット利用にともなう行動と共感性との関連を検討した。

II. 研究方法

1. 対象と方法

高校1年～3年生422名を対象とし、無記名の自記式質問紙を用いた集合調査法によりデータを得た。質問紙の配布と回収は協力施設の担当教員に依頼した。調査期間は、2009年7月8日～7月30日であった。

2. 調査項目

(1) 高校生のインターネット利用の実態

高校生のインターネット利用を「携帯電話に対応した学校非公認消費者生成メディアの利用」と定義し、「自己紹介や日記、掲示版などのウェブサイト（以下、ウェブサイトとする）の閲覧および書き込み」という表現を用いた。調査項目は、携帯電話の所有状況、携帯電話の使用時間、携帯電話利用に関する家族との制約、自分自身のウェブサイトの所有状況、ウェブサイト所有の校則による禁止、情報リテラシー、モラルなど情報教育の有無とした。

(2) インターネット利用にともなう行動

インターネット利用にともなう行動は「影響要因へ

の接触および影響要因による触発」と定義し、操作的定義は、行動1「他者とのやりとりへの接触」2項目、行動2「有害性をもつ情報への接触」2項目、危険行動「行動1, 2による触発」2項目の、3分類6行動に整理した。

(3) 高校生の共感性

共感性の測定には、多次元的共感性尺度¹²⁾を使用した。他者志向の温かい気持ちを持つ「共感的関心」、他者の気持ちや状況を想像する「気持ちの想像」、架空の他者に感情移入する「ファンタジー」、他者に向かわない自分中心の感情的反応を示す「個人的苦痛」の4因子30項目からなり、中学生、高校生、大学生を対象とした調査により内的一貫性による信頼性の検討が行われている（ $\alpha = .63 \sim .86$ ）。また Interpersonal Reactivity Index : IRI¹³⁾との基準関連妥当性が検証されている。

3. 分析の方法

対象者特性、インターネット利用の実態、インターネット利用にともなう行動の実態、共感性の実態について単純集計した。インターネット利用には性差が指摘されている¹⁴⁾ことから、実態と行動は男女別に算出した。

さらに共感性（次元別）とインターネット利用にともなう行動について2変量解析を行った。行動1「他者とのやりとり」への接触については、男女差が見られたため、行動1との関連については、男女別に分析を行った。検定の有意水準は5%とした。

4. 倫理的配慮

調査の目的、方法、成果、個人情報取り扱い、および承認せずとも不利益を受けないことについて書面と口頭で説明し、調査協力施設の承認を得た。質問紙には、調査の目的、調査結果の活用、調査結果を目的外に使用しないこと、および質問紙への回答は個人の自由意志であり回答しなくても不利益は受けけないことを明記し、質問紙への回答をもって調査への同意と見なした。また、個人の回答が他に漏れないよう個別の回収用封筒を用意した。なお、本研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 研究結果

1. 質問紙の回収率と分析に使用するデータ

質問紙を配布した436名中, 422名から回答を得た(回収率96.8%)。そのうち, 属性と共感性尺度の項目に欠損のない393名を分析の対象とした。

2. 対象者の特性 (表1)

対象者は, 男子38.9%, 女子61.1%, 高校1年生38.4%, 2年生32.8%, 3年生28.8%であった。家族構成は核家族69.7%, 拡大家族30.3%であった。携帯電話の所有は98.0%であった。

3. インターネット利用の実態 (表2)

1日の携帯電話使用時間の中央値は, 男子1.00時間, 女子3.00時間, 合計2.50時間であった。携帯電話利用に関する家族との制約ありは31.0%であった。自分自身のウェブサイトの所有は, 男子30.1%, 女子61.3%, 合計49.1%であった。自分自身のウェブサイト所有の校則による禁止は100%であった。情報リテラシー, 情報モラルなどの情報教育の経験ありは, 男

表1 対象者の特性 n = 393

項 目	人 数	割合 (%)
性 別	男子	153
	女子	240
学 年	高校1年	151
	高校2年	129
	高校3年	113
家族構成	核家族	274
	拡大家族	119
(核家族内訳)	両親	248
	母親のみ	20
	父親のみ	4
	祖父母のみ	2
(拡大家族内訳)	両親+祖父母	102
	母親+祖父母	12
	父親+祖父母	5
きょうだいの有無	あり	342
	なし	51
(内訳)	年上	132
	年下	160
	両方	50
携帯電話の所有	持っている	385
	持っていない	8

表2 インターネット利用の実態

(時間)

	男 n = 153 人数 (%)	女 n = 240 人数 (%)	合計 n = 393 人数 (%)	p
1日の携帯電話使用時間	1.00(0.50~3.00)	3.00(2.00~5.00)	2.50(1.00~5.00)	***
携帯電話利用の家族との制約あり	49(32.0)	73(30.4)	122(31.0)	
(内訳)	利用できる金額が決まっている	21(42.9)	35(47.9)	56(45.9)
	利用時間が決められている	2(4.1)	5(6.8)	7(5.7)
	書き込みを禁止されている	3(6.1)	6(8.2)	9(7.4)
	インターネットを禁止されている	8(16.3)	11(15.1)	19(15.6)
	メールを禁止・制限されている	2(4.1)	0(0.0)	2(1.6)
	フィルタリングがかけられている	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
自サイトの所有	46(30.1)	147(61.3)	193(49.1)	***
自サイト所有の校則による禁止	153(100.0)	240(100.0)	393(100.0)	
情報教育を受けた経験あり	139(90.8)	232(96.7)	371(94.4)	*
(内訳)	親など家族から	30(21.6)	56(24.1)	86(23.2)
	学校で先生から	84(60.4)	158(68.1)	242(65.2)
	学校で警察の人から	62(44.6)	132(56.9)	194(52.3)
	友だちや後輩から	11(7.9)	14(6.0)	25(6.7)
	先輩から	2(1.4)	3(1.3)	5(1.3)
	雑誌で読んだ	11(7.9)	17(7.3)	28(7.5)
	インターネットで見た	25(18.0)	21(9.1)	46(12.4)
	テレビで見た	53(38.1)	98(42.2)	151(40.7)

※ p : pearson の χ^2 検定

※ 1日の携帯電話使用時間は中央値 (25~75%) を示した (p : Mann-Whitney の U 検定)。

※* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

子90.8%, 女子96.7%, 合計94.4%であった。

4. インターネット利用にともなう行動

(1) インターネット利用にともなう行動の実態 (表3)

「行動1 他者とのやりとりへの接触」の「他者サイトへのアクセスあり」は79.4%, このうち、「他者サイトへのメッセージの投稿あり」は68.9%であった。

他者サイトへアクセスした者のうち、「行動2 有害性をもつ情報への接触」の「ウェブサイト上で自分自身が誹謗・中傷を受けたことがある」は7.4%, 「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見たことがある」は38.5%であった。

「危険行動 行動1, 2による触発」の「他者にむけた誹謗・中傷の書き込みをした」は3.8%, 「青少年の健全育成の観点からみた有害情報にアクセスした」は4.5%, 「アクセスをして現実的に危険な経験をした」は1.3%であった。

(2) 他者のサイトへのアクセス目的 (表4)

他者のサイトへのアクセス目的は、男女ともに「暇つぶし」(男子89.2%, 女子87.2%)が最も多く、次いで「友だちとの連絡」(男子15.1%, 女子25.7%), 「友だちに関する情報交換」(男子9.7%, 女子19.7%)であった。

5. 共感性の実態 (表5)

「共感的関心」は男子3.62, 女子4.04で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.001$)。「気持ちの想像」は男子3.20, 女子3.60で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.05$)。「個人的苦痛」は男子3.00, 女子3.17で、女子の得点の方が有意に高かった($p < 0.01$)。「ファンタジー」は性別による有意差は見られなかった。

6. インターネット利用にともなう行動と共感性との関連 (表6)

有意な関連が見られた項目のみを表6に示した。

行動1-1「他者のサイトへのアクセス」については、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「共感的関心」、「気持ちの想像」、「ファンタジー」が有意に高い値を示した。男女別にみても「気持ちの想像」と「ファンタジー」において同様の結果が示された。

行動1-2「他者のサイトへのメッセージの投稿」は、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「共感的

関心」が有意に高い値を示していた。男女別にみると、女子において同様の結果が示された。

行動2-2「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た」については、行動あり群の方が、他者志向の共感性である「気持ちの想像」が有意に高い値を示した。

危険行動-2「有害サイトにアクセスした」については、危険行動あり群の方が、他者志向の共感性である「ファンタジー」が有意に低い値を示した。

IV. 考 察

1. インターネット利用と行動の実態

(1) インターネット利用の実態

本研究への協力を得た高校生の98.0%が携帯電話を所有しており、69.0%が携帯電話使用に関する家族との制約は「ない」と回答していた。ほぼ全員がインターネット上での「他者とのやりとり」や「有害性を持つ情報」に接触する機会を持っており、接触するか否かの行動は約7割が自己に委ねられていると考えられる。また、自分自身のウェブサイトは、校則で禁止されているにもかかわらず、約半数が所有していた。校則等による禁止には、大きな効果は期待できないと考えられる。

(2) インターネット利用の性差

本研究ではインターネット利用の性差が示された。「携帯電話の長時間使用」、「自分自身のウェブサイトの所有」、「他者サイトへのアクセス」、「他者のサイトへのメッセージの投稿」は女子の割合が有意に高かった。インターネット上での人間関係の構築の仕方は男女で異なり、女子は情緒的な親密性とコミュニケーションを通じて人間関係を維持することや、男性がスローペースのコミュニケーションを好むことに対し、女性はインスタント・メッセンジャーなどに引きつけられることが指摘されている¹⁴⁾。また、女性の方が男性よりも相談支援など、オンライン上のサポートを求める傾向が強いことが報告されている¹⁵⁾。学校における情報リテラシー、情報モラル教育は、こうした性差への配慮が必要と考えられる。

(3) インターネット利用の目的から考える必要な取り組み

本研究において他者サイトへのアクセスの経験がない者は20.6%であり、女性においてはわずか8.8%であった。また他者サイトへのアクセス目的でもっとも多いのは「暇つぶし」であり、男女ともに約9割に達

表3 インターネット利用にともなう行動

行動1 「他者とのやりとり」への接触										
		n	ない 人数 (%)	ほぼ毎日ある 人数 (%)	週3～4回ある 人数 (%)	週1～2回ある 人数 (%)	月に数回ある 人数 (%)	年に数回ある 人数 (%)	無回答 人数 (%)	p ^a
行動1-1 他者のサイトへのアクセス	全	393	81(20.6)	169(43.0)	37(9.4)	28(7.1)	50(12.7)	28(7.1)	0(0.0)	***
	男	153	60(39.2)	41(26.8)	14(9.2)	8(5.2)	21(13.7)	9(5.9)	0(0.0)	
	女	240	21(8.8)	128(53.3)	23(9.6)	20(8.3)	29(12.1)	19(7.9)	0(0.0)	
行動1-2 他者のサイトへのメッセージ投稿	全	312	96(30.8)	34(10.9)	40(12.8)	34(10.9)	62(19.9)	45(14.4)	1(0.3)	**
	男	93	39(41.9)	8(8.6)	7(7.5)	7(7.5)	21(22.6)	11(11.8)	0(0.0)	
	女	219	57(26.0)	26(11.9)	33(15.1)	27(12.3)	41(18.7)	34(15.5)	1(0.5)	
行動2 「有害性をもつ情報」への接触										
行動2-1 ウェブサイト上で自分自身が誹謗・中傷を受けた	全	312	280(89.7)	0(0.0)	2(0.6)	0(0.0)	3(1.0)	18(5.8)	9(2.9)	
	男	93	86(92.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	3(3.2)	3(3.2)	
	女	219	194(88.6)	0(0.0)	2(0.9)	0(0.0)	2(0.9)	15(6.8)	6(2.7)	
行動2-2 ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た	全	312	190(60.9)	1(0.3)	9(2.9)	15(4.8)	29(9.3)	66(21.2)	2(0.6)	
	男	93	62(66.7)	0(0.0)	3(3.2)	4(4.3)	6(6.5)	17(18.3)	1(1.1)	
	女	219	128(58.4)	1(0.5)	6(2.7)	11(5.0)	23(10.5)	49(22.4)	1(0.5)	
危険行動 行動1, 2による触発										
危険行動-1 他者にむけた誹謗・中傷の書き込みをした	全	312	298(95.5)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	5(1.6)	7(2.2)	2(0.6)	
	男	93	89(95.7)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.1)	2(2.2)	1(1.1)	
	女	219	209(95.4)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	4(1.8)	5(2.3)	1(0.5)	
危険行動-2 青少年の健全育成の観点からみた有害情報にアクセスした	全	312	100(32.1)	194(62.2)	10(3.2)	4(1.3)	8(2.6)	5(5.4)	3(1.4)	p ^b
	男	93	32(34.4)	51(54.8)	5(5.4)	2(2.2)	5(5.4)	3(1.4)		
	女	219	68(31.1)	143(65.3)	5(2.3)	2(0.9)	3(1.4)			

※ p^a: 「ない」と「それ以外」の2値による性別に関する pearson のχ²検定※ p^b: 有害サイト広告を「見たことがない」、「見た」、「アクセスした」の3値による性別に関する pearson のχ²検定

※ *: p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

※ 「アクセスし危険な経験をした」は、「広告から有害サイトにアクセスした」に含まれる(再掲である)

表4 他者のサイトへのアクセス目的

	男	女	合計	p
	n = 93 人数 (%)	n = 218 人数 (%)	n = 311 人数 (%)	
友だちづくり	4(4.3)	28(12.8)	32(10.3)	*
暇つぶし	83(89.2)	190(87.2)	273(87.8)	
ストレス解消	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
友だちとの連絡	14(15.1)	56(25.7)	70(22.5)	**
授業や試験の情報交換	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
部活やクラブの情報交換	7(7.5)	9(4.1)	16(5.1)	
先生に関する情報交換	0(0.0)	1(0.5)	1(0.3)	
学校に関する情報交換	2(2.2)	5(2.3)	7(2.3)	
友だちに関する情報交換	9(9.7)	43(19.7)	52(16.7)	*

※ p : pearson の χ^2 検定※* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

註) 他者サイトへのアクセスありは312であるが, アクセス目的は無回答1を除外し n = 311で集計した。

表5 共感性下位尺度の男女別・学年別中央値

		高1	p	高2	p	高3	p	合計	p
		n = 54		n = 62		n = 37		n = 153	
	男女	n = 97		n = 67		n = 76		n = 240	
共感的関心	男	3.58(3.31~4.08)	***	3.69(3.13~4.31)	**	3.54(3.31~3.88)	***	3.62(3.31~4.08)	***
(25~75%値)	女	4.00(3.54~4.31)		4.00(3.69~4.46)		4.08(3.69~4.62)		4.04(3.69~4.46)	
気持ちの想像	男	3.20(3.00~4.00)		3.20(3.00~3.80)		3.20(3.00~3.70)	**	3.20(3.00~3.80)	*
(25~75%値)	女	3.20(3.00~3.80)		3.40(3.00~4.00)		3.80(3.20~4.20)		3.60(3.00~4.00)	
ファンタジー	男	3.00(2.17~3.38)		3.00(2.17~3.88)		3.00(2.50~3.67)		3.00(2.33~3.67)	
(25~75%値)	女	3.00(2.50~3.50)		3.50(2.83~4.00)		3.33(2.67~3.83)		3.17(2.67~3.83)	
個人的苦痛	男	2.83(2.50~3.33)		3.00(2.33~3.38)		3.00(2.58~3.17)	**	3.00(2.42~3.33)	**
(25~75%値)	女	3.00(2.50~3.50)		3.17(2.67~4.00)		3.17(2.83~3.63)		3.17(2.67~3.67)	

※ p : 性別共感性尺度に関する Mann-Whitney の U検定

※* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$ *** : $p < 0.001$

していた。文部科学省の調査においても76.8%の者が「暇つぶし」と回答していた⁴⁾。先行研究では, 変動していく情報社会, インターネットの特徴をとらえた, 安全なウェブサイトを考えていく必要があることが指摘されている¹¹⁾が, 暇つぶしに何気なく携帯電話を手に取り, 他者サイトへアクセスする者が多い状況から, 「携帯電話を活用した安全で有用な情報サイトの構築」を検討していく必要があると考えられる。

2. インターネット利用にともなう行動と共感性の関連

インターネット利用にともなう行動別に共感性下位尺度の得点をみると, 行動1-1「他者のサイトへのアクセスあり群」の方が, 他者指向型の共感性である「共感的関心」, 「気持ちの想像」, 「ファンタジー」の

得点が有意に高く, 行動1-2「他者のサイトへのメッセージ投稿あり群」の方が, 「共感的関心」の得点が有意に高かった。行動2-2「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た群」の方が「気持ちの想像」の得点が有意に高かった。共感性の得点の高い者が他者のウェブサイトに興味を示し, 多くアクセスし, ウェブサイト上で他者の感情に敏感に気づいていると考えられる。

一方, 危険行動-2「有害サイトにアクセスした群」の方が, 「ファンタジー」の得点が有意に低かった。しかし, 本研究において「有害サイトにアクセスした群」は10例と少なく, この結果のみから『他者志向型の共感性であり架空の他者に感情移入する「ファンタジー」が高いと, 他者のサイトにアクセスしても有害

表6 行動別共感性下位尺度の中央値

		行動あり		行動なし		p
		n	中央値 (25%~75%)	n	中央値 (25%~75%)	
行動1-1 「他者のサイトへのアクセス」						
共感的関心	合 計	312	4.00(3.54~4.38)	81	3.61(3.23~4.15)	***
	男	93	3.62(3.31~4.08)	60	3.54(3.15~3.92)	
	女	219	4.08(3.69~4.38)	21	3.84(3.46~4.61)	
気持ちの想像	合 計	312	3.50(3.00~4.00)	81	3.20(2.80~3.60)	***
	男	93	3.40(3.00~4.00)	60	3.20(3.00~3.55)	*
	女	219	3.60(3.00~4.00)	21	3.20(2.80~3.60)	*
ファンタジー	合 計	312	3.17(2.67~3.83)	81	2.83(2.17~3.42)	***
	男	93	3.17(2.67~3.92)	60	2.83(2.17~3.33)	*
	女	219	3.17(2.67~3.83)	21	3.00(1.83~3.58)	
行動1-2 「他者のサイトへのメッセージ投稿」						
共感的関心	合 計	215	4.00(3.69~4.46)	96	3.77(3.38~4.08)	***
	男	54	3.65(3.31~4.23)	39	3.53(3.31~4.23)	
	女	161	4.08(3.69~4.46)	57	3.92(3.54~4.15)	**
行動2-2 「ウェブサイト上で他者が誹謗・中傷を受けているのを見た」						
気持ちの想像	合 計	120	3.60(3.20~4.15)	190	3.40(3.00~4.00)	**
	男	30	3.50(3.00~4.00)	62	3.30(3.00~3.80)	
	女	90	3.80(3.20~4.20)	128	3.40(3.00~4.00)	**
危険行動-2 「有害サイトにアクセスした」						
ファンタジー	合 計	10	2.66(2.50~3.17)	294	3.25(2.66~3.83)	*
	男	5	3.17(1.50~3.33)	83	3.17(2.75~3.83)	
	女	5	2.67(2.50~2.67)	211	3.33(2.67~3.83)	

※ p : 性別共感性尺度に関する Mann-Whitney のU検定

※* : p < 0.05 ** : p < 0.01 *** : p < 0.001

※有意な関連が見られた項目のみ記載

サイトへはアクセスしにくい』と断定することはできない。今後、本研究で示された結果を仮説としたさらなる研究、すなわち、インターネット利用にともなう危険行動と共感性に関する多数例での詳細な研究が求められる。

現在の学校教育は、インターネットを活用していく方向で進んでいる。共感の発達とは0歳から始まり、発達段階によって効果的な関わりはあるものの、思春期を迎えてからも十分に育まれる。社会的判断を下したり、他者の考えを自己に取り入れ総合判断する共感の出力中枢は前頭前野であるといわれているが、前頭前野は思春期もそれ以降も働き続ける¹⁶⁾。今後、インターネット利用にともなう危険行動と共感性の関連をより詳細に検討し、その関連を明らかにしていくことは、共感性強化の特徴をとらえた方法論を学校保健や学校教育実践の場に取り入れるための一助となり、青少年のインターネット利用にともなう逸脱行動や犯罪の抑制につながっていくと考えることができるのではないだろうか。

3. 本研究の限界と可能性

本研究は、自記式質問紙調査でありインターネット利用の実態などを必ずしも正確に反映していない可能性は否定できない。また、実際に危険行動を起こしている者のサンプルが少なく、共感性との関連を論じるには十分ではないことが否定できない。しかし今回得られたインターネット利用における行動と共感性との関連は、今後の研究に新しい視点を加えた。今後、サンプル数を増やし詳細な研究を行うことにより、安全なインターネット活用を実現できる可能性があると考えられる。

V. 結 語

高校生のインターネット利用にともなう行動の実態を把握するとともに行動と共感性との関連を検討した。他者志向型の共感性が高いと、インターネット利用にともなう行動が盛んになるが危険行動にはつながりにくい可能性が示唆された。情報リテラシー、情報モラル教育に加え、共感性を育む方法論を取り入れた

アプローチを行いつつ、メディア空間をデザインしていくことが求められる。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力をいただきました多くの方々にお礼を申し上げます。研究にご協力いただいた高等学校の先生方、地域の教育委員会、保健センターの職員の皆さま、研究にご参加いただいた対象者の皆さま、そして、阿部真理子先生に深謝いたします。

本研究は第58回日本小児保健学会（新潟）にて発表したものである。

文 献

- 1) 警視庁. バーチャル社会の弊害から子どもを守るために 最終報告書. 東京: バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会, 2006: 1-35.
<http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen29/finalreport.pdf> (2011年1月10日アクセス).
- 2) 内山絢子. 出会い系サイトと若者の規範意識. 思春期学 2006; 24 (2): 319-326.
- 3) 下田博次. 子どものインターネットリテラシー. インターネット白書 2007: 318-321.
- 4) 文部科学省スポーツ・青少年局青少年課. 青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査について. 青少年問題 2008; 55 (631): 24-27.
- 5) 内海春代. 情報化社会における青少年の「孤独」—ケータイでつながる—. 情報化社会・メディア研究 2008; 5: 61-70.
- 6) 赤坂瑠衣, 坂本章. 携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響—パネル調査による因果関係の推定. パーソナリティ研究 2008; 16 (3): 363-377.
- 7) 国分明男. 青少年を取りまく有害サイトについて. 青少年問題 2008; 55 (630): 26-31.
- 8) 森山 潤, 鬼藤明仁, 高田美那子, 他. インターネット使用に対する高校生の加害的意識. 兵庫教育大学研究紀要 2008; 33: 127-133.
- 9) 文部科学省. 「教育の情報化に関する手引き」について. 2009a. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm (2009年12月12日アクセス).
- 10) 町沢静夫. いじめ・虐待そして犯罪の深層 失われていく共感性. 東京: 丸善株式会社, 2007: 25-113.
- 11) 渡辺多恵子, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 他. 子どもにとつて安全なインターネット環境の整備に関する研究—フォーカス・グループ・インタビュー調査より—. こども環境学研究 2010; 6 (3): 31-36.
- 12) 登張真穂. 青年期の共感性の発達: 多次的視点による検討. 発達心理学研究 2003; 14 (2): 136-148.
- 13) Davis MH. Measuring individual differences in empathy: evidence for a multidimensional approach. Journal of Personality and Social Psychology, 1983; 44 (1): 113-126.
- 14) Boneva B, Kraut R, Frohlich D. Using e-mail for personal relationships: the difference gender makes. American Behavioral Scientist, 2001; 45 (3): 530-549.
- 15) Mickelson KD. Seeking social support: parents in electronic support groups. In S. Kiesler (ed), Culture of the Internet. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 1997: 157-178.
- 16) 納富 貴, 納富 壽, 入江慎一郎, 他. 痛みと共感. 思春期学 2009; 27 (1): 45-52.

[Summary]

The purpose of this study is to clarify the status of Internet usage by high school students and to explore the relationship between this status and their empathy. The participants comprised 422 students. A questionnaire was administered to the students to gauge their Internet usage and empathy. Completed questionnaires were obtained from 96.8% of the participants.

The results showed that lively behavior on the Internet (visit to someone's Internet website, post the messages on someone's Internet website, etc...) was related other-oriented empathy. Also there were negative relationships between risk behavior on the Internet (inspired by hazardous commercial message, visit to hazardous site) and other-oriented empathy.

The findings of the study suggest that too little other-oriented empathy have a significantly higher risk of Internet usage. A new approach is required to develop the empathy of the students.

[Key words]

safe internet, media literacy, moral, empathy, high-school student

子どもにとって安全なインターネット環境の 整備に関する研究

—フォーカス・グループ・インタビュー調査より—

SAFE INTERNET ENVIRONMENT FOR CHILDREN

— USING A FOCUS GROUP INTERVIEW —

渡辺多恵子*、篠原亮次*、杉澤悠圭*、童連*、田中笑子*、森田健太郎*、Amarsanaa Gan-Yadam、
平野真紀*、富崎悦子*、恩田陽子*、望月由妃子*、川島悠里*、安梅勅江**

Taeko WATANABE*, Ryoji SHINOHARA*, Yuka SUGISAWA*, Lian TONG*, Emiko TANAKA*, Kentaro MORITA*,
Amarsanaa Gan-Yadam*, Maki HIRANO*, Etsuko TOMISAKI*, Yoko ONDA*, Yukiko MOCHIZUKI*, Yuri KAWASHIMA*, Tokie ANME**

The purpose of this study was to clarify the factors to make a safe Internet environment for children. A focus group interview was conducted with nine IT-specialists aged 27 to 49 years for 90 minutes.

Factors for using the Internet appropriately and safely were divided into individual factors and environmental factors. The individual factors were “Media literacy”, “Moral in information science” and “Empathy”. The environmental factors were “Ethics law in information society” and “Design the new media space”.

These results suggested that if students were encouraged to improve their empathy, literacy, and moral for information, they enhanced their abilities to use the Internet more appropriately and safely. New media space with ethics law will be expected to establish for safe Internet environment for children.

Keywords: *Safe Internet, Online community, Media literacy, Moral, Empathy, Environmental factors*
インターネット、メディアリテラシー、情報モラル、共感性、情報倫理、オンラインコミュニティ

1. 緒言

近年、青少年がインターネット上の違法・有害情報に触発されたことにより発生した犯罪や、出会い系サイトと呼ばれるウェブサイトにアクセスしたことをきっかけに買春や暴行などの犯罪に巻き込まれた例が多く報告されている^{1,2)}。「学校裏サイト」や「プロフ」と呼ばれるウェブサイトが出現し、誹謗・中傷やわいせつ情報の発信が著しくなり、インターネット上でいじめなどの問題が深刻化した³⁾。文部科学省による青少年が利用する学校非公式サイトに関する調査では、学校非公式サイト・スレッド数は38,260件(平成20年1月～3月現在)におよび、その半数に誹謗・中傷の言葉が含まれていた⁴⁾。

青少年のインターネット利用に関する研究は数多く行われ、インターネット利用における心理的効果などが検討されている^{5,6,7)}。また、青少年がインターネット上に氾濫している違法・有害情報に容易にアクセスできる状況があるこ

と⁸⁾や、違法・有害情報にアクセスし自分や友人が被害を受けた経験がある状況^{9,10)}などから、情報リテラシーの必要性が指摘されている。さらに、情報モラルに関する知識の習得によってインターネット利用にともなう加害的意識が抑制されることや¹¹⁾、インターネット被害への意識の状況などを加味した指導が必要である^{4,12)}など、具体的な情報モラル教育の必要性が指摘されている。そして、学校教育、学校保健の現場では、情報リテラシー、情報モラル教育に関する積極的な取り組みがなされている。しかし、逸脱行動や犯罪は依然としてなくならず、そのような状況においても、学校における教育の情報化は、ますます推進される状況である⁴⁾。そこで我々は、インターネット利用にともなう逸脱行動や犯罪を抑制し、インターネットを安全に活用するために必要な要因を検討する必要があると考えた。

インターネット利用における実態や関連要因は、量的研究によって検証する方法があるが、具体的な仮説の設定や、調

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科 大学院生
** 筑波大学大学院人間総合科学研究科 教授

* Graduate School of Comprehensive Human Sciences University of Tsukuba
** Graduate School of Comprehensive Human Sciences University of Tsukuba Ph.D.

査項目の明確化のためには、現状を質的に把握する方法が適している^{13, 14)}。

本研究では、インターネットの開発及び普及の専門家に対してフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施した。そして、専門家の「なまの声」からインターネットの特徴を質的に把握し、インターネットを安全に活用するために必要な要因を検討することを目的とする。

II. 研究の方法

1. 対象者及び調査日

青少年のインターネット利用にともなう問題については、複雑高度化するインターネットのメディア特性理解と業界構造の現実理解が無ければ解決に繋がる結果は期待しがたい¹⁵⁾。このことから、本研究の対象は、「インターネットの特徴」の把握が可能になるようインターネットを活用したビジネスを展開しているベンチャー企業の代表者とした。対象者のリクルートは、インターネット業界に精通しているIT企業の代表者に依頼し、リクルートする人数は、グループダイナミックスが最も起こりやすい7～9名程度^{13, 14)}とした。調査日は、平成20年8月27日とした。

2. データの収集及び調査項目

データの収集には、フォーカス・グループ・インタビュー法を用いた。調査場所は静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダとビデオカメラを設置し記録した。また、情報を確実に記録するため、観察者による観察記録を作成した。観察者は目立たない場所で観察及び記録を行った。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで、名前が表に出ないことを保証し、安心して話ができるよう配慮した。調査時間は1時間30分であった。

調査項目は「インターネットの肯定的な特徴」「インターネットの否定的な特徴」「今後の活用への提案」の3点とした。インタビュアーは、参加者の自由な発言やグループダイナミックスを効果的に促進できるようインタビューガイドを作成し、事前トレーニングを積んでからインタビューに臨んだ。

3. 分析の方法

まず、ICレコーダに録音された記録から正確な逐語記録を作成した。次に、観察記録とビデオカメラの録画記録による参加者の反応を加味しながら、テーマに照合して重要な言葉（重要アイテム）を抽出した。

抽出した重要アイテムはシステム構造分析を用いて類型化し、類型ごとにサブカテゴリと重要カテゴリを抽出した。システム構造とは、「個」と「環境」の要素で人間発達を生態学的に捉える枠組みである¹⁶⁾。

重要アイテムの類型化、及び、抽出したサブカテゴリ、重要カテゴリについては、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受け、重要アイテムの意味すること

と、類型化及びカテゴリの抽出にずれがないことを確認した。

4. 倫理的配慮

対象者には事前に、インタビューの目的、方法、名前や所属などの情報が外部に出ないこと、インタビューに参加したことでいかなる不利益も受けないことを口頭で説明し、インタビュー参加への同意を得た。ICレコーダ及びビデオカメラによる記録は、記録をとる理由を説明し、参加者の承諾を得た上で実施した。インタビュー中は番号札を参加者の名前の代わりにすることで名前が表に出ないことを保証した。なお、録音及び録画記録は鍵付きのケースに保管した。

III. 結果

グループインタビューへの参加者は9名（男性7名、女性1名）、年齢は27～49歳であった。インターネットを安全に活用するための要因は、【個の要因】と【環境要因】に分類された。【個の要因】には《情報リテラシー》《情報モラル》《共感スキル》の重要カテゴリが抽出され、【環境要因】には《情報社会の倫理構築》と《新たなメディア空間のデザイン》の重要カテゴリが抽出された（表1）。

1. 個の要因

（1）情報リテラシー

《情報リテラシー》には3つのサブカテゴリが抽出された。

1つ目は《情報活用の実践力》である。「ある一定レベルを義務教育で通過しないとインターネットを使えないようにする必要がある。」「どうやって活用するかを学んでいかないと、気づいたら悪いことをしている可能性がある。」などの発言より、『一定レベルの教育と整備』『活用方法の学習』の重要アイテムが抽出された。

2つ目は《情報の科学的理解》である。「情報量が多く買いい物も価格の比較ができる。」「情報量が多すぎ、本質の情報が誰にも見つからずに終わって、また違う情報が増えていく。」「情報の価値判断が個人にゆだねられる、情報自体を自分でえらぶ時代になった。」などより、『莫大な情報量』『信頼性や価値の低い情報』『個に委ねられた情報の価値判断』の重要アイテムが抽出された。

3つ目は《情報社会に参画する態度》である。「活動範囲が広がった。」「リアルに活動しなければできなかったことが出来るようになった。」「障害をもっている方などに新しいワークスタイルを与えた。」などより、『活動範囲の拡大』『生活のしやすさの向上』『新しいワークスタイル』の重要アイテムが抽出された。

（2）情報モラル

《情報モラル》には2つのサブカテゴリが抽出された。

1つ目は《安全への知恵》である。「子どもに携帯電話を渡すと料金がかさんだり、変なものを見ていたり、思わぬ被害を被ったりする。」「うちのすぐ近くでネットが原因の殺人

	重要カテゴリ	サブカテゴリ	重要アイテム
個の要因	情報スキル	情報活用の実践力	一定レベルの教育と整備 活用方法の学習
		情報の科学的理解	莫大な情報量 信頼性や価値の低い情報 個に委ねられた情報の価値判断
		情報社会に参画する態度	活動範囲の拡大 生活のしやすさの向上 新しいワークスタイル
	情報モラル	安全への知恵	多額の使用料金の発生 有害性をもつ情報 思わぬ被害 凶器ともなり得るインターネット
		ルールやモラルの理解と遵守	ユーザーモラルの危機 匿名性の高さが招く悪事 情報操作のしやすさが招く悪事 ルールを守る必要性
	共感スキル	対人関係スキル	他者との安易な出会いと繋がり 他者に対する判断力や想像力の欠如 思考能力や文章力の欠如
		自己管理スキル	インターネット情報の影響の大きさ インターネット情報への依存・固着
環境要因	情報社会の倫理の構築	社会的規範	インターネットのルール 制限のない情報発信と活用
		法律	法律も政治もついていけない 法律も国も超えている
	新たなメディア社会のデザイン	スピード	情報の速度 環境変化の速度 コミュニケーション速度
		影響力	情報による触発 ピアプレッシャー
		消費者生成メディア (CGM)	個人が不特定多数に発信 形を自由に変えて発信
		双方向性	送り手と受けてが双方向 コミュニケーション
		出会い	出会いのきっかけ 出会いの広がり

表1 インターネットを安全に活用するために必要な要因

事件があったりインターネットは凶器にもなり得る。」などから、『多額の使用料金の発生』『有害性をもつ情報』『思わぬ被害』『凶器ともなり得るインターネット』などの重要アイテムが抽出された。

2つ目は＜ルールやモラルの理解と遵守＞である。「掲示板に好き勝手かくけど、実際の家やポストにはかいたりしない。ネットは、そういう行動を容易に起こしやすい。」「インターネットはルールさえ守ればよい形でひろがる。」などより、『ユーザーモラルの危機』『匿名性の高さが招く悪事』『情報操作のしやすさが招く悪事』『ルールを守る必要性』などの重要アイテムが抽出された。

(3) 共感スキル

《共感スキル》には2つのサブカテゴリが抽出された。

1つ目は＜対人関係スキル＞である。「出会いが増えたんだけど、それをうまく活かせる人と活かさない人で、だいぶ変わってくる。」「技術を力として持っているほうが、判断したりとか想像したりとかするよりも、価値が上になっていくような気がし、そこに危うさを感じる。」「思考能力も文章力も無くなるんじゃないか、低くなっているんじゃないかと思うんですよ。」などより、『他者との安易な出会いと繋がり』の

促進』『他者に対する判断力や想像力の欠如』『思考能力や文章力の欠如』などの重要アイテムが抽出された。

2つ目は＜自己管理スキル＞である。「情報が多いので、知らなくていい情報も知ってしまう。知らなければ何も無いのに、知ってしまったから、なんとなくやってしまうみたいなの。」「ネットの情報を鵜呑みにしちゃいけないんだろうと思いつつも、他に頼るものが無くなってきてしまっている。」などより、『インターネット情報の影響の大きさ』『インターネット情報への依存・固着』の重要アイテムが抽出された。

2. 環境要因

(1) 情報社会の倫理の構築

《情報社会の倫理の構築》には2つのサブカテゴリが抽出された。

1つ目は＜社会的規範＞である。「交通ルールはできているけど、インターネットルールはできていない。」「情報の無限活用が可能になって、時、場所、相手、内容を選ばない。」などより、『インターネットルール』『制限のない情報発信と活用』の重要アイテムが抽出された。

2つ目は＜法律＞である。「法律も国も超えてしまうの

がインターネットだよね。たとえば、googleのストリートビューみたいなものもあるし。みんなついてこれないから、やっちゃったもんがち。」などより、『法律』『政治』などの重要アイテムが抽出された。

(2) 新たなメディア空間のデザイン

《新たなメディア空間のデザイン》には5つのサブカテゴリが抽出された。

1つ目は<スピード>である。「情報の速さとか、新しいサービスとってところに注目して仕事をしている。」「技術革新だったり利用の技術だったり、(ネット環境が変わっていく)スピードが速すぎるんだよ。」「出会いのスピードもあがってる。」などより、『情報の速度』『環境変化の速度』『コミュニケーション速度』などの重要アイテムが抽出された。

2つ目は<影響力>である。「知らなければ何も無いのに知ってしまったから何となくやってしまう。」「インフラとして整っていくと、自分だけ使わないのが許されなくなった。」「などより、『情報による触発』『ピアプレッシャー』などの重要アイテムが抽出された。

3つ目は<消費者生成メディア (CGM)>である。「今までマスメディアが大きな力を持っていたのが個人でできる。それもものすごいスピードで。」「形を自分の好きに変えて、情報の無限活用を可能にした。」などより、『個人が不特定多数に発信』『形を自由に変えて発信』などの重要アイテムが抽出された。

4つ目は<双方向性>である。「情報を送る側と受ける側という機能があったが、それが双方向になった。」「インターネットのすごいところはコミュニケーションである」などより、『送り手と受け手が双方向』『コミュニケーション』などの重要アイテムが抽出された。

そして、5つ目は<出会い>である。「インターネットは、本来出会うことの無い人と出会うきっかけをつくと思う。」などより、『出会いのきっかけ』『出会いの広がり』などの重要アイテムが抽出された。

IV. 考察

1. データの信頼性と妥当性

グループインタビュー法によるデータの信頼性及び妥当性を高めるには、対象メンバーの選定、インタビュー項目の設定、妥当性のかく乱要因の除去、インタビュアーのスキル、正確な記録が必要であるとされている⁷⁾。本研究では下記4点を厳密に実施した。

(1) 対象者の選定

対象者の設定は、インターネット業界に精通しているIT企業の代表者に依頼し、研究のテーマである「インターネットの持つ特徴」の把握が可能になるよう、インターネットを活用したビジネスを展開しているベンチャー企業の代表者であることを条件として選出した。

(2) インタビュー項目

インタビュー項目は、対象者が表現しやすいよう平易な言葉で設定し、参加者がインタビュー中に自由に意見を述べる事が容易なように配慮した。

(3) グループインタビューの進行

インタビュアーは、インタビューガイドを作成し、事前トレーニングを積んでからインタビューに望み、できるだけ参加者の自由な発言を促し、効果的なグループダイナミクスにより、顕在的および潜在的なニーズを把握できるように配慮した。

(4) 分析

逐語記録と逐次観察記録から抽出した重要アイテム、重要カテゴリ、サブカテゴリの妥当性について、複数の専門職間で確認した。また、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。

2. インターネットを安全に活用するために必要なスキル

(1) 個の要因

【個の要因】には《情報リテラシー》《情報モラル》《共感スキル》の3つの重要カテゴリが抽出された。青少年のインターネット利用に関するこれまでの研究でも、情報リテラシー^{9, 10)}や、情報モラル^{11, 12)}に関する教育の必要性が指摘されてきた。そうした状況と、これまでの取組の評価から、文部科学省は平成21年3月に、これまでの手引きを構成、内容ともに大きく見直した「教育の情報化に関する手引き」を作成している。これには「情報教育の体系的な推進」と「学校における情報モラル教育の推進と家庭・地域との連携」という項目が大きくとりあげられ、情報活用能力の育成と情報モラル教育に関わる内容が詳しく解説されている⁴⁾。つまり、インターネット利用における問題行動が指摘されつつも、情報化は今後ますます進展し、学校における教育の情報化にも一層の充実が図られる状況である。そして、教育の情報化が円滑かつ確実に実施されるための取組の中として取り上げられているのが、情報教育と情報モラル教育の推進である。

本研究において【個の要因】の1つ目の重要カテゴリとして抽出された《情報リテラシー》は、<情報活用の実践力><情報の科学的理解><情報社会に参画する態度>の3つのサブカテゴリで構成されており、これは文部科学省が推進する情報教育の内容に含まれる。また、同様に抽出された2つ目の重要カテゴリである《情報モラル》は、<安全への知恵><ルールやモラルの理解と遵守>の2つのサブカテゴリで構成され、文部科学省が推進する情報モラル教育の内容に含まれる。学校保健、学校教育の現場で推進されている情報教育と情報モラル教育の重要性が改めて示唆されたと言える。

さらに本研究では、【個の要因】の3つ目の重要カテゴリとして、《共感スキル》が抽出された。昨今の青少年の犯罪の根底には、共感性の欠如(喪失)があることが指摘されている¹⁷⁾。インターネット上の誹謗・中傷やいじめ、違法・有害

情報を掲載したサイトへのアクセスなどのインターネット利用における危険行動については、情報リテラシーや情報モラルに関する教育の必要性が指摘されているものの、共感性を育むアプローチの必要性は十分には検討されておらず、あまり指摘されてこなかった。今回、インターネットを安全に活用するための新たな働きかけの視点として《共感スキル》が示唆された。

また、ここで注目したいのは、本研究において抽出された《共感スキル》は、＜対人関係スキル＞と＜自己管理スキル＞の2つのサブカテゴリで構成されていることである。人の共感性については、これまで、認知・感情面からの定義がなされてきた。Mehrabianらは、共感性を「他者が知覚した感情的な経験を、他者の立場に立って感じることににより生じる感情的な反応」と定義した¹⁸⁾。Hoffmanは、自分自身の状況よりも、他者の状況におかれた場合の感情である共感が人との繋がりを生み出すことを5つの共感が喚起される過程から検討し、共感の発達理論を唱えた¹⁹⁾。Davisはこれらの理論をふまえ、共感性を多次元的な構造として捉え、Perspective-Taking (PT)、Fantasy (FS)、Empathic Concern (EC)、Personal Distress (PD)の4因子からなるInterpersonal Reactivity Index (IRI)を開発した²⁰⁾。PT、FS、ECは他者志向の概念であり、PDは自己志向の概念である。本研究において抽出された《共感スキル》も、他者志向の性質をもつ＜対人関係スキル＞と、自己志向の性質をもつ＜自己管理スキル＞で構成されていた。今後、対策を進めていくにあたって、共感の発達理論や共感性の多次元的概念を考慮することは、有効な手段のひとつであると考えられる。さらに、自己志向の概念であるPDは、青年期において状況によって低下することが指摘されている²⁰⁾。＜自己管理スキル＞は低下する可能性があるという、青年期の脆弱性を考慮した上で、共感性強化の特徴をとらえた方法論を、学校保健や学校教育実践の場に取り入れることが、青少年のインターネット利用にともなう逸脱行動や犯罪を抑制する可能性につながっていくと考えることもできるのではないだろうか。

(2) 環境要因

【環境要因】には、《情報社会の倫理の構築》と《新たなメディア空間のデザイン》の2つの重要カテゴリが抽出された。

まず、情報社会の倫理については、これまで、個人情報保護とセキュリティ^{21, 22)}や、著作権問題^{23, 24)}、商取引²⁵⁾、ポルノグラフィの規制²⁶⁾などから検討されてきているが課題を残している。本研究では《情報社会の倫理の構築》として＜社会的規範＞と＜法律＞が抽出された。情報モラルは「社会の人間関係を維持し、秩序を保ち、社会の利益を守るための規範」に対する態度や行動であるとされているが²⁷⁾、インターネットを安全に活用するために必要な社会的規範や法律とは具体的にどのようなものなのか、どのように構築していいのかを検討していく必要がある。

次に、日本のメディア空間の問題点として二極化があげられている。プライベートなやりとりからなる「極私圏」と、モノやサービスの売買、交換からなる「商業圏」に二極化し、中心にあるべきである「子どもや市民が自律的に関わることのできるパブリックなコミュニケーション圏」がきわめて貧弱な状況に置かれている¹⁵⁾。「商業圏」では、インターネットの特徴やメディア社会の動きを的確に捉えた巧みな商戦略が展開され、個は商業圏のなかで逸脱行動や犯罪に巻き込まれている状況である。本研究においては、《新たなメディア空間のデザイン》のサブカテゴリとして、＜スピード＞＜影響力＞＜消費者生成メディア＞＜双方向性＞＜出会い＞が抽出されたが、これらの特徴はメディア社会、あるいはそれを取り囲む社会背景によって変動していくことが考えられる。今後は、変動していく特徴を的確にとらえたパブリックなコミュニケーション圏をデザインしていく必要があると考えられる。本研究において抽出されたメディア空間の特徴を意識しつつ、訪問者（であり情報提供者）である青少年に肯定的な感情反応がおこるような空間を積極的にデザインしていく必要があると考える。肯定的な感情反応が起こる場所に人は足を運び、互いに（双方向性、出会い）影響（影響力）しあいながら、メディア空間を構築していく（消費者生成メディア）。情報を提供していく場合も、「どのような情報（知識）を提供するか」よりも、訪問者であり情報提供者である者に肯定的な感情反応がおこるような仕組みを考えていくことが重要であり、それが、変動していく特徴を的確にとらえたパブリックなコミュニケーション圏であると考えられる。

インターネットは、真の自分を表現でき、他者とより良い関係を形成し、人を成長させる場となる可能性があることが論じられている²⁸⁾。情報化が今後ますます推進される状況の中では、メディアを批判的に検討しつつも、メディアを成り立たせている諸要因を操作可能なものとして捉え直し、建設的に構想しデザイン必要がある¹⁵⁾と言えよう。

3. 本研究の可能性と限界

本研究は、限られた人数の対象者による調査であり、数値による調査の妥当性を統計学的理論に基づいて評価することは困難である¹³⁾。これは本研究の限界である。しかし、今後、本研究の結果をもとに量的な側面からの研究を行っていくことで、本研究の信頼性、妥当性を検証していけると考えられる。また、本研究において示唆された、【個の要因】と【環境要因】についてさらに研究をすすめていくことによって、安全なインターネット利用を実現できる可能性がある。

V. まとめ

インターネットを安全に活用するための要因は、【個の要因】と【環境要因】に分類された。【個の要因】としては、《情報リテラシー》《情報モラル》《共感スキル》が抽出された。今後、従来の情報リテラシー教育、情報モラル教育に

加え、共感性を育む視点からのアプローチを取り入れた対策を取り入れていくことで、インターネットを安全に活用することに効果をもたらす可能性があると考えられる。【環境要因】としては、《情報社会の倫理の構築》と《新たなメディア空間のデザイン》が抽出された。インターネット利用における規範や法について検討していくとともに、変動していく情報社会、インターネットの特徴をとらえた、安全なメディア空間をデザインしていく必要があると考えられる。

（謝辞）

本研究にご協力いただきました、株式会社サンロフトの松田敏孝社長と、グループインタビューにご参加いただいた対象者の皆さまに深謝いたします。

VI. 文献

- 1) 警視庁バーチャル社会のもたらす弊害から子どもを守る研究会：バーチャル社会の弊害から子どもを守るために―最終報告書, <http://www.npa.go.jp/safetylife/syonen29/finalreport.pdf>, 2009年10月11日アクセス。
- 2) 内山絢子：出会い系サイトと若者の規範意識, 思春期学 24(2), 319-326, 日本思春期学会, 2006.6.
- 3) 下田博次：子どものインターネットリテラシー, インターネット白書2007, 318-321, 財団法人インターネット協会, 2007.6.
- 4) 文部科学省：「教育の情報化に関する手引き」について, http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm, 2009年9月28日アクセス。
- 5) 緒方泰子, 和泉由貴子, 北池 正：高校生の孤独感と携帯メールの利用および友人とのネットワークとの関連, 公衆衛生雑誌 53(7), 480-491, 日本公衆衛生学会, 2006.7.
- 6) 内海春代：情報化社会における青少年の「孤独」―ケータイでつながる―, 情報化社会・メディア研究 5, 61-70, 放送大学情報化社会研究会, 2008.11.
- 7) 赤坂瑠衣, 坂本章：携帯電話の使用が友人関係に及ぼす影響―パネル調査による因果関係の推定, パーソナリティ研究 16(3), 363-377, 日本パーソナリティ心理学会, 2008.3.
- 8) 国分明男：青少年を取りまく有害サイトについて, 青少年問題 55(630), 26-31, 財団法人青少年問題研究会, 2008.4.
- 9) 渡邊典子, 久保田美雪, 石崎トモイ, 他：中・高・大学生における携帯電話の使用状況と生活環境への影響に関する調査, 新潟青陵大学紀要 8, 31-40, 2008.3.
- 10) 池田かよ子, 久保田美雪, 渡邊典子：高校生における携帯電話と性意識, 性行動について, 新潟青陵大学紀要 4, 187-194, 2004.3.
- 11) 森山潤, 鬼藤明仁, 高田美那子, 他：インターネット使用に対する高校生の加害的意識, 兵庫教育大学研究紀要 33, 127-133, 2008.9.
- 12) 森山潤, 鬼藤明仁, 高田美那子, 他：インターネット被害に対する高校生の不安―メディアの利用状況との関連性に焦点をあてて, 兵庫教育大学研究紀要 32, 107-113, 2008.2.
- 13) 安梅勅江：『グループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開』, 医歯薬出版株式会社, 2001, 1-40.
- 14) 安梅勅江：『グループインタビュー法Ⅱ/活用事例編 科学的根拠に基づく質的研究法の展開』, 医歯薬出版株式会社, 2003, 16-19.
- 15) 水越 伸：『コミユナルなケータイ-モバイル・メディア社会を編みかえる』, 株式会社岩波書店, 2007, 5-68.
- 16) 安梅勅江：『コミュニティ・エンパワメントの技法―当事者主体の新しいシステムづくり』, 医歯薬出版株式会社, 2005, 2-22.
- 17) 町沢静夫：『いじめ・虐待そして犯罪の深層 失われていく共感性』, 丸善株式会社, 2007, 25-113.
- 18) Mehrabian, A, Norman, E : A measure of emotional empathy, Journal of personality 40(4), 525-543, 1971.6.
- 19) Hoffman, M, L. : 『Empathy and moral development implications for caring and justice』, Cambridge University Press, 2000, 1-110.
- 20) Davis, M. H. : Measuring individual differences in empathy—evidence for a multidimensional approach, Journal of Personality and Social Psychology 44(1), 113-26, 1983.
- 21) 張 蕾, 中村 純, 隅谷孝洋, 富田達郎：ネットワーク社会におけるセキュリティと情報倫理, 情報処理学会研究報-コンピュータと教育研究会報告 2008(13), 65-69, 2008.
- 22) 岡村久道：プライバシーと個人情報保護の現状と課題, 電子情報通信学会技術研究報告-SITE 技術と社会・倫理 107(490), 45-48, 2008.
- 23) 山田尚志, 石原 淳, 加藤 拓：マルチメディア時代のコピープロテクション, 電子情報通信学会論文誌 AJ87-A(6), 734-745, 2004.
- 24) 近藤佐保子, 南雲浩二：ネットワークにおける現行著作権制度の問題と検討―ファイル共有ソフト(Winny 事件)を中心として, 電子情報通信学会技術研究報告-SITE 技術と社会・倫理 106(526), 39-46, 2004.
- 25) 大沼友紀恵：インターネット・オークションの法律問題, 経営情報学会誌 15(2), 101-109, 2006.
- 26) 奥村 徹：インターネット上の児童ポルノの擬律, 情報処理学会研究報告-EIP 電子化知的財産・社会基盤 2003(17), 11-18, 2003.
- 27) 平松琢弥：ネットワーク社会の情報モラル―21世紀の社会基盤, 熊本大学文学部論叢 100, 175-193, 2009.
- 28) Bargh, J. A., McKenna, K. Y. A., Fitzsimons, G. M. : Can You See the Real Me? Activation and Expression of the “True Self” on the Internet, Journal of Social Issues 58(1), 33-48, 2002.

20●/●/●投稿受付、20●/●/●採用決定

報 告

夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所の
支援的役割に関する考察

— 育児環境の実態から —

渡辺多恵子¹⁾, 田中 笑子¹⁾
富崎 悦子¹⁾, 安梅 勅江²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、育児環境の実態から、夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所が担う支援的役割について考察することである。保育所設置基準を満たして認可され、厚生労働省の延長保育促進事業の基準に基づく19時以降に及ぶ保育を実施している全国の保育所(41所)に在籍する子どもの養育者2,232名を対象として自記式質問票調査を行った。保育所は子どものすこやかな発達を促すかわりを子どもの発達状態に合わせて日常的に提供し、子どものすこやかな発達を支える役割を担っていた。夜間に及ぶ長時間保育に携わる保育士は、養育者のサポートを通じ、子どもに関する深刻な問題の予防に寄与してきた可能性が示唆された。

Key words : 長時間保育, 保育の質, 保護者サポート, 養育環境, 育児ストレス

I. 緒 言

近年、少子化問題の解決に向け、「働き方の見直しによる仕事と生活の調和の実現」と「就労と子育ての両立、家庭における子育てを包括的に支援する枠組みの構築」を両輪とした取り組みの必要性が指摘された。保育所には、就労形態の多様化に対応した延長保育や夜間・休日保育などの保育サービス、待機児童を解消するための取り組みの推進などが求められるようになった¹⁾。

平成20年改訂の保育所保育指針では保育の質の向上が強調された。そして、これを受けた保育所の実態を明らかにする大規模調査では、家族の基本的機能や地域関係が失われつつあるな

かで、子どもの育ちを支援する役割と機能が保育所に期待される一方にあるマンパワー不足等の課題が報告された²⁾。

以上のように質の確保された保育の充実が求められつつも、保育所を利用する子どもと養育者に対して保育所が担っている支援的役割を検討した研究は数少ない。そこで、本研究では、保育所を利用する子どもの育児環境の実態を明らかにする中から、夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所が担ってきた支援的役割について考察することを目的とした。

Supportive Role of Nursery Staffs in the Authorized Nurseries for Extended and Night Care
from a Survey Focusing on Child Care Environment

(2137)

Taeko WATANABE, Emiko TANAKA, Etsuko TOMISAKI, Tokie ANME

受付 09. 5. 7

採用 09.12.13

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科(大学院生)

2) 筑波大学大学院人間総合科学研究科(研究職)

別刷請求先: 渡辺多恵子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1

Tel/Fax : 029-853-3436

II. 対象および方法

1. 対象者

本研究の対象は、保育所設置基準を満たして認可され、厚生労働省の延長保育促進事業の基準に基づく19時以降に及ぶ保育を実施している全国の保育所41所に在籍する子どもの養育者2,232名であった。

2. 調査方法および調査期間

本研究は、養育者による自記式質問票調査とした。質問票には調査の目的、調査結果の活用、調査結果を目的外に使用しないこと、および、個人の名前が出ないことを明記した。質問票の配布および回収には保育士の協力を得た。担当保育士に対しては、事前に調査の目的と個人情報取り扱いについて説明し共通理解をはかった。質問票配布の際には、回答は個人の自由であり回答しないことにより不利益を受けない等の説明を加えた。

調査期間は、2007年11月1日～12月31日であった。

3. 調査内容 (表1)

調査内容は、育児環境 (育児環境指標 Index of Child Care Environment, 以下 ICCE とする)、子どもの特性 (性別、年齢、入園年齢、家族構成、きょうだいの有無)、養育者の特性 (育児に対する自信、現在のストレス)、保育形態とした。ICCE は子どもと環境とのかかわり

を測定する指標である。4 領域13項目で構成され、0～6 歳児の養育者を対象として活用することができる。現在100ヶ国以上で活用されている育児環境評価 HOME (Home Observation for Measurement of the Environment)³⁾の枠組みをもとに項目と領域が設定されており、日本での家庭訪問調査により HOME との基準関連妥当性、将来の発達や気になる行動等との予測妥当性が検証されている⁴⁾。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、質問票に調査の目的、結果の活用、結果を目的外に使用しないこと、および、個人の名前が出ないことを明記すると共に、回答は個人の自由であり回答しないことにより不利益を得ない等の説明を加えた。また、質問票の回収には個別の回収用封筒を用意した。なお、本研究は筑波大学大学院人間総合科学研究科の倫理審査委員会において承認を得ている。

5. 分析

質問票を配布した2,232名中2,041名 (回収率91.4%) から回答を得た。このうち、質問票のすべての項目に回答が得られた1,332名を分析の対象とした。分析方法は、まず、ICCE の13項目および養育者の特性について単純集計をし、次に、保育形態 (夜間/昼間、長時間/通常) と、ICCE 項目および養育者の特性について χ^2 検定を行った。 χ^2 検定を行うに当たって、保育形態の区分は、厚生労働省の延長保育促進

表1 育児環境指標 (ICCE) の内容

領 域	項 目	非リスク群	リスク群
1. 人的かかわり	(1) 子どもと一緒に遊ぶ機会	右記以外	めったにない
	(2) 子どもに本を読み聞かせる機会	右記以外	めったにない
	(3) 子どもと一緒に歌を歌う機会	右記以外	めったにない
	(4) 配偶者 (または、それに代わる人) の育児協力の機会	右記以外	めったにない
	(5) 家族で食事をする機会	右記以外	めったにない
2. 社会的かかわり	(6) 子どもと一緒に買い物に行く機会	右記以外	めったにない
	(7) 子どもを公園に連れて行く機会	右記以外	めったにない
	(8) 同年齢の子どもをもつ友人との交流	右記以外	めったにない
3. 社会的サポート	(9) 保育園以外に子どもの面倒をみってくれる人の有無	いる	いない
	(10) 育児相談者の有無	いる	いない
	(11) 配偶者 (または、それに代わる人) と子どもの話をする機会	右記以外	めったにない
4. 制限や罰の回避	(12) 子どもの失敗への対応	右記以外	子どもをたたく
	(13) 1週間のうちに子どもをたたく頻度	たたかない	左記以外

事業の基準に基づき、19時以降の保育を利用して
いる者を夜間群、それ以外を昼間群とした。
また、1日に11時間以上に及ぶ保育を利用して
いる者を長時間群、それ以外を通常群とした。
ICCE項目は、子どものすこやかな発達に対し
て最もリスクの高い回答を基準とし2値とした
(表1)。養育者現在のストレスについては、「や
や高い」、「とても高い」をリスク群とした。なお、
χ²検定における有意水準は5%とした。統計解
析には、SPSS16.0J for Windowsを使用した。

Ⅲ. 結 果

1. 子どもの特性 (表2)

入園年齢は、1歳未満が680名(51.1%)と
多く、2歳未満までが1,026名であり、全体の
77.1%を占めていた。家族構成は、核家族が
89.1%であった。母親のみは172名(12.9%)、
父親のみは8名(0.6%)、家族人数の中央値
は4人であった。保育形態は、夜間群が599名
(45.0%)、長時間群が423名(31.8%)であり、
保育時間の中央値は10.0時間であった。

2. 養育者の特性と育児環境 (表3, 4)

ICCEおよび養育者の特性を表3に示した。
人的かかわりの領域においては、子どもと一緒
に遊ぶ機会「めったにない」は15名(1.1%)
であったが、低頻度である月1~2回以下を含
めると358名(26.9%)であった。本を読み聞
かせる機会「めったにない」は181名(13.6%)
であり、月1~2回以下を含めると413名
(31.0%)であった。配偶者(または代わりと
なる人)の育児協力が月1~2回以下は236名
(17.7%)、家族で食事をする機会が月1~2回
以下は65名(4.9%)であった。

社会的かかわりの領域においては、一緒に買
い物に行く機会「めったにない」は18名(1.4%)、
月1~2回以下を含めると158名(11.9%)で
あった。公園に連れて行く機会「めったにない」
は308名(23.1%)、月1~2回以下を含め
ると898名(67.4%)であった。同年齢の子
どもを持つ知人との交流「めったにない」は553
名(41.5%)、月1~2回以下を含めると1,092
名(82.0%)と非常に高い割合であった。

社会的サポートの領域においては、保育所以

表2 子どもの特性 n=1,332

項 目	人数	割合(%)
性別	男児	690 51.8
	女児	642 48.2
年齢	0歳	48 3.6
	1歳	213 16.0
	2歳	228 17.1
	3歳	234 17.6
	4歳	206 15.5
	5歳	250 18.8
	6歳	153 11.5
入園年齢	0歳	680 51.1
	1歳	346 26.0
	2歳	148 11.1
	3歳	114 8.6
	4歳	32 2.4
	5歳	10 0.8
	6歳	2 0.2
家族構成	両親	1,003 75.3
	母親のみ	172 12.9
	父親のみ	8 0.6
	祖父母のみ	1 0.1
	母親+その他	3 0.2
(拡大家族)	両親+祖父母	91 6.8
	母親+祖父母	45 3.4
	父親+祖父母	9 0.7
家族の人数	中央値(25~75%) 最小~最大	4(3~4)人 2~12人
きょうだいの有無	なし	537 40.3
	あり	795 59.7
(内訳)	年上	489 36.7
	年下	242 18.2
	両方	64 4.8
保育形態	夜間群	599 45.0
	昼間群	733 55.0
	長時間群	423 31.8
	通常群	909 68.2
保育時間	中央値(25~75%) 最小~最大	10.0(8.5~11.0)時間 4.0~15.5時間
回答者	母親	1,267 95.1
	父親	58 4.4
	祖母	6 0.5
	その他	1 0.1

外に子どもの面倒をみってくれる人が「いない」
222名(16.7%)であったが、育児相談者が「い
ない」は59名(4.4%)にとどまった。保育所
以外に子どもの面倒をみってくれる人は、祖父母
86.0%、配偶者51.3%であった。育児相談者は、
祖父母73.5%、友人68.7%、配偶者65.1%に次
いで、保育士41.5%であった(表4)。

制限や罰の回避については、子どもの誤り
に対して「たたく」が78名(5.9%)おり、子

表3 育児環境評価（育児環境指標（ICCE）および保護者の特性） n = 1,332

<育児環境指標>	めったにない 人数(%)	月1～2回 人数(%)	週1～2回 人数(%)	週3～4回 人数(%)	ほぼ毎日 人数(%)	その他 人数(%)
1. 人的かかわりの領域						
子どもと一緒に遊ぶ機会	15(1.1)	343(25.8)	189(14.2)	89(6.7)	691(51.9)	5(0.4)
本を読み聞かせる機会	181(13.6)	232(17.4)	375(28.2)	254(19.1)	269(20.2)	21(1.6)
一緒に歌を歌う機会	52(3.9)	64(4.8)	225(16.9)	264(19.8)	715(53.7)	12(0.9)
配偶者（または代わりとなる人） の育児協力	116(8.7)	120(9.0)	230(17.3)	97(7.3)	701(52.6)	68(5.1)
家族で食事をする機会	31(2.3)	34(2.6)	276(20.7)	148(11.1)	810(60.8)	33(2.5)
2. 社会的かかわりの領域						
一緒に買い物に行く機会	18(1.4)	140(10.5)	778(58.4)	264(19.8)	128(9.6)	4(0.3)
公園に連れて行く機会	308(23.1)	590(44.3)	388(29.1)	22(1.7)	3(0.2)	21(1.6)
同年齢の子どもを持つ友人との交流	553(41.5)	539(40.5)	177(13.3)	32(2.4)	11(0.8)	20(1.5)
3. 社会的サポートの領域						
配偶者（または代わりとなる人） と子どもの話をする機会	88(6.6)	44(3.3)	197(14.8)	173(13.0)	758(56.9)	72(5.4)
	いない	いる				
保育所以外に子どもの面倒を みてくれる人の有無	222(16.7)	1,110(83.3)				
育児相談者の有無	59(4.4)	1,273(95.6)				
4. 制限や罰の回避の領域						
	子どもをたたく	口でしかる	なんらかの方法で悪いことをわからせる	別の方法で誤らないように考える	その他	
子どもの誤りへの対応	78(5.9)	865(64.9)	164(12.3)	114(8.6)	111(8.3)	
	たたかない	週1～2回	週3～4回	週4～5回	ほぼ毎日	その他
子どもをたたく頻度	794(59.6)	374(28.1)	80(6.0)	41(3.1)	27(2.0)	16(1.2)
<養育者の特性>						
	よくある 人数(%)	時々ある 人数(%)	あまりない 人数(%)	まったくない 人数(%)	その他 人数(%)	
育児に対して自信がなくなること	113(8.5)	506(38.0)	502(37.7)	203(15.2)	8(0.6)	
	ない	低い	中程度	やや高い	とても高い	
現在のストレス	200(15.0)	403(30.3)	413(31.0)	202(15.2)	114(8.6)	

表4 社会的サポートの内訳

	保育所以外に子どもの 面倒をみてくれる人 n=1,110 人数(%)	育児相談者 n=1,270 人数(%)
配偶者	569(51.3)	827(65.1)
祖父母	955(86.0)	933(73.5)
友人	136(12.3)	872(68.7)
親戚	193(17.4)	296(23.3)
隣人	18(1.6)	86(6.8)
ベビーシッター	18(1.6)	0(0.0)
保育士	— —	527(41.5)
園長	— —	165(13.0)
その他	63(5.7)	81(6.4)

どもをたたく頻度が、週4～5回以上が68名(5.1%)みられた。

養育者の特性については、育児に対して自信がなくなることが「よくある」が113名(8.5%)、現在のストレスが「やや高い、とても高い」は316名(23.7%)であった(表3)。

3. 保育特性と育児環境の関連(表5)

人的かかわりの領域では、本を読み聞かせる機会「リスク群」が通常群(12.2%)より長時間群(16.5%)に多かった(p=0.039)。社会的かかわりの領域では、同年齢の子どもをもつ知人との交流の機会「リスク群」が昼間群(35.9%)より夜間群(48.4%)に多く

表5 保育形態(夜間/昼間, 長時間/通常)と育児環境(ICCE および保護者の特性)の関連

<育児環境指標>	夜間群 n=599 人数(%)	昼間群 n=733 人数(%)	合計 n=1,332 人数(%)	p 値	長時間群 n=423 人数(%)	通常群 n=909 人数(%)	合計 n=1,332 人数(%)	p 値
1. 人的かかわりの領域								
本を読み聞かせる機会 「リスク群」	87(14.5)	94(12.8)	181(13.6)	=0.378	70(16.5)	111(12.2)	181(13.6)	=0.039*
2. 社会的かかわりの領域								
同年齢の子どもを持つ 友人との交流「リスク群」	290(48.4)	263(35.9)	553(41.5)	<0.001***	215(50.8)	338(37.2)	553(41.5)	<0.001***
4. 制限や罰の回避の領域								
子どもの誤りへの対応 「リスク群」	23(3.8)	55(7.5)	78(5.9)	=0.005**	12(2.8)	66(7.3)	78(5.9)	<0.001***
子どもをたたく頻度 「リスク群」	216(36.1)	322(43.9)	538(40.4)	=0.004**	145(34.3)	393(43.2)	538(40.4)	=0.002**
<養育者の特性>								
育児に対する自信「リスク群」	40(6.7)	73(10.0)	113(8.5)	=0.038*	33(7.8)	80(8.8)	113(8.5)	=0.598
現在のストレス「リスク群」	152(25.4)	164(22.4)	316(23.7)	=0.219	121(28.6)	195(21.5)	316(23.7)	=0.006**
<ストレスの内容>								
仕事	120(81.1)	97(61.0)	217(70.7)	<0.001***	99(83.9)	118(62.4)	217(70.7)	<0.001***
<社会的サポートの内訳・相談者>								
保育士	260(45.9)	267(38.0)	527(41.5)	=0.005**	180(45.3)	347(39.7)	527(41.5)	=0.065
園長	99(17.5)	66(9.4)	165(13.0)	<0.001***	60(15.1)	105(12.0)	165(13.0)	=0.149

※保育形態(夜間/昼間, 長時間/通常)と育児環境(ICCE および保護者の特性)のχ²検定において, 有意な関連がみられた項目のみ掲載。

($p < 0.001$), 通常群 (37.2%) より長時間群 (50.8%) に多かった ($p < 0.001$)。しかし, 制限や罰の回避の領域では, 子どもの誤りへの対応「リスク群」が, 夜間群 (3.8%) より昼間群 (7.5%) に多く ($p = 0.005$), 長時間群 (2.8%) より通常群 (7.3%) に多かった ($p < 0.001$)。子どもをたたく頻度「リスク群」は, 夜間群 (36.1%) より昼間群 (43.9%) が多く ($p = 0.004$), 長時間群 (34.3%) より通常群 (43.2%) が多かった ($p = 0.002$)。

養育者の特性は, 育児に対する自信「リスク群」が, 夜間群 (6.7%) より昼間群 (10.0%) が多かった ($p = 0.038$)。現在のストレス「リスク群」は, 通常群 (21.5%) より長時間群 (28.6%) に多かった ($p = 0.006$)。

社会的サポートの内訳をみると, 相談相手「保育士」は昼間群 (38.0%) より夜間群 (45.9%) に多く ($p = 0.005$), 「園長」は昼間群 (9.4%)

より夜間群 (17.5%) に多かった ($p < 0.001$)。

IV. 考 察

1. 育児環境からみた保育所の役割

ICCE の人的かかわりの領域5項目は, 日常にかかわりがあることが重要とされる項目である⁴⁾。しかし, 本研究においては, 5項目すべてに, 家庭でのかかわりが乏しい者がみられた。保育所は, 一緒に遊ぶ, 本を読み聞かせる, 一緒に歌を歌うなどのかかわりを日常的に行っている。家庭において十分とはいえない人を介した重要なかかわりを, 子どもの発達状態に合わせて提供する役割を担っていると考えられる。子どもの「食」についても同様である。「子どもは家族や仲間などとの和やかな食事を経験することで安心感や信頼感を深め, 人や社会とのかかわりを広げていく⁵⁾」とされている。保育所は仲間と一緒に食事の場を日常的に提供

し、家族とは違った側面から安心感や信頼感の形成、社会性の発達促進への一助を担っていると考えられる。

社会的なかわりは、子どもにとって家庭内では得られない新鮮な刺激となる。買い物や公園で遊ぶ機会など屋外での体験や、同年代の子どもとかかわる機会の確保は、子どもの社会性の発達において重要である⁴⁾。本研究では、公園に連れて行く機会や、同年代の子どもを持つ知人との交流の機会に乏しい者が高い割合でみられた。「子どもたちは、ともにかかわりあう中で相手の気持ちを受け止め、自分の気持ちを伝えるなど、共感し合う関係を深めていく」⁶⁾と言われている。保育所では、屋外での遊びや同年代の子どもとの交流が毎日行われ、社会的なかわりを日常的に補完する役割を担っていると考えられる。

社会的サポートについて、保育所以外のサポートが得られない者がみられた。相談者として保育士をあげている者は4割以上であった。社会的サポートに関しては、「子どもに関する問題の背景には、家庭や地域での育児機能の低下や、育児不安による母親のストレスなどとの関与が予測される」⁷⁾とされ、「夫や友人からのサポートが少ないと予測される母親への公的なサポートの重要性」⁸⁾や「母親のストレス軽減に向けた支援としてのインフォーマルサポートの重要性」^{9,10)}などが示されている。保育所が担っている養育者へのサポートは重要であるといえる。

制限や罰の回避は、子どもに対する敵対心、否定的な感情の表現が制限や罰という形になりやすいことから、把握する必要のある項目として重要であり、乳幼児期における制限や罰は可能な限り回避することが望ましい⁴⁾とされている。本研究において、子どもの誤りに対して「たたく」や、子どもをたたく頻度が週4～5回以上が5%程度みられた。このような養育者には早急な対応が必要である。不適切な養育を受けている子どもの発見のきっかけで最も多いのは“本人のことは”であり、次いで“本人の行動”と“保護者のことは”¹¹⁾との報告がある。日常的に子どもを観察し、養育者と接触する機会のある保育士は、不必要な制限や罰を発見しやす

い立場である。保育士には養育者との日常的なやりとりを通して、制限や罰の回避を促すような働きかけを行うことが期待される。

2. 保育特性別の育児環境からみた保育所の役割

保育特性別の育児環境の特徴として、「子どもの誤りへの不適切な対応」が夜間群および長時間群に少なく、「育児の自信喪失」は夜間群に少ないことがあげられる。

Bradleyらは保育と子どもの発達に関する研究106編のレビューから、「保育は多次元的事象であり子どもに対しては非常に多くの交互作用が働いている。子どもの発達に対する入園年齢や保育時間、保育形態からの提言は複雑なものになるが、保育の質の影響は示唆される」¹²⁾と述べている。また、「保育園や家庭での子どもの様子について親と保育者とが日常的に伝え合うという営みは保育の基本であり、ここに子育て支援としての機能が内包されている」¹³⁾ことや、「子育てと仕事の両立の中でおこる満たされない感情や心理的な葛藤などには、“安心”や“相談相手”などの要因が効果をもたらす」¹⁴⁾ことが示されている。これらの研究成果が報告される以前から、夜間に及ぶ長時間保育に携わる保育士は、質の確保された保育や養育者サポートを強く意識しながら対応してきた⁴⁾。保育士が、養育者の良き相談相手となり、サポートし、子どもに関する深刻な問題の予防に真摯に取り組んできたことが、養育者の子どもへの不適切な対応や、育児の自信喪失に対して効果をもたらした可能性があると考えられるのではないだろうか。

3. 本研究の限界と今後の可能性

本研究は、横断研究であり一時点のデータからの考察である。経年的に集積している育児環境データや年次推移、夜間に及ぶ長時間保育を行っている認可保育所や幼稚園との比較をすることで、夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所が担う役割がより明らかになる可能性がある。また、時代の変化にともない保育所に対する社会的な要請には変化が生じる可能性がある。継続的にデータを積み上げ、保育所に求められる変わりゆく役割と普遍的な役割を明らか

にすることが期待される。

V. 結 論

夜間に及ぶ長時間保育を行っている保育所を利用する子どもの育児環境の実態から、保育所が担う支援的役割を考察した。人的かかわり、社会的かかわり、社会的サポート、制限や罰の回避など、子どものすこやかな発達を促すかわりに乏しい子どもが存在しており、保育所は、それらのかかわりを、子どもの発達状態に合わせて日常的に提供し、すこやかな発達を支える役割を担っていた。夜間に及ぶ長時間保育に携わる保育士は、養育者に対する良いサポートを提供し、深刻な問題の予防に寄与してきた可能性が考えられる。

謝 辞

本研究は、科学研究費（193301261, 21653049）の助成を受けました。

全国夜間保育園連盟の天久 薫会長、枝本信一郎副会長、保育パワーアップ研究会の皆さま、本研究にご参加いただきました対象者の皆さま、ご協力いただきました夜間に及ぶ長時間保育園の皆さまには、心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 厚生労働省. 平成20年度版 厚生労働白書. 東京: ぎょうせい, 2008; 228-237.
- 2) 全国保育所協議会. 全国の保育所実態調査報告書. 東京: 社会福祉法人 全国社会福祉協議会, 2008; 1-107.
- 3) Bradley RH, Caldwell BM. Home observation for measurement of the environment: a validation study of screening efficiency. *Am J Ment Defic* 1977; 81 (5): 417-420.
- 4) 安梅勅江. 子育て環境と子育て支援—よい長時間保育のみわけかた. 東京: 勁草書房, 2006; 3-178.
- 5) 厚生労働省. 楽しく食べる子どもに食からはじまる健やかガイド「食を通じた子どもの健全育成（いわゆる「食育」の視点から）」のあり方に関する検討会」報告書. 東京: 日本児童福祉協会, 2004; 1-97.
- 6) 山本弥栄子. 子ども同士の言語的コミュニケーションにおける一考察—会話の自然発生過程の検討—. 創発 大阪健康福祉短期大学紀要 2007; 5: 51-60.
- 7) 加藤忠明. 乳幼児の保健活動・相談に関する質問紙調査—少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究. 平成6年度厚生科学研究報告書 1994; 35-41.
- 8) 海老原亜弥, 秦野悦子. 保育園・幼稚園を育てる母親の育児負担感—ストレス—, コーピング, ソーシャル・サポートの関係—. 小児保健研究 2004; 63 (6): 660-666.
- 9) 黄川田美玲, 安梅勅江, 丸山昭子, 他. 保育園を利用する4歳児の発達への複合的な関連要因に関する研究—母親のストレスに焦点をあてて—. 日本保健福祉学会誌 2006; 13 (1): 15-24.
- 10) 丸山昭子, 大関武彦, 安梅勅江. 保育園を利用する2歳児の発達・社会適応・問題行動・健康状態への複合的な関連要因—母親のストレスに焦点をあてて—. 厚生指標 2006; 53 (6): 24-33.
- 11) 福岡淑子, 郷間英世, 戸松玲子, 他. 保護者から不適切な養育（虐待）を受けている学齢児童に関する研究—第1報 兵庫県小学校における児童の実態調査—. 小児保健研究 2007; 66 (1): 16-21.
- 12) Bradley RH, Vandell DL. Child Care and the Well-being of Children. *Arch Pediatr Adolesc Med*. 2007; 161 (7): 669-676.
- 13) 村山祐一. 地域社会の中の子どもと保育所・幼稚園の課題—子育て環境格差の広がり—と一元的児童福祉行政の推進—. 保育学研究 2006; 44 (1): 22-29.
- 14) 久井志保. 企業による育児支援がワーク・ファミリー・コンフリクトへ及ぼす効果について—企業内保育所を設置する企業の実態から—. 兵庫大学論集 2008; 13: 201-209.